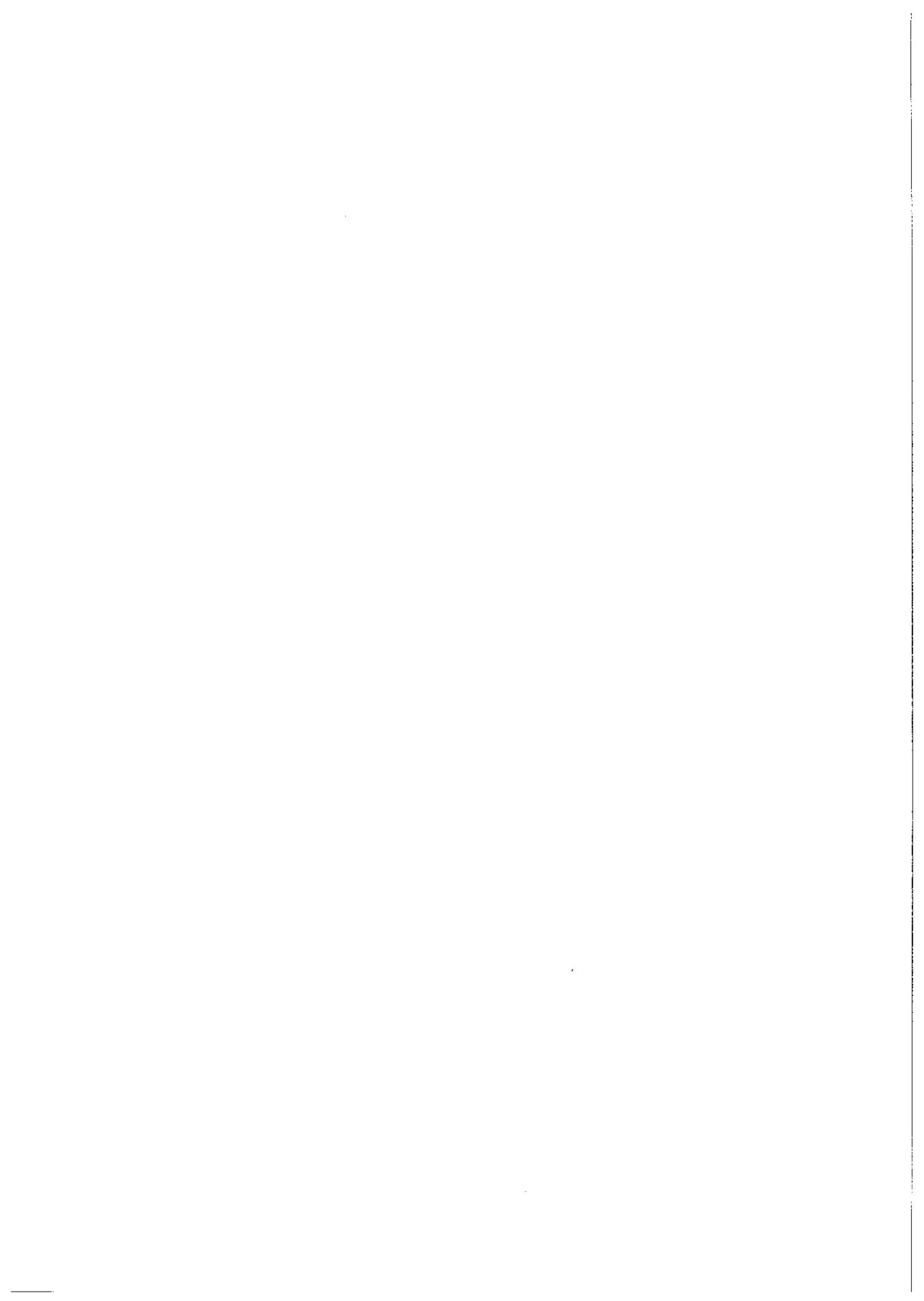


読谷村民話資料集 14

おお わん ふる げん
大 湾・古 堅

の
民 話

沖縄県 読谷村教育委員会
歴史民俗資料館編



いあいさつ

読谷村長 安田慶造

このたび、読谷村民話資料集十四『大湾・古堅の民話』が発刊されるにあたり一言ごあいさつを申し上げます。すべての文化の原点はことばである。といわれますように我々人間は意志の交通手段としてことばを生みだし、ことばを用いてものを考え、創造し、それは時間を越えて変化しながらも継承されてきました。

また、昔は現在のように、交通手段や情報伝達機関が乏しかったことから、その地域の地理的条件、気候や風土に密着した生活の中から言葉が生まれ、地方独特の文化が形成されてきました。

自分の生まれ育った地域の文化や歴史に関心を持ち理解することは地域への愛着を深め、発展への足がかりになると思います。しかし、現代のように情報過多の社会、移り変わりの激しい社会ではむかしから伝わることばを残し、継承していくことは容易なことではなくなってきました。でも、こういうスピード社会だからこそ、お互いの生まれた地域を見つめ直し、特性を掘り起こし、「形」を残すことが必要であり、その一つの手段として民話集の作成があると思われれます。

このような昔のことば、方言によって語り継がれた先人達の民話は、民衆の郷愁であると同時に文化遺産でもあります。私たちは、民話集を読むとき、先祖の素朴で、純真な心の教訓、人間の生きる知恵など、昔の人々の生きざまに触れることができます。民話集が家庭教育、学校教育ひいては生涯教育の中で活用され、将来を担う子供たちや青少年の心を育む糧となり、新たな文化創造の発展につながりますことを期待いたします。

今回の民話集は、山内繁茂さんをはじめ三十五名の方に民話を語って頂いたものですが、昔から「湾・古堅」と愛称され、大湾ノロや古堅ノロの出た地域でございます。そういう地域の背景も理解しながら、その民話に触れると新しい発見が生まれてくると思います。

終わりになりますが、このようにすばらしい民話集が次々に発刊できますのも、語り部である先輩方をはじめ関係各位の深い情熱と努力の賜であり、関係者の皆様に衷心より敬意と感謝の意を表し、ごあいさつと致します。

発刊によせて

教育長 伊波清安

読谷村の民話集は、全十五集の発刊を予定しておりますが、この度は第十四集目として字大湾と字古堅に伝わる民話を収録し、発刊することができました。語り手の方々や編集にご協力下さいました各位に深く感謝申し上げます。

湾・古堅と連呼・連称されるように両字は緊密な関係にありますが、一方字の伝統や風習、しきたり等においてはいくらか異なるところがみられます。話しことばにおいてもアクセントやイントネーション等に微妙な違いがあります。地域の持ち味が反映されている民話に接する場合、このような特性にも着目したいものです。

昔話に属する民話の世界には、古きよき時代の人々の心の温もりがいきづいております。地域の人々の人間関係や連帯意識を醸し出す味わい深い内容の話も多く盛りこまれております。幾世代を重ねて語り継がれた民話のなかには、人の心を豊かにしたり、ときには道徳や社会規範を教示するような知恵がさり気なく語られております。現在の私たちは、情報や物流の氾濫する社会の歪みをもろに受けて、ともすると、心の拠り所や人生の羅針盤さえ見失いがちであります。このようなご時世なればこそ、先人たちの知恵が凝縮されている民話の世界を咀嚼して後進への心のかげ橋にしたいものです。

今回の発刊に当たっては、字大湾及び字古堅の古老の方々や多くのご先輩の方々から聞き取り調査をさせていただきました。改めて感謝を申し上げますと同時に、今後とも両字の発展・充実のためにご精進下さることを祈念申し上げます。

この民話集をかけがえのない地域の文化遺産として見直していただくとともに、これまでに発刊された十三集と併せて、多くの村民が民話に親しみご愛読下さることを期待申し上げます。

大湾・古堅部落の概況——序にかえて——

館長 名嘉真 宜勝

大湾の概況

大湾部落は、読谷村における古層の村の一つである。一六七三年以前に編集された『琉球国高究帳』に「湾村」で表記されていて、古くは「湾」と呼ばれていた。『琉球国由来記』（二七二三年）や、『琉球国旧記』（二七三一年）には、現在使用している「大湾」に漢字が当てられるようになった。村民には湾・古堅と愛称されている。大湾部落にはウフグシクやメータグシク、ヤクミーグシクの三つのグスクが存在する。沖縄における考古学上のグスク時代は十二世紀から十六世紀頃までと考えられているので、大湾部落の歴史もこの辺りまで遡って見ることが出来る。この時代に活躍した今帰仁城主の血を引く大湾按司の伝説がある。大湾按司一族の古い墓が数カ所にある。その子孫が大湾の根所・上地であるといわれている。人口の推移は、明治十三年に四四二人、戸数八四戸で、明治二九年に七八六人、戸数一四九戸、平成十一年三月現在の人口二〇〇五人、五九三所帯である。

大湾の門中とそれを構成する姓をあげると、上地門中（上地・松田・金城姓）、宮城門中（宮城姓）、松田門中（松田・島袋姓）、大城門中（大城・松田・山内姓）、比嘉門中（比嘉・知名姓）、安室門中（安室姓）、仲門中（上地・松田姓）などがある。旧家は屋号上地と支場がある。

昭和十九年当時の姓を見てもみると、松田姓が二一軒と多く、続いて宮城姓十三軒、上地姓六軒、比嘉姓六軒、大城姓五軒、知名姓三軒、島袋姓三軒、我那覇姓三軒、山内姓三軒、砂辺姓三軒、古謝姓二軒、又吉姓二軒、与久田姓二軒、石川姓二軒、富着姓二軒、津波古姓二軒、山田姓二軒、以下は一軒ずつ。安室、富川、町田、知念、名嘉真、安次富、平安名、西平、伊波、松村、伊礼、屋宜、儀間、亀島、伊佐、仲本、野里、山城、仲栄間、糸村、福島、石嶺、我喜屋。以上四〇の姓があった。

住居は、戦前は、一〇七軒のうち、七七軒が茅葺で、残り三〇軒が瓦葺であった。そして屋敷内にチンガー（つるべ式井戸）があった家は三一軒であった。井戸のないところは部落の共同井戸、ウブガーやミーガーを利用していた。古い神井戸として、メーヌカー（ウチュジガー）、アジガー、ヒジャガー、ワンガーなどがある。

拝所と主な祭祀

グスクが三件ある。①メータグシク（比謝橋の西側の岩山在）、②ウフグシク（国道五八号線北側の森。メータグシクの真向い）。③ヤクミーグシク（部落東北、深迫原在、御嶽は、①メーヌウグワン（ワシウグワンとも称する。）と、②マカーウターキの二箇所、部落東

方にある。メーヌカーとマカーガーのそれぞれの神井戸がある。その他の神井戸として、ヌールガー、ワンガー、アジガー、ミーガー等があり、旧暦一月七日の初拝みに他の拝所と共に拜んでいる。大湾には戦前までヌールがいて、古堅、渡具知、比謝の四ヶ部落の祭事を司っていた。主な年中祭祀は、旧暦一月七日の初拝みで、拜所は村のニーヤー（根屋）である屋号上地の山のビジュールの神、支場の旧屋の神屋の火の神、外間の東の地頭火の神、ヌンドウンチの神、ヌル火の神、前ヌカー、湾ガー、ヌルガー、アジガー、マカーガー、メーヌウグワン、ウフグシク、東原のウグワン。以上の箇所を拜み、最後は上地の神棚に祀られている神へ供物をして祈願する。ウマチーは、旧暦二月一五日、三月一五日、五月一五日、六月一五日の四回で、ヌンドウンチ、ヌル火の神等を拜んでいる。旧暦三月の神願清明祭には、渡具知西タケサー、渡具知前ヌ御殿のアジ墓、古堅前新垣の前の東り上御墓、古堅アシビナーの下の湾尺墓、比謝元徳山のメーヌアジ御墓、比謝元ウフグシク下のウミナイビ御墓、比謝元ヌル御墓、比謝元賭殺場の若アジ御墓、比謝元徳山の後の支場の主御墓、上ヌーリのアジ御墓、楚辺クミンドーの御墓。以上を拜む。中には直接その所へは行かないで、御通しで拜んでいるところもある。

〔葬制〕死は、犬や猫、鳥などの異様な鳴き声で知ることが出来た。これをムヌシラシと称している。夜にタマガイ（火玉）が上がり、ノコヤ板をたたきつける音も死者が出る前兆として嫌われている。

死者が出ると、まず近親者が集まる。ヒヌカン（火の神↓かまどに宿る）に線香十二本を供え、何年生れの何某が死亡したことを報告する。次にニーセーガシラ（二才頭）に知らせると、彼がホラ貝を吹いて部落中に知らせる。隣り組が葬式組になるので、ホラ貝の

合図を聞いて葬儀準備のために集まる。ユーアミ（湯浴み↓湯灌）に使う水を近親の二人が桶でウプガー（産井戸）から汲んで来る。浴びせるのは娘など二〜三人でやる。湯を死者にかける場合も右手に持った柄杓を手首をひねって逆手にしてかける。使った容器も三日間は家の裏に放置しておく。グソーヌガイ（死装束）は、五枚、七枚などの奇数にする。死者にはグソーヌナイギムン（後生へのおみやげ）として、お茶、お菓子、タオル、タバコ、酒、クシ、水、そして湯灌の際切った爪、髪の毛などをチンダンブクルに入れて、死者の中指にかけて持たせる。酒は小壺に入れ、フチクルザキ（壊中酒）と称して、ふところに入れてやる。ぬい針七本を糸に通し、二組を着物の前面、膝のあたりに針先を上向にして刺して持たせる。墓前にはゾーリ、傘、杖などが供えられる。

死者は仏間で、手を胸元で組ませ、立て膝をさせて仰臥の姿勢で、イリマツクワー（西枕）して寝かれる。死者の顔に白い布をかけ、チヨサージ（経手巾）で全身を覆う。

葬式組があつて、二才頭の指揮で、一切の仕事が行なわれた。男性は、葬具作りや、墓の掃除など、女性は何物の餅や食事の準備などをした。倉担ぎは妻が妊娠していない男性、四人が選ばれた。

香典料は大正の初め頃は一〜二銭であったが、徐々に値上りしていき、五銭から十銭となり、昭和十九年頃は五〇銭になった。（現在は、村一円生活改善下で千円）。香典袋は使用せず、そのまま二才頭に出し、二才頭は金額と屋号を帳面に記入して、それを現金とを死者の枕元に添えて焼香した。

葬式の翌日、ナーチャミーと称し、近親者で墓参りする。その帰りカーウリー（川下り）と称して、死者の衣類を比謝元長田川よりのウマアピシドゥクル（馬浴びせ所）で洗濯した。そして手足を洗い清めた。

主人が死んだ場合は、畑に青竹を立てた。これは、畑は山になったから未練を残さず、成仏しなさいという意味だという。牛馬も主人の後を追って行くので、早目にチナゲーイ（手綱替え）と称して、売りかえた。



メーダグシク（左）とウフグシク（右）

ナンカ（七日）の焼香は、ハチナンカ（初七日）からシンジュークニチ（四十九日）の七回行なう。シンジュークニチの晩にマブイワカシ（魂分し）をする。ウグワン（祈願）は、勝手な古老がやる。参加者は臨終に居合せた近親の人々でやる。まず、死者の夕飯の膳を戸口の方に、一方参加者の膳は内側に準備し、死者の膳を後にして、「もう、お前はこの世の者ではないから、御飯も一緒に食べるわけにはいかない。戻って来るな」と、告げて、参加者は御飯を食べる。

年忌は一年忌から始まり、三年忌、七年忌、十三年忌、二五年忌、三三年忌で終了する。

洗骨は死者が出た日の午前中に行なうのが多いが、長い間死者が出ない時、易者を訪ねて日取りをしてやる。夫婦は同じ厨子甕に納める。

古堅の概況

古堅部落は、前述の大湾部落と並んで古い村の一つである。一六二三年に編集された『おもしろさうし』に、『ふるげものろのふし』の題名で、古堅のノロが詠んだ歌を紹介している。この歌が有名な宇座の泰期が、対明貿易を盛んにしたという記事である。続いて一六七三年以前に編集された『琉球国高究帳』にも「ふるげむ村」の名が見え、一七一三年に編集された『琉球国旧記』には「古堅邑」として、現在使われている字名の漢字が当てられるようになった。

古堅の始まりは、その昔、今帰仁での争乱後、今帰仁から追われた今帰仁按司の子孫である若按司が乳母とともに落ちのびてきて、その若按司が成長してのちに大湾按司となりこの地に住みついたのが発祥だといわれている。

人口の推移は、明治十三年に四四六人、戸数九七戸で、明治二九

年には五〇七人、戸数八八戸、平成十一年三月末現在の人口は、二一八二人、六五五所帯である。



古堅のピジュアル

古堅の門中とそれを構成する姓をあげてみると、上地門中(伊波、新垣、池原、島袋、松田、金城姓など)、知名門中(知名、重田姓)、波平門中(波平姓)、比嘉門中(比嘉姓)、儀間門中(儀間姓)、長嶺門中(長嶺姓)、仲本門中(仲本姓)、佐久川門中(佐久川姓)、安里門中(池原、伊波姓)、神谷小門中(奥原姓、高良門中(高良姓)、呉屋門中(呉屋姓)、喜瀬門中(喜瀬姓)、神山門中(阿波根姓)、糸村門中(糸村、我喜屋姓)などがある。

昭和十九年当時の姓をしてみると、池原姓が二二軒と多く、続いて比嘉姓(九軒)、新垣姓(八軒)、島袋姓(八軒)、知名姓(七軒)、伊波姓(六軒)、波平姓(五軒)、長嶺姓(五軒)、上地姓(四軒)、儀間姓(四軒)、我喜屋姓(四軒)、佐久川姓(四軒)松田姓(三軒)、仲本姓(三軒)、宮城姓(三軒)、金城姓(三軒)、呉屋姓(三軒)、喜瀬姓(三軒)、高良姓(二軒)、奥原姓(二軒)、阿波根姓(二軒)、以下は一軒。佐久本姓、新里姓、重田姓、神谷姓、小渡姓、奥間姓、具志堅姓、山田姓、上原姓、松村姓、与久田姓。以上三二の姓が見られた。

住居は、戦前は、一二七軒のうち、九四軒が茅葺で、残り三三軒が瓦葺であった。そして屋敷内にチンガー(つるべ式井戸)があった家は二二軒であった。井戸のない家は部落の共同井戸である古堅ガーや、仲宗根ガー、チュジカガーなどを利用した。

拝所と主な祭祀

古堅部落にはグスクは存在しない。御嶽は古堅ウタキが旧部落北方にあり、福木の太木が生えている。屋号上地の東南に仲宗根アタイと称される所にウグワンジュがある。そこには神井戸である仲宗根ガーがある。神アサギは屋号上地の屋敷の東南にコンクリート造りの祠がある。タウンが二ヶ所ある。一つは部落の東で、ブルーミヨ

ウ（不動明神）の隣にある。古堅ガーを拜んで、他の拜所へ行く前の休み所で、単なる広場である。もう一つのトウンは、古堅ウタキの近くにある。古堅子（古堅村をつくった人）の墓、御宮が造られていて、その下方にある。立派な石があり、字の拜みの時は現在でも拜んでいる。カンカーモーは、旧暦十月の初庚の日にカンカーの行事で牛を殺す場所。ハタキヌチビーぬビジュルは部落南方、獅子屋の近くにある。山と山の切れ目があり易学上の風水が悪いといつて拜所を造った。サクル松は、旧部落北西に大きな松があつて、旧九月サクル拜みに大湾ノ口などが来て拜んだ。

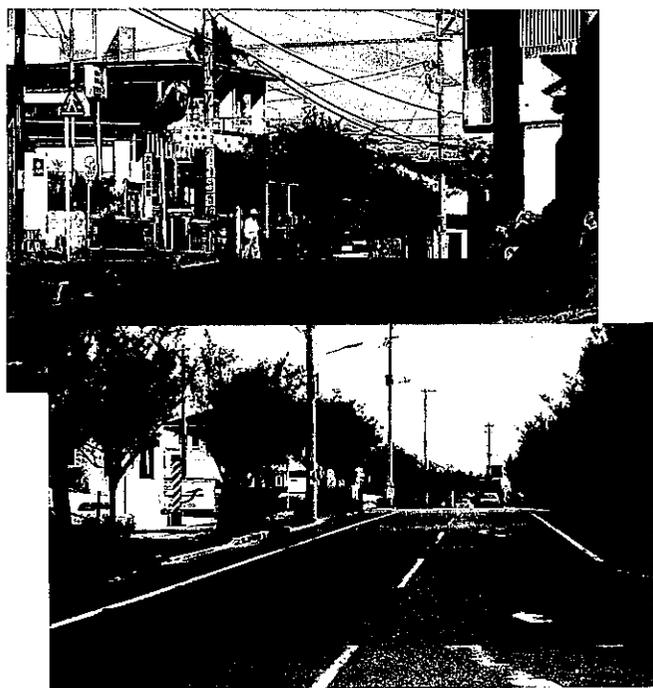
主な祭祀行事として、①アブシバレー（旧暦四月十五日）。害虫が発生している年はムシバレーを行なう。通常はカーウガミを行なう。古堅ガー、仲宗根ガー、西上の墓、古堅御嶽、チズカガー（御通し）、ミチューガー（御通し）、等を拜む。村民総出で井戸を清掃し、妊婦が海で砂利を拾つて来て井戸の底に入れ清める。②神ウシミー（旧暦三月）、東西の二組に分かれて拜む。西組はタケーサーガマ（御通し）、都屋のテイラガマ（御通し）、大松蒲の墓を拜む。東組は、古堅ガーの南と東に神御墓、大湾のウフグシクを拜む。③ウマチー（旧暦の二月十五日、三月十五日、五月十五日、六月十五日）。屋号上地（根所）を拜み、その後各門中の本家を拜む。④山田拜み（旧暦六月二五日）。アシビナーの丘に登つて、恩納村山田のテイラバルの洞穴に向かつて通拜。ワラジャン（村民の数の藁を束ねたもの）を供え、「今年は何人いるが、来年はもっと増やして下さい」と祈願した。⑤ティールグアームヌメー（旧暦九月十五日）。都屋のテイラガマを拜んで、楚辺のクミンドーで中休みをしてウサンデーを食べた。その後、二手に分れ、老人は大木のトウクブサーを拜み、若者は部落に帰つて来るのを大湾の親見原で字旗を持って迎えた。⑥サクル拜み（旧暦九月吉日）。大湾ノ口を先頭に、大湾ノ口殿内、古堅のサク

ル松、渡具知の根所、伊良皆のジョウグチを廻つて拜んだ。ノ口は白衣を着け、白サージを前結びにし、チルマチャー（サミセンツル草）のガンシナを頭にのせ、馬に乗つて行つた。

参考文献

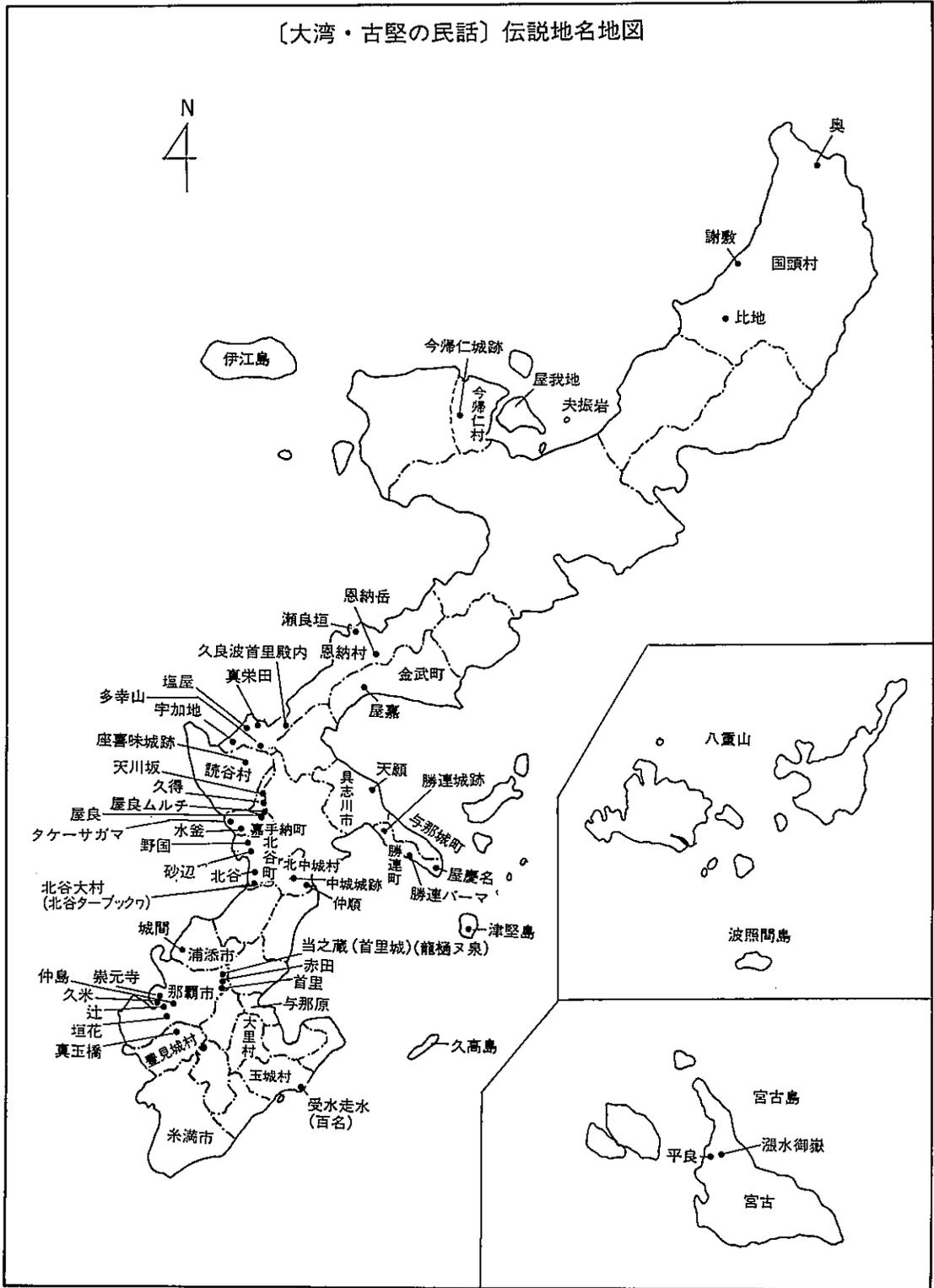
- 筆者「読谷村の聖地と信仰」（読谷村立歴史民俗資料館）館報三 号一九七八年。読谷村立歴史民俗資料館
- 「読谷の文化」第三集、民俗地図資料編、昭和五六年三月、読谷村教育委員会

○「読谷村史」第四巻、資料編3 読谷の民俗 読谷村史編集委員会 平成七年三月

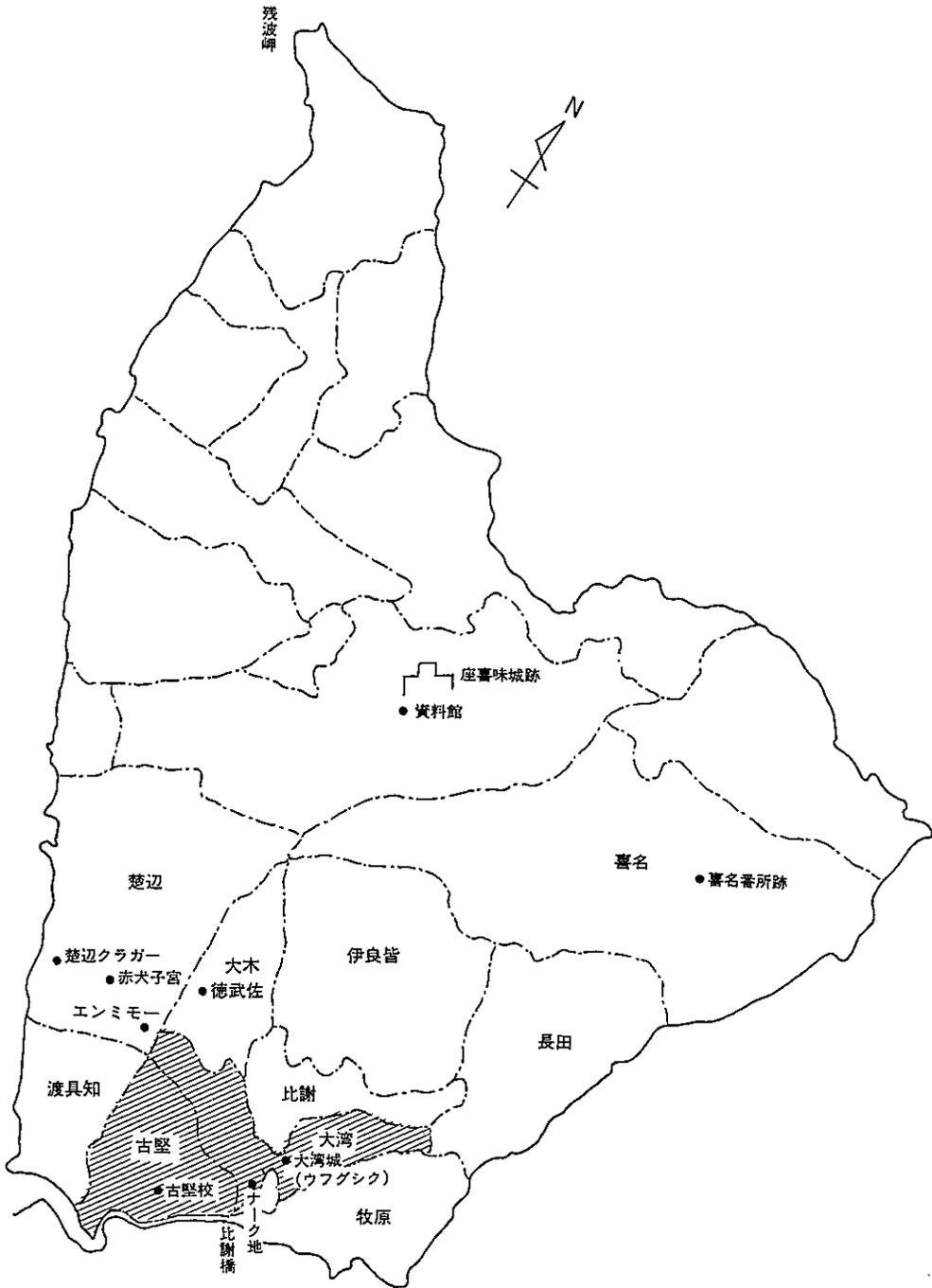


現在の大湾部落（上）と古堅部落（下）

〔大湾・古堅の民話〕 伝説地名地図



〔大湾・古堅の民話〕地名地図（読谷村全図）



凡例

一、翻字対象話の選定基準

- ① 昔話（動物昔話・本格昔話・笑話）、伝説を翻字対象とした。
- ② 聴取できたすべての話型（話型として認定される可能性のあるものも含む）を網羅すべく、断片的な話でも翻字の対象とした。
- ③ 類話がある場合は、最も良い語りと思われる話を選定した。
- ④ 方言・共通語両方の語りを収録してある場合、原則として方言の語りを翻字対象とした。

二、翻字について

- ① 語りに忠実に翻字することを原則としたが、語りが前後している場合などは、わかりやすくした。
- ② 語りの場面を反映している事柄や、話の伝承に関わる事柄については、すべて翻字した。
- ③ 話者の語り口調に区切りがない場合、翻字者の判断により適宜句読点を打った。また、話の展開に従って適宜段落を設けた。
- ④ 注意をうながす言葉なども「」で示した。

三、方言表記について

① 表記は漢字仮名混じり文とし、漢字には全て読み仮名（平仮名）を付けた。また、漢字のあてられる箇所にはできるだけ漢字を用いたが、無理にこじつけた当て字は避けた。

② 民俗行事や特殊な民俗語彙などは、片仮名で表記した。

③ 引き音（のばす音）は「」で表した。①引き音に助詞（は、が、を、に等）が含まれている場合は、助詞の部分を小文字で表した。②引き音に送り仮名が含まれている場合は、送り仮名の部分を大文字で表わした。

例①うぬ人お居らん（その人は居ない）

大工しよくん達ちやうあ集あ集あまてい（大工が集まり）

人ひと先さきえ物ものお言いなよ（人より先に物を言わないでよ）

親おやぬ考かんえやて（親の考えはね）

②家いかい連れんおてい行いちゅん（家に連れて行く）

見みいが行いじゃんよ（見に行つたよ）

追いい出いじゃち（追い出して）

四、対訳について

- ① 方言（共通語混じりも含む）翻字には、共通語の対訳をつけた。
- ② 対訳は方言翻字に忠実に言い、できるだけ意識をさせた。
- ③ 共通語語りの場合でもわかりやすくするために、下段にその話を清書したものもある。
- ④ 難解な語句や抽象的な表現を避け、できるだけわかりやすい言葉で対訳した。
- ⑤ 対訳上、補足説明の必要な箇所には（ ）を付して補った。

⑥ 方言翻字文と対訳文の行数を調整し、段落を揃えた。

※ 方言翻字文イチムシについては、内容に応じた共通語の対訳をした。

五、本文について

① 上段に方言翻字文、下段に対訳文の二段組みにした。題名の上に通し番号を付した。

② 話の初めには、題名、話者名、話者の生年月日、翻字対訳者名を明記し、話の終りに採集年月日、調査団名、採訪者名を明記した。

題名は『日本昔話名彙』（柳田国男監修）、『日本昔話集成』（関敬吾著）によったものもあるが、多くは方言翻字に即した題名を付した。

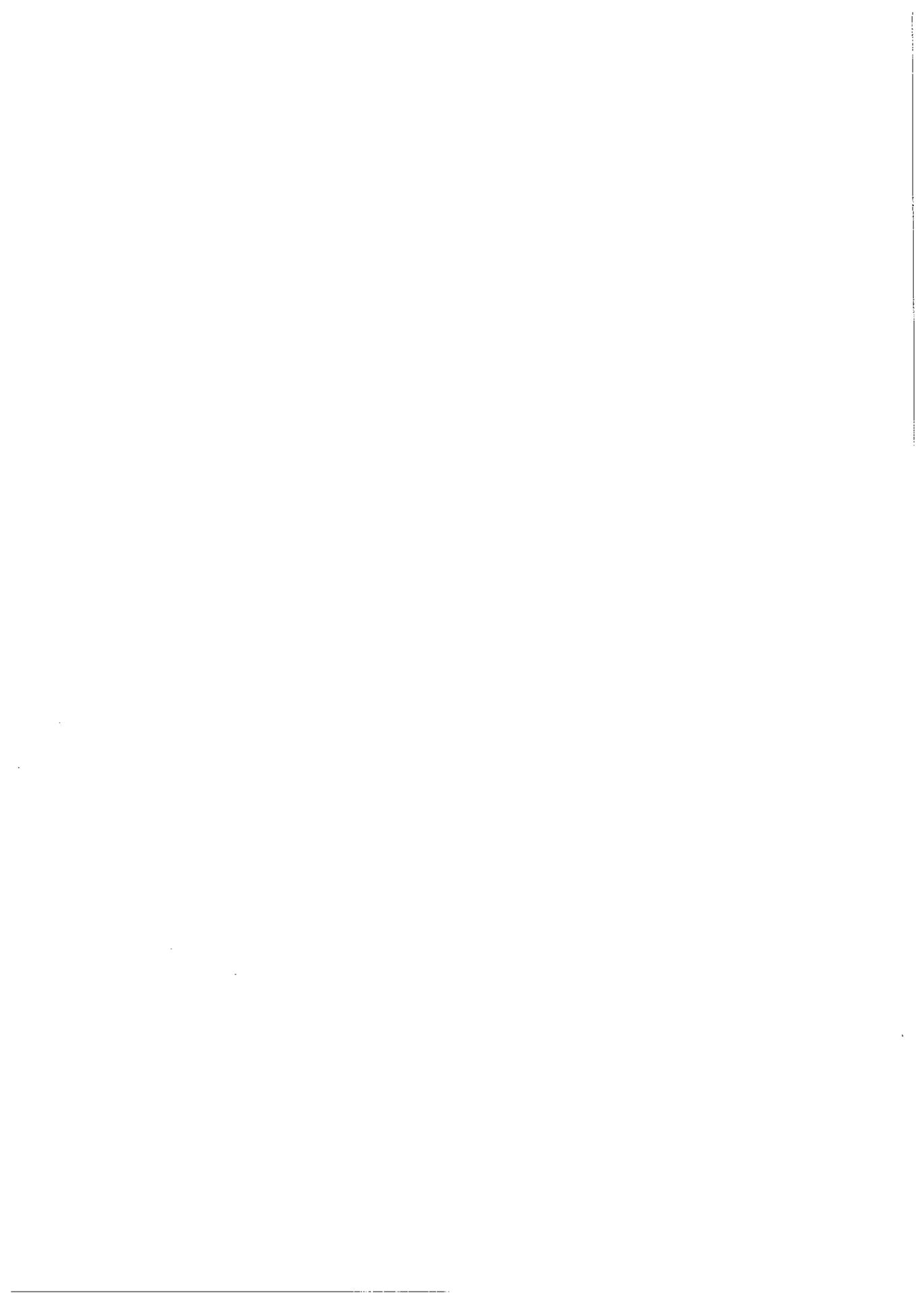
③ 語りの中の会話部分（文脈上、会話と判断される部分も含む）や、思慮している部分には「」を用いた。「」は会話中の会話を示す。但し、会話部分は特に改行しなかった。

④ 歌の部分は、改行して全体に二字下げて書いた。一行には二句程度記入し、句間は一マスあけた。

六、注記について

① 人名、地名、年中行事などについては可能な限り注記して説明した。但し、地図で捕える分については省略した。

② 地域独特な意味をもつ語句については、注記して意味を説明した。



目次

あいさつ	読谷村長	安田慶造
あいさつ	読谷村教育長	伊波清安
大湾・古堅部落の概況―序にかえて―	館長	名嘉真宜勝
『大湾・古堅の民話』伝説地名地図(沖縄県)		
『大湾・古堅の民話』伝説地名地図(読谷村)		
凡例		

大湾の民話

大湾民俗地図

第一編 翻字資料

〈動物昔話〉

1 雀孝行	松田英徳	1
2 雀孝行	宮城カマド	2
3 雀孝行	仲宗根カマド	3
4 雀孝行	大城平順	4
5 犬の足	松田源蔵	5
6 鬼餅由来	松田英徳	6
7 鬼餅由来	糸数カマド	8

〈本格昔話〉

第一編 資料

話者別一覧表……………125

話型一覧表……………134

調査者名簿……………136

翻字・対訳者一覧表……………137

古堅の民話

古堅民俗地図

第一編 翻字資料

〈動物昔話〉

1 雀孝行……………金城ウシ…139

2 雀孝行……………阿波根ツル…140

3 雀孝行……………池原幸子…141

4 雀孝行……………阿波根ウシ…142

5 雨蛙不孝……………阿波根ツル…144

6 カワセミ不孝……………阿波根庸秀…145

7 犬の足……………儀間真治…148

8 蚤と虱と油虫の由来……………儀間真治…148

9 烏孝行……………奥原松助…149

〈本格昔話〉

10 鬼餅由来……………島袋利蔵…150

11 鬼餅由来……………奥原山登…153

12 アカマタ婿入へカマンタ十浜下り……………奥原松助…154

13 アカマタ婿入……………波平秀…157

14 字を書くアカマター……………阿波根ウシ…158

15 アカマタ婿入へ蛙報恩……………阿波根庸秀…159

16 キジムナーへ魚取り・屁……………阿波根ウシ…163

17 天人女房……………池原幸子…164

18 天人女房……………波平秀…165

19	五月五日由来	阿波根	ウシ	167
20	夫婦の赤い糸	阿波根	ウシ	169
21	子育て幽霊へウチカビ由来	池原	幸子	172
22	継子のハブ除け呪文	比嘉	好子	174
23	継子話へ麦突き二十日月	波平	秀	175
24	継子話へ麦と涙	奥原	松助	176
25	継子話へ雪払い十カセカケ	波平	秀	177
26	継子念仏	池原	幸子	182
27	嫁と姑へうどんはミミズ	池原	幸子	187
28	兄弟の仲直り	阿波根	ウシ	188
29	兄弟の仲直り	比嘉	好子	190
30	子供の子へ仲順流り	比嘉	好子	192
31	子供の子へ仲順流り	知名	定雄	193
32	猿長者	島袋	利蔵	195
33	猿長者へ若水由来	奥原	山登	197
34	猿長者へ若水由来	奥原	松助	198
35	城間ナーカへ盗人	奥原	山登	202
36	城間ナーカへ盗人	儀間	真治	204
37	坊主御主と城間ナーカ	池原	幸子	205
38	城間ナーカへ盗人	波平	秀	207

39	坊主御主	比嘉	利益	210
40	炭焼長者へ初婚型	奥原	松助	213
41	藁しべ長者	奥原	松助	215
42	姥捨山	波平	秀	217
43	姥捨山	奥原	松助	221
44	逆立ち幽霊へ十六日由来	奥原	山登	222
45	逆立ち幽霊	奥原	松助	225
46	身代わり観音へ焼御観音	阿波根	庸秀	227
47	子供の子へ米寿由来	儀間	真治	230
48	塩が一番おいしい	波平	秀	233
49	貧乏神と福の神	波平	秀	234
50	下男が成功した話	奥原	松助	236
〈笑話〉				
51	モイ親方へ殿様の難題	比嘉	好子	241
52	モイ親方へ勉強十雄鶏の卵	儀間	真治	242
53	モイ親方へ勉強十灰縄	阿波根	ツル	243
54	モイ親方へ難題	奥原	松助	244
55	渡嘉敷ペークへ碁打ち	島袋	利蔵	249
56	渡嘉敷ペークへ欠け茶碗	島袋	利蔵	251
57	渡嘉敷ペークへ鳩汁十低頭	阿波根	ウシ	252

58	渡嘉敷ペークー〈碁打ち〉	比嘉利益	254
59	渡嘉敷ペークー〈馬勝負〉	比嘉利益	255
60	渡嘉敷ペークー〈低頭門〉	比嘉利益	256
61	渡嘉敷ペークー〈月の吸い物〉	比嘉利益	257
62	渡嘉敷ペークー〈鴨汁〉	比嘉利益	258
63	渡嘉敷ペークー〈褒美の片荷〉	比嘉利益	259
64	渡嘉敷ペークー〈味噌と花鉢〉	比嘉利益	260
65	渡嘉敷ペークー〈味噌と花鉢〉	奥原松助	261
66	勝連バーマへハルアース	阿波根庸秀	262
67	尻ひり嫁	波平秀	264
68	山原と団亀	比嘉好子	265
69	山原と団亀	儀間真治	266
70	山原と団亀	波平秀	267
71	十五夜の餅	島袋利蔵	267
〈伝説〉			
72	徳武佐	島袋利蔵	269
73	古堅部落の始まり	儀間真治	271
74	宮古の始まり	阿波根ウシ	273
75	護佐丸と阿麻和利	島袋利蔵	274
76	阿麻和利〈網笈見十勝連按司〉	島袋利蔵	279

77	屋良ムルチ	阿波根ウシ	281
78	嘉手納チナーの話	儀間真治	282
79	赤犬子〈暗川発見〉	波平秀	283
80	京阿波根親方	阿波根庸秀	285
81	ハジチ由来	波平秀	286
82	ハジチ由来	奥原松助	288
83	吉屋チル―の死	阿波根庸秀	290
84	吉屋チル―と炭焼御主前	奥原山登	294
85	吉屋チル―〈生涯〉	波平秀	297
86	吉屋チル―〈歌い骸骨〉	池原幸子	303
87	黒金座主	阿波根ウシ	305
88	カジャン坂の話	阿波根ウシ	308
89	蚊の始まり	儀間真治	309
90	言葉の使い用	奥原松助	309
91	お茶二杯	長嶺ノブ	312
92	奥の人と比地の人の話勝負	比嘉利益	313
93	間男の話	阿波根ウシ	315
94	流された王女	奥原松助	316
95	天川坂のお粥戦争	島袋利蔵	318
96	遺念火	波平秀	320

〈民俗・その他〉

97 人の振り見て我が振り直せ……阿波根 庸 秀……321
98 親孝行の話……奥 原 松 助……326

99 不思議な話……奥 原 松 助……328
100 カンカー由来……島 袋 利 蔵……332
101 歌勝負……阿波根 庸 秀……333

第二編 資 料

話者別一覧表……

335

話型一覧表……

344

調査者名簿……

346

翻字・対訳者一覧表……

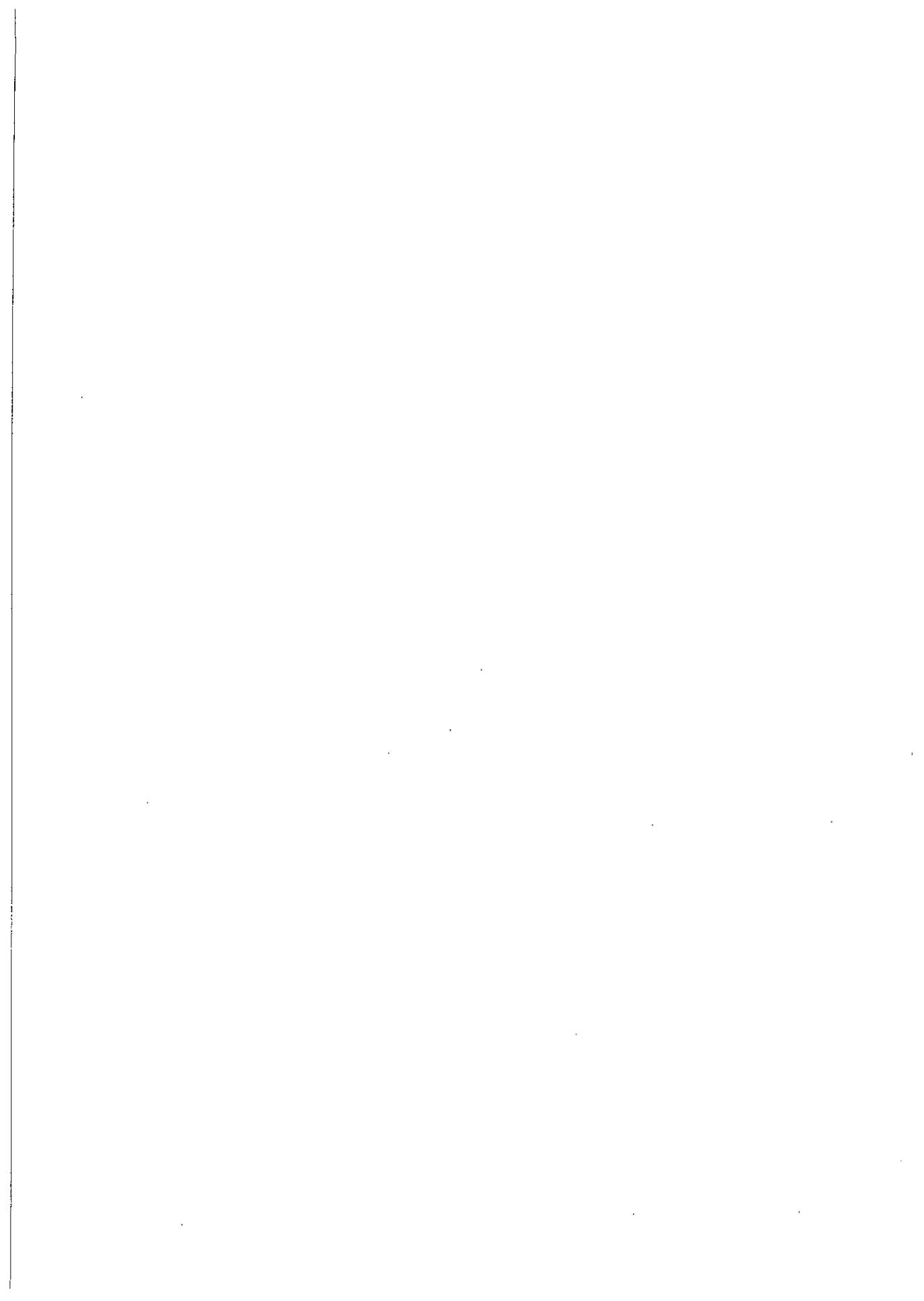
347

参考文献……

350

編集後記……

351





大湾の民話

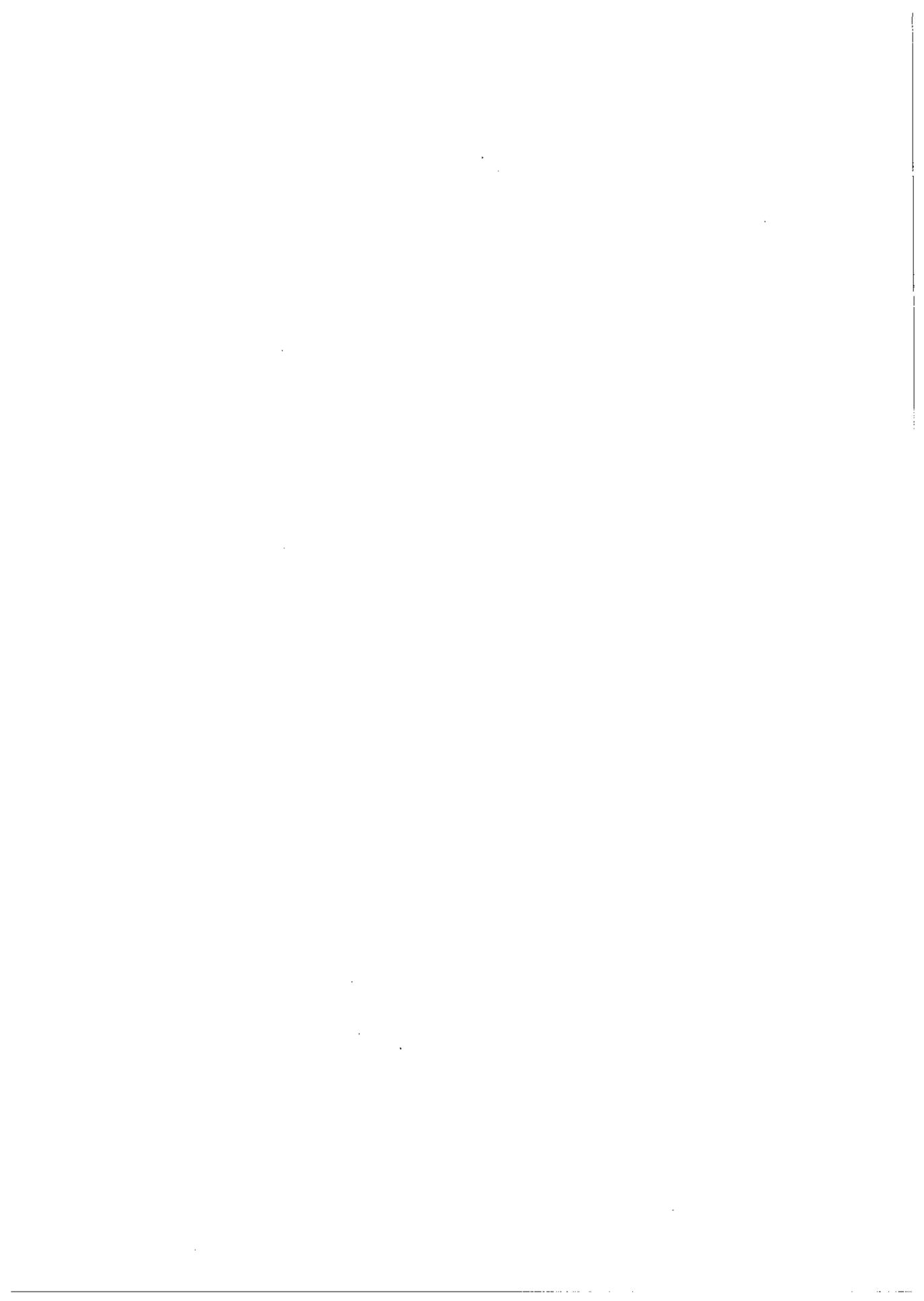




大湾民俗地图

比例尺 = $\frac{1}{2,400}$





第一編 翻字資料

1 雀孝行

話者 松田英徳(明治二十六年六月三十日生)

翻字・対訳 仲里咲子

あれー雀えうりやたんり。昔親ぬ病氣やしがいよ、
うりやたんりよ。病氣やしがいよ、川原ばたんかいな、
美ら着物着やーに飛ぶしがうーせ。カーラバタバター
んち。あれーな親ぬミーウテイしん見らんよ、美ら
装いすんり。

また、くぬクラールよりやたんり。な親ぬ孝行でー
むんりち、フクター着ちよーていんよ、親ぬなーミー
ウテイすんでい言ちやぐとう、走えーし行ぢえぬぐ
とーん。

あんさぐとう、うぬまたカーラバタバターよ、装い
ぬ間な、うりしーねーな親不孝者やぐとう、「いやー
や、川原ばたんじ歩きよ」。

また、くぬクラールでいせよ、何処んくい歩ち、人
ぬ家ぬ中に入ち行ぢてーな、食物食みよーりちよ。
うりん昔話。

あの雀はこうだったって。昔、親が病気になってい
るのに、こうだったよ。あの川原の側で美しい着物を
着て飛ぶ鳥がいるでしょう。カーラバタバターといっ
てね。あれは、美しく装うために親の臨終を看取るこ
とが出来なかったよ。

また、あのクラールはこうだったって。もうクラールは
親孝行だといって、フクターを着たまま親の臨終に間
に合うために急いで行つたそうだよ。

それで、そのカーラバタバターが、美しく装って
る間に親は亡くなり、親不孝者なので「あんたは川原
の側から歩きなさいよ」と。

また、クラールはあちこち歩いて人の家の中に入っ
て食物を食べなさいよといってね。これも昔話だよ。

「ら水から歩きー」りちぬちむえー。なーうっぴる分かる。

して（カーラトウンジュヤー）お前は川原のはしから歩きなさい」という意味だよ。それだけしか分からないね。

採集S 52・2・25 読谷村民話調査団第十六班（知花利江子）

4 雀 孝 行

話者 大 城 平 順（明治三十三年十二月四日生）

翻字 知 花 めぐみ

あの親が非常に病氣をして長い間休んでおるのを、クラぐわーですね雀、これはポロは着けて親の側にいて孝行したという。またうぬカンジュヤーは、ハイカラばかりしてあまり看なかつたという。

そういう意味でこの親が死ぬ時に、雀に言うに「あんたはね、倉のはしでゆつくり飯を食なさい」と。うぬカンジュヤーの方には「お前は、不孝者であるから、川原ばたに行つて何かミミズでも探して食いなさい」と。そういう話を聞きました。

採集S 52・2・25 読谷村民話調査団第十六班（金城清美）

5 犬の足

話者 松田源蔵(明治三十一年七月六日生)

翻字・対訳 上原ヨシ

御香炉。ウブ茶飲まーに、御香炉あいせーや。ありが、三ちる足ああんり。うぬ足あ何がりねー、本当や四ちあたんり。

犬ぬてー、「なーいやーや足三ちどうあんとちや、一ちえーいやーんかい呉らやー」んち、うぬ御香炉から取やーに犬ぬ足んかいとうらちやんり。

あんさぐとう、犬お「有難う」りち、くれー神から、呉てえーみせーる足でえーむんりち、小便しいちきらんり上げていすんり。

御香炉。お供えのお茶を飲んでね、(線香を立てる)御香炉があるでしょう。それが、三本しか足がないって。その足はどうしたのかと言うと、本当は足は四本あつたつて。

犬がね、「もう、お前の足は三本しかないので、一本はあげようね」と言つて、その御香炉から取つて犬の足に付けてやつた。

そうしたら、犬は「有難う」と(お礼)を言つて、これは神様から授かつた足なので、小便する時は足にかからないようにと足をあげてするようになったそうだよ。

採集S 52・2・25 読谷村民話調査団第十七班(辺土名朝三)

注 ウブ茶 仏を供養するお茶(飲物)のこと。一般的にはウチャトウ(御茶湯)と称している。ウブク(御仏供)はご飯の供物。

6 鬼餅由來

話者 松田英徳(明治二十六年六月三十日生)

翻字・対訳 松田美奈

あれー兄弟え二人居たんでいしが、なーうれー島尻
やんでー島尻。ペルリーから来しが。イキーや、なー
鬼なやーにむる人食てーるぐとーん。

あんさーに、うりやたんでい。なー、ムーチャーによ、
ムーチャー作てい行ぢやーに自分ぬはばちよ、そーム
チャーや食でい、うぬイキーや鬼んかいよー、鉄さーに
作てーるムーチャー呉たんでい。あんさー美味さんでい
やーにけー取らつたんでい。あんさーに崖んかい落と
し死じやんでい話。

いえーうりやたんでいよ。うまー何やが、女ぬはてー
るぐとん下。下はたぐととう、「うまー何やが」でい言ちや
ぐととうよー、「鬼食いる口」んでいちやんり。あん言ちや
ぐととう、あんさーになーうりん知らんよー、だーうま
ん分からんでいやーになー。うれーなー小さいんから
出じているうるはじやぐととう。

あんさーに、うまー「鬼食いる口」んちやぐととう、

あれはね、兄弟が二人いたらしいが、島尻のペルリー
から来ていた。イキーの方は、もう鬼になって人を捕
らえて食べていたらしい。

そして、こうだったよ。もうムーチャーの日に、
妹は餅を作つていつて本當の餅は自分で食べて、その
鬼であるイキーには鉄で作つた餅を食べさせた。する
と美味しいとうばい取つて食べたそうである。そうし
て(鬼を)崖から落として死なせたという話。

つまりこうだったようです。何か、女が股を開いた
そうで。(女が)股を開いたら、「そこは何か」と言つ
たので、「鬼を食べる口」と言つた。そう言つても、も
うそれを知つてもいないし、もうそこも分からなかつ
た。これは小さい時から家を出ているはずだからね。

そういうことで、そこは「鬼を食べる口」と言う

崖^{はんだ}んかい^う落ちて^{はな}いて^{はな}死^{はな}じや^{はな}んで^{はな}いる^{はな}話^{はな}やる。う^{はな}つ^{はな}さ^{はな}る。
聞^{はな}ち^{はな}よ^{はな}ー^{はな}る。

崖^{はな}から^{はな}落^{はな}ち^{はな}て^{はな}死^{はな}んだ^{はな}と^{はな}い^{はな}う^{はな}話^{はな}で^{はな}あ^{はな}る。そ^{はな}れ^{はな}だ^{はな}け^{はな}聞^{はな}い^{はな}て^{はな}い^{はな}る。

採集 S 52・2・25 読谷村民話調査団第二班 へ鈴木信一・手登根政子

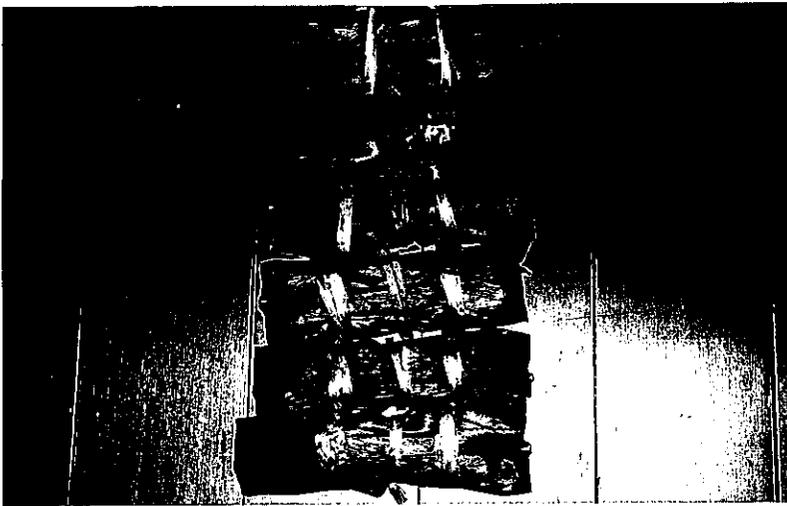
注① 鬼餅 オニモチ・ウナムーチーとは鬼餅の意味。一般的には単にムーチーと称している。

注② ペルリー ペリーとも呼ばれている。那覇市山下町のこと。戦後、町名が山下奉文中将を連想させるので米軍に遠慮してペリー区に改称。

注③ イキー 兄弟をさす。ウナイは姉妹のこと。

注④ ムーチー 大湾や古堅では旧曆十二月七日にムーチーと称する行事があり、現在でも行なわれている。巾約五センチ、長さ十二センチぐらいの餅を作り、月桃の葉に包んで大鍋に蒸して作る。魔除けとして煮汁は庭にまき、餅を食べた後のサンニンの殻二枚をあせて十字型にし軒先に吊るす。子供のいる家庭では子供の分をひもで吊るしたり、男の子には力餅を作つてあげたりする。

※のイキーはウナイの語り違いと思われる。



ムーチー

7 鬼餅由来

話者 糸数 カマド(明治三十九年六月十日生)

翻字 知花 めぐみ
対訳 玉城 和美

首里のよーいー、首里うていやたんでい。

あんさぐとうイキーぬてー、いつペー野蛮なやーに
むる人殺ちさぐとう、あんしえー、またウナイぬてー、
「私達あ兄さんの餅上戸やぐとう、うぬカーサムー
チー煮ち行ぢやーなかいや、私達あ兄さんのーなー殺
しわらないる」んち。

あんさーに、うぬムーチー持つち行ぢ、「兄さんムー
チー持つちえーさ。食めー、食めー」さがちー、あ
んさーに呉やがちー崖んかいたた寄てい行ぢやーなか
い、うぬイキーや崖んかい落とうちけー死なちゃんち
ぬムーチーぬ由来記やあなるやんどーり。ムーチーが
嘉例な物、じこー嘉例な物どー。

首里のね、首里での事だつたよ。

そうしたらイキーが、とても野蛮で人を殺したりし
たので、そうしたらウナイは、「私の兄は餅が大好物な
ので、このカーサムーチーを作つて行き、殺してしま
おう」と。

そして、そのムーチーを持って行き「兄さん、ムー
チーを持ってきてあるよ。食べて、食べて」と言い、
そうして食べさせながら崖の方にだんだん寄つていき、
その兄を崖に落として死なせたというムーチーの由来
記はそういうことだよ。ムーチーは、とても嘉例な事
だよ。

採集 S52・2・25 読谷村民話調査団第十班(山城悦子)

注 首里 那覇市の東部に位置し、地域全域が高台になって、山紫水明で名所旧跡に富む。かつての王都で、首里親国といわれていた。

8 美女に化けたアカマタ(煙草)

話者 宮城 官 正(大正三年二月十日生)

翻字・対訳 知花 めぐみ

昔よー、ハブぬ美ら女んかい化きてい来よ。あんさーにウナイイキーうまー居しがよー、うぬ部屋ぐわーんかい籠てい話ぐわーせーさぎーんばーてー。なー女んかい化きている、男は騙されてあんさぎーしが、男のー全然分からんさー、美ら女でいやるでいち。

あんさーにウナイぬ外から見ちやぐとう蛇やるばー。あんさーもう「大事なとーん」りち呼ばーにイキーんかい言いしが合点のーさん「女でいやる」んち。あんさーになげーんなー通てい話やし、後お女ぬ考やーによー呼び出ぢやさーに見したぐとう、やっぱしハブなやーによー。「とーうれーちやーさらましが」んちするうちに、女ぬかんむすんかいさーに煙草吹ちよー煙草、煙草煙吹ちくわーちえーん。

くんぐとうーしさぎーる場合によ、吹ちくわーちやぐとう、もう毒になるからね。あんさーにかーぐんかーぐんする場合に女ぬ、また、塩、塩撒いてよ。あんさー

昔ね、ハブがきれいな女の人に化けて来てね。そこはウナイとイキーが居たそうだが、(男は)部屋にこもつて、(女に化けたハブと)話をしていたよ。もうハブが女に化けて男は騙されてそうしているのだが、それを男は全く分からずきれいな女だと思っていた。

そうしてウナイが外から見ると蛇だった。それでもう「大変なことになっている」といってイキーを呼んで言うが、「女である」といって承知しなかったよ。そして長い間通つて話し合いをして、姉は考えて弟を呼びだして見せたら、やっぱりハブになっていたつて。「これはどうしたらいいか」といっている間に、姉は勘をきかせて煙草の煙を吹きつけたよ。

そうしている時にね、吹きつけたら、もう毒になつてね。そしてよろけている間に姉が、塩を撒いてね。そうしてハブが煙草の煙を吸って酔っている時に、殺

にハブうんぐとうーし、もう酔うわけさーねー、煙草たばく
ぬ煙きばしを吸うやーに、あんさーにうぬ場合ばいに、もう殺さー
に男いさがあ助たじきたんでいぬ話はなしがあぐとう。

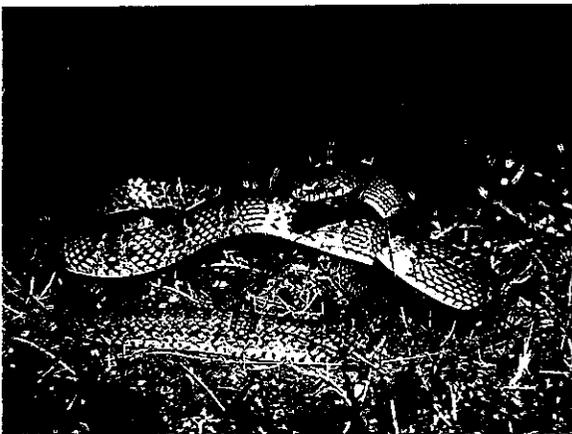
して男を助けたという話があるよ。

採集S52・2・25 読谷村民話調査団第二班（鈴木信一・手登根政子）

注① アカマター 琉球列島中央部の固有種で奄美大島、加計呂麻島、喜界島、徳之島、冲永良部島、与論島、久米島、渡名喜島、沖縄

本島とその属島（浜比嘉島、伊計島、宮城島）に広く分布している無毒蛇で体長二三〇cm内外である。人家周辺から耕作地及び山地にかけて、広い範囲に生息している普通種で、主として夜間活動する。

注② ウナイイキー 日常民俗用語として用いられる。男女兄妹がいる中で、ウナイは、姉妹をさし、イキーは、兄弟をさす。ウナイがイキーを守護するというオナリ神信仰は有名である。



アカマター

9 アカマタ 婿入り（浜下り由来）

話者 宮城 シズエ（明治三十年五月十日生）

翻字・対訳 玉城 和美

一人女ん子ぬお腹が大きいなたぐとう、男ん出じ入りさーんしが、私あ女ん子あたたたいお腹ぬ大なとーるやーりち。

親加那志や哀りしみそーち、「三月三日えやー浜んかい行かやー」りち。人は隠れて行つたためしやしが、浜んかい行ぢやぐとう、アカマター子産ちえーたんり。それから始まりは。

三月三日は、女は浜の砂を踏みなさいというのを、それが理なたんりさ。

一人娘のお腹が大きくなったので、男の出入りもないのに、私の娘はだんだんお腹がお大きくなっているねと。

親は心配してね、「三月三日には浜に行こうね」と言つて。人に隠れて行つたつもりだが、浜に行つたらアカマターの子を産んであつたつてよ。それからの始まりだよ。

三月三日は、女は浜の砂を踏みなさいという、それが理由だつてよ。

採集 S 52・2・25 読谷村民話調査団第十五班（新垣修子）

注 三月三日（サングワチサンニチー） 海浜に下りて災厄を払い清める習俗。また旧暦三月三日に御馳走を持って浜辺に行き、潮に手

足を浸して清め、健康を祈願して楽しく遊ぶ行事。浜下りとも呼ばれている。

翻字 知花 めぐみ

昔むかしですね、沖繩おきなわにあった話はなしだが。あるところの一人娘ひとりむすめが妊娠にんしんしたそうですが、もう妊娠にんしんしたら、うちの子こどもも妊娠にんしんしているといつて大変たいへん喜よろこんだそうです。

初はじめはとつてもきれいな青年せいねんが、赤あかい手拭てぬぐいを被かつてこの一人娘ひとりむすめを騙だましたそうですが。これは近所きんじよのとっても年寄としよったお婆ばあさんが、これの(青年せいねんに化ばけたアカマター)出で入りするのを見みて「あんたの子こどもは妊娠にんしんしていてもね、これはアカマター子妊娠にんしんしているから、三月三日さんげつさんじちにフーチムーチーして食たべて、白浜踏しろはまふんだらすぐこの子こは下りるよ」って。その時ときに、三月さんげつになつたらフーチムーチーして食たべて、そして浜下りはまうしたらね、この子こは沢山たくさんのアカマター産うんであつたという話はなし。

その時ときから妊娠にんしんした女おんなは、是非ぜひとも三月三日さんげつさんじちには白浜しろはまを下りるよおうという伝つたえがあつたそうです。

採集 S 52・2・25 読谷村民話調査団第十五班 へ新垣修子

注 フーチムーチー よもぎ餅。

※浜下り 三月三日と同じ 11頁参照

11 アカマタ婿入り

話者 山城 幸成 (大正四年八月五日生)

翻字・対訳 玉城 琳子

あぬ、アカマターぬ話やし。うぬ最初からアカマターりち、分かとぬしじえーあらん。

非常にこの美人ぬ青年が、うぬ女ぬ側んかい来、寝んてー行ち行ちするうちに、なにげなく何日、妊娠さん。

うぬ女ぬ妊娠さぐと、うぬ親ぬ、「あんし、いやーや夫ん持ったんそーてい、誰と寝んてい、ちやーさが」りさぐと、ぬーうれー分からんぬ事なたぐと、「あんしえーうり分かいる為ねー、とー今晚来るんさー、針持ちちよーてい、うぬ針かい糸ちやなげーん付きてい、着物かい針通ちよーき」りちさぐと。いんねーすんねー来ぐと、着物んかい針通ち行らちやぐと。

翌日、夜明きてい、うぬ糸追てい行ぢやぐと、やつぱしこの岩ぬ穴んかい行ぢよーたなり。やてい、うにーからアカマターでいぬ事分かつたんぬ話。

あの、アカマタの話ですがね。最初からアカマターだと、知っていたつもりではないよ。

とても美しい青年が、女の所に来ては、泊まっけ行きていけるうちにね、いつのまにか妊娠してしまつた。

その女が妊娠したので、母親が、「お前は結婚もしていないのに、誰と寝て、妊娠したのか」と聞いたたら(女は)、それは分からないということだったので、「それを調べるためには、今晚来たら、針を持っていてその針に糸を長くぬいて、その人の着物に針を通しておきなさい」と教えた。そうしているうちに(その人が)来たので、着物に針を通して行かしたそうです。

そして、翌朝になつて、その糸を辿って行ってみたら、やつぱり岩の穴に辿り着いたそうです。それで、その時からアカマターだと分かつたという話である。

12 アカマタ婿入

話者 糸数 カマド (明治三十九年六月十日生)

翻字・対訳 知花 めぐみ

昔んかしえやーひー、アカマターぬ男いながなやーに化はきていやー。
あんさーにうぬ、女いながやるうつきはむる犯うかち歩あちよー。
うぬアカマターぬ化はきてい男いながんかい。

あんさぐとう、昔んかしええ女いながやるうつきむる、うぬ浜はま下り
しみてい、浜はまぬ砂しなく踏しなくまち、あんしつちうぬ厄やくお逃ぬがー
いたさ。

昔はね、アカマターが男に化けてね。そうして、女
を全て犯して歩いたよ。このアカマターが男に化けて
ね。

そうしたから、昔の女の人は皆、この浜下りさせて、
浜の砂を踏ませて、そういうふうにしてこの厄を逃
たそうだ。

採集 S 52・2・25 読谷村民話調査団第十班 (山城悦子)

13 キジムナーと屁へ

話者 松田 カマド (明治三十三年三月十五日生)

翻字 知花 めぐみ
対訳 比嘉葉子

友達どうしさーなかい、魚取いめといがんち行いぢやくとうやー、
「いやーや屁ひやひんなよーやー」んちいつペー言いい付ち

(キジムナーと) 友達になつて、魚取りに行つたら
ね、「お前は屁はするなよ」と強く言い聞かせてあつた

ぎとーしがてー。

ある時、海うとーてい魚取いがちなうぬ時、連
おとーる人ぬ、屁プーみかちひちやくとう、置つち降
るさーにありやたんだりさぬ話ぬあたる。

がね。

ある時、海で魚取りをしている時、連れていた人が
屁をプーとやってしまったから、置き去りにされてし
まったという話があつたよ。

採集S52・2・25 読谷村民話調査団第十班(山城悦子)

注 キジムナー 木の精。古木に宿ると言われ、人間と友達になつて魚取りを手伝つてあげる。タコや屁が嫌いだとされる。

14 天人女房(銘苳子)

話者 松田英徳(明治二十六年六月三十日生)

翻字・対訳 知花めぐみ

また、銘苳子、うまんかい行ぢやーに人飛ぶ着物
替てーるぐとーん。

また、銘苳子が、そこへ行つて飛衣装を替えたらし
い。

あんさぐとう、なー仕方あならん、なーうまかい妻
なてーるばてーな。銘苳子妻。

それで、もう仕方がなく、もうその妻になつてい
るわけさ。銘苳子の妻にね。

あんさーにまた、なー子二人、三人ひけー、子あ二
人るやたがやー、なー産ちえーるふーじー。産ちやく
とう、なードウーぬあたれー、帰りわるないりちそー

そしてまた、子どもは二人か三人程、子どもは二人
だつただろうか、産んであつたそうだよ。そして羽衣
があつたら、天に帰らなければいけないが、飛び布は

しが、飛とい布ぬのお隠かくみらつてい無ならんしえー。

あんさーに子こぬ達ちやうぬ聞きかさーに、飛とばーに、あんし
行いぢやんでい。

隠かくされて無ないでしよう。

それで子供達こどもたちから聞きかされて、そうして天あまに飛とんで
行いつたそうだ。

採集 S 52・2・25 読谷村民話調査団第二班（鈴木信一・手登根政子）

注 銘めい子し 伝説上の人物。組踊「銘めい子し」で有名。王府の諸文献では成化年間（二四六五〜八七）の实在人物とする。「球陽」に、安

謝じや村の銘めい子しが天女てんじよと夫婦ふうふになり、その娘むすめはのちに尚真王しやうしんの夫人ふじんに、銘めい子しの領地りやうぢは孫まごのサスカサアジガナシに伝えられた、とある。
いわば羽衣伝説（天人女房）である。

15 鬼おに女によう房ぼう

話者 宮 城 官 正（大正三年二月十日生）

翻字 知 花 めぐみ
対訳 玉 城 和 美

ずっと前まえの話はなしですかね、鬼おにぬ美うら女にんかい化ばきてい、
あんさーに男おとこ、騙だまする場ば合あやしがよー。

うぬ男おとこあまた安あんナ松ま金がりち有ゆう名めいな人ひとやんり。安あん
ナ松ま金がつち。

あんさーにうぬ人ちゆだま騙だますんちやしがなー化ばきているう

ずっと前まえの話はなしですがね、鬼おにが美うしい女にんに化ばけて、そ
うして男おとこを騙だまそうとする場ば合あの事ことでね。

その男おとこは、安あんナ松ま金がといって有ゆう名めいな人ひとだったよ。

そして鬼おにはその人ひとを騙だまそうと化ばけているんだが、松

ぐとう、美女人ち考とーるぐとう、やつぱしなうぬ人とういつペー話ぐわーせーし騙さつとーる場合によー。

あんさーに別ぬ人ぬ達がよー、美ら男やぐとう想やーまんどーるばーてー。あんさー別女ぐわー達がありすが、うりんかい惚りてい聞かんよー。

あんさー後おうりんかい追つてい、な後おうナイぬ達がよー、鬼どうやるんち分かたぐとう、うぬ男あ逃ぎーんでいしが、ちゃー追いやるばーてー。後おあぬ寺、寺んかい行ぢやーい坊主んかいありさーに囲まれてよ、あんさーい経文読り、うぬ坊主えふらふらしみーるばーてー。あんしがまたそれも逃げて、もう後お戦いんでいしがよー、男あもう殺そうとするんだけど女ぐわー達あ入つちちなー。

後お菖蒲ぬ葉でねー、五月五日ぬ由来記といつてね。

その男は、菖蒲の葉の中に隠して、あんさーに菖蒲の葉で逃げてね。あんするうちにまた坊主も来て経文読まーに、祈り殺すわけさ。それで退治して男は助かったという話です。

金がは美しい女だと思つているので、それでもその人と話をして騙されているよ。

そして他の人達も、美しい男なので想う人がたくさんいたわけだよ。そして他の女の人達が想いをよせるが、その鬼に化けた人に惚れて相手にしなかつたよ。そうして後はそれに追われてね、姉妹達が鬼だと分かつたので、男は逃げるがずつと追いかけてきた。後は寺に逃げ込んで坊主が、お経を読むがその坊主もふらふらさせたようだ。そしてまた逃げて後は戦つて殺そうとするが、そこへ女達が入つてきた。

そして後は、菖蒲の葉でね、五月五日の由来記といつて、菖蒲の葉の中にその男は隠して逃げてね。そうするうちに坊主も来てお経を読んで祈り殺してね。そしてその鬼を退治して男は助かつたという話だよ。

の葉ぬ中んかい隠くいんよー。うまなー菖蒲の葉ぬ、
じこー茂とーる真ん中んかい隠きいたぐとう、うぬ鬼
の探めーいうさん。

あんさぐとう、今度おうぬ話ぬ世間ぬんかい聞かつ
てい、うぬ首里ぬ侍や鬼んかい追でいやーにさぐとう、
菖蒲の葉ぬ中んかい隠きてい命え助かたんでいぬ。

あんさーにうぬ理由から、今度お、五月五日えあま
がしん作てい菖蒲ぬ葉あ受きてい、御祝すんでいぬそ
ういつた伝説ですよ。

注 首里 8頁参照

17 継子の豆拾い

大昔、継子扱けーりち、いつペー悪く扱かーつてい
いつペー継子哀りしえーるぐとーん。

れてね。ここは菖蒲の葉が、とても茂つていてその真
ん中に隠れていたの、その鬼は探せなくてね。

そうして、今度はこの話が世間に知れて、首里の侍
は、鬼に追われたので、菖蒲の葉の中に隠れて命は助
かったと。

そういうわけで、これからは五月五日にはあまがし
を作つて菖蒲の葉をおいて、御祝いするという伝説だ
そうです。

採集 S 52・2・25 読谷村民話調査団第十四班（運天悦子）

話者 山城 幸 成（大正四年八月五日生）

翻字・対訳 玉城 琳 子

大昔、継子扱かいと言つて、継子はとてもひどく扱
われて、非常に哀れしたそうだよ。

やていうまんかい、ある悪質ぬ継親ぬ、女ぬ、「豆植いり」りち来い、直ぐ庭んかい転ばち「うり何分間にひじり、取り入れなさい」りぬうりなてい、いっぺー哀りそーる、うぬ継子。

うまんかい哀りそーる時に鳩が飛びつち、うぬ鳩ぬ手伝いし、うりん時間通い、継親ぬ言い付き通いなてい、助かたなりぬ話やし。うなーたい、戦前のー継子悪く取り扱ひさつたなりぬ話。

18 継子の嫁入

自分ぬ本當ぬ子あ、嫁かい行かしぶさしがてー、自分ぬ生ちえーる子あ。

継子やしえーや。あんすぐとうなーうぬ子どう望どーしが、本當ぬ子あ望でー無んばーてー。お母さんの子あ

それである所に、意地悪な継親がいて「豆を植えなさい」と来たり、また庭に転ばして「それを何分間に取り入れなさい」とのことになって、とても気の毒な継子がいた。

そして悲しんでいる時に鳩が飛んできて、豆拾いを手伝ってくれたので、継親の言い付け通り、時間通りに豆を取り入れることが出来て助かったそう。その位、戦前は継子の扱ひがひどかったという話です。

採集S52・2・25 読谷村民話調査団第七班（仲村渠清美・佐和田茂美）

話者 松田 カマド（明治三十三年三月十五日生）

翻字 知花 めぐみ
対訳 比嘉葉子

自分の実子を嫁に行かせたいのだけれど、自分の生んである子をね。

継子がいるでしょう。だからその子を望んでいて、実子は望んでいないわけだよ。お母さんの子どもは望

望まん、側ぬ子あ望どーしが。

あんし、うぬ自分ぬ子あ連おてい行ぢやぐとう、「うれーあらん私ねーありるましやぐとう、あれ私ねーする」んりちよー。あんしとういけーたんりぬ話やるばーてー。

19 継子話へ土は金よりも宝

これは始めはすね、砂辺殿内ですよ。そのウナジャラ調びねー、嫁調びさー。それから始めますがね。

今度は砂辺殿内え嫁取いぐとう。あんさーに、うまー家ぬ名あ何やたがやー忘れたがね、ここに女が二人居るんですよ。もう美人さ。その長女が継子で、実子は、これが後妻ぬ子よ。そうしてすね、誰を嫁に取るかという争いが出るんですよ。

また、その殿内の家庭には、ヤカーというお爺が居

まれないで、先妻の子を望んでいるわけだよ。

そして、自分の子連れて行つたら、「この子ではない私はあの子が好みだから、あの子を私の嫁にする」と言つて。それでとりかえたという話なんだよ。

採集 S 52・2・25 読谷村民話調査団第十班へ山城悦子

話者 津波古 只 一 (明治三十六年九月十日生)

翻字・対訳 玉城 琳子

これは始めは、砂辺殿内のことすね。そのウナジャラ、嫁調べです。

今度、砂辺殿内は嫁を取ることになつてね。その家の屋号は忘れたがね、そこに美人の娘が二人居たそうです。長女は継子で、次女は後妻の子であつた。そこで、誰を嫁に取るかと争いが起きたそうです。

また砂辺殿内にはヤカーというお爺さんが居てね。

るんですよね。今度はまた、女二人嫁調べに行くんですよ、二人座らして。

「今度おその継親ですね、いろんな悪考し、「是非自分ぬ子どう砂辺殿内んかいぬ嫁なする」りち、うんなくんさぐとう、今度おそのウスメーは「あんせーならん」りち頑張たぐとう。

「その場合に今度は、その夫なるものも立ちあいしてね。今度は誰あ取いがんりる事なたぐとう、重箱にさ、土とすね、また黄金、重箱に入れてその女二人が前におくさ。その妹の女はですよ、非情にさつすうでね、はがに者なていよ。一番黄金から取いんよ。そうして次はまた、その長女が土が入った重箱取るさーね。今度はその長女が言うには、妹おマカトウー名やんよ。「何がいやー、何んち黄金取いが」り言ちやぐとう、「あんし、いやー黄金ぬありわる、銭かにありわる世ぬ中立つちいちゆる」んち、妹お言ちよーるばーよ。「とーうれーあねーあらんぐとう、くぬ土りせーじこー宝やぐとう、いやー黄金とう私あ土とう替ていとうらし」りちよーんよーやー。「うれー、ちゃーんならん」んち。

その人が女二人の嫁調べに行つて、そこで二人を座わらしたそうです。

「今度はその継親がいろんな悪い考えをして、「是非自分の子を砂辺殿内の嫁にする」といつて、そうこうしたので、ウスメーが「そんなことしたらいけない」と怒つたそうです。

そして今度は、夫になる人も立ち合いてね。誰を嫁に取るかという事になつて、重箱に土と黄金を入れてその女二人の前に置いた。妹は非常に口がたつしやで素直でなかつた。(妹が)最初に黄金を取つた。そうして次に長女が土が入った重箱を取つた。長女が、妹のマカトウーに言うには「どうしてあなたは黄金を取つたの」と聞いたたら、「黄金があれば、世の中は渡つていける」と妹が返した。「それはそうではないよ、土というものはとても宝である、あなたの黄金と私の土と交換して下さい」と言つてゐるんですね。(妹は)「それはどうしても出来ない」と。

あんさーい今度お二人うぬ夫ないし前んかい座して
いよ、そうして今度はその夫なるものが聞くさー。
最初は黄金取つとーしんかい言いんよ、「いやー、ぬー
んち黄金取つたが」んち、「うれーじこー宝やいびーぐ
とう」。今度はその長女に聞くさ、土取つた者にね。「あ
なたはどういう意味で、その土が入つたものを取つた
か」と言つたら、それからその場合その長女が言うに
は、

土ぬあていでんし すむ作い作てい

仰じ拝なびる

いかなる金銀も 磨ち初みている宝なやびる

世間に土ふるぬ 宝や無やびらん

すむ作い作てい 仰じ拝なびら

そうした場合、もう土取つた者に嫁は決まるんです
よ、砂辺殿内の嫁え決まゆんよー。そうして嫁は長女
に決まった。そうしてから、アヤーが^{注⑤}出てくるんです
よ。「今日ぬウナジャラ調べー、誰があたいびたが」と
来るんですよ。姉マナビーというが、妹おマカトウー。
「マナビーが当たたいびたん」りち。それから母親は、
非情に残念がるさ。

そして今度は、二人の女を夫になる人の前に座わら
してね、そうして今度はその夫になる人が聞いた。最
初に黄金を取つた人に、「あなたは どうして黄金を取つ
たか」と言うと、「それは非常に宝だから」と。今度は
土を取つた長女に聞いたよ。「あなたは どういう意味で、
その土が入つたものを取つたか」と言つたら、その時
に長女が言うには、

土があつてこそ 何でも作られるのだ

仰いで拝もう

いくら金銀でも 磨いて初めて宝となる

世間に土ほどの 宝はない

色んなものを作つて 仰いで拝もう

そうしたら、土を取つた者に嫁は決まって、長女が
砂辺殿内の嫁に決まった。そこでアヤーが出てきてね。
「今日のウナジャラ調べは、誰に決まったんですか」
と聞いてきてね。姉はマナビー、妹はマカトーという
が、「マナビーに決まりました」と。そう答えると母親
は非常に残念がつてね。

今度お悪考さーに、マナビー、自分ぬ草刈やー達あなかいよ、両手を切らすさーねー。あんぬーせー、嫁んかい行からんりち、それでもう両手を切ってしまうさ。

そのうちに、下男ヤカーお爺さんが母を呼んでね、「いやー、悪欲く企らむぬ人間やぐとう、ただー合点ならん」と言うがねー。今度は「いやーが、砂辺くまにかい嫁なてい來ぬ場合やていん、私から何んくい習とーる。『味噌ガマー何処んかいあだが、塩お何処んかいあだが』んち、むる私から習とーぬむん、いやーあんし悪企みする」んちよ。

それからもう、ウスメーとうマナビーや残念がるさねー。これはいかんと思つて、お爺とマナビー二人ね、京太郎に化けて、敵取りに行くんですよ。

今度は、京太郎に化けて行っているんだから、敵取するために。最初にマカトウーはね、お爺さんが殺してしまふさ、最後には、もう両手は無くなつたが、今度はおもう神が現われてね、その両手が元の通りになるんですよ。それから、砂辺殿内の嫁はですね、このマナビーがなるんですよ。あの両手は切れたが、神の助か

今度はまた悪い考えをして、自分の使用人達に、マナビーの両手を切るように命令した。そうすれば、嫁に行けなくなるといつて、両手を切ってしまうんですよ。

そのうちに、下男のヤカーお爺さんが母に「あなたは、欲を企む人なので、ただでは許せない」と言つてね。今度は「あなたが、砂辺に嫁に來た時でも、私から何もかも習っている。『味噌ガメは何処にあるか、塩は何処にあつたか』と、全部私から習っているのに、あなたはそんな悪企みをするのか」と言つてね。

それからもう、ウスメーとマナビーは残念がつてね。これではいけないと思つて、お爺さんとマナビーの二人は、京太郎に化けて敵を取りに行くことになつたよ。今度は、敵を取るために、京太郎に化けているのでね。最初にお爺さんはマカトウーを殺してしまつたが後には神が現われて、無くなつたマナビーの両手が元にもどつた。それから砂辺殿内の嫁はマナビーがなつてですね。いえば、あの両手は切れたが、神の助けによつてその両手が元にかえつたという。継親と実子と、そ

りによつてその両手が元のように生えたという。継親と実子とその継子と継親ぬ、それが非常に伝説なんですよ。

して継子と継親の伝説です。

採集S 52・2・25 読谷村民話調査団第十四班（運天悦子）

注① 砂辺 北谷町の字（砂辺の前）を含む古層の村で戦前から村芝居の盛んな所で知られる。殿内は総地頭の親方家をさす俗称。砂辺殿内は砂辺の総地頭の親方家をいう。

注② ウナジャラ 王妃のこと。転じて接司の妻、奥様もさす。

注③ ウスメー 自分の父母の父、お祖父さん。またよその年をとった男の人を親しみをこめて呼ぶ言葉で、ここではお爺さん。ヤカーは同一人物。

注④ さつすうではがに者なてい 口がたっしやで素直でない性格。

注⑤ アヤー お母さん、母。士族についていう語。平民についてはアンマーという。

注⑥ 京太郎 明治初期ごろまで首里近郊、中南部まで出かけ、人形を使って数々の芸を演じた門付け芸人、およびその芸能をいう。現在沖繩市泡瀬や宜野座村宜野座で保存継承されている。

20 兄弟の仲直り

話者 宮城 カマド（明治二十三年二月十一日生）

翻字・対訳 村山友江

なー兄弟、いつペー固さる兄弟、とうんじやーんさ
ん兄弟やしがやー。肝見れーにてーなー兄弟ぬ。

あぬー、私ねーなー山猪射つてーたんり、山猪。あ
んさぐとう、「私ねーなー人殺ちえーしがやー、りつか
人ぬあぬだー、夜ぬ明きらんまーるけーひじみてい來」
りち、友達頼みーが行ぢゃんり。なーしかつとうぬ友
達。頼みーが行ぢゃぐとう、「いんーんー、私ねーな
いやーが人殺ちえーらーやー、私ねー一緒しえーひじ
みーが行かんむー」り言ちやぐとう。

あんさぐとうなー、行かんたれー、なーいつペー
固さぬ兄弟ぬ所んかい行ぢえーぬぐとーん。「私ねーな
人殺ちえーしがなーちやーすがやー、ひじみてい來ん
ねーならんしがちやーすがやー」り言ちやぐとう。「り
か、あんしえー早くなー行ぢひじみてい來」りち、兄
弟や行ぢゃんり。山猪る殺ちえーしが、人殺ちえーん
りちよーるばーてー。あんさぐとう山猪担みていちゃ
んり。

あんさぐとう、兄弟や切つちん切ららんやー、兄弟
りしえー、固さる兄弟やゆーするむのーやんどー。

もう兄弟、大変仲が悪い兄弟で、何の付き合いもな
い兄弟なんだが。もう、兄弟の心を見るつもりだつた
らしい。

あのおう、その人は山猪を射つたそうだ。だが人を殺
したと見せかけて、「私は人を殺してしまつたが、人に
見つからないうちに、夜が明けないうちに片付けて來
よう」と、友達を頼みに行つた。大変仲の良い友達を
頼みに行つたら、「いいえ、あんたは人を殺したのだつ
たら、私は一緒に片付けには行かないよ」と言つたつ
て。

そうしてもう、(友達が)行けなくなつたので、今度
は大変仲の悪い兄弟の所に行つたらしい。「私は人を殺
してしまつたがもうどうすればよいのだろう、片付け
て來ないといけないが」と言つたら、「ああ、そうだつ
たら早く片付けて來よう」と、兄弟は一緒に行つたつ
て。山猪を殺してあるのだが、人を殺したと言つてね。
それで、山猪を担いで來たつて。

だから兄弟の(縁)というのは切つても切れない。
仲の悪い兄弟でもよくしなくちゃいけないと。

注 とうんじやーんさん兄弟 付き合いもない兄弟のこと。

21 子 供 の 肝 へ 仲 順 流 り

話者 宮 城 カマド（明治二十三年二月十一日生）

翻字・対訳 村 山 友 江

※ちゆんじゆんなが
 仲順流れーいつペーなー銭持ちてーなー、うぬタ
 ンメーや。銭持ちやしが、子ぬ達あ三人、三男までい
 居しがやー。子ぬ達あ肝見れーに、私達あシマなーしー
 すたさ。

肝見れーなかい、子ぬ達あ三人揃ちよ、妻子ん三
 夫婦揃ちやぐとう。嫡子んかい、「私ねーなー年ん取つ
 ていやー、食物ん喉から落ていらんぐとう、いやー子あ
 捨てていやー、私にんかい乳い飲まち呉らんなー」
 りちやぐとう。嫡子ぬ夫婦あ、「仲順大主やふりてい
 るめーりー、私ねー子捨ててい乳いあぎーるくとー
 ならん」りやーに帰とーるばー。あんさくとうまた、

仲順大主はもう金持ちさあ、そのタンメーは。金持
 ちなんだが、子どもが三人、三男までいるのだが。そ
 の子供達の心を見るといいう（芝居）が、私達のシマで
 もやっていたよ。

心を見るために、子供達三人集めて、妻子も一緒に
 三夫婦集めて。長男に、「私はもう年を取つて、食べ物
 も喉から落ちないから、お前の子を捨ててね、私に乳
 を飲ませてくれないか」と言った。長男夫婦は、「仲順
 大主は気が触れているのですか、私は子を捨てて乳を
 あげるわけにはいかない」と帰って行ったわけさ。そ
 うしたらまた、それで良いと、もう心を見るためだか

うぬ人おな一濟まちよーるばーてー、な一肝る見ちよー
ぐとう。

あんさくとうまた、うぬ次男んかい言ちやぐとう、
次男んまたちよーるうんぐとうてーな一。「仲順大主
やや一、私ね一子捨ていてい乳い飲ますぬくと一なら
ん、死じすむさ。年取つとーる親や死じすむさ」り言
ちやぐとう、投ぎとーるばーてー。あんさ一に夫婦さ一
に直ぐな一、親あ庄迫そーるばーてー。あんさ一に帰
とーるばーてー、二夫婦。

また、三男ぬんかい問たれ一。「三男ぬ産し子よ、
いや一や、私ね一年取つてい食物ん落ていらんぐとう
や、いや一子捨ていてい私にんかい乳い飲まち呉らん
な一」り言ちやぐとう。あぬ、「またとう拝まりる親や
あらんや一、またとう拝まりる親やあらんぐとう私ね一
子あ埋ずみていん、親んかい乳やあぎ一んどー」りち。
夫婦、また、うつた一や心有るばーてー。徳ぬ有るば一
てー。あんさくとう、「私ね一や一、と一あま、東ぬ何
処ぬ何処りがら一んかい、あぬ一三尺掘てい黄金埋す
て一ぐとう。三尺掘てい、いや一子あ埋ずみよ一」り
ちやぐとう。うぬ子、埋ずみ一がる行ぢよ一んどー。

らね。

そうしてまた、今度は次男に言つたら、次男もまた、
ちようど（長男と）同じだったらしい。「仲順大主、私
は子を捨てて（貴方に）乳を飲ますことは出来ない、
死んでもいいよ。年を取っている親は死んでもいいさ」
と、見捨ててしまった。そうしてもう、夫婦でそのよ
うにして、親は粗末にしているわけさあ。そのように
して、二夫婦は帰って行つた。

また、次は三男に聞いてみた。「三男よ、お前は、私
は年を取って食べ物も喉から落ちないから、お前の子
を捨てて私に乳を飲ませてくれないか」と言つた。す
ると、「またと拝まれる親ではないから私は子を埋めて
も、親に乳を差し上げますよ」と答えた。この夫婦は
良い心を持っていた。徳があつたわけだ。そうして、
「私はね、あそこに、東にある何処そこを三尺掘つて
黄金を埋めてあるから。三尺掘つて、お前の子は埋め
なさいよ」と言つた。（三男は）、その子を埋めに行つ
た。もう心を見るためだからね。

な一肝見れーるやぐとう。

あんさぐとう、「いやー子あ三尺下うて埋ずみよー」
りちやぐとう。なーうぬ夫婦、妻えなー子あ抱ちよー
てい泣ちよーるばーてー。あんさぐとう、夫おまた穴
掘てー、鍬、一鍬下るちえーなー泣ちえー、うぬ子あ
見ちえー泣ちえーういっし。なー子埋ずみーる穴掘
いぎーぐとう、生ちちよーる子埋ずみーぐとう。あ
んさぐとう、泣ちえーうい泣ちえーういしちなー三鍬
下るちやぐとうなー、黄金え出しとーるばーてー。「三
鍬必じ下るしよー」り、親ぬ言ちよーぐとう。三鍬
りーねー「三鍬下るしわる、いやー子あ埋ずまりーぐ
とう三鍬やかんし耕りよー」りちやぐとう三鍬下る
ちやぐとう黄金ぬ花ぬばんない上がとーるばー。
ちよーる、私達あシマぬアシビそーさ。黄金ぬ花ぬ
上がたぐとう、三男のお、鍬えうちゆるさーに踊とー
ぬばー。夫婦なーうにーねーうりっし、徳ぬ有る子見
ちやんりち、うぬ子んかいなーうりっし。泣ちよーてい
なー、いりきさっし泣ちよーてい、また踊てい見してい、
踊とーぬばーてー。

むる赤ん子抱ちよーぬばーやさ。あんさぐとうなー

そのようにして、「お前の子は三尺掘って埋めなさいよ」と言つたから。もうその夫婦は、妻は子を抱いて泣いているわけさあ。そうしたらもう、夫はまた穴を掘って、鍬、一回下ろしては泣いて、その子を見ては泣いたりしていた。もう、子を埋める穴を掘っているのだから、生きている子を埋めるんだからね。そうして、泣きながら鍬を三回下ろしたら、黄金が出てきたわけだ。「必ず三回鍬を下ろしなさいよ」と、親が言っていたから。「鍬を三回下ろさないと、お前の子は埋められないから鍬でこのように耕しなさいよ」と言つたので、鍬を三回下ろしたら黄金の花が勢いよく上がった。

ちようど、私達のシマのアシビでやっていたよ。黄金の花が上がったから、その三男は、鍬を放して踊つた。この夫婦はその時はもう(大変喜んで)、この子は徳のある子だと、その子に(感謝した)。もう大変喜んで泣いて、それから(喜びのあまり)踊って見せてね、踊つたわけだ。

全員(三兄弟)、赤子を抱いているんだよ。そうした

黄金え、うぬ三男ぬ徳お取つとーぬばーてー。なー二人やなー親の孝やはじりとーぬばーてー。あんさぐとう、三男ぬんかい、うぬ親やなーわたさつとーるばーてー、わんだつとーるばーてー。銭んうつさな、黄金ん出じゃちよーぐとう。

あんさぐとう、徳ぬ有し、三人ぬ子ぬ達あぬ心調べりちる、いじとーみせーぐとうや、うぬタンメーや。あんすぐとう、子ぬ達や、三男のお徳お有てーぬばーてー、親ぬ孝するぶのー。

らもう黄金は、その三男が徳は取つたわけさ。もう二人は親の孝からは外されてしまった。もう親は、三男の所に行つて、養われたわけさあ。お金も、黄金も出してくれたから。

だから、徳があるか、三人の子供達の心を調べるためにやったことだからね、そのタンメーは。だから、子供達は、三男は徳があつたわけさあ、親の孝行をするだけあつて。

採集 S 52・2・25 読谷村民話調査団第三班（阿波根初美）

注① タンメー 士族の祖父。または士族の老翁（おじいさん）。

注② 仲順大主 伝承によると、仲順大主は、今から約七〇〇年頃に北中城村仲順を統治していた人物で、人々から深く敬慕されたと
いう。

※「仲順流れ」村芝居で行なわれる劇の演目で親孝行を主題にした短編劇、作者不詳。登場人物は、仲順大主と嫡子、次男、三男夫妻で構成。

※アシビ 村芝居のこと。

22 子供 肝へ仲順流り

話者 糸 数 カマド (明治三十九年六月十日生)

翻字・対訳 島 袋 喜美子

うぬ子ぬ是非飲まさんあれーならんぬーなやー
なかい、うぬ嫡子ん次男ぬん三男ぬんボージャー産ちゃ
ぐとう。

あんさぐとう嫡子ん、「なー寄とーる年るやる、貴方お
うったーやけー亡しみてい、亡すらー亡しえー」んち
次男んあん言ちやぐとう。三男のーまた、親ぬ孝ぬ子
なやーなかい「なーあんしえー、私あ子捨ていていん
やっぱし親ぬ命え替ららんむぬあんすさ」んち。うぬ
親ぬ達ぬ、うぬ試しし魂見じゆんり。

あんさーに、何んりが黄金え埋すとーてい、「とーいやー
子何処ぬ何処んかい埋くれー、あんさーなかい私ねー
乳い飲まちとうらしえー」りちやぐとう、「あんすん」
りち。なーすぐうぬ子見ちえーまたなー別りーさやー
んち、二人ぬ親さーなかいじこーなーすぐうぬ子ぐわー
見ちえーういすしが、うぬまた年寄ぬなー「くまんか
いいやー子埋くれーいー」んちやぐとう。うまからあ

その子の乳を、是非飲まさなくてはいけない事になつ
て、長男、次男、三男とも子どもが産まれていたので
ね。

すると長男は、「もう年をとっているので、貴方はも
う亡くなつたらいい。この子達を死なせるわけにはい
かない」と言つて次男もそう言つた。三男はまた、親
孝行だったので「それでは、私の子どもを捨てても、
親の命には替えられないのでそうします」と答えた。
親達が、子どもの心を見るための試しであつたよ。

そして黄金を埋めてから、「それじゃお前の子どもを
何処そこに埋めて、それから私に乳を飲ませてくれ」
と言つたら、「そうします」と。もう子どもを見ては、
また別れるのかと二人の親は、何度も子ども顔を見
ていたら年寄が「ここにお前の子を埋めなさい」と言つ
た。そうしたら、一回(鉄を)下ろしては子どもを見
て、二回下ろしその子どもを見て、三回目には黄金が

んし、あぬ、一鍬下とうちまたうぬ子見ち、二鍬下
とうちうぬ子見ち、三鍬でいねー黄金ぬ花ぬ出してい。

あんさーに、うりやしえーやー、三鍬ねー黄金ぬ花
ぬ出したぐとう、うれーまたやつぱしうぬー三男ぬー
んかい。うぬ宝あ、誰んかいんち呉らんやーに黄
金埋すやーに、うぬー黄金えくぬ三男が。

あんしうねうねー 産し子あん命救てい

黄金ぬ花ん 拝まつてい

あんしうつびなーん 命ん救てい

うんぐとーるうー事お無らんちる。あぬ「仲順流
り」やんりさに。

23 子供 の 肝へ仲順流り

出てきたよ。

そういうことで三回目には黄金が出てきたので、そ
れは、その三男にやった。この宝は、誰にいつてあ
げることが出来なくて、黄金はこの三男が貰つて。

また その産まれた子の命も助かり

黄金にも めぐまれて

そして命も 救われて

このようなうれしいことはない。これが、その「仲
順流り」ということだそうです。

採集 S 52・2・25 読谷村民話調査団第十班へ山城悦子

話者 松 田 英 徳 (明治二十六年六月三十日生)

翻字・対訳 知 花 孝 子

三人、三男まで居たんりしが、あんさーに、な
三人子居てーるふーじ。男ん子ん居てーるふーじやし

三人、三男まで居たというが、それでも、もう三人
とも子どもが居たようだ。息子がいたようだがね。

翻字・対訳 玉城 琳 子

私わんにん昔かんし お祖父おじいさん、お祖母おばあさんから聞きちえーる事ことやしが。

ある金持いんしんちの人ぬ家やんかい物喰ものくい、いわゆる今いまのなにと
いうかな、物喰ものくい。読谷よみたんでは、方言ほうげんではギンジャヤー
と言いいよつたが。ギンジャヤーが、「困こまつてゐるから泊とど
まらち呉くり」という事ことで来ちやん。

やしが、うぬ金持いんしんちの人、うり汚きたないりち断くどわたん。断くど
わたぐとう、くぬギンジャヤーんりせーまた貧乏ひんずいむん者ものか
い行いぢやぐとう、うまぬ主人しゆじんのーいっペー良いい人ぢやなやー
い、「とーあんせー、早へくなー、疲ちかりとーさに、休やすみな
さい」りち、快くわく憩やすらちやん。あんさーい蚊帳かぢやと取とつてい
泊とどまらちやぐとう、明朝みょうちやうなてい、蚊帳かぢやと取とつたぐとう、
うぬ人ぢやお居うらん、そこに宝物たからものが積つまれていた。

宝物たからものぬまじまつとーたなり言いいる事こと、うつさるお祖おじ
父いさん、お祖母おばあさん達たから聞きちよーる。

私も昔わん、お祖父おじいさん、お祖母おばあさんから聞きいたこと
ある話わなだけどね。

ある金持いんしんちの家の乞食こじきがね、読谷よみたんでは乞食こじきのこ
ギンジャヤーと言いつていた。そのギンジャヤーが、「泊とど
まるところが無くなくて困こまつてゐるので泊とどめてくれ」とお
願ねがひに來きた。

ところが、その金持いんしんちのの人は、その人が汚きたないと断くどつ
たよ。断くどつたので、このギンジャヤーは貧乏ひんずいむん者の所ところへ
行いつたらその主人しゆじんはとても良いい人で、「疲ちかれてゐるん
だろ、早へく休やすみなさい」と言いつて、快くわく休やすませてく
れた。そうして蚊帳かぢやとを吊かつて泊とどめてくれた。翌朝あしたあさになつ
て、蚊帳かぢやとを取とつたら、その人ひとはいなくて、そこには宝
物たからものが積つまれていたそうです。

だから、宝物たからものが積つまれていたという事こと、それだけお
祖父おじいさん、お祖母おばあさん達たから聞きいてゐるよ。

注① 大歳 大晦日（おおみそか）。一般的にはトウシヌユル（年の夜）という。
注② ギンジャヤヤー またはニンジャヤヤー。念仏者転じて乞食のことをいう。

26 大歳おおとしの火ひへ遺骨いこつは黄金おうごん

話者 松田源蔵（明治三十一年七月六日生）

翻字 知花めぐみ
対訳 玉城和美

童わらわぐわ、けー亡まさくとう、葬ほうむいかい行いぢやくとう、
大変親孝行いっぺうやうこーぬ人ちひやたんでい。

あんさーかいまた、うり手ていがね伝つたさーん居うてーるばーてー。

「あんえーなー、とー」送ういが行いかんまーるの話はなし。

なー亡まそーていからあんしえー家やううてい葬ほうららんち、
人ちひどうやしが、葬ほうららんちさーに茶毘だびぐわーするばー
てー。

さくとう墓はかんかい行いぢされー、なー持むつちゆんでい
さくとう持むたらんたんでいうぬ童わらわぐわーやしが。うま
んかい来ちねー持むつち来ちんどー、ひつたていうかりんどー。
送ういが行いぢゆんなたぐとう、持むたらんたんでい。あん

子どもが死んだので、葬りに行ったらね、とても親
孝行の人だったって。

そうしてまた、これは手伝い人も居たらしいよ。「あー、
もう」葬りに行かないまえの話だがね。

もう亡くなっていてるんだったら家で送ろうとするが、
人であるのに葬ることが出来ないというので葬式をし
たようだよ。

そうして墓に行つて、もう持とうとしたら持てなかつ
たつて子どもなのだが。ここに来る時には持つてこれ
たのに、葬りに行くとなくなつたら持たれなかつたつて。
それで、開けてみたら黄金ばかりだったつてよ。

ぐとう、開あきてい見けんちやれー黄金くがねびけーやたんでい。
うりが今いまぬ東恩納ひじやうなやさ、屋号やうごうや当とんでい言いいたがやー、
うまぬ神かみからの黄金くがねあんどーしぬ話はなしぬあたん。

注 東恩納 美里間切東恩納村。今の石川市東恩納。

27 城間ナーカ註①へ妻取り

田舎いなかんでいしえー、御主うす加那志がなしぬめんせーねー国王こくおう
やくとう、めんせーねーう取とい持むちすぐとう。男女集いなかいなあち
まていう取といすぐとう。うまぬ嫁ゆめぬ美ちゆらかーぎーやた
んでい。

あんさくとう、う取とい持むちるやくとう、女いなかんかい
取とい持むちすぐとう、御主うすくとうやくとう、う取とい持むち
そーるばーてー。御主うすがけー惚ふりていねーんよー。「だー、
一時いっちゆたうまんかい来くわ」んりやーなかい、裏座くちやんかい連そ

これが今の東恩納にある、屋号は当と言ったかな、
ここは神様からの黄金があるという話があったよ。

採集S 52・2・25 読谷村民話調査団第十七班へ辺土名朝三

話者 松田源蔵(明治三十一年七月六日生)

翻字・対訳 島袋智子

田舎というのは、御主加那志というと国王なので、
いらつしやるとお持てなしをする。男女揃ってお持て
なしをした。ここ城間ナーカの嫁は美人だったって。

そうして、御主のことだからといって女がお持てな
したから、御主が、(その妻に)惚れ込んでしまった。
「ねー、一時いっちゆたここにおいで」と言ってから、裏座に連
れて行つたって。そうして御主は(その妻のことが)

おてい行ぢやんでい。行ぢさぐとう、だー氣にかかとー
んてー、御主や。うまぬ主人でー思ん、夫んでー思ん
くとう、「えー、うぬ女お何処ぬやが」んちやぐとう、
「私あ妻どうやいびんでー」り言いたんり。「あんせー、
いやー見ちなー、とー」大事なとーさなー、隠ち知ら
んふーなーしよ。んじ土地や、何処何処良い土地やぐ
とう、私が呉ぐとう口封じし呼びてー呉んなよー」ん
ち、相当良土地ぬあるうつきー、むる貰たんでい。

うりからるやる。あぐとう、夫ぬ心ぬゆたさるばー、
妻ぬ心ぬゆたさるばー、あんさつてー事んち、夫ぬ、
しかんしちきていんならん。また、御主くとうやくとう、
女んあんしるせーくとう、うまからぬ綾あ無んばー。
あんとう、女ん男んうつきー勘ちちよーるばーてー。
恨みこーみ無んばーてー、御主やぐとう。あんさーに、
心んゆたさぬとうーち金満家んり。

もう氣にかかつていたんでしようね。城間ナーカの主
人とは思わず、また夫とも思わないで、「おい、この女
は何処のか」と聞いたたら、城間ナーカの主人は、「私の
妻ですよ」と言つたつて。「それじゃ、お前、見たでしよ
う。もう大変なことになつてしまつた」と言つて「も
う隠して知らんふりしてくれよ。何処その土地は良
い土地だから、私があげるから、誰にも話さないでく
れよ」と言われ、城間ナーカは相当良い土地のほとん
どを貰つたつて。

その時からである。また、夫の心も、妻の心も良かつ
たから、御主に妻がそうされたからといつて、夫がし
かけてはならんと。また御主だからといつて、女もそ
うしたから、そこからの綾は無いわけだよ。それで、
女も男もそれは勘づいているわけ。恨みはないわけね。
御主のことだから。そうして、心が良かったから、い
つまでも金満家だつたそうだ。

注① 城間ナーカ 城間は浦添市城間。ナーカは屋号、沖縄本島および周辺離島によく伝えられている大金持ち。

採集S 52・6・19 読谷村民話調査団第五班 富村朝夫・知花春美・米須美音子

注② 御主加那志(ウスガナシー) 国王に対する敬称。ウスガナシーメーともいう。〈加那志〉〈加那志前〉は最高の尊称をあらわす接
尾辞略して御主ともいう。

翻字 知花 めぐみ

沖繩の方言に、あるナーカ城間ナーカ、うぬ精神の南風原外間んかいるあるという言葉がある。これは城間ナーカが金持ちであつたという証拠になる。この家が代々栄えたということは、その主人が大変情け深く、人情味のある人であつたという証明に。

ある年の晩に、大きな昔の農家であつたでしょう。どこか、屋根の上に夕方盗人が入り込むのを見ておつたと。人が寝静まつてから、盗人は目的の物を取つていこうと天井に登つておつたと。それを見つけた主人は、御馳走も沢山作つてから、その盗人の所に行つて、「降りてきなさい、叱らないから一緒にここで年を取りなさい」と。見つかつたから「もうこれは仕方がない」と降りてきて御馳走を食べてから「何故こんなするか」と言つたら、「自分はお正月の年越しの金もないし、着物もないので、貴方の家が大変な金持ちであるというのでひとつ分けて帰ろうと思つて忍んでおります」と言つた。「それも分かるが気の毒であるから、私の家はあるから、あなたが困つておるなら少しお金もあげよう」とお金も貰つて、それから御馳走も分けてもらつて帰つて行つたと。

それからこの男は感激して心を改めて、うんと働いてそして、一生成間ナーカの御得としたと。つまりそういう風な心持ちで下男を扱うので、世に栄えたということだろふと思ひます。

採集 S 52・6・19 読谷村民話調査団第七班 へ遠藤庄治・石嶺まさみ

注① 南風原外間 全島でも屈指の豪農といわれる。勝連町南風原の外間家。穀物倉庫の高倉も現存。

注② 年の晩 (トウシヌール) 大晦日の夜。

29 城間ナーカ(盗人)

話者 松田英徳(明治二十六年六月三十日生)

翻字 知花めぐみ
対訳 玉城和美

トウシヌユールによ、城間ナーカー、ありな一貧乏者に肉ん何う呉てーぐとーん。

あんさーになーあり、金持ん昔から金持人やくとう、天井かい登てい、なーうまぬ寝んじーねー肉盗でい取いるんちやてーるふーじやしが。

あんさーに、なーうり主ぬ分かてい、うまーな一年ん取つて、「とー上んかい居る二才ん降りてい来わ」んちよー。あんさーに肉ん沢山食まち、また家族によー肉ん沢山持たちやんでいやんでーなー。

なトウシヌユールなていん食むしん無らん、あんさーにうまかい盗みーが来るぐとーん、肉盗みーが。あんさぐとうなー「上んかい居る二才え出してい来わ」んち年ん取らち、また沢山持たちやんでい話でいやる。うぬふーじーあいやすたるはじどーなー昔え。

トウシヌユールに、城間ナーカの人が、貧乏人に肉や何かを食べさせたつてよ。

そしてあの城間ナーカは、昔から金持ちだったので、(貧乏人が)天井に登つて、この人が寝てから肉などを盗もうと思つていたようだ。

そうだったが、この事を主人は分かつていて、ここは、年も取つたので、「さあ、天井にいる青年よ降りて来なさい」と。そして肉も沢山食べさせて、また家族の肉も沢山持たせたそうだよ。

もうトウシヌユールになつても食べるものも無くて、それでここに盗みに来たらしいが、肉を盗みにね。そうしたら「上にいる青年よ出て来なさい」といつて年も取らせて、また家族への肉も沢山持たしたという話だよ。そういう事があつたはずだよ昔は。

30 炭 焼 長 者 〈初婚型〉

話者 宮 城 官 正（大正三年二月十日生）

翻字・対訳 大 浜 洋 子

昔よ、炭焼きやーといって、もう大体困窮むんねー。困窮つていつたら貧乏者です。貧乏者が炭焼きやーそんでいしが、そこにある嫁さん何処かからとうめーやーに。

あんさーに、うぬお爺さん所んかい、おひるか茶か持つち行ぢえーるふーじやしが。その場合に、うまんかい沢山金ぬ転つておつたそうすね。あんさーいうり見じゃーに、「あい何が貴方お、くれー何処かいあたが「んちやぐとう、自分ぬ炭焼きやぎーる窯、窯うてい炭焼きやぎーねーむるうりるやんどー」んちやぐとう、びつくりしてねその嫁さんは。それで行つてみたら金山だつたらしいです。うぬ山は。

それでうり掘やーに、大事な金持ちなたんでいーる

昔、炭焼き人と言つて、ほとんど困窮であつたよ。困窮とは貧乏のことです。貧乏人の炭焼きの所に、お嫁さんがよそから嫁いできた。

それで、このお爺さんの所に、昼食かお茶を持って行つたようだがね。その場合に、そこに沢山の金が転がつていたそう。だ。（嫁が）それを見て「ねえお爺さん、これは何処にあつたのですか」と聞くと、自分が炭を焼いている窯で炭を焼いたらみんなそれだよ」と言つたものだから、嫁さんはびつくりしてね。そして行つてみるとその山は金山だつたらしいです。

それでそこを掘つて、大変な金持ちになつたという

話なんですね。

話ですね。

採集 S 52・2・25 読谷村民話調査団第二班 へ鈴木信一・手登根政子

31 姥 捨 山

話者 糸 数 カマド (明治三十九年六月十日生)

翻字 知 花 めぐみ
対訳 比 嘉 葉 子

今ぬ若さしが達が分からんなやーに、「んだ、あんしえー
年寄んかいまじ問ていんだ」つち親んかいあんしえー
問たぐとう、やつぱし灰繩御用何んちあたしえー。う
んなむんさーにむる年寄ぬ言ちやぐとう、年寄やうん
にーからる六十一歳からー捨ていらんなたんでいさに。

あんさーにうぬ子あまたうぬー男ん子あなー、「私達あ
まじ親ん達かい問ていちなだ」りちやぐとう、うぬ事
問やなかい」とーうれーちゃーしやさ、かーしやさ」
んち、うぬ年寄ぬ言ちやぐとう、やつぱし年寄や捨てい
てーならんりち、うんにーからる、年寄や捨ていらん

今の若い人達に分からない事があり、「そうだ、それ
なら年寄りにまず問うてみよう」と言つて親にそう問
うてみると、やつぱりあの灰繩御用というのがあつた
でしょう。こんな事を全部年寄りが答えたので、年寄
りはその時から六十一歳になつても捨てないようになつ
たそうだよ。

そしてまたこの息子が、「私達の親にまずは問うてこ
よう」と言つて、その事を問うたら「さあ、これはこ
うしてだよ、ああしてだよ」と、この年寄りが言った
ので、やつぱり年寄りは捨ててはいけないといつて、
その時から年寄りは捨てなくなつたつて。

なたんりさに。

くんなげー、六十一歳ろくじゅういちからむる捨ひていたんでいーしえー。
あの姥捨山おばすてやまんち、あんどやんでいさにー。本ほん当たうんでい
ろー。年寄としずいやあんしる生いちかちえーん。

今までは、六十一歳からは皆捨ひてられるといつてい
たでしょう。あの姥捨山おばすてやまというのは、そうだつてよ。
本ほん当たうらしいよ。年寄としずいりはこうして生いかされたよ。

採集S52・2・25 読谷村民話調査団第十班 へ山城悦子

注 姥捨山 沖縄の伝説では、六十歳を過ぎると、アムートウヌシチャに捨ひてた。アムートウ（哇あるいは岩屋いわや）

32 姥うば捨すて山やま

話者 松田源宜（明治四十一年二月二日生）

翻字・対訳 伊藝弘子

やつばし若者わかた達がよー、薩摩さつまぬ国くにからよ、御用ごゆうぬあ
るばーてー、「うまかい虎とらぬ絵いぬ有あしがやー、追いい出い
じゃしくんじゅん」でいながら言いちやくとうよー、うり
が出いじらんせーやー。後あとから、「とー棒ぼうし、追いい出いじ
せーくんじゅさ」んでい言いちやくとうよー、うりがー
出いじらんせー、うりさーに勝かちちやんでい。

若者達がね、薩摩の国からの御用があつて、「そこに、
虎の絵があるが、追いい出いして縛いりなさい」と言うが、
絵の虎は出いられないでしょう。そうしたら「それでは、
棒で追いい出いしなさい縛いるから」と言うと、それは絵な
ので出いられないから、それで薩摩に勝かちつたそうだよ。

とーうりが出いじらんせーやー、虎とらぬ絵いるやくとう、

それは出いないでしょう、虎の絵なんだから、「お前た

「いったーが追い出じやすらー、私がくんじゅさ」ん
ちそーしが、出じらんせー。うりさーに勝ちよーるばー、
うぬお婆が分かいてーるばーて。

ちが追い出せば、私が縛るから」と言うが、追い出せ
ない絵だからね。それで薩摩に勝ったそうだ、そのお
婆さんが分かつていたつてよ。

採集S 52・6・19 読谷村民話調査団第八班（渡慶次勲・上間京美・新里律子）

注 薩摩 旧国名、今の鹿児島県西部。

33 ク ス ケ ー 由 来

話者 大城 平 順（明治三十三年十二月四日生）

翻字 知 花 めぐみ

子どもが出来た時のクスクエーという話がありました、昔の人から聞いただけを申し上げます。

これは、私が十七、八歳の若い時分、子どもが生まれてその御祝いに行つた時の話ですが。ある年寄りが、何故クスクエーというかという話ですが。それはある木こりが山で大きな木を切り倒して、その最初の木の精が腹を立てて、「やつさー、こいつの子どもができたら取つてやろう、殺してやろう」というようなことで、これで木こりは心配している時に山の神が告げた。

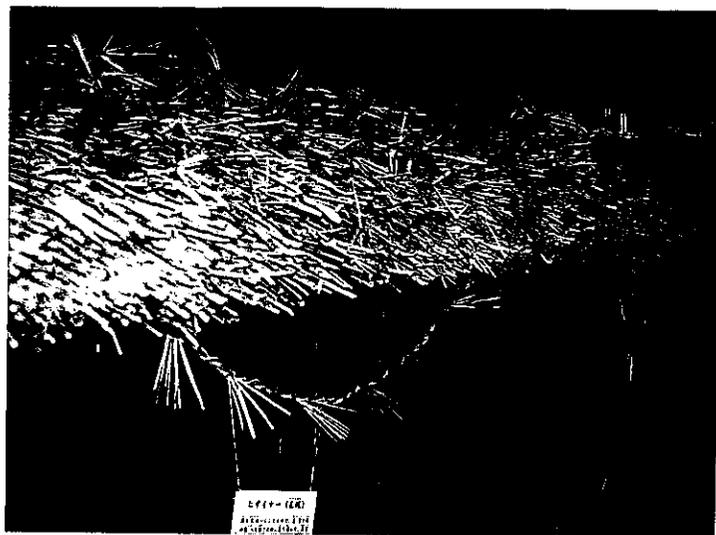
これは何と言うたかと言いますと、「確かに木ぬ精が、あんたの子どもを取りに来るから、その時にもし男の子であればウフィナグ、女の子であればウフィキガと、こういうような言い方しなさい。そうすれば、産んだ子は男と聞いたが女だねー」というような意味合いで反対が居たんだからすぐ帰つていった話です。

そうやって、山の神は何と言ったかというところ、「もし、この産婦の座敷の周囲に七、五、三縄を架けて、これに鶏の卵を架けてからサミナンコやって祝いなさい」そして、「もし、くしゃみしたらすぐクスキューと取り消しなさい」という話を聞いています。

採集S 52・2・25 読谷村民話調査団第十六班（金城清美）

※「男の子であればウフィンナグ、女の子であればウフィキガ」無事に赤子が生まれたことを隣近所に報告する時に男女の性を逆に報告する風習があった。男児であれば「ウフィンナグヌウマリトンドー（大女が生まれたよ）」といい、女児であれば「ウフィキガヌ ウマリトンドー（大男が生まれたよ）」と報告した。

※サミナンコ 産室に悪役が入らないように左縄、サン、または地域によって卵をさげて準備して、子供が生まれたら三線も弾いて祝うこと。サンミナクーとも呼ばれ、サン（スキの葉を結んで作ったもの）ミナは縄、クーは卵のことを表しているという。



左 縄・サン

翻字・対訳 玉城 琳 子

ちようどな、マジムンぬ来にて。幽霊ぬ達ぬ、
「今産まりーぎる子、生まりとーる子や私がうぬ子あ
今命取つてい来んでい」言ちやぐとう。また、ある人
ぬな、知恵出じゃちよーるばーて、うり聞ちよーるばー
てーいえーりん。あんさぐとう、「うぬ子ぬ命ちやーし
取いが」言ちやぐとうよ「鼻ひらちんり、鼻ひらち
取いんり」言ちやぐとう。

またうり聞ちよーる人お、「鼻ひらち、「クスケー」
り言いねーや、取いさんしが、「クスケー」り言やん
あいねーや、取いんり」言ちよんり幽霊ぬ。

あん言ちやぐとう、うぬ子ぬ鼻ひつちやぐとう「ク
スクエー」り言ちやぐとうよ、取いさんたんり。無ら
んりち来たんり。また私かな、うれー取いさん。「ク
スクエー」り言やつとーぐとうりちよ。

ちようどもう、幽霊がきてね。幽霊達が、「今産まれ
た赤ん坊の命を取ってくる」と言った。また、それを
聞いたある人が知恵を出してね、たぶん(幽霊達の)
話を聞いていたんでしようね。そうしたら、(幽霊達は)
「その子の命をどうして取るうか」「クシャミをさせて
取るよ」と言つて相談していた。

それを聞いていた人が、「クシャミをさせて、「クス
クエー」と言つたら命を取ることとは出来ないが、「クス
クエー」と言わないと、命を取る」と幽霊が話してい
た。

そういうことで、子どもがクシャミして「クスケー」
といつたらね、命を取ることが出来なかつた。私
には命は取れない。「クスケー」と言われたからと言っ
てね。

翻字・対訳 玉城 琳 子

塩お、昔からいつペー縁起良いでいち。ナンジャマース、黄金塩んり言ちありやしが。

まず昔聞ちやる事やしが、現在やしが、今各料亭とか飲み屋なんか、玄関の両方に塩置かつとーん。「何がやー」んちうり、聞ちんちやぐとう。

大昔、ある王様が、牛乗てい視察し歩ちみそーちやんり。うぬ牛えいつペー塩上戸やたんり、塩を欲しがらうり。

あんさぐとう、自然とうまから通たぐとう、うぬ塩置かつとーん所かい行ぢ、塩なみたん。それと乗ていめーいる王様、あー、くぬ家庭、縁起良いやしーりやーい、降りてい一服しみそーちやんり。

やてい、うにーんから塩お、非常に客引きにいつペー縁起良いりち。

塩はね、昔からとても縁起の良いものである。ナンジャマース、黄金塩といつていたそうですが。

昔聞いたことですけど、現在でもね、料亭や飲み屋の玄関の両脇に塩が置かれているよ。「どうして塩が置かれているのか」と聞いてみたらね。

大昔、ある王様が、牛に乗って視察しに行ったそうです。その牛は塩が好きで、とても塩を欲しがったそうです。

そうして、自然と塩が置かれている料亭や飲み屋の所を通り塩をなめたそうです。それで牛に乗っている王様は、その家庭は縁起が良いといって、牛から降りて休んだそうです。

それで、その時から塩は、客を引くのにとっても縁起が良いと言われたつて。

注 ナンジャマース 語義は銀塩、祝のときに頭にいただく塩、諸行事の時、神への供物として、小皿に塩を供え、それを直会なおらいする時「ナンジャマース、クガニマースをお供えて・・・」と唱えて塩を頭にいただく。(参)直会↓ウサンデーのこと。

36 真玉橋の人柱

話者 宮城 官 正(大正三年二月十日生)

翻字・対訳 松田美奈

昔よ、真玉橋まんだんばしかい橋はしか架かきいーしが、もうあつちは土つちが柔やわらかくてねえ、何回架なんかいけても、もうとうじゅまらんよー。

昔ね、真玉橋に橋を架けようとするが、もうあそこは土が柔らかくてね、何回架けても完成することが出来なかつたよ。

あんさーにうぬ橋架はしかきやー大工しえくん達ちやあ集あちまてい、いつペー心配しんぱいそーる場合ばいに、ある女いながぬ通とていちやぐとう「何なが役人やくみん達、あんしとうるばとーいびーる」うんぐとうーし、何回架なんかいきていん泥どろぶつくわーしとうじゅまらんどうやんでー」「とーうれー、恩義うんぎかきてい何回架なんかいきていんとうじゅまらんどうー。とーうまにかい七色なないろムーティー注そーる女埋いながじゅみわるとうじゅまいんどー」り言いちさしが「あんしえー、七色なないろムーティーそーる女いなが何処まんかい居うが」りちやぐとう。うぬ女いながおやつぱし、神人かみんふー

それで橋を架ける為に大工が集まり、大変心配している時に、ある女の人が通つて「どうしたのですか役人さん、こんなに深刻な顔をして」「こんなふうには、何回橋を架けても完成出来ないんだよ」と。「そうこれは、情をかけて何回架けても完成出来ないよ。そこに七色ムーティーをしている女性を埋めないと完成出来ないよ」と言つたので、「それでは、七色ムーティーをしている女性は何処にいるのか」と言つた。やつぱりこの女性は、霊力を持つていたようだね。

じやてーるばーてーやー。

あんさーに、うぬ人やしが、自分ちえー分からん
あん言やーに。「とーあんしえー、七色ムーティーそー
る女搜り」りち、皆し搜ていさぐとう、いよいよぬ
女やてーるばーよ。

あんさーにうり、夫ん、子ん居しがよ。後お調びた
ぐとう、うぬ女なやーになー後お埋ずまんねーならん
事なやーによー。あんさーにうり連おてい行ぢうまに
埋じまいる場合に自分ぬ女ん子んかいぬ遺言よ。「とー
人先え物お言なよー」りち、それから出たらしい。「人
先物お言なよー」り。あんさーに人先え物お言ちやん
為にうまんかい埋じゆみらつたぐとうやー。

あんさーに、うぬ橋や落成さしが。あんさーに女ん
子あ、なーチーガーなていよ。「人先え物お言なよー」
でい遺言さつたぐとうよ、女ん子あ生まりとーしがチー
ガーなてい。

あんさーに、うりん夫持つちゆぬ時分なとーしがよ、
うま、浜んかい見拾いんかいん何ん行ちゆしが、美らー
ぐわーなてい、いっぺーなー泣ち虫ぬ居しがよ、物お
言らん。

その人は自分でそう言ったようだが、自分であると
は思わなかつたらしいよ。「それでは、七色ムーティー
をしている女性を探さない」ということになり、皆
で探していたら、やっぱりその女性であつたつて。

またその女性には、夫も子も居たそうだよ。後で調
べてみたら、この女性にあたりその結果埋めなとい
けないことになつた。それでその女性を埋めぬ時に
娘への遺言があつてね。「人より先に物を言わないでね」
と言つて。その時から出たらしいよ。「人より先に物を
言わないでね」つて。人より先に物を言つた為に埋めら
れたからね。

それで、その橋は落成した。そうしたらその娘は啞
になつていたよ。「人より先に物を言うなよ」と遺言さ
れていたからね、その娘は生まれていたが啞になつた
よ。

そうして、娘も結婚をする年齢にもなつていて、浜
に貝拾いにも行く美しい娘だが、とても泣き虫で物も
言わなかつたよ。

あんさーになー主が、男ぬ親ぬ死ぬんでいさぐとう
「待てい」でいち、あんさーにうりから物言い始まやー
に。「あんさー、私ねー大さぬ立身すんどー」りちよ、
その伝説よ。人先え物お言なよーりる伝説やるばーてー。

採集S52・2・25 読谷村民話調査団第二班 鈴木信一・手登根政子

それで哀れに思つた父親が、もう死のうとするが「待つて」と言つて、それから物を言い始めてね。「それで、私は立派に立身するよ」と言う、その伝説です。人よりに先に物を言つてはいけないという伝説だつたよ。

注① 真玉橋 国場川にかかつている橋で、那覇市と豊見城村を結ぶ橋。十六世紀の尚真王が三山の按司を首里城下に集めて、中央集権を固めたころから代官の往来やらで、南山の豊見城間切と中山の那覇を結ぶ要路としての重要な橋であつた。

注② 七色ムーティー 七色の髪飾りでもとどりを結つたもの。

注③ 神人(カミンチュ) 神に仕える人。神役。祭祀行事に神役として参加する人々で、ノロや根人、根神、クデイ等。

37 真玉橋の人柱

話者 津波古 只一 (明治三十六年九月十日生)

翻字 知花 めぐみ
対訳 玉城 琳子

首里城の公儀すいりじょうのこうぎというんですね、時代は、今の政府いまのせいふですよ。

それでもう橋武はしぶ、その大将ていさうが一人おるんですよ、武ぶ

首里城の公儀すいりじょうのこうぎというんですか、時代は今の政府いまのせいふですね。

それでまた、責任者が一人いて武将ぶしょうといった。その

将しょうという。その間かんにもう十名じゅうめいぐらい集あつめるんですよ、その臣下しんかよー。「何なにんちくぬ真玉橋またまはしえ、架かきていん架くわきていんむるなー保たもかんしが、ちゃーさらまししが「んち、うぬまー臣下しんかさー、要まうは家来けらい、うったんかい計はからいるばーよーやー。

そうしてあまり良い案あんも出でない。それがまた世間せけんの噂うわさに出でてすね。その噂うわさが出でてから、今度こんどはその橋はしの橋柱はしばしらになる女おんなが言うには、「いったーうつき吟味じんみしん、うりがあんしえーじょーい保たもかんしが、世間せけんぬんかい七色なないろムーティーそーる女いなか居うぐとう、うり、うぬ橋はしぬ下しちやんかい埋うみらんあれー、くぬ橋はしのーちゃーし架かきていん保たもかんしが」と言うのですねー。

その話はなしが出でたもんだから、今度こんどは公儀くうぎの方々かたがたもよー、「それじゃー、その七色なないろムーティーそーる女いなかお何処まんかい居うが」ということで、その公儀くうぎぬ方々かたがたが探さがしに出でるんですよー。出でたらもううり家名やんあーイージョーでい言いいたんやー。

イージョーのチラーという女おんなが居おるんですよ。もう世間せけん様さまでは巡めぐったら、うぬ女いなかが当あたていよー七色なないろムーティーそーる女いなか見当みあたとーるばー。今度こんどお公儀くうぎから行いっ

間に十名じゅうめいぐらいの臣下しんかを集あつめてすね。「どうしてこの真玉橋またまはしは、架かけても架かけても壊こわれるが、どうした方がいいのか」と家来けらいに相談さうだんした。

そうしたらあまり良い案あんが出でなかつた。また世間せけんの噂うわさになつてすね。その噂うわさによれば、その橋はしの橋柱はしばしらになる女おんなが言うには、「あなた方がどんなに協議ぎぎしても、その橋はしは壊こわれるし、世間せけんには七色なないろムーティーをした女おんなの人がいるので、その人を橋はしの下したに埋うめないかぎり、橋はしはどんなに架かけても壊こわれる」と言いったようすね。

その話はなしが出でたものですから、今度こんどは公儀くうぎの方々かたがたが、「それじゃー、その七色なないろムーティーしている女おんなの人は何処まんかい居うるのか」と、公儀くうぎの方々かたがたが探さがしに行いった。行いくと屋号やごうがイージョーという家いへを探さがしあてた。

イージョーにはチラーという女おんなの人が居おたそうです。世間せけんで聞きいたら、その女おんなが七色なないろムーティーをしていいる女おんなであつた。今度こんどは公儀くうぎから行いつてその女おんなの人ひとを連れ

てその女を連れて来て、「とーくぬ橋え、いやー埋みり
わる保つんでいくとう、今度お、いやー橋柱となてい
うまんかい埋みーぐとう」んち、もう連れていくさー
ねー。

そしたら、夫と、その女ん子一人居んよー。女ん子
ぬ名あや、ナビーという名前さーね。それで、その橋
柱んかいいるその別れが非常なんで、親子の別れ
ですからよー。今度は、もうとうとうぬ七色ムーティ
ーそーる女お橋柱んかいなてい、もうこの世を失うさー。
今度、その親子お女ん子とう男ぬ親あ、もう国頭に
行くんですよー。首里、那覇うてー暮らし方ならんと
いつてね。国頭の謝敷という部落に行つてです、生
活するが。

今度はその男ぬ親とうぬ女ん子、謝敷ぬ浜んかい
潮干狩りに行くさねー。そういう場合に、その女のも
う愛嬌とう、謝敷節があります、その波ぬ返りいし
とうぬ女ぬ齒茎ぐわーぬ美らさとう、というなんで
歌を作らつてゐるんですよ。

それから、そこにあの侍が遊びに来るんですよ。う
ぬ潮干狩りやる所で。それでその女は非常にその男が、

て来てね、「もうこの橋は、お前を埋めないと壊れるの
で、今度は、お前を橋柱としてそこに埋めるので」と
言つて、連れて行かれたそうですよ。

その家には、夫と娘が一人居たそうです。娘の名前
はナビーといった。それで、その橋柱になるその別れ
が非常にもう、親子の別れですからね。そして今度は、
とうとうその七色ムーティーをしている女の人は橋柱
になつて、この世の人でなくなつたよ。

今度は、その父親と娘親子は、国頭に行くんです
よ。首里、那覇では暮らせないといつてね。国頭の謝
敷という部落に行つて生活をしていた。

そして父親とその娘は、謝敷の浜へ潮干狩りに行く
でしょう。その時に、その女の子の可愛いらしさが、
謝敷節というのにありますがね、波のかえす様子とそ
の女の子の齒茎の美しさが歌に詠まれているそうです。

それから、その女の人が潮干狩りをやっている所に
侍が遊びに来てね。それでその娘に侍が、惚れてね、

もう惚^ふりてい、うりんかい惚^ふりてい、いやー、私^わあ妻^{とうじ}
すんでいるふーじーし、なーじこーうりすんよやー。
だー何^ぬがうれえー、また何^ぬん物^{もの}お言^いやんぬー、もうチー
ガーねー。そしてその侍^{さむらい}が、うぬ男^{おとこ}の親^{おや}に言^いうには「いやー
女^{いなか}ん子^こ、私^{わん}にんかい妻^{とうじ}してみていとうらさんなー」んち
言^いう。でその男^{おとこ}の親^{おや}の言^いい分^{ぶん}には、「うれえー物^{もの}言^いらん
ぬーチーガーでいやぐとうなー、じょーいならん」でい
ちはねるさーねー。うんととうりからー、最^{さいご}後^ごには、
うぬ女^{いなか}ぐわーぬ、なー望^{ねじめ}どーるばーてーやー、その歌^{うた}
が^で出^でるさーねー、あの一[＊]「スーリアガリー」という節^{ふし}
に。

一^{まじやん}緒^{ぐん}なてい アンマー

私^{わん}ねー 物^{もの}言^いらちたぼり

私^{わん}ねー まざさる立^{りっしん}身^んすんどー

し啞^{おし}が、そういう歌^{うた}うたつたんだから、親^{おや}も侍^{さむらい}もびつ
くりしてですな。今^{こんど}度^ど、そういうなんで、もう侍^{さむらい}の
妻^{つま}になるんですよ。それから夫婦^{ふうふ}暮^くらして首^{すり}里^りに行^いつ
て、もうそれから物^{もの}を言^いうようになつて。

自分の妻にするつもりでいた。その女の子は何も物は
しゃべらない、啞^{おし}であつた。そして侍^{さむらい}が、男^{おとこ}の親^{おや}に「あ
なたの娘^{むすめ}を、私の妻^{つま}にさせてくれないか」と言^いつた。
そしたら男^{おとこ}の親^{おや}が、「この子は物^{もの}もしゃべらない啞^{おし}なの
で、絶^{ぜつ}对^{たい}出^で来^来ない」と断^{ことわ}つた。しかし最^{さいご}後^ごには、その
女^{いなか}の子^こが侍^{さむらい}に惚^ふれてね。「スーリアガリー」という節^{ふし}で
歌^{うた}をするんですよ。

しばし待^{まち}つて お母^{おとこ}さん

私^{わん}に 物^{もの}を言^いわせて下さい

私^{わん}は 大^{おほい}きな立^{りっしん}身^んをしますよ

と啞^{おし}(の娘^{むすめ})が、そういう歌^{うた}をうたつたので、親^{おや}も侍^{さむらい}
もびつくりしてですな。それからその侍^{さむらい}の妻^{つま}になり、
首^{すり}里^りへ行^いつて夫婦^{ふうふ}で暮^くらしてそれから(妻^{つま}は)物^{もの}を言^い
うようになつたつて。

注① 首里城 那覇市首里当蔵にある。中山王の居城であった。城の創建年代は不明であるが、尚巴志三山統一後の築城ではないかとい

われる。今次大戦で壊滅され、僅かに城壁の一部を残すのみとなった。

注② 公儀 玉府、官府のこと。

注③ 国頭 沖縄本島北部を指す。

注④ 首里 8頁参照

注⑤ 那覇 琉球王府時代の王都、首里の港町として発達、廃藩置県を機に、

政治の中心が首里から移り、県都となった。

注⑥ 謝敷 国頭村の字謝敷(ジャ)は砂の意味。琉歌の(謝敷板平瀬)で有名。

注⑦ アンマー お母さんのこと。平民についていう。

※謝敷節 琉球古典音楽の楽曲の一つ、謝敷板干瀬シヤクシキイタノシにうちやい引く波の謝敷シヤクシキイタノシめやらべの目笑い歯ぐき

謝敷の浜辺にある板のような干瀬に打ち寄せて返す白波はまるで謝敷の乙女たちの白く美しい歯のようだ。

※スーリアガリー ここでは継母念仏をお盆の七月エイサー「スーリアガリー」の節にのせて歌うこと。この場合、スーリーは歌に出てくる囃子言葉か？。



真玉橋

翻字・対訳 玉城 琳子

あぬちようど、うりやたんり。真玉橋え、な一架子
いしが壊りてーうい、壊りてーういしちやぐとう。う
ぬ真玉橋ぬうぬ橋えー、な一神ぬが言ちやらー何ぬが
言ちやらー「真玉橋や、ちようどな一七色ムーティー
そーしうまんかい埋みわる、うぬ橋えとうじゆまいん
どー」り言ちやぐとう。な一自分の子んかい当たとー
るばーて七色ムーティーや。当たたぐとうな一仕方あ
ならん、うまんかい自分ぬ子んかい当たていさぐとう、
うぬまた親あなうぬ子埋ずまつていそーるばーて。
ハーベールーまたなとーるばーて。

あんさぐとう、ちようどな一ハーベールなやーに飛
びーねー、「人先え物言なよー。ナバグワー、人先物言
いねー、だーうんぐとうな一当たいせー」。あんしあれ
な一、ハーベールーなていな一、飛ろーていなーうり
そーるばーて。

あんさーに、真玉橋んかい七色ムーティー、あぬー

あの一、ちようどそうだったて。真玉橋は、もう
架けても架けても壊れてね。その真玉橋の橋は、ある
神様が言ったのか誰が言ったのか「真玉橋は、ちよう
ど七色ムーティーをしている人をそこに埋めないと、
その橋は完成しないよ」と言った。そうしたらその七
色ムーティーは、自分の子どもに当たってしまったもう
仕方がなく、そこに自分の子どもを埋めたそうだよ。
そうしたら蛾になつてね。

そうして、ちようど蛾になつて飛んでいる時に「人
より先に物を言うなよナバグワー、人より先に物を言
うから、そのようになるよ」と。それでその人は、蛾
になつて飛んでね。

それから、真玉橋に七色ムーティーをしている人を

埋うみずみりわるうりするんりーせー、自分ど分うぬ言いやーなかい、自分どぬ子こんかい当あたとーるばーて。

あんすぐとう、「人ち先ゆえ、物む言いなよー」りち。またあんなさぐとうまたうぬ子こんりーせー、いふえーチーグふーじなとーるばーて。「物ものお言いなよー」んち親おやぬ言いちやぐとう。

※七色ムーティーに当たった人が、ここでは娘になつてゐるが語り違いと思はれる。

39 六尺ろくしやくフンドシ

話者 山城 幸成 (大正四年八月五日生)

翻字・対訳 玉城 琳子

昔むかし、公儀くわいじほのくわいじ、公儀くわいじりねー、王様おさまぬ住すまていめん所ところ。

あんさーい、うぬ公儀くわいじぬ側そばんかい、あるお爺おじさんが、やぐさみ者むん、一人ひとり住すまいぬお爺おじさんがめんせーたん。

さぐとう、うぬ人ちぬ六十一歳ろくじゅういちぬ還曆かんれきぬ祝儀すいじなたぐとう、隣組となりぐみぬ人しんぬ、「記念品きねんひん、何持なにもちつち行いぢやらーましが

埋うめないと橋はしは完成せいせいしないといふことは、自分が言いつたことが、子どもに当あたつてゐるわけだよ。

だから、「人ひとより先まは物ものは言いうなよ」と。またその為ために、その子どもは少し啞おどろのようになつていた。「物ものを言いうなよ」と親おやに言いわれてね。

採集 S 52・2・25 読谷村民話調査団第三班 (阿波根初美)

昔むかし、公儀くわいじといつたらね、王様おさまが住すんでいた所ところだよ。

そうしてその公儀くわいじの隣となりに、ある一人ひとり住すまいのお爺おじさんがいたそうですが。

そこで、そのお爺おじさんの六十一歳ろくじゅういちの還曆かんれきのお祝いわいいがあつて、隣組となりぐみの人ひとたちが、「記念品きねんひんは何なにを持もつていつた

やー」んり。「記念品、何やましがやー」りち。六尺ぬサナジ長いサナジ、うり記念しちゃん。うり記念さぐとう、うぬお爺さのー」はー、くれー有がたい事」りち受きてい、あんさーい、うぬフンドシなーはみいんそーちゃん。かきたぐとう、今度お洗濯しーねー弱いくとう、うり長持ちしみーいる為ねー洗濯おしえーならんりるお爺考え方。

あんすぐとう、洗濯さんよーいうぬサナジちゃー掛きーさぐとう、たつたいたつたたい、うりが物知りなてい。さぐとううぬ物知りりしえー、うぬサナジぬゆいに、明日雨降いん、あさつてー良い天気ないんとかりちはつきり分かいる事なたん。

あんさぐとう、何処んくいから「家あ造いやしが、何月ぬ何日あ雨降いびーみ、晴りーいびーみ」りち聞ちーが来ん。来ぐとう、「うにねー雨降いさ」、本当降いたんり。今度お、また、ある人お「御祝儀せーやー思しいしが、何月ぬ何日あ雨晴りるやりー」り言ちさぐとう「うにねー良い晴日ないさ、いい天気ないんどー」ぴっしやり合いよつた。

うり首里ぬ王様ぬ聞ちみそーやーい、「あんやんりし

らしいのかなー」と話し合つてね。六尺フンドシ（長いフンドシ）を記念品として持っていったそうです。そのフンドシを記念品にしたので、お爺さんは「これは有り難いことだ」と受け取つて、そのフンドシをはめたそうです。フンドシをしめたら、今度は洗濯したらフンドシが弱るといので、長持ちさせるには洗濯してはいけないというお爺さんの考えだった。

それで、洗濯をしないフンドシをずつと決めていたら、しだいしだいにその人は物知りになったという。そうするとその物知りは、そのフンドシのお陰で、明日は雨になる、あさつては良い天気になるとかはつきりと分かつたそうです。

そうしたら、あつちこつちから「家を建てるが、何月の何日は雨が降りますか、晴れますか」と聞きに来たという。「その時は雨が降る」と答えると本当に雨が降つたそうである。今度、ある人が「お祝いをしようと思つていますが、何月何日は晴れますか」と聞いたら「その時は晴れ日になる、良い天気になります」と答えて、それがぴしやりと当たつた。

この話を、首里の王様が聞いてですね、「そういう話

が、本当やみりち、「試ししくー」りち使者行らちさ
ぐとう、うぬ王様が言いしん当たたん。王様が質問し、
「何日ぬ」りち、聞ちくーりちひるーさぐとう、うり
ん「良い天気ないん」りち当たたぐとう。

くれー珍らしい人りやーい。りー、くれーあぬ時分
氣象台無んどうあぐとう、誰ん分からん。あんさーい
うぬ王様が、「こんな物知り、公儀んかい引ちあぎてい
くー」りちぬ事なたん。公儀ぬ首里城になーうぬ珍ら
しい人、うまんかい。

さぐとう、今度おお爺さのー、「公儀んかい行ちゆさ
やー」りち行ぢやくとう。あま行ぢやくとう、いつさ
いかつさい、着物からうぬサナジからむる新しい物とう
着替えしみらつたん。

さぐとう、うぬお爺さのー、うぬ元からいつペー縁
起良いやたるサナジ、「くれー、恩義ぬあるサナジでー
んむん捨ていてーならん」ち、紙箱ぐわーんかい立派
ぐわー隠みてい置ちえーたん。うぬ汚いサナジ、洗濯
んせー無ぬ置ちやくとう。

今度おなー、全部着替えさつたぐとう、着替えさり
ていから、また、くぬ王様ぬ、「何時ぬ何日、何ぬ祝ぬ

があるけど、本当なのか試してきなさい」と使いをやつ
て「何日の天気はどうか」との、王様の質問にも「何
日は良い天気になる」と当てた。

これは珍しい人だといってね。その頃は、氣象台も
なかつた時分なので、誰も分からなかつた。そこで王
様は、「その物知りを公儀に連れて来なさい」と言つて
首里城にその珍しい人を呼ぶことになった。

それで、今度はお爺さんは、「公儀に行くんだね」と
公儀へ行つたそうである。公儀へ行つたら、フンドシ
もすべて新しい物と着替えさせられてしまった。

そうしたら、お爺さんは、この元から縁起良いフン
ドシで、「これは恩儀のあるフンドシなので捨ててはい
けない」と、紙箱にちゃんとしてまっておいた。その汚
れた洗濯もしてないフンドシをね。

今度は、全部着替えさせられたから、王様が「何月
何日に、お祝いがあるけど、雨は降るか降らないか」

あしが、雨降いみ降らに」り言ちさぐとう。だー、うぬサナジぬる物知りなたぐとう、うりサナジェー取つてい無らんなたぐとう、今度おうぬお爺や、後おうぬサナジぬ無んなたれー分かいくりくないん。「いいばー、うぬサナジ箱んかい詰みてい、かじみてーてーぬむん、箱見ちんだ」りち箱開きてい見ちやぐとう、うぬサナジェー、洗濯せーねーんなたれーコージふちよーん。あんさぐとう、白コージふちやぐとう、あはー、雪ぬ降いさやーんりちし、「うぬ時ねー、雪ぬ降いびん」り言ちやぐとう、「何んてい言いが、沖繩んかい雪ぬ降たぬ事お無んむん。雪ぬ降いんり言み」りぬとうくるなてい。うにねーちんとうなー答当たらんなやーい。うりから、またくれーダメリち、また元ぬ所かい帰さつたんりぬ話。

と質問した。そのフンドシが物知りになっていたので、その縁起の良いフンドシをはずしていたために、返事にこまってしまった。(お爺さんは)「良かった、フンドシは箱にしまつてあるので、箱を見てみよう」と箱を開けて見たら、洗濯もしてないそのフンドシは、カビがはえていた。白カビがはえていたので、雪が降るんだらうねと思って、「その時は雪が降ります」と答えた。すると王様が、「何を言っているか、沖繩に雪は降つたことはない。雪が降るか」その時は答えがはずれてね。その時から、この物知りはだめだといって、またもとの所へ帰されたという話である。

採集 S 52・2・25 読谷村民話調査団第七班 仲村渠清美・佐和田茂美

注① 公儀 55頁参照

注② 首里城 55頁参照

40 果て無し話へ人を飽きれさせた話

話者 山城 幸 成 (大正四年八月五日生)

翻字・対訳 玉城 琳子

ある人ぬ、いっぺーに話上手ないんそーち。「あつさよー貴方ぬ話いっぺー面白さぬ、いつ聞いても聞きたい」。

「あんやみ、あんしえー今日や、いやー私話にりらちんだやー」りさーに。

「平生やなー、貴方ぬ話やいっぺー面白さぬ、いちまりん聞けやーりち思いん」りち、「あんしえー、今日やなー、にりらさやー」りぬ話さぐとう。

今度おちやんねーる話やがや思たぐとう、戦前山原船りち聞いたことあるかなー、山原船。山原船のいっばいアリ積んできて、港んかい着きてい、一ち、一ち腹結ち降るち。またん、腹結ち降るちまたん、腹結ち降るち。うれー、ちやつさが積ろーら分からんせーや。あとーなー、「ゆたさいびん」り言いたんり。

そんで、あんたの話は飽きれましたり言いたんり。

ある人が、とても話上手だったよ。「もうあなたの話はとても面白いから、また聞きたい」と。

「そうなのか、そうしたら今日は、君に私の話を飽きるまで聞かそうね」と言った。

それで、「あなたの話は、いつも面白い話で、いつまでも聞きたいと思っている」と言うので、「それじゃ、今日は飽きれさせようね」と話をしたという。

今度はどういう話をするのかと思つたら、戦前の山原船の話だった。山原船のいっばいアリを積んできて、港に着けると、アリを一匹、一匹腹を結んで降ろしたつて。またもアリの腹を結んで降ろして、また腹を結んで降ろしたつて。船には、どんなにたくさんアリの積まれているか分からないのでね。後は、「もうこれでいいです」と。

それで、あんたの話は飽きれてしまったと言つた話

である。

採集 S 52・2・25 読谷村民話調査団第七班へ仲村渠清美・佐和田茂美

注 山原船 他に馬艦船まがらんの別名もある。戦前までは、山原船が沖縄の海上交通機関の主役で、沖縄本島北部地方、いわゆる山原地方から薪炭を中頭、那覇方面へもたらし、都会からは日常雑貨を山原地方へ運んでいた。大湾、古堅に隣接する比謝川は山原船の一大寄航地であった。



比謝川河口の山原船

翻字・対訳 松田美奈

モーイ親方の話や。ちようどよ、支那から琉球にてー恩納山御用、また灰繩御用、また雄鶏の卵御用、三ちてーな、三ちあまからうりしーんち男ぬ親んかい御用ぬちやぐとう、男ぬ親あまた頭うすとーるばーてーな。うれー恩納山りちん壊さらんしえーや、また灰繩りちん、灰し繩綯てい持つちいからん。雄鶏の卵んちん無んしえー。

うぬ、うりてーちようどな、子あまたなーいふえーふらーふーじそーてい、知恵むちやてーんてー。だー何んたがやーヤマトウーんでいせー。「えーターりさい、何が貴方おあぬだーあんし心配しちよーみしえーが」でいちやぐとう、「私ねーや、あまからうつさ御用ぬちやぐとう、なーちやーしーねーしむがやーりち、あんし頭うすとーんでーヤマトウー」でいちやぐとう。うぬヤマトウーや、「うりん心配しみせーみ、私が立派くりつていぬ御用や私が行ちやびん」りち、私が行ちゆんり

モーイ親方の話はですね。ちようど支那から琉球に恩納山御用、灰繩御用、また雄鶏の卵御用と三つの御用がきたので、モーイの父親は頭を悩ませていた。恩納山といつても壊すことは出来ないし、また灰繩といわれても、灰で繩を綯って持つていくことは出来ない。雄鶏の卵といつてもないしね。

そこでまた、子どもが気違いのふりをしていたが、本当は賢くてね。その子の名前はヤマトウーと呼んでいた。「ねーお父さん、どうしてあなたはそんなに心配しているのですか」と言うと、「私はね、支那から三つの御用が来て、どうしたら良いのか悩んでいるんだよ、ヤマトウー」と言った。ヤマトウーが、「それは心配しないでいいですよ、私が立派に今回の御用は果たしてきます」と、自分が行くといつて。「私がでも解けないのに、お前に出来るか。お前には出来ない」と言った

ち。「私がんちよーならんむんぬ、いやーがないみ。いやーがならんしが」でいやぐとう、「私が立派果たちちやーびん」りち行ぢよーるばーてー。

あま行ぢやぐとう、「何が、いやーが来る、ターリーや」りちやぐとう、「あれ、産催そーいびん」でいやぐとう、「男んぬひやー産催すみ」んでいやぢやぐとう。「何が、雄鶏ぬ卵りしえー何やいびーが。雄鶏ぬ卵りしえー、人お産催そーぐとうる産ちえーる」り言ぢよーるばーてー。

あんさぐとう、「いやーあんし」灰繩持つちちえーみ」りちやぐとう、「灰繩ん立派持つちちえーびん」りち。また鉄んかい、繩綯やーに焼ちやーに、うり御差ぎてーるばーてー。「あはーくりん通とーん」りち。また、あまーなー二ち通とーしえー。「あんしえーいやー、恩納山あぬだー持つちちー」り言ぢやぐとう、「恩納山積んくする船ぬ無らん。あぬ船、くまから借らちうたびみそーり。あま壊する道具とう積しーる船とう借らしぬさー、立派持つちちやーびん」り言ぢやぐとう。うりんあまー詫びそーるばーてー。うぬ三ちさーに負かち勝つちよーるばーてー、ヤマトウーや。ふらーふー

ら、「私が立派に果たしてきます」と行っているわけだよ。

支那へ着くと、「どうしてお前が来たか、父親は」と言ったので、「父親は、産氣づいています」と言うと、「男が産氣づくということもあるのか」と言った。「それでは、雄鶏の卵というのはどういことですか。雄鶏が産氣を催して産まれたならば、人間も同じ」と言った。

それから、「おまえは灰繩は持ってきたか」と聞くと、「灰繩もちゃんと持ってきました」と言つて。灰繩はこのように繩を縛つて、鉄の上に立派に縛つて置いて焼いて、それを差し上げたそうです。「それも通つてい」と。(ヤマトウー)は二問解いた。「それからお前は、恩納山は持ってきたのか」と言うと、「恩納山を積む船がありません。船をここから借してもらえないですか。恩納山を壊す道具とそれを積む船を借してもらえらなら、ちゃんと持つてきます」と言つた。それも向こうはあやまつてね。三つの難題はヤマトウーが勝つたわけだよ。氣違いのふりして、とても賢い人であつ

じそーる、いつペーぬ知恵持ちてーなうれー。

たよヤマトウーは。

採集S52・2・25 読谷村民話調査団第三班〈阿波根初美〉

注① モーイ親方 本名は伊野波盛平で毛氏八世。親方の位にあり伊野波親方と呼ばれ三司官職につき、知行高三百二十石都合四百石を

賜う、同十月美御殿大観職に任ぜられる。

注② 恩納山 恩納村恩納にある山の名。

注③ ターリー 土族言葉でお父様。

※「ヤマトウー」モーイ親方の幼名、「ヤマトウー」はモーイと同一人物だと思われる。

42 モーイ親方〈殿様の難題〉

話者 津波古 只 一 (明治三十六年九月十日生)

翻字 知花 めぐみ
対訳 玉城 和美

今、おたくがお話なさる通り、鹿児島から、そのモーイ親方ぬ親はもう首里城ぬ役人ですよ。そういう旧藩時代は、沖繩は鹿児島にも支配されてというのがあったんでしようね。そういう関係で、今度は鹿児島島の役人がですね、沖繩に来て灰繩御用ですね、

今、おたくが話をした通り鹿児島からね、そのモーイ親方の親は首里の役人だったんですよ。旧藩時代には、沖繩は鹿児島にも支配されていたんでしようね。そういう関係で、鹿児島島の役人が沖繩に来て灰繩御用というのと恩納岳を壊して鹿児島に持ってこいという

それと恩納岳ぬ壊ち鹿兒島んかい持つち来んでいたる
うぬ二ちだつたわけか。

そのモーイ親方が言うには、はー親んかいですよ、
「うなーたいぐわーぬ事んあんし心配しめしえーんなー、
私が立派解んさびーぐとう」んち「とーあんしえー、
いやーちゃーし考とーが」すると「おー、うり私が立派
解んさびーさ」んち。

今度は、鹿兒島からその役人が来てですな。「あん
しえー、何月何日までにひつ壊ち持つちちゆーが」ん
ち、聞いたらすよ、それをモーイ親方が、今度お返
答してですな。「とー、貴女達あうぬあたいたぐわー分か
いみそーらん、私があんしえーさびーぐとう」んち。

今度は、灰繩御用というのは、藁繩、あれ巻いてで
すよ、それ火いちきていなーうりしちーねー、うぬま
ま灰繩ないぐとう、うり持つち行きんちやつたらしい
ですよ。「ちゃーが」んち、鹿兒島の役人かい言ちやぐ
とう「うれーなるほどあんやん」ち。

今度はまた、恩納岳御用さーねー、「あり持つちくー」
んち。「とーあんしえー、恩納岳え私達が立派壊ち積む
る船え無んしえーや」くれーなー私達が詫びー」んち、

二つの御用があつたよ。

そのモーイ親方が言うには、親にですよ、「これくら
いの事でこんな心配するね、私が立派に解いてみせ
るから」と「それじゃ、お前はとういうふう考えて
いるか」というと「私が立派に解いてみせるよ」とい
い返した。

今度は、鹿兒島から役人が来てですな。「そうしたら、
何月何日までに恩納岳を壊して持つてくるか」と聞い
たら、それもモーイ親方が返答したよ。「貴方達は、そ
のくらいの事も分からないのですか、私がいりますよ」
と。

そして今度は、灰繩御用というのは、藁繩を巻いて
それに火を付けてそのままにしておく灰繩になるの
で、それを持つて行きなさい。「どうかね」と、鹿兒島
の役人に言つたら「なるほど」と言つたよ。

そしてまた今度は、恩納岳の御用でしょう、「それを
持つてきなさい」と。「それでは恩納岳を私達が立派に
壊しても積む船が無いでしょう」「これは私達が悪かつ

そういう話ですよ。

た」と詫びたという話だったよ。

採集 S 52・6・19 読谷村民話調査団第八班へ上間京美・新里律子・渡慶次勲

注 恩納岳 恩納村恩納に位置。標高三六二・八メートル。優美な、気品あふれる女性を思わせる山容は、遠く王府所在の首里あたりからも望見され、歌にも詠まれた。

43 モーイ親方〈難題〉

話者 松田英徳（明治二十六年六月三十日生）

翻字 知花めぐみ
対訳 玉城和美

あれー親ぬ薩摩んかいぬ御用なーうりしえーぐとう
よー。あぬ恩納、灰繩んち灰繩なよー。

あれは、親が薩摩からの御用があつてね。恩納岳、
灰繩などと。

灰繩とう、また恩納岳でいちやぐとう、うりやたんでい。なー親あ哀りつしなー「親のおならんしが、私がないんち」言ちえーるふーじ。あんさーうりがー大丈夫やたんでい。

灰繩と恩納岳のことで御用がきたらしいよ。もう親
が心配していたら、「親が出来ないけれども、私が出来
るよ」と言ったらしい。そしたらそれが大丈夫だった
てよ。

あんし繩やていんよ、昔ん人から聞ちやーに、繩あ
絢やーにくんじやーに絢てい焼ちやぐとうる灰繩なとー

そして繩でもね、昔の人から聞いて、繩は絢って結
んで焼いたら灰繩になっていたよ。これも通っていたつ

んぐとーん。うりん通とーや。

また、恩納岳んよ、押し倒いるうれー道具、船と
やー道具くまんかい取らしえーりりちえーるぐとーん。

て。

また、恩納岳もね、それを壊す道具と船をここによ
こしなさいと言ったらしい。

採集S 52・2・25 読谷村民話調査団第二班 へ鈴木信一・手登根政子

44 渡嘉敷ペークー へ味噌と花鉢

話者 松田源藏(明治三十一年七月六日生)

翻字 知花めぐみ
対訳 玉城和美

御主加那志前とう御城うてい、暮う打つちゆしが、
御主加那志前んかい一番手でい言やつてい「ひやひや
ひや」つち打つちさくとう、また役人んかい言ちきらつ
ていペークーや。「うーさが、あーさが」し打つちやぐ
とう「あんしえー樂しみえーあらんさー」んち「何が
あんする」んちやれー「あー私ねー言ちきらつてーぐ
とう、「うーされー、あーされー」し打つちやいびる」
んちさくとう。御主加那志前や、「あんしえーすな、う
れー樂しみあらんくとう、前すたるぐとうしみてい呉

(ペークーは)、御主加那志前と城の方で、暮を打つ
ているが、一番手だと言われて「ひやひやひや」と打つ
ていたら、役人に注意されたらしいよ。それで「さあ
どうぞ、あ、どうぞ」といつて打つたら「こうしたら
樂しみはないよ、どうしてそう言うのか」といわれ、
「私は注意を受けたので『さあどうぞ、さあどうぞ』
と打ちますよ」と言った。そうしたら御主加那志前は、
「そんなふうにはするな、これでは樂しみもないよ、
前のようにしてくれ」と言ったそうだよ。

り」んちやたんでい。

あんさーんかいまた、家やんかいぬお土産みやげえ味噌みそ呉くて
みしえーるふーじー、味噌みそ。あんさくとう 頓とん知ちぬ強ちやうさ
ぬ、うまー門もんから持むつち出でしーしえー難むづかしーむんや
くとう、木きぬ枝えだぐわー折うやーに味噌みそ樽すだるんかい立たていてい、
花はな木ぎんち持むつち出でしたんでい。うれーペークーりぬ話はなし
てー。

そうしてまた、家への土産として味噌をくれたらし
い、味噌をね。そうしたら頓知が強くてね、それを持っ
て門から出ていくのは難しいとって、木の枝を折っ
て味噌樽に立てて、花木にみたてて持つて行つたつて
よ。これペークーの話だよ。

採集S 52・6・19 読谷村民話調査団第五班 富村朝夫・米須美音子・知花春美

注① 渡嘉敷ペークー モーイ親方とならんで沖繩を代表する笑い話の主人公。ペークーは王府時代の士族の位階名 渡嘉敷親雲上。尚

敬王三一年(二七五〇年)首里赤田村の渡嘉敷兼倫の三男に生まれ、和名を兼副という。兼副は長じて花当の職を奉じていたが、

二七歳の時鹿兒島へ行き、和歌、書道、生花、謡、剣道、茶道等の諸芸道を修得して七年後に帰朝し、尚穆王の世子、尚哲公の仮
右筆となり、翌年右筆となった。尚育王十四年(一八四一年)九二歳の時、北谷間切真栄城の名島を賜わり、「真栄城」に改姓。

尚育王十七年(一八四四年)旧曆三月二四日九五歳で桑江之前で奄で死す。

注② 御主加那志前 39頁参照

翻字・対訳 津波古米子

皆が、家来ぬ達が遠慮し、渡嘉敷ペークーとう冗談しえーならんち。皆が嫌いすぐとう、王様あ、「ペークーがすしる本当やる」んち。だー、気兼し、うじいていさんばーてえー。

うぬペークーや、「ひゃー、かんなるやる、かんなるやる」し碁う打ち、後お足までいかんし置つちやきーるふーじ。

下家来ぬ達や、「ならん、いやー、王様んかいあんすんなー」んち言ちやれー、王様や、「いいんーくれー、私が気に入つちよーん」ち、ペークー褒たんりよー。

本当、朗らかにあんやりわるやし、下家来ぬ達ぬ、「むのー、思ん。王様んかいあんし失礼ないしが」んち言ちやれー、なー、王様や、じこー気に入つちよ、ペークー褒たんり。朗らかなりわるいりきさいさやー。

王様の家来の者達が遠慮して、渡嘉敷ペークーと(王様は)冗談をしてはいけないと。皆が嫌ったので、王様は、「ペークーのやるのが本当なんだ」と。(家来達は王様に)気兼をし、おつくうで話かけようとしないわけだよ。

このペークーという人は、「あーだ、こーだ」と言いながら碁を打ち、しまいには足まで置いたらしい。

家来の者達が、「けしからん、あんたは、王様に対して、あのような事をするのか」と言ったら王様は「いやいや、これは私が気に入っている事だ」とペークーを褒めた。

本当は、朗らかに楽しくした方がよいのだが、家来達が、「物事を知らん非常識であるぞ。王様に対してとても失礼にあたる」と言ったのが、王様は、ペークーが気に入り、褒めることばかりである。朗らかである

遠慮遠慮しいねえーな、うりとー氣に合わん。王様
や、じこー氣に入っちよーたんり。

とこちら側も楽しくなるものである。遠慮がちにして話しているともう、この人とは氣が合わないという事になってしまふ。王様は、とてもペークーを氣に入っていたという事です。

採集 S 52・6・19 読谷村民話調査團第八班（渡慶次勲・上間京美・新里律子）

46 渡嘉敷ペークー（碁打ち）

話者 山城 幸 成（大正四年八月五日生）

翻字 知花 めぐみ
対訳 玉城 和美

渡嘉敷ペークーという人が昔めんしえーてるぐとー
しが、うぬ渡嘉敷ペークーが、ある所ぬ王子様とう
碁、両方碁う好きなんそーやーに碁打っちゃん。あん
とう碁んかい夢中なやーに渡嘉敷ペークーが王子様ん
かい「あにひやー、あまーなまー死ぬんどー、んだく
まー殺ちとうらさ」とう。碁るやぐとう夢中なてい言
ちやぐとう、うぬ王子様ぬ監視ぬ聞ちやーい「むぬ当
てー無らん王子様んかいうんぐとうぬ言葉使えすみ

渡嘉敷ペークーという人が、昔いらつしやったが、
その渡嘉敷ペークーが、ある所の王子様とね、両方と
も碁が好きで碁打ちをしていたよ。そして碁に夢中になつて渡嘉敷ペークーが王様に「あれ、まああそこは今は死ぬよ、ここは殺してあげよう」などと。碁打ちなので夢中になつてそう言っていたら、その王子様の監視がそれを聞いて「あと先も考えないで、王様にそういう言葉使いをしてなんてことだ」と注意を受けたつ

ひやー」んでいち咎受きてい。

あんさぐとう、渡嘉敷ペークーや、「あんしえーなー私ねー碁んかい夢中なやーにるあん言ちやる、王子様に対して軽蔑の言葉りちえーあらんてーぐとう。あんしえーなー、次からなー私ねー碁打つちーがー来びらん」ち。あんさーいなー遠慮さぐとう、今度お反對に王子様が「とーいやーが来らんるあれー、私娯楽おや無らんぐとう、うんな言葉使自由に済むぐとう、またん来、一緒私にん楽しまちとうらし」でいる事なてい。あんしうりから、監視ぬ人ぬん見逃がーらちうぬ碁打ち、悪話許したでいん所ぬ事。

て。

そうしたら、渡嘉敷ペークーは、「私は碁に夢中になつてそう言ったが、王子様に対して軽蔑の言葉とは思つてないよ。そうだったら、次から私は碁打ちには行きません」と遠慮したら、今度は王子様が、「お前が来なかつたら、私の娯楽は何の楽しみもない、言葉使いも自由にしていいから一緒に楽しませてくれ」という事になった。それから、監視の人も見逃して、碁打ちをしてそのことも許したという事だよ。

採集 S 52・6・19 読谷村民話調査団第九班〈運天悦子・大宜見光〉

47 渡嘉敷ペークー〈鳩汁〉

話者 山内繁茂 (明治三十七年三月五日生)

翻字 国吉トミ

あのー、「今日は鳩の御馳走しよう」と呼ばれ喜んで行つて見たら、自分に出したお汁は大根の汁であつたと。それで、これは何時また恨み返しをしようという企みで、今度は「私の家にみんなおいで、今日は鳩の料理をし

てあげるから」と言つて、この畑から大根を沢山持つてきて煮て、大根だけ出したと。

そしたら「お前は鳩の料理をしてくれるというのに、何故大根ばかり出すか」と言つたら、「私は、何処の家で食べた時には鳩の料理というのはこんなものであったから、私はそれを鳩料理と言つた」と言つて、恨み返したという話を聞いた。

採集S52・6・19 読谷村民話調査団第七班〈遠藤庄治・石嶺まさみ〉

48 渡嘉敷ペークー〈後生の礼儀〉

話者 山内 繁 茂 (明治三十七年三月五日生)

翻字 知花 めぐみ

階級制度のはつきりした時代の人であつたらしいですね。

そして、王侯貴族、色々なものがあつて、ペークーは下役人でしよう。だから園遊会上の人達がやっている時に、御馳走を出して食べておる所に行つて御馳走を食べたいなと思つておるが自分は参加し得ないから、ひとつ才知で御馳走を食べようと思つて、その集まつた所に行つて、「さりー」と言つたら、「何かペークー」と言つたら「一つ物習えしーが来ました」、「何やが」と。その偉い人達は、威張つておるから「とーあんしえー問ていんでいと。」私の親は、私より若い時に死んだが、親よりは年取つて死ぬんだが、後生に行つたら、「イー」と言うか、「ウー」と言うか」そう言つた。

そうすると誰も返事しないから「うりペークー、くりん食めー、くりん食めー」と言つて御馳走を食べて、返事は聞かないで帰つたという。それは、つまり頓知家のペークー。

※「さりー」目上に男が用いる敬語。「もし」に相当する。

※「イー」目下に対して承諾、同意を表わし肯定する語。「はい・そう・ああ」に相当する。「ウー」目下に対して承諾・肯定・同意を表わす語。「はい・ええ・はあ」に相当する。

49 鳩肉料理

話者 松田英徳（明治二十六年六月三十日生）

翻字 知花めぐみ
対訳 玉城和美

鳩肉煮ちやぐとう、なー上びんかいむる浮ちゆんぐ
とーん、鳩ぬ肉お。あんしやぐとう、なー味すんでい
なーむる無んなどーるばーてーなー。
あんさーに、自分ぬ股切やーに入つてーんでいぬ話
やんでー。

鳩の肉を煮たら、もう上の方に全部浮いていたよ、
鳩の肉は。そうして、もう味見をしているうちに全部
無くなつてしまつたよ。

それで、自分の股の肉を切つて入れたという話だそ
うだよ。

話者 松田英徳（明治二十六年六月三十日生）

翻字 知花めぐみ
対訳 玉城和美

糞ぬ歩ちゆたしや 今度う初みんち

亀の上んかいうりが歩ち行ちやぐとう、糞ぬ歩ちゆ

せー今度う初みんでいぬ。

山原んかい行ちーがーちー、山原亀ぬ上んかい糞ま

たぐとう。糞が歩ち行ちやぐとう、ありん歌作てーる

ばーでいやる。今度う初みんち。

糞ぬ歩むしや 今度初みでい

糞が歩いたのは 今度初めてだよ

亀の上にした糞が歩いて行つたので、糞の歩くのは
今度初めてという。

山原の方に行く途中で、山原亀の上に糞をしたよ。

その糞が歩いたので、そのことを歌にしてあるわけだ
よ。今度初めてといって。

糞が歩くのは 今度初めて

採集 S 52・2・25 読谷村民話調査団第二班 鈴木信一・手登根政子

注 山原 沖縄本島北部一帯の呼称で、恩納村金武町以北を指す。

51 大湾のビジュル石

話者 山城 幸成（大正四年八月五日生）

翻字 知花 めぐみ
対訳 玉城 和美

大湾ぬんかいビジュルでいぬ神ぬ、石仏ぬめんしえー
てーるぐとーしが。うりいつペー大湾部落とうし、産
し子繁盛ぬ対する神様なたぐとう、ある部落ぬいつペー
うらやまさしうり盗でい行ぢさぐとう。

あんさーいまた盗まつたん 所ぬ大湾部落お、うり
搜めーいが歩ちやくとう、搜めーやーが歩ちゆんでい
やーい、字ぬ溜め池んかい落とうちやくとう。さぐとう
うぬ仏様のーうまかい搜めーやーが来ぐとう、ぶるぶ
るぶるーしーさん。あんさーい搜めーたんでいぬ伝え
話。

かんしこの水の泡がぶるぶるあんさぐとう、「うりう
ま何から珍しむん」ちさくとう、うまんかいあたんでい
ぬ伝え話。

大湾にビジュルという神が、石仏がいらつしやつた
らしい。これはとても大湾部落としては、子宝に恵ま
れ繁盛するという神様だったので、それをある部落が
うらやましく思い盗んだようだ。

そうしてまた盗まれた大湾部落は、それを捜し歩い
ていたら、その捜している人達が来たといつて（盗ん
だ部落の人は）字の溜め池に落としたそうだよ。そう
したらその仏様はそこに捜す人が来たら、ぶるぶるぶ
ると泡を出したようだ。それで探すことが出来たとい
うことだよ。

そして水の泡がぶるぶるしたので「ここは何か不思議だ
ね」といって、ここにあったという伝え話だよ。

注① 大湾 読谷村の南端に位置し、嘉手納町とは比謝川を隔てて接している。

注② ビジュル 石を祀る習俗。恩納村山田久良波川付近から二個の石を招請して大湾の根屋ウィーチに安置されている。

52 ビジュル岩の話

話者 津波古 只 一 (明治三十六年九月十日生)

翻字 知花 めぐみ

こつちにあのー、ビジュルという宮が、ビジュルという石があるんですよ。今度(こんど)はあれがある関係上(くわんけいじょう)です。大湾(わん)は非常に(ひじょう)皆美人(みなびじん)が生まれよつたらしいですよ。今度(こんど)はナンカヌシーク(な)ー、赤(あか)ちゃん(ちゃん)が生まれ(う)れた場合(ばあい)には、皆(みな)そこ(そこ)拜(おが)んで(います)よ。

そうして拜(おが)んで、それが盗(ぬす)まれて(いる)のははつきり(わ)かり(ませ)んが。そのビジュルは、楚辺(そべ)の人(ひと)が盗(ぬす)んで(ね)ー。ちようど(ちようど)今(いま)の話(はなし)の通(とお)り、あぬ楚辺(そべ)の池(いけ)に放(ほう)つて(あ)つた(と)う話(はなし)です(ね)ー。

今度(こんど)大湾(おおわん)から、その石(いし)を盗(ぬす)まれた(か)ら(ら)捜(さが)し(に)行(い)つ(た)ら(ら)です(よ)、もう各(かく)字(じ)ま(わ)つ(て)ね(ー)。何(なに)処(ところ)が持(も)つ(て)行(い)つ(た)か(か)分(わ)から(ら)ん(か)ら。今度(こんど)楚辺(そべ)の伊(い)ツ(ツ)カ(カ)ナ(ナ)近(きん)辺(べん)に(い)行(い)つ(た)ら(ら)その石(いし)が(が)ね(ー)、水(みず)、泥(どろ)吹(ふ)ち(ゆ)た(た)ん(で)い、泡(あわ)。それ(それ)で珍(めづ)しい(と思(おも)つ(て)池(いけ)の中(なか)を(を)探(さが)し(た)ら、そのビジュル(ビジュル)が(が)出(で)て、今度(こんど)元(もと)の所(ところ)に(か)飾(かざ)つ(て)です(ね)ー。その後(ご)また(また)ワン(ワン)ター(ター)ング(グ)ワ(ワ)とい(い)つ(て)美人(びじん)の双(ふたご)子(こ)が(が)生(う)ま(れ)た(と)う話(はなし)。それ(それ)から(ら)もう今(いま)通(とお)り(それ)が(が)現(げん)在(ざい)も(も)あ(あ)る(る)ん(だ)す(よ)、そのビジュル(ビジュル)が(が)。

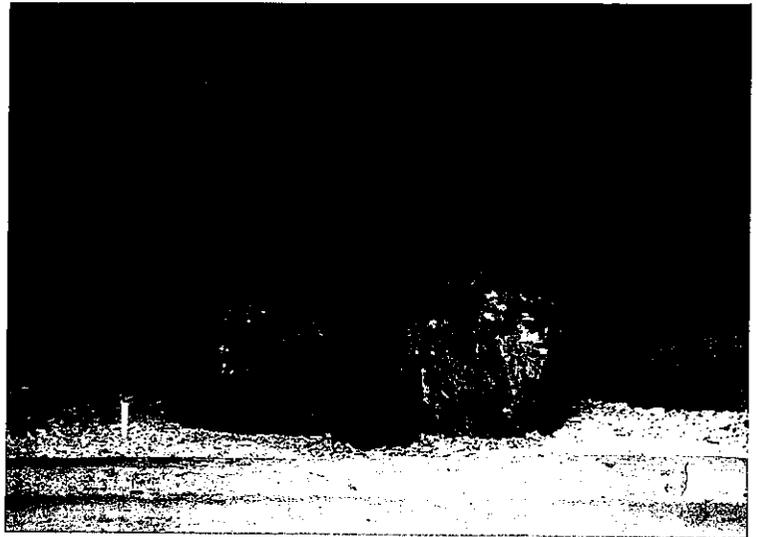
採集S 52・2・25 読谷村民話調査団第十四班(連天悦子)

注① ナンカヌシークー 一月七日の節供（年頭の拝み）。

注② 楚辺 読谷村の南西部に位置し、西に広がる海岸段上に立地している。

※イツカナー 現在イツカナーという地名は古老からは聞きとれない。部落の共同溜池（四〇一番地）に隣接しているウカーがあるのです、その地名と考えられる。

※ワンターングワ 大湾で古老がウチナー口で、双子のことをワンターングワと言っていた。語義はワンは大湾、ターングワは双子のこと。



ビジュール石

翻字・対訳 名嘉真 宜勝

今度は、首里、那覇から、国頭によー、昔はエーというのがあつて、あれを買いに国頭に行きよつたらしいですよ。

まー、そうでなければ首里の役人、勤め人てー。国頭んかい行ちゅんとうか、また、いひなー国頭んかい用事があるさーねー。

そうして今度は、多幸山フエーレー所やんでいんむんと言つたらね。あれは、読谷の番所あるさーねー。戦前の役場、読谷番所。「うまんかい泊まてい行かなやー」でいちゃれー、「女ていらむん喜名番所に泊まいみ、早くなー歩けー」でいち。

そうして、うぬ山田ヌン殿内という所は、いわば旅館みたいなところであつたらしいですね。泊い所よー、旅人ぬ。そうして泊りには行くが、出しーせー居らんたんでい。皆やられてねー、宝物を奪らつてい。

今度は、首里・那覇から国頭にですね、昔はよく藍という染物の原料を買いに、国頭に行つていたらしいですよ。

まあ、そうでなければ首里王府の役人、勤め人ですね。国頭に行くとか、時々は国頭に用事があるでしよう。

そうして今度は、多幸山というところは山賊がよく出没する場所として知られていた。読谷の番所がありますよね。戦前の役場、昔の読谷山番所。(ある女性の旅人が)「ここに泊まつて行こうかな」と言つたので、「女性の身で喜名番所に泊まつてはいけない、早く歩きなさい」と言つて。

そうして、その山田ヌン殿内(久良波首里殿内)という所は、つまり旅館みたいなところであつたらしいですね。泊まるところですね旅人の。そこで泊まりには行くが、出て行く人はいなかったそうです。皆な殺

そうしてそれでうまにかい入る人お居しが、出しー
る人お居らんと、山田ヌン殿内の伝説はそうであつ
たらしいが。

されて、持っている宝物も奪われてね。

それでそこに入る人はいるが、出る人はいないとい
う、山田ヌン殿内の伝説はそうであつたらしいよ。

採集S52・2・25 読谷村民話調査団第十四班〈運天悦子〉

注① 山田ヌン殿内 これは久良波首里殿内の語り違いである。旧久良波部落跡で、現マリブハウスの一角にその屋敷跡が遺っている。
山田ヌン殿内は現在でもあり、山田ノロの出た家の屋号で、山田ではこの話が間違つて伝えられているのを至極迷惑千万だとして
いる。

注② 首里 8頁参照

注③ 那覇 55頁参照

注④ 国頭 55頁参照

注⑤ 多幸山 フェーレー 恩納村にある山の名で、読谷村との境界にある。旧道が残っており、一里塚も存在する。沖縄ではフェーレー
(盗賊)の出没する場所として多幸山のフェーレーは有名である。

注⑥ 読谷番所 喜名番所のこと、戦前の役場。番所は王府時代間切り行政の拠点となった役所で、今日の村役場にあたる。間切名、
あるいはその番所のある村名を冠して喜名番所とよんだ。

翻字・対訳 知花孝子

山田ヌン殿内んうまんかい、うりやたんりよ。なー
うまやなー中央やしえー。山原から行きわん、那覇か
ら行きわん、中央やしえーなー。

あんさーに、仲泊からまたうまんかい、喜名、喜
名んがる部落や有くとう、あんさーになーうまんかい
泊まいが来ねーうりやたんり、女ん子ぬ居たんりよー
なー。なー親子が居たらー、うれー分からんしが。う
まんかいちようど旅館ぬふーじーてーなー、今ぬ旅館
とー同むん。うまんかい泊まいが来るうっさー全員殺
ちよー、銭取つてい、あんさーに家ぬ後んかい穴掘やー
にたつくみてーういし、むる分からんたんりよ。「山田
ヌン殿内や入る人やうしが、出じーる人や居らん」り
ち。あんさーにうりやたんりぬ語るやる。

あんさーに、後おうりやたんりさに、旅ぬ人お殺ちえー
ういさーにうりやたんり。骨や今ん出じーんりる話
やたんでー。あぬ温泉ぬまんぐらやたるはじやつさー

山田ヌン殿内もそこに、そうだったよ。そこはもう
中央でしょう。山原から行つても那覇から行つても、
中央だからね。

そうして、仲泊からまたここには、喜名に部落はあ
るので、それでもうそこに泊まりに来たらそうだった
て、娘が居たつてよ。もう親子で居たのか、それは分
からないが。そこは、ちようど旅館のようであつたわ
け、今の旅館と同じ。そこに泊まりに来る者は皆殺し
て、金を取つて、そうして家の後に穴を掘つて押し込
んだりして、全然分からなかつたつてよ。「山田ヌン殿
内は入る人は居るが、出る人は居ない」という。そう
いう事で話があるよ。

それで、終いにはこうだったつてね。旅の人を殺し
たりして。骨は今も出るといふ話だったよ。あの温泉
の近辺だったはずだよ今の。

な—今ぬ。

採集 S 52・2・25 読谷村民話調査団第二班（鈴木信一・手登根政子）

注① 山原 75頁参照

注② 那覇 55頁参照

注③ 仲泊 恩納村の字。

注④ 喜名 読谷村の東部に位置する字。

55 多幸山 フェーレー

話者 津波古 只一（明治三十六年九月十日生）

翻字・対訳 名嘉真 宜勝

多幸山ぬフェーレーというのは、なんですよねー。

多幸山のフェーレーという話です。

あの、今喜名から国頭に行くあいなか道にです、大きな岩が立っておっいたらしいですよ。それは多幸山ぬフェーレーさーねー。

あの、喜名から国頭にいく道中にです、大きな岩があつたらしいですよ。それにまつわる話が、多幸山のフェーレーですよ。

そしてそのフェーレーは、その岩の上に座っておつて、こんな昔は、皆あの女なんか荷物は頭に載せるでしよう。また、男は肩に載せるとして。

それでそのフェーレーは、その岩の上に座っていて、その昔は、女性は皆な荷物を頭上に載せていたでしよう。一方男性は肩に担いでいたでしよう。

うぬフェーレーは、カケジャヤー（まのく）作つてねー、それひっかけて奪りよつたらしいですよ。それが多幸山（たこやま）うぬフェーレーであつて。

そのフェーレーは、カケジャヤーを用意していて、それでひっかけて奪つたらしいですよ。それが多幸山のフェーレーの話です。

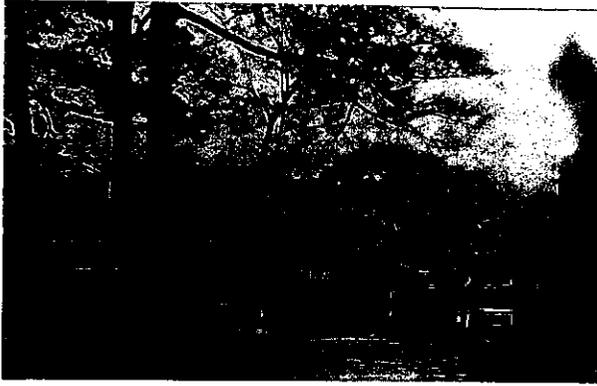
採集S 52・2・25 読谷村民話調査団第十四班（連天悦子）

注① 多幸山フェーレー 80頁参照

注② 喜名 82頁参照

注③ 国頭 55頁参照

注④ カケジャヤー カキジャヤー、鉤（かぎ）のこと。ここでは頭や肩に載せている荷物を引き上げる鉤のこと。



喜名番所跡



多幸山



旧久良波部落

翻字 知花めぐみ
対訳 玉城和美

あれー昔、屋嘉んかしやかまごんりち犬いん居うたんでいよな。うれー楚辺すびくらが暗川あなとぬ穴探めてーるふーじー、うまんじ浴あみてー居ういたんでい、うぬ赤犬あかいんく子が。浴あみてー居ういさぐとう、うまーなー泉井かあ信しんじやーに楚辺すびやあまからむる水みづん汲くでい。

あんさーに屋嘉やかぬ女いぬな子ごぬよー、いつペー美ちゆらーが居うたんでいよ。あんさーになー男いさかぬなーいつペー望ねじゆでいよー、野蛮やばんするあたいやたんでいよ。あんさーに、うぬ屋嘉やかぬ女いぬなおなー別べつぬ人ひととうりつし、うれーなー好しかんそーてーんてー。

あんさーに妊娠かまごたぐとう、うぬ女いぬなお久高くたかんかい行いぢやぐとう。またうぬ野蛮やばんのーよー、「なーくれー、犬いんぬ子ごでいやる」んち。あんさーんかい赤犬あかいぬく子ご付ちきてーるぐとうりさなー。

あんさーにうぬ赤犬あかいぬく子ごお、また仙人せじん始はじまいんちよー

あれは昔、屋嘉という所に犬が居たつてよ。これは楚辺の暗川の洞窟を探したらしいよ、そこで浴びたりしていたつて、その赤犬が。浴びたりしていたので、楚辺は泉井を信じてあそこから皆な水を汲んでいた。

そして屋嘉の娘でね、とても美しい人が居たそうだ。そうして男がこの(屋嘉の娘に)とても想いを寄せていて、野蛮になってあばれたりもするくらいだったよ。そうだったが、この屋嘉の娘は別の人を想っていて、その人の事は嫌いだつたようだ。

そして女の人は妊娠したので、久高の方に行つてね。そうしたらその野蛮の男が、「これは、犬の子である」と。それで赤犬子と付けてあるというよ。

それからこの赤犬子は、仙人の始まりだといつて沖

なー沖繩ぬ。うまぬ船ぬうりさーに造てい。あんさーに国々歩ちうりやたんでいよ、何処んくい歩ちなー御神でいやてーんしえーなー御神。

あんさーに瀬良垣行ちんでいからー船造いたんでいよ。なーあんさーになーうまー、茶ん飲まさん、食物、やーさるそーぐとうやーうぬ人お。あんさーにしえーしが怒らていよ、あんちやぐとうよー、うまぬ船でいきらんとんでいよなー。

また谷茶んかい来ぐとう、うまー酒ん持つちつち食物ん食まち、茶ん飲まちいっペー話んぬんしちやぐとう、うまぬ船でいきていうりしえーぬ話でいやんなー。仙人りち、何処んくい歩ち御神でいやんしえーたるはじどーなー。

繩の。ここは船もその人が造つてね。そうして国々を何処もかも歩いてまわり、神様だったんでしようね。

そして瀬良垣に行つたら船を造つていたようだ。その人はお腹をすかせているのに、そこはお茶や食べ物も出さなかつたよ。そして怒られてね、そうしたら、その船はうまく出来なかつたて。

また谷茶に行つたら、ここは酒や食べ物、お茶なども出してちゃんと持てなしたので、その船はうまく出来たという話だったよ。仙人で、何処もかも歩いて神様だったんでしようね。

採集S52・2・25 読谷村民話調査団第二班〈鈴木信一・手登根政子〉

注① 赤犬子 伝説上の人物、赤犬子の字を当てる。母は読谷村楚辺部落の屋嘉(屋号)のチルーで、恋人の子を身こもつたので、部落民から愛犬との子供であると言われ、村に居たたまれず津堅島で、赤犬子を出産したと言われている。赤犬子に関する伝説は多い。楚辺部落では、中国に使者としておもむき五穀を持ち帰った恩人としてあがめている。

注② 屋嘉 楚辺部落の屋号で、現在の戸主は安里善昌氏。また、チラーの恋人、大屋のカマーの子孫も現在あり、戸主は上地鎌吉氏である。

注③ 楚辺暗川 旧楚辺部落内で、現在は米軍用地内になっている。鍾乳洞内にある水脈で、現在でも水量は豊富で農業用水として使われている。このクラガーは、他のウツカー、カビギンガーとともに、一月の初ウグワンに拝まれている。

注④ 久高 知念村久高島の字。

注⑤ 瀬良垣 恩納村の字。

注⑥ 谷茶 恩納村の字。



暗川



赤犬子

今 帰 仁 按 司 へタケーサーガマン

話者 松 田 英 徳 (明治二十六年六月三十日生)

翻字 知 花 めぐみ
対訳 玉 城 琳 子

昔え、王やむる射つちやらちえーるふーじやぐとう、
あんさーに骨までい砕かりんでいやーにうまんかい送
いんでいよ、うんちけーしえーるふーじでな。タケー
サーんち、あぬ水釜あうんとうくたんかーんかいよー
なー骨むるうんちけーしちやーに。

うまー昔え、何んりが洞窟ぬあたんでいるはじやし
が、今あなーまた立派しえーんよーな、明るくしえー
んよ。

昔え、うぬ骨までい砕ちゆんちよー、うりがーうま
かいあいねー、あんさーむる骨までいうんちけーしち、
うまんかい置ちえーるふーじでーな。今帰仁から。

なーくぬ昔え、落とうしえーでいやたんでいぐとう、
城おなー誰あむんちえー無ん。やぐとう力ぬ強さん
人ぬむんでいやたるふーじやぐとう。

あんさーに骨までい砕かりんでいやーに、うまんか

昔は、王様がすべて射ち殺したそうで、それで骨ま
で砕かれるとってお迎えしたということだよ。タケー
サーといつて、水釜のその向かいにね骨を全部お迎
えして葬ったよ。

そこは昔、何といったか洞窟があつたそうだが、現
在はもう立派にしてあるよ、明るくもなっているよ。

昔は、骨まで砕くというので、今帰仁に遺体がある
と骨まで全部お迎えしてタケーサに葬ったそうである。

もう昔は、戦で落としあいだったので、城は誰のも
のであるという事は無かつた。だから力が強い人の
ものであつたらしい。

また骨まで砕かれるといつて、タケーサに持ちかえつ

いうんちけーしちえーるふーじやる。なー私達あくぬ
大湾ぬ五月んちむる拝どーんよなー。読谷のーいーく
る拝どーるはじやつさー。

て葬ったそうである。私達この大湾でも五月には皆な
が拝んでいるよ。読谷でも多くが拝んでいるはずだ。

採集S 52・2・25 読谷村民話調査団第二班へ鈴木信一・手登根政子

注① 今帰仁按司 今帰仁は本島の北部、村の歴史は古く沖縄の三山分立時代は

北山王の居城であった今帰仁城跡がある。按司は位階名。琉球王朝時代の
位階で王子の次に位する。

注② タケーサー タケーサガマともいい、古い時代の人骨が葬られた洞窟があ
り、拝まれている。

注③ 水釜 嘉手納町の字。国道五八号線を隔てて、嘉手納基地と向いあつてい
るが、西側の海が埋め立てられ新興在宅地となっている。

注④ 大湾 77頁参照

注⑤ 五月(ぐんぐわちやー) 五月ウマチー(旧暦五月十五日)のことをいう。



タケーサーガマ

翻字 知花めぐみ
対訳 玉城和美

くぬ比謝橋の橋え。吉屋チル―は、橋出来ていから
売らつと―ぐとう、恨む比謝橋んでいる歌ぐわーんあ
しが。

あんすぐとう吉屋や昔え、男相手すしえーましあら
んば―女お。あんぐとう、家庭ぬ困窮なていよー、税
金関係つし、売らんならんちてー、ジュリアナかい行
ぢやんり。行ちゆる場合なかい作てーる歌んでい。

恨む比謝橋や 誰が架きていうちやが
情無ん人ぬ 架きていうちえさ

んち。うりがうんに―時分ぬ歌、吉屋あ。

あんぐとう、うれ―また―御願すね―うんな事お無
らんむぬ、ちがり者ちて―女お。あんしシマンかい行
ぢやれ―ちがり者やくとうんち、自分ぬ家から見いら
ん所に墓は造てい葬たるば―て。うぬ屋敷ぬ今ぬ温

この比謝橋の橋はね。吉屋チル―は橋が出来てから
売られているから、恨む比謝橋はという歌もあるがね。

それで吉屋チル―は昔、男の人の相手をする事が嫌
であった。しかし家庭が貧しく、税金関係などがあつ
て、身売りされることになりジュリに売られて行つたつ
て。その時に作つた歌だよ。

恨めしい比謝橋は 誰が架けておいたのか
情無い人が 架けておいてあるよ

よ。と。いって。これがその時分の吉屋チル―が作つた歌だ

そうして、これはまた御願をすればそんな事も無かつ
たはずだがね、女は普通ではないといつて。そしてシ
マに行つても普通の人ではないといつて、自分の家か
ら見えない所に墓を作つて葬つたよ。この屋敷は、今

泉湯ぬ上方やるばー。アラカチャーんち昔あたんり新垣ぬ女ん子やるばーて。墓あまたくぬー、宇加地ぬ上つち葬てーる話ぬあるばー。

うりからまた吉屋が甕んかい入つちよーてい歌呼びたんでいしえー、あれーあねーあらん仲里ぬウメーが情かきてーる歌んでい。これ伝え話。吉屋やな私にかい想かきとしがなー、心ひがさんてーんくとうんち情かきたる歌んでい。

ウシデイウチャガイル 首里御天加那志
遊でいうちやがゆる 御茶屋御殿

でい。

あんさぐとう、なー歌あ合格さるばーてー。あんくとう吉屋あ噂残すんり作てーる歌やんり。仲里ぬウメーがなー情かきてーしんり。

うぬひやー、私ぬジュリるやしがやー私達あとーつり合わんくとう。あんしーねー私あ身分ぬ廃たりーぐとうんち、相手えさんたんり。うぬ伝え話。

の温泉の出る上あたりだよ。新垣というところの娘だつたよ。墓はね、この宇加地の上の方に葬つてあるという話もある。

それからまた吉屋チルーが甕に入つていて歌を詠んだというのは、そうではなくて仲里のウメーが情をかけている歌で。これは伝え話だよ。吉屋チルーは、私に想いをかけているが、心残りがあろうと思いい情をかけている歌だよ。

お目にかかりたいものだ 首里の王様よ

遊んでよい所は 御茶屋御殿

といつて。

そうしたら、もう歌は合格したよ。そして吉屋チルーの噂を残すために作つてある歌だつてよ。仲里のウメーが情をかけてあるものだつて。

これは、私のジュリなのに私達とはつり合わない。そうしたら私の身分が廃たれるといつて、相手にしなかつたつてよ。この伝え話だよ。

採集S 52・2・25 読谷村民話調査団第十七班（辺土名朝三）

注① 吉屋チルー 恩納ナベと並ぶ女流歌人で、幼いとき遊廓に売られ、ある男と恋仲になるがそれも裂かれ、十八歳で亡くなったとい

う。

注② 身売り 近世祖税を納めきれないなどの経済的理由で借金、借米をした百姓が、その身代金の代替えとして自らの労働力を提供するをいう。

注③ 御茶屋御殿 首里崎山町にあった旧家の別邸、東苑のこと。一六七七年築造。

注④ 比謝橋 読谷村と嘉手納町との境をなしている比謝川にかけられた橋。当初は板橋で、一七二六年に石橋に改修され、その後一九五三年に軍用道路拡張、改修に伴ない、現在の鉄橋に変わった。

注⑤ ジュリアナ 女郎屋のことをいう。

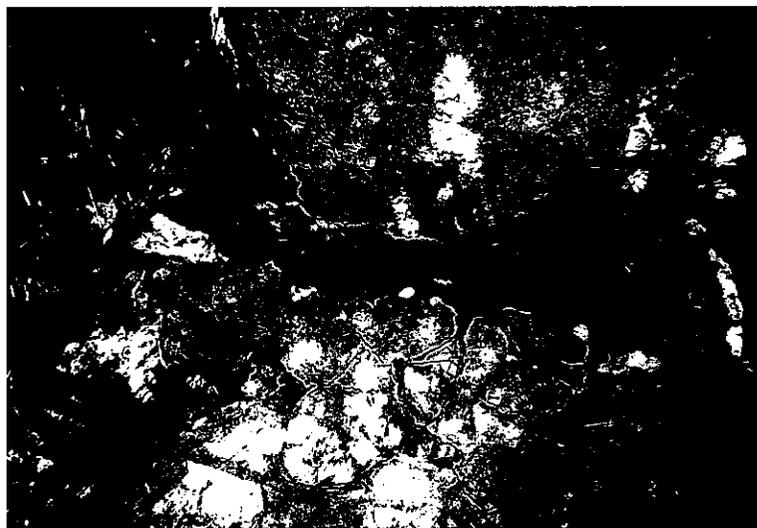
(参) ジュリ 女郎・遊女・娼妓・歌も歌い三線も弾くので芸者も兼ねている。

注⑥ 宇加地 恩納村にある字。

注⑦ ウメー 殿様。



吉屋チルーの歌碑



恩納村美留と塩屋の間にある吉屋チルーの墓

59 大湾の名の始まり

話者 松田源蔵(明治三十一年七月六日)

翻字 知花春美

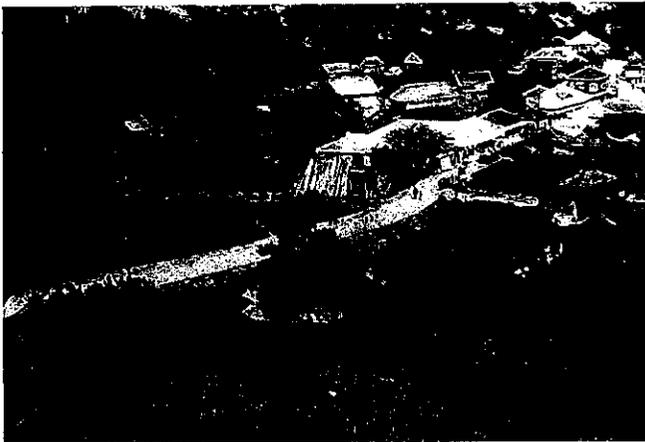
大湾おおわんの名なの始はじめです。

最近さいきんは比謝ひしゃ砦しやい言いうておりますが、そこは大きな港みなとであるから船ふねも着つくし、その前まえは大湾おおわんの名な前まえもない。大きな湾わんを前まえにするから大湾おおわんと名なを付つけたと。港みなととしてね。大きな湾わん、大湾おおわん。

採集S 52・6・19 読谷村民話調査団第五班(富村朝夫・知花春美・米須美音子)

注① 大湾 77頁参照

注② 比謝砦 読谷村の南の玄関口にあたる字。屋取集落で一九〇八年、字大湾より分立。



比謝砦

60 大湾の名の由来

話者 松田文太郎(明治四十二年十一月十日生)

翻字 知花めぐみ

あの大湾おおわんですね、湾わんという字あきの名前なまえが付いたのはこの湾わんという、今いまの比謝川ひじやがわですね、あつちおおわんに大湾おおわんはあつたらしいですよね。

そうして、港みなとなつたもんで、大湾おおわんとして。そして昔むかしは砂糖さとうもここから那覇なはに運送はやくして、やりよつたそうですよ。またその後あともですね、久得くわくとくに鉾山ほこやまがあつたわけですが、鉾山ほこやまを山原船やまはらせんでもつてこの大湾おおわんから運はこんでいたというわけで、小ちひさい時ときに見みたわけです。

そして沖繩県おきなわけん中のナカウマなかつまーイはずつとやっていますから。このナカウマなかつまーイというのは、ずつと昔むかしの人達ひとたちが拜おがんでおるから、ずつと以前いぜんに出来できた部落ぶつらくだろうと思おもうわけです。

採集S 52・6・19 読谷村民話調査団第七班(遠藤庄治・石嶺まさみ)

注① 比謝川 沖繩中部に位置している。

注② 那覇 55頁参照

注③ 久得 嘉手納町にある字。

注④ 山原船 62頁参照

61 比謝の名の始まり

話者 松田源蔵(明治三十一年七月六日生)

翻字 知花春美

それで、その後からは、山羊の頭ね。御城は龍碑、龍碑又泉、山羊ぬ頭、ヒージャー、ヒージャーカーと出来たから、それが比謝になったと。

橋が架かったから比謝缸になったと。

採集 S 52・6・19 読谷村民話調査団第五班(富村朝夫・知花春美・米須美音子)

注① 比謝 読谷村の南部に位置している。南は大湾に、北は伊良皆に隣接している。

注② 龍樋又泉(ドゥーヒヌカー)首里城内瑞泉門の下にある竜の形をした樋、その口から湧く清水は水量が豊富で味もよく中山第一と称せられた。中山伝信録の著者徐葆光によって書かれた碑が側に立っていた。

62 宮古地の始まり

話者 山内繁茂(明治三十七年三月五日生)

翻字 知花めぐみ

そこに、宮古から来た船が泊まっておった。そうしたら地震か何かで南側の崖が崩れて、この船を押しつぶしたと。そうすると船は沈んで、人は怪我したか分からないが、この港で船が沈んだね。これは宮古の船が来たとい

う意味で、宮古の人が造った船は沈んだ。

そうすると、この岩は今、川の中にあるが、これを宮古地と言うんだ。それは今もある。だから貿易港であったことが分かるね。

それで航海する時にその岩にぶつかったら、例えば、荷を積んでそこを通るときにその岩にかかったら、もういつぱん積み直して行くんだって。ここはつまりローレライの何のように引つかかったら、船がどっかで難破するかという迷信があつて、積み替えたよ。

その意味で、宮古の船も何処の船も来ておつたが、用心しておつたなーということ。宮古地とは現にある港の中に。これは今岩が入つてますね、それが大湾の港の説明。

採集S 52・2・25 読谷村民話調査団第十四班へ連天悦子

注① 宮古地 伝承によると大湾の港で宮古からきた船が崖崩でつぶされて沈んだ。その時の岩は今も川の中にあつてこれをナーク地と呼んでいる。

注② 宮古 宮古諸島。沖縄諸島から南西三百キロ隔てている。

注③ ローレライ 巨岩のこと。

注④ 大湾 77頁参照

翻字 知花めぐみ

これは、阿麻和利が勝連城から追われて屋良に来て、大湾の西側、大湾公民館より約一キロぐらいの地点に、親見原というのがある。その親見原は、阿麻和利が降参したというので、エンミとつけたという話。

そこで捕らえられて、古堅小学校の裏山約三百メートルのところに阿麻和利の墓がある。そして墓の前には小さな畑が一区切りあるが、これは死刑されたというので、まな板畑、マルチャバタキといわれておる。これは地名の説明ね。

採集 S 52・2・25 読谷村民話調査団第十四班(運天悦子)

注① 阿麻和利 北谷屋良村に十五世紀初頭に生を受けた英雄である。十歳の頃まで体が弱く、山に捨児されていたが、山中で蜘蛛が巣をはるのをみて網をつくりだしたという。成長の後、勝連按司につかえたが、勝連按司茂知附を亡ぼし勝連城主となる。また、海外貿易なども盛んにしたとされるが、護佐丸や第一尚氏と対立抗争し、一四五八年に越来按司(鬼大城)にひきいられた軍勢に亡ぼされてしまった。

注② 勝連城 与勝半島の中央部勝連町南風原に在って、中城湾をまたいで南の方には中城城跡が望見される。首里城第一尚氏尚泰久(一四五四―一四六〇)時代勝連按司・阿麻和利の居城であった。

注③ 屋良 嘉手納町の字名の一つ。町分離以前は北谷村に所屬。

注④ 大湾 77頁参照

注⑤ エンミ 現在の楚辺部落で、古堅小学校西側一帯の原名。そこに阿麻和利の墓がある。「エンミ」とは方言で「降参する」とい

う意で、阿麻和利が首里の追手に討ち取られる際の言葉が小字名として使われるようになったといわれている。「オヤミ原」ともいう。

64 焚字炉

話者 山内 繁 茂 (明治三十七年三月五日生)

翻字 知花 めぐみ

それが、特にあつたがね、つまりその炉があつたわけ。これは恐らく儒教の影響だろうと思う。つまり文字に命がある、という尊厳であるという理由で、書いた紙は、一カ所に集めて焼くところが焚字炉というのであつたらうと想像する。都会にもあるそうだが、これがあるのは沢山はないはず。

採集 S 52・2・25 読谷村民話調査団第十四班 (連天悦子)

注 焚字炉 (ふんじる) 字を書いた紙 (字紙) を焼く炉。惜字炉 (せきじろ) ともいう。



玉城村百名公民館敷地にある焚字炉

65 天川坂の由来

話者 松田源蔵(明治三十一年七月六日生)

翻字 知花春美

天川あまかというたでしよう。それから、この嘉手納かてな、屋良やらあたりからここに流ながれてくるから、こんなに石いしの積つんだ道だからね、流ながれてくるから。天てんから流ながれるようにみえるからティンガリーていながり注①って、天川あまかいうて名なあな付つけたつて。

採集S 52・6・19 読谷村民話調査団第五班(富村朝夫・知花春美・米須美音子)

注① 天川板 読谷村から嘉手納に差しかかる急な坂道。戦前は石畳だった。

注② 嘉手納 嘉手納町の字。国道58号をはさんで東西に位置している。

注③ 屋良 96頁参照

注④ ティンガリー 天の川、銀河。

66 天川泉の殿様

話者 松田源蔵(明治三十一年七月六日生)

翻字・対訳 知花春美

天川泉あまかというところ作ちやくたんり。また殿様とのさまがとお通りになる時じ分に、若わかい方かたがくね背中せちゆうをすつて浴あびておつたら

天川泉という所を造ったよ。そこへ殿様とのさまが通る時間じかんに若わかい人が背中せちゆうをさすつて浴あびていたらしい。

しい。

その場合にね、「うちらも百姓の身だつたらな、男も女もあんなに愛さぐわーそーてい浴みーぎる。ぬーんり侍え生まりたがやー」り。あんしそーに歌作てーしが。

比謝川ぬ川に 浮かぶ鴛鴦ぬ

思い羽ぬ契り 他所ぬ知むとうち

歌作たつて。二人が心お誰がん分からんりち。愛さぐわーそーる心お誰がん分からんりち。

その場合に、「私も百姓の身だつたら、男も女もお互いに思いあつて浴びる事が出来るのに。どうして侍に生まれたのかねー」と。そんな時に歌を作つたよ。

比謝川の川に 浮かんでいるおしどりの

相思相愛の深さは 他人は知らない

と歌を作つたそうだよ。二人の心は誰がも分らないと。思いあつている心は誰がも分らないとね。

採集 S 52・6・19 読谷村民話調査団第五班 富村朝夫・米須美音子・知花春美

注① 天川泉 (アマカーガ) 沖繩本島中部に位置

する比謝川下流比謝橋の東側にあつた井戸のと。現在の名嘉病院の下辺り。

注② 比謝川 93頁参照



天川坂

話者 松田源蔵(明治三十一年七月六日生)

翻字 知花めぐみ
対訳 玉城和美

沖繩あやなし、えー、琉球でいやんでー。うにねー
琉球食べ物ぬ無らん、いつペー困難そーる場合に唐か
いめんそーちやる人ぬ、「珍しむんやさ、あんし良い物
ぬある」んち、別国かい持たさん禁止さつとーしが、
芋小あ少てんぐわーホンドシんかい隠みていち、屋敷
に持つちち植いていうりが広がたるばー。うりが芋ぬ
元祖。

沖繩はもう、あ、琉球だったかね。その頃琉球は食
べ物も無く、とても困難な時期に唐に行つた人が、「珍
しい、こんな良い食べ物があるね」と言つて、別の国
への持ち出しは禁止されていたが、芋を少しだけフン
ドシに隠してきて、屋敷に持つてきて植えて、それが
広がつたよ。これが芋の元祖だよ。

種ぐわー、小さい芋よ、うり調びーるばーてー。ホ
ンドシんかい隠くちよーくとう、金玉やかん少てーん
ぐわーやてーんてー。少ぐわーうりが持つちちさくとう、
うりが今ぬ野国総管。

種芋、小さい芋だよ、それを調べるのでね。フンド
シに隠してあるので、金玉よりも小さい物だったんで
しようね。その小さい(種芋)を持つてきたのが、今
の野国総管だよ。

採集 S 52・6・19 読谷村民話調査団第五班(富村朝夫・米須美音子・知花春美)

注 野国総管 北谷間切野国の人で沖繩に甘藷を最初にもたらした人とされる。

68 煙草の始まり

話者 松田源蔵(明治三十一年七月六日生)

翻字 知花めぐみ
対訳 玉城和美

煙草の話。愛さる夫婦やし、妻えけー亡しさぐとう、
「あつたる愛さる妻ぐわーが、あんなていやー」んち。
毎日墓通てい泣ち明かちしーにる「私達あ夫おあんす
かなーうりやるやー」んち、心いさみる意味えーがや
たらー。まー墓ぬ側んかい煙草ぬ生いてい。
あんさーんかい、うり吹ちーるんしえーましんでい
る意味え男かん勘ちち、うぬ煙草吹ちやくとう心いさ
でいましなとーんでい。やぐとう心いさまするいとう
いぬ煙草。

煙草の話だけれどもね。仲むつまじい夫婦だったが
妻が死んだので、「ああ、愛する妻よ、こんな姿になつ
てね」と。毎日墓に通つて泣き明かしている時に「私
の夫は、こんなに哀れだね」といつて心を落ち着かせ
る意味だったのか。墓の側に煙草が生えていたつて。
そして、それを吹くと落ち着くという事を男は勘づ
いて、その煙草を吹くと心をあらためて落ちつくそう
だよ。だから心をあらためて落ち着かせるといふこと
だよ煙草は。

採集 S 52・6・19 読谷村民話調査団第五班 富村朝夫・米須美音子・知花春美

翻字・対訳 菊地尚子

日本政治なとーしえー、あんさーにうり突かんしえー
 なー、連おらりーたん、若者達あやていん。

私達あ童そーねーなー、うりやたんよ、うりていー
 ちあてーぐとうやー、ハジチりしえー。はしるみち
 とーてい、小てーんぐわー開きてい、ハジチあらんねー
 捕みらりーぐとう。

あんさーにうりやたんどーなー。自分が若さいによ、
 十七、八歳びけーるないたしが自分や。すびかりんり
 やーに、内地んかい。うり突ちよーけーなー野蛮るや
 ぐとうりち、あまんかいすびかたるばーてー。うれー
 あねー無んてーしが。

あんさーにまたうぬハジチャー捕みていよー、罰
 んさりーたぬはじやっさー。

あんさーにうりやたんり。なー私達あが童そーいねー
 よー、むる集やーによ、一カ所んかい集てい、あんさー
 に味噌鉢ん何んしなーうまー痛むせー。御馳走ん何ん

琉球が日本の政治に変わり、それを突かないと若者
 達は、日本本土に連れて行かれたよ。

私達が子どもの頃には、そんなことがあつて、これ
 だけはさせられたよハジチというのをね。戸道で少
 だけ開けてハジチを突いていたよ。ハジチがないと捕
 まえられるといつてね。

それでこうだったよ。私が若い頃にね、十七、八歳
 の頃だよ私が。大和に連れて行かれるといつてね。こ
 れを突いていると野蛮人だといつて連れて行かれなかつ
 たよ。そういうことは無かったはずだが。

それからまたこのハジチを突く人は捕まえられて、
 罰金されたはずだよ。

それからこうだったつて。私達が子どもの頃は、み
 んな一か所に集つて、味噌鉢なども置いて、もう痛い
 でしょう。御馳走も食べさせて突かないと、痛さを我

呉きていなーしわる、にじーんりちやたぬはじやさなー。

あんさーに二に、三日さんなーうりすぐとうよー、うま摺かちみてい歩あちちゆたんどーなー。あれーあまんかい、日本にほんぬんかい連そおらりんでいやーに言いし聞きかんぬーや。あ
んさーに若者わか達たあ突ちちやーに今年なま寄とん達ちやあ残ぬくとーしん
うんどー。あれーはていむんやてーんでーなー。うっ
び膨ふっきいていよー、なーにりらすんよ。

あんすぐとう、昔んかし人ちややしいらいつちえーんてーやー。
またうりが剝はぎぎーねー、また突ちちるすぐとうはていむ
んやたぬはじどなー。

慢出来まないと言いつてだつたかも。

また二、三日もハジチは突つくので、手は摺かちんで歩あいていたよ。あれは向むかこう、日本にほんに連れていかれるといつてね、言うことを聞きかないと。それで若い人達わかいひとは（ハジチを）突ついて。今いまでもハジチを突ついた年寄としよりりは残のこっているよ。ハジチはとても痛いたかつたと思うよ。こんな
に膨ふれてね、もう嫌いやだつたよ。

それで、昔むかしの人は大お変かな思おもいをしたと思うよ。また
ハジチが剝はげ落おちたら、また突ついたのでそれこそ大お変か
だつたと思うよ。

採集S52・2・25 誦谷村民話調査団第二班へ鈴木信一・手登根政子

注 ハジチ（針突） 明治三十年代頃まで盛さかんに行いなわれていた入墨いぼく習俗。年頃十七、八歳の手甲てがまに、針と墨ぼくで施せ術じゆつをした。士族と平民

の区別くべつがあり、また地域によつても多少異ちがなつていた。宮古、八重山地方では織物おりものの模様もようもあつたようだが、沖繩本島内は指ゆびには弓ゆみの矢や、手の甲てのあしには星形ほしがたや柘形せがたなどの模様もようがある。これをしてないと後生あごで困まどるとか、大和やまとに連れて行いかれるとの伝説でんせつがある。

翻字・対訳 玉城琳子

だー女お、ゆーさんねー山原るえたのーあらに。女お、美らーやたんりよ。あんさーに男あ、心お誠うやしがカンパチャーやたんりよ。だてーんぬカンパチあたんり。あんさーになー、いかなしんならんよ。

あんさーに親ぬ考ていさーに、あぬ舟ぐわーからな、夫振岩んちあまんかいあんよーな、屋我地ぬあまんかい。あんし連おてい行ぢやーになー、うったー二人うつちゃんなぎていぢやーにひつけーちちえーぬふーじ。

あとーなー寒さぬふしがらんよ。あんさーに夫んかいたつくわたぐとう、「なー私にんかい心ぬある」りなやーに。あんさーにまたな、時分なたぐとう連おてい行ぢ、うぬ親あ。

親ぬ考えやて、拝みしーがでいぢるやーてーるふーじやしが、あんさーに夫振岩んち言ちえーるばー。

その女の人は、もしかしたら山原の人だっと思つた。女の人は、美人であつた。そして男の人は、心は誠実であるが禿があつた。とても大きな禿があつたよ。それでもう(女はその人を)受け入れなかつた。

そこで親は考えて、夫振岩といつて屋我地にあるが。そして舟で二人を連れていって、置き去りにしてひき返してきたようだ。

あとは寒くてたまらなくなつてね。そうして夫になる人に寄りそつてきたので、(その男は)「私に想いがあるんだね」と思つた。それからまた、親は時間がたつたので迎えに行つた。

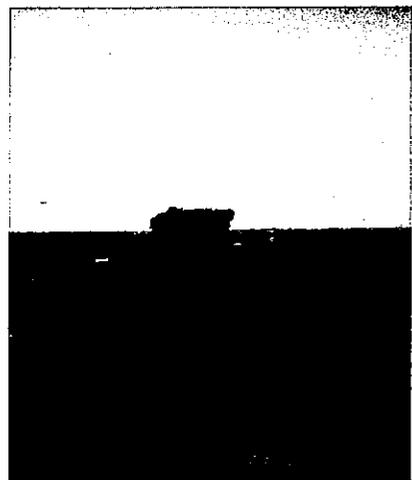
親の考えはね、拝みをさせるといふことであつたがそうなつたので、夫振岩と言つているわけだよ。

注① 夫振岩 名護市羽地の源河のほぼ真北一・四キロメートル沖にある

海拔三・五メートルの岩礁をいう。

注② 山原 75頁参照

注③ 屋我地 沖縄本島北部。羽地内海にあり、名護市に属する架橋島。



夫振岩

71 北谷王子

話者 松田英徳（明治二十六年六月三十日生）

翻字 知花めぐみ
対訳 玉城和美

北谷ぬ王子や、反対さーに競走さーに命取って。あ
んさーに、うぬありがやちさーに子ぬ生まりーるかー
じよーむるけー取ってーういし、あぬ耳切り坊主ぬ。
あんやたくとう、北谷王子や考え出しやしわるやん
でいやーに、「男あ生まりーねーなー女生まりとーんどー」

北谷王子がね、反対に競走して命を取ってね。そう
して、あれが（坊主は）やきもちをやいて子どもが生
まれるたびに皆奪ったりしたよ、あの耳切り坊主が。
そうしたから、北谷王子は考えを出さないといつて、
「男が生まれたら女が生まれたよ」と言ったら、大丈

りーしえーよ、ちゃーん無んたんていよ。

あんさーうりから伝ちていでいやるふーじやつさーなー。

男いまが、じゅんに言いいねーなーありがけー取といんでいやー

に、ゆうさんねー女いながぬ生うまりーねー男いまがんりーたんり。

ありが取といんち、ありんかい化はきやーにうぬ話はなしでいやる。

夫うぶだつたつて。

それからの言いい伝えだということだよ。本当に男おとこが

生まれたよと言いつたらあの(坊主うばに)奪うばられるので、

ひよつとして女おんなが生まれたら男おとこと言いつていたかもよ。

あれに奪うばられるといつて、あれが化はけてからの話はなしだよ。

採集S52・2・25 読谷村民話調査団第二班へ鈴木信一・手登根政子

注① 北谷王子 尚益王の第二子、尚敬王(一七一三〜五二)の弟。文武両道にすぐれ、囲碁の名手。北谷間切の領主だが、そこには代

官を置き、自分は竜潭池のほとりに大村御殿(後の中城御殿)を構えていた。尚家の祖先。

注② 北谷 沖縄本島中部に位置する。

注③ 耳切坊主 尚敬王の頃、護道院(真言宗、現若狭町)の住職をしていた、盛海上人せいかいじょうじんのこと。顔色が浅黒かったので黒金座主と呼

ばれた。政治批判をしたために、北谷王子に肅清されたという。

・耳切坊主 黒金座王が耳を切られて亡霊となった姿。

72 屋や良らの阿あ麻ま和わ利り

話者 山内繁茂(明治三十七年三月五日生)

翻字 知花めぐみ

アマンジャナー注⑧はですね、歴史的には、大川按司の子どもだと言われておるが、ここでは、ある家の普通の平民の息子という意味があるようであります。それは生まれてから十四、五歳なるまで足腰が立たないで屋良の後の洞に寝かしてあつて、それで女の親が三度三度の食事を運んであげたと。寝ておつてそのアマンジャナーは、外側で蜘蛛が巢を掛けるのを見ておつたと。それを見てとうとう思いついて、母が食事を持つてきた時に、「もういつぺん来る時には、芭蕉の糸、それを一卷持つて来てくれ」と頼んだつて。

で、その芭蕉の糸一卷を小さな糸にくつて、それで蜘蛛が糸で巢を張るのを見て、その通り張つて、今度は足腰がだんだん立つようになったからその網を持つて、川に行つてお魚をすくつてみたら良く取れると。「これ面白い」というんで、それから自分の住んだ所を後にして、勝連辺りに行つたら、たたくしーびー、食べておればいいから、金持ちになろうと思わんから、沢山の友達をこしらえ、お魚をその網で取つて、そして人々にやつたから「君は僕等にこんな親切にしてくれるのだが、何か貴方に恩返しをしなければならんが」と言つたら、阿麻和利は「恩返しは私がやれと言う時にやつてくれ、今はいいから食べておきなさい」と言つて絶えずお魚を取つてみんなに配つておつたと。

それからそれが段々知恵付いて、王様の家来になるようになった。茂知附王といつておつたでしょうね。そしてら野心があるものだから、ある日、茂知附に城の上から南を見るように仕掛けたんでしよう。そしてその日に約束して漁民達に、「小舟に松明をつけて、南から与那原辺からこの勝連を向けて皆漕いでこい」と合図して、そしてその船が、夕方になつてから松明を付けて勝連城に向かつて来るのを王に見せたら、王は「何だ」と聞いたから「あれはここを攻めに来るんだ」と言つて脅して。もつと城の崖の近くまで行つたら、この王を下に押し落として死なして、そして家来達に「王は死んだが、私の家来になるか、王の味方をして僕に反抗するか」ということで図つたらみんな「家来になる」と言うので、それから勝連城主になつたという。

その後で、護佐丸の子どもが阿麻和利を討つ事になるんです。変装して逃げたのが、はじめ自分の屋良、そして

殺される時には変装して来るんでしよう。ここも危ないというので今度は読谷に渡って。そして追っ手は追うてきて、この部落の楚辺の通信隊の所に、追いつかれて捕まえられたからここでエンミしたつて。エンミというのは降参という方言です。ここの地名は親見原と書くんです。親見と書くが、これはエンミと読むんですよ。そこで降参して、それから古堅小学校の北約百五十メートルぐらいの所に阿麻和利の墓があります。で、戦前は屋良の人々が、その子孫がそこを拝んでおるようでした。その墓の中には阿麻和利が使つておったという太刀もあつたという話です。

採集S 52・6・19 読谷村民話調査団第七班（遠藤庄治・石嶺まさみ）

注① 屋良 96頁参照

注② 阿麻和利 96頁参照

注③ アマンジャナー 阿麻和利のこと。

注④ 芭蕉 繊維を取るリュウキュウバショウ、方言名 ウー。

注⑤ 茂知附王 酒色におぼれて、政治を紊り、百姓を非常に苦しめていた。阿麻和利は手製の網で魚を取つては住民に分け与えていたので、住民は恩返ししたいと申し出る。期日を決めて勝連城の見える所へ出て行列をつくつて歩くよう頼む。阿麻和利は茂知附接司を崖上に誘い、行列を見せて敵の襲撃と欺き、崖下に突き落とし城を手に入れる。

注⑥ 与那原 中城湾の南に面した小さな港町。戦前は山原船の出入りで賑わつた。

注⑦ 勝連城 96頁参照

注⑧ 護佐丸 一四二〇年代の英雄、護佐丸はもと大北（読谷山、恩納）地方を領し、最初山田城にいたが、後に座喜味に城を築いて移つた。ここで北山地方をおさえ、長浜港を利用して南蛮貿易を行ったといわれる。更に、その娘が尚巴志の妃（夏氏大宗由来記には尚泰久の妃）となり、北山も一四一六年に滅亡したので、一四四〇年頃に中城城を築造して移つた。

注⑨ 楚辺の通信隊 現在の米軍トリイ通信隊基地。

注⑩ エンミ 96頁参照

73 蛇^{へび} 婿^{むこ} 入^{いり} へ漲水御嶽^{はりみずうたき注①}

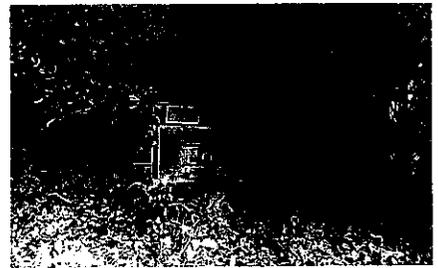
話者 松田 カマド (明治三十三年四月十日生)

翻字 知花 めぐみ

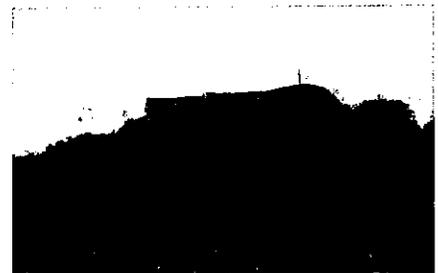
昔^{むかし}、これはもうずっと昔^{むかし}の話^{はなし}ですが、宮古^{みやこ}の平良ジマ^{ひらら}という所^{ところ}に、今は平良町^{ひららちやう}だが、平良ジマ^{ひらら}という所^{ところ}に中年^{ちゆうねん}の夫婦^{ふうふ}が居^いてねー、子^こどもが恵^{めぐ}まれないので、「どうしても神様^{かみさま}、うちにも子^こどもを授^まけて下^{くだ}さい」と言^いって、神様^{かみさま}に毎日^{まいにち}願^{ねが}ったそうです。願^{ねが}ったそうだから、この人^{ひと}は運良^{うんよ}く中年^{ちゆうねん}になつてから、妊娠^{にんしん}したそうです。

産^うまれてきたこの子^こは、とつても美^{うつく}しい娘^{むすめ}で、もらい手^ても沢山^{たざん}居^いたそうです。だが年^{とし}が若^{わか}くて、十四^{じゅうし}であるから誰^{だれ}にもやらない、今^{いま}はこれは年^{とし}が年^{とし}だからやることは出来^{でき}ないといつて、別^{べつ}にやらなかつたそうです。

したら、この子^こは何気^{なにげ}なくお腹^{なか}が膨^{ふく}れて、もう今日^{きょう}明日^{あした}という時^{とき}に、お腹^{なか}がだいぶ膨^{ふく}れてしまつて、したら親^{おや}は



阿麻和利の墓



勝連城

もう心配してねー、「何でこの子はまだ、結婚もしないのに妊娠したのは、これは不思議」と言つて。ある日、親達がこの子呼んでからに、これを戒めて、問い尋ねしたから、「うちは誰とも、関係やつてないがねー、ある夜とつてもきれいな男子が来て、来たと思うとすぐなくなつたつて。また、これ神であるから。何かねーと不思議に思つて、もう何か稲光の光みたいにして無くなつたつて。その時から私は、お腹が膨れたよ」と両親に言つたから、「そうか、これは一度では済まさん、もつと来るはずだから、その時には、どうしてもこれが行方を尋ねんといかんから」と言つてね、「何処かこの針に糸を抜いて、この男を行かしなさい」とこの子に教えたから、親の言うままにそうしたそうです。

そうしたから、翌日は、この糸の行く所を辿つてみたら、この糸は宮古の今の漲水港のツカサヤーという洞窟に入つて行つたつて。したら、この洞窟は奥深く、行つてみたらね、大きな大きなハブがいたそうです。アカマターというてゐるでしょう。アカマターがいたから、親なんかは、びつくりして、すぐ家に引き返してきたわけさー。これはアカマター子、妊娠しているんじゃないかといつて。したら、またちよつと日も経つて、もうやがて産み月になつてから、またこの人が現れてね、「あんたは妊娠しているが、本当はあんたのお腹には女の子が三ついる」つてこの神様が。これ神であつたつてよ。

そうしたら、「この女の子が三つになつたらみんなねー、うちの所に連れてこい」と。神の子だから、すくすく大きくなつて。して三つになつたらこの洞窟に連れて行つたつて、親ももろともに連れて行つたら、この子達はねー、もうこのハブは赤い舌をへろへろして見ていたつて、首を掲げて。したらこの子どもなんかはねー、もうハブにくつついてねー、動きもしなかつたそうです。したらもう、この親達もまた生みの親も、この子はそこに置いて、びつくりして家に逆戻りしてきたつて。

して、後はね、女の子達は、一人の女の子はこの平良町の守り神になつて人には見えないわけさ。また一人の子は、八重山の守り神に行つたつて。八重山の太川でしょう。何処か、それはどつちかと言うとはつきり私は分から

ないが、一人はまた天に上がったて。

そんなにして宮古のツカサヤの御嶽という所は、本当にあれば宮古の守り神つて。このアカマターは、本当のアカマターではなくして神であつて神の子を産んだわけつて。これは宮古の伝説です。

採集 S 52・2・25 読谷村民話調査団第十五班（新垣修子）

注① 漲水御嶽 宮古島平良港と第一棧橋のターミナル近くの一角にある。宮古島創世の神話ならびに人蛇婚説話等にいろどられ、古代

宮古人の源流をさぐる上からも貴重な御嶽である。

注② 宮古の平良ジマ 宮古諸島、沖繩諸島から南西三百キロ隔てている。現在の宮古平良市。宮古諸島の中心都市。

注③ ツカサヤの御嶽（司屋御嶽） 宮古島上野村は台地上に形成される村落で、御嶽は親里の南側、台地、緑に立地し、林縁からは急傾斜をなしている。

注④ アカマター 10頁参照

注⑤ 八重山 沖繩本島の南西に位置する。



漲水御嶽

74 犬婿入へ大将の首

話者 松田 カマド (明治三十三年四月十日生)

翻字 知花 めぐみ

昔、沖繩は、もう他の国と戦争するわけにはいかん内乱だはずですが。ある所の戦の大將と、またある所の大將と両方戦の時があつたそうですが、その時に一方はもうどうしても負けなくちやいけない立場にあつてゐるわけさね。

したらこの負ける方の方は女の子三名、して男の子はいない。そして是非、今日の夜に敵の首を取らなかつたら、あくる朝は向こうから大勢の軍隊が来たら負けるに決まつてゐるから。どうしてもこれは物考えしてね、今日の夜で敵の首を取つてこなくちやいかんという話になつて。そしてこの女の子も三名、また犬を一匹飼つていたそうですが、その犬も前にして、もう今日の一晚しかこんなに話も出来ないからみんな考えて、どうしなさいということに決めて。「これは、女が戦にも出られん、考へ問題だね、明日の朝なつたらもう全滅だね」と言つて、思案してゐる事をこの犬が聞いて、そしてこの犬がもうなにげなく、すーと出ていったそうです。出て行つてからにね、朝早くこの犬が、敵の大將の首を啞えてきていたつて。

したらもうこの大將は、とつても喜んでね、「あんたは、何が欲しいか、あんたが欲しいだけのものをやるから、言いなさい」と言つたら、この犬は、一番上の姉の股の上に行つて座つたつて。座つたから、「あんたこれが希望か」と言つたらね、この一番上の姉は「こんな犬と私何するの」と言つてね、この犬を自分の股からどけたそうです。よけたから、今度はまた次女に行つて、やっぱし次女の娘もその通り。今度は三番目の娘に行つたら、三番目の娘は「もうこれは、とつてもないことだから私はどうしよう」と言つて。そしてあるだけの小判も、何もかもみんな持てるだけは持たして。そして自分の所で犬と夫婦になつたという話ぬ世間に広がつたら面目に触

わかることだから、これはこんなにしてはいかないといつて、新に親が船も造つて、そして「あんた方はね、この船の着く所が、住まいだから、この船の行く所に行きなさいよ」と言つて犬とこの三女の娘と二人港を出して行かしたつて。何処の港とかこれは分からんが。

行かしたらこの犬はね、宮古島のヤンシーというとても大きな岩があつたそうですがね、この岩の上に船は着いたつて。そこで「もうじゃー、あんたも降りなさい」と言つてこの女の子を降ろしてね。そしてその近辺の岩のほとりに大きな池があつたつて、溜め池が。したらこの池の縁を巡つてからに、「あんたそこに立つていて、何処にも行かないでよー、私はすぐ来るから」と言つて、この犬は溜め池の中に入つて行つたつて。

溜め池の中にここから犬は入つたとすると、向こう側からとってもハンサムの青年になつてきているわけさ犬は。して「さあ行こう」と言つたら「私、犬と来たんだからあんたと行くわけにはいかない。犬がこつちで待つていてよー、すぐ来るからと言つていたから、犬が来てからしか私行かない」と言つて断つたさうだ。したらこの犬は、「僕だったよ、犬は僕だったよ」「違いますよ、犬だった」つて。「そうねー、あんたは必ず犬が来ないと行かないわけねー」と言つたら、「はい、私は犬が来なかつたら行かない」「じゃー、僕が犬であつたという証拠をみせるか」と言つてね、尻尾を開けて見せたつて。したらね、犬の尻尾だつたつて。「そうか、なるほどこれは神であつたかね」と言つてね。そしてこの犬についてここで暮らしたさうだ。そしてこの犬と娘の二人だから、子どもも産まれるし、これが段々と広がつてね、宮古島という島を造つたというのはその由来記。

したら向こうはね、この犬というのを忘れないが為に三度の食にね、この犬の尾というのを入れるわけさ。「今は、あんた方は何のお汁食べたねー」と言う。これはもう三度の食に入つてゐるわけさ、この尾というの。こつちでも犬の尾といつて言うでしょう。それを入れて、何の尾食べたと言つて汗に尾と言うわけさー向こう、さういふ理由だつて。

※ヤンシー ツカサヤーの語り違いと思われる。

75 死んだ娘 へ南風原按司の一人娘へ

話者 松田 カマド (明治三十三年四月十日生)

翻字 知花 めぐみ

昔、南風原按司に一人の娘が居たそうです。したらその子がちよつと重い病氣にかかったそうで、そして氣を失つて氣絶したから親なんかは、皆これは死んだもんだと思つて、そして早々にお墓に葬つたそうです。だが、この子は本当は死んでいなかったそうですね。

して、翌日その墓の近くの青年が草刈に行つたらちよつと雨が降つたもんで、この墓の何と言うか、ハシルグチーというか、トグチというか、そこに雨宿りしに入つたら、後の方からこの青年の首筋を掴まえて引つ張つたそうですがね。引つ張つたから、びっくりして何でこちらは新後生だのに、大変だなーと思つて、化け物か何かと思つて振り向いて「お前は何か、人の首なんか引つ張るから化け物であるか、人間であるか」と聞いたたら「私は化け物でもない、私は南風原按司の一人娘だが重い病氣にかかつて氣絶したもんだから、死んだもんだと思つてこの様に葬られてるがどうぞ助けて下さい」と言つたから、「そーねー、本当かこれは」と言つてね。

そして一人では出来ないから別からも加勢を頼んできて、この女の人を助けたらとつても衰弱しているものだから。これが元の人になったら親元に帰そうと思つて、自分の家に連れてきて介抱して、いよいよ完全に健康になつたから親元に使いを行かして、連れさしたそうです。

して、その子はまた、この助けた青年と何か結婚の約束でもしてあったそうですがね。これも百姓と侍と言つたら昔は大違いだから、これに嫁いではいかんと言つて、別の同じ侍の家に結婚に出したら、この助けた青年はその時に、この籠の側からこのお嫁に行く人の荷物を担いで行く途中、道中で「あんた、うちとの約束はどうするね」と聞いたから、「そーね、はーもー大変だ私は」と思つて、もう道中で「お腹が痛い、私はもう苦しい苦しい、向こうに行く事は出来ないから、自分の実家に引き返してくれ」と言つて、自分の実家に引き返してきて、そしてその後からいろいろ理由を親達には話して、そしてこの青年の所に帰つて夫婦になつたという話。

採集S 52・2・25 読谷村民話調査団第十五班 へ新垣修子

76 お茶二杯

話者 山城 幸 成(大正四年八月五日生)

翻字・対訳 仲里 咲子

あぬよ昔ん人ぬ言葉、「一茶碗茶や飲むな」りぬ話、
いつたーんかい聞かすしが。

うぬ理由や、必じ茶や二茶碗なーや落ち着いて飲み
りぬ意味。うぬ意味え何やいびーがりち聞ちやぐとう、
一杯茶あ飲り行ちねー道中うてい事故あつたり、ある
いは何がら悪者あつたりするおそれが多い。
あんやぐとう、くぬ二杯飲む問ね、悪者ん通りす

あのう、昔の人の言葉に、「お茶一杯は飲むなよ」と
いう話、貴方達にしてみようかね。

その理由はね、必ずお茶は二杯落ち着いて飲みなさ
いという事である。その訳を聞いてみるとね、一杯の
お茶を飲んで出かけたら道中で事故にあつたり、何か
悪者にあつたりすることが多いそうさ。

だから、お茶を二杯飲む問には、悪者も通りすぎて、

ごすし、また車事故くるまじこんあたらんりぬ意味いみあいさーい、茶ちやや一茶碗ちやわん茶ちやや飲ぬむな。是非じひ二茶碗ちやわんなーや飲ぬみりぬうれー、あんし習ならていちゃん。

また車事故にも合わないという意味があるので、お茶は一杯は飲むな。お茶は是非二杯は飲みなさいと教えられたよ。

採集S 52・2・25 読谷村民話調査団第七班（仲村渠清美・佐和田茂美）

77 ハブ除け呪文

話者 山城 加那（明治二十五年一月八日生）

翻字 知花 めぐみ
対訳 玉城 和美

「恩納山うんなやまぬ竹山たけやまうてい、水汲みづくり飲ぬまぢやるンジジャマーう爺じい子こ、孫まがどー、子こ、孫まがどー」り。あんいち話はなししんしえーたん。私わんにん何聞なんちちるうしがよー、見んじえーさんしが、私わんにんいつたーんかい今いま、話はなしすしえー私わんにん聞ちちよーるばー。

「恩納の竹山でね、水を汲んで飲ましたンジジャマよお爺の子、孫だよ、子、孫だよ」と。そういうふうな話をしていたよ。私も何か聞いてはいるが、見たこととはないけど、私も貴方達に今、話をするのを聞いたことがあるよ。

あんされーハブお何処まから歩あちん、うぬハブんかい、居うる所ところてー、あんし話はなしでいんしえーちやーん無なんさでい言いいたん。またうぬ木きぬ中なかからん何処まからん昔むかしえキジムナーつち居うたんよ、キジムナーてー。あんし「恩納

そうしたらハブが何処から歩いてても、そのハブが居る所で、そういう唱えごとをすると大丈夫だったよ。昔は木の中にねキジムナーが居たよ。そして「恩納山の竹山で、水を汲んで飲ましたンジジャマ、お爺の子、

山ぬ竹山うてい、水汲り飲まちやるンジジャマ、う爺
子、孫どー、子、孫どー、子、孫どー」りちよ、三回
のーしぐ言んしえーたんよ。

恩納山ぬ竹山うてい、平生やかんうまー良い天気な
てい焼ちやぐとう、うまんかいハブお沢山てーんてー。
あんさーに、あん人んかいしがいいし水かきやーちやれー
うぬ、「恩納山ぬ竹山うてい、水汲でいとうらちやるン
ジジャマーう爺子、孫どー、子、孫どー、子、孫どー」
でいあん言いるんしえーうぬハブお、何処にん居しん
ふかねーちやーんさんでいんしえーたん。なーあんねー
あらんていん、あん言りより言んしえーたん。

孫だよ、子、孫だよ、子、孫だよ」と三回は唱えてい
たよ。

恩納山の竹山で、普段よりも良い天気なので焼いた
ら、そこにハブが沢山いたよ。そして、人に寄ってこ
ようとするが、「この恩納山の竹山でね、水を汲んであ
げたンジジャマ、お爺の子、孫だよ、子、孫だよ」と
唱えごとをしたらこのハブは、何処にいてもどうもし
なかつたらしいよ。そうでなくても、そう言いなさい
と言っていたよ。

採集 S 52・6・19 読谷村民話調査団第九班へ運天悦子・大宜見光一

注① 恩納山 65頁参照

注② キジムナー 15頁参照

※ンジジャマ イチジャマ(生ち、邪魔)生きている人の怨霊、呪いのこと。

78 産婆の始まり

話者 宮城 シズエ (明治三十年五月十日生)

翻字・対訳 玉城 琳子

時取いぬ神んでい言みせーせー、今ぬ産婆さんやい
びーしが。

あがとー世から、くぬ大湾なかいやめんしえーん。
くぬ人お何神んでい言みしえーが、「フンチウヌール」、
金細工小んかいめんしえーん。

で、それからいうもんは、うぬ人ぬ習ち、かんし産
婆何処んくいかい分つくいたんでいお話。うれー、
分かとーるばーやさうつさ、産婆ぬ始まいや大湾なか
いるめんせーてーんてー。

時を取る神様というのは、現在の産婆さんのことであ
る。

昔から、この大湾にはいらつしやる。この人は何の
神様かと言うと、「フンチウヌール」といって金細工小
という家にいらつしやつたそうです。

それからは、その人の教えで、こうして産婆が各地
にいるようになったという話。それは分かっている、
産婆の始めは大湾にいらつしやつたという。

注 金細工小 屋号。

採集S 52・2・25 読谷村民話調査団第十五班 (新垣修子)

誠まことな人ひとに矢やは立たたない

話者 山城 幸成 (大正四年八月五日生)

翻字・対訳 玉城 琳子

私が聞きちやる範圍はんい内ない、「誠まことする人ひとに弓矢ゆみやぬたつみ」くりんお祖父じいさん、お祖母ばあさん達たあから聞きちよし。

うぬ意味いみえ、ある悪者わるもの、やな人ひとぬ、誠まことそーる人ひとんかい、しーていんあり死しなすんりやーい弓射ゆみはんちやん。弓射ゆみはんちやぐとう、やつぱし相手あいてえ誠まことなたぐとう神かみ様さまからん助たきらつてい。うぬ弓ゆみえ誠まことそーる人ひとねー当あたらん、うぬ誠まことそーる人ひとぬ後ごぬ崖がけに当あたつて、うりが跳はんち返けていつち、弓射ゆみはんちやぬ悪者わるものなかい当あたたんりぬ事こと。

やてい、「誠まことする我身わみに弓矢ゆみや立たつみ」りーせーうりからやぐとう。どこまでも人間にんげんは、誠まことで尽つくしなさいよと表現ひょうげんされている。

私が聞きいている話はなしの中で、「誠まことする人ひとに弓矢ゆみやぬたつみ」という諺ことわざがある。それもお祖父じいさん、お祖母ばあさん達たから聞きいているがね。

その意味いみは、ある悪者わるものが、誠まことな人を必ず殺ころしてみせると弓矢ゆみやを射やつたのだ。

弓矢ゆみやを射やつたらね、相手あいては誠まことな人ひとなので神かみ様が助たすけてくれた。この弓矢ゆみやは誠まことな人ひとに当あたらないで、その人ひとの後の崖がけに当あたつて、それがはね返かえつて、弓矢ゆみやを射やつた悪者わるものに当あたつたということである。

そういうことで、「誠まことする我身わみに弓矢ゆみやが立たつか」というのはそういうことから言いわれている。人間にんげんはいつまでも誠まことでいなさいといっているよ。

80 お茶の子の始まり

話者 松田源蔵(明治三十一年七月六日生)

翻字・対訳 知花 めぐみ

女ぬよー、いつペー男想とーるばーてー。自分ぬ夫
しえーやーんちはまていそーしが、なかなかならんた
んでい。

あんさぐとう、ある日てー、ちゃーないんちる待ち
ぶとーぐとう、男あ合点おあらんどうあぐとう。あん
さーに、うぬー茶あ一緒ん飲でーうるばーてー。あん
さくとう、うぬ男ぬ去ちやくとう、うぬ男ぬ残しぐり
ぬ茶よー、うちゆ飲でい「くり飲でい妊娠れーしがやー」
んちさーにさぐとう妊娠とーたんてい。

妊娠ていそーしが産すんなたれー、ウチャヌクやた
んでい。餅ヒラター餅てー。産ちやれー餅やたんてい。
あんすぐとう、くぬ女ぬ想いんでいしえー、うりや
るむんち、ウミチムンてー、ウミチムンぬう竈てやー、
竈。ウミチムンでいるばーてー。うまんかい供ぎーしえー、
あぬー、ウチャヌク供ぎーんでい。うぬ伝んでい、女
ぬ想いや。

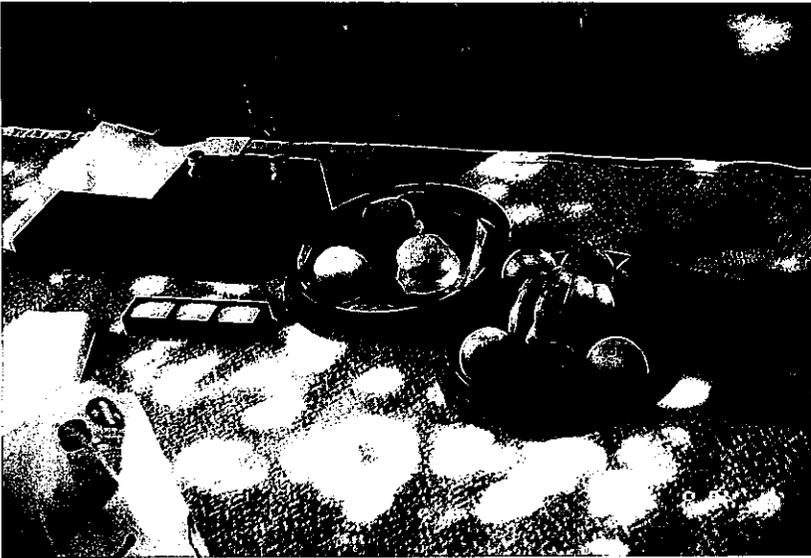
女がね、大変男を想っているわけだ。自分の夫にし
ようと頑張っているが、なかなかうまくいかなかった
そうさ。

それで、ある日ね、女はいつもその男にまわりつ
いていたが、男は応じなかった。それで、(この男と)
お茶と一緒に飲んでいたらそうさ。そうして男が去って
しまうと、この男の残してある茶かすのお茶をね、飲
んで「これを飲んで妊娠すればいいのに」と、そうし
たから妊娠したって。

妊娠して出産したら、ウチャヌクだったそうさ。餅、
ヒラター餅さ。産んだら餅だったそうさ。

それで、この女の想いというのはこれだとね、ウミ
チムンさ、ウミチムンのお竈。ウミチムンと言うわけ
さ。そこに供える物、ウチャヌクを供えるそうさ、こ
の伝えだそうさ、女の想いは。

- 注① ウチャヌク 祖神や火の神に供える餅。大、中、小と三個重ねる。
- 注② ウミチムン（御三物） 火の神の別称。火の神の象徴として三つの石を・状に置くことからきた名称。



ウチャヌク

翻字 知花めぐみ
対訳 玉城和美

お爺さん達あ話でいやしが、金持、貧乏や坂ぬ降り登い、働ちじつくわどうやんどー。寝んとーてー飛び鳥ぬ口んかい糞るまいんちゆんどー、働きよーり。

まずは、貧乏者ぬ、金持ちに盗るしーが行ぢよーしが、盗るさぎーる場合なかい、同ぬ盗るはつちちねーらん。うぬ盗人おまた女盗人。

あんさぐとう、「あきさみよーな」助きていゆたさぬ入つちよーる盗人ぬうり助きていさぐとう「いやー助きていありがとう」んちやぐとう、「いやー何しーが来やぐとう」「盗るーしーが来びたん」り、あつさり。「なー妻んかいなぎらつてい親子心配そーしが、なーくまー金持ちやくとう、金盗るしわるやる」んち借りわるんりる意味えやんてー。「いえーあなるやでい、とーとーゆたさん、いやー子私達が育ていー事やー、いやー自分ぬ心ぬ向かとーん所んじ働きよー」んち、金借

お爺さん達の話だけれど、金持ちと貧乏は、坂の降り登り、働いてなんぼだよ。寝ていたら飛ぶ鳥が口に糞をするよ、働きなさいよと。

まずは、貧乏者が金持ちの家に盗みに入るが、その時に、同じ盗人に鉢合わせしてしまった。その盗人は、女をあさる泥棒だった。

そうしたら、「もう大変なことだ」と、良い盗人がその女を助けてあげたら「助けてくれてありがとう、ところでお前は何しに来たのか」と言ったら、「泥棒しに来ました」と。もう妻にもあてにされなくて親子で心配していたが、ここは金持ちなので金を盗もう」と。その人は、お金を借りるつもりだったんでしょかね。「あ、そうだったのか。よしよしそれではいいよ。お前の子どもは、私達が育てるので、お前は自分の心の向かっている所で働きなさいね」と、お金を借してあ

らちゃんてい。貰りよーんりるやししが、本人お、また貰てーならんち働ち儲きていつち返ちやんでい。

また返ちやくとう、「うぬ助きたる童え、妻し呉り」でい、親ぬ言ちや事、「はー金まで貰てい行ち成功そーむぬ、女ん子までい、貰らしみしえーんなー」んち。「何が私が貰らしえーしめーさに」「ひしみしかーにひちやーびーしが、無礼やびさやーさい」りちさくとう、「あらん、無礼あらん、貰らんあれー無礼どー、貰れー」んち貰らさったんり。

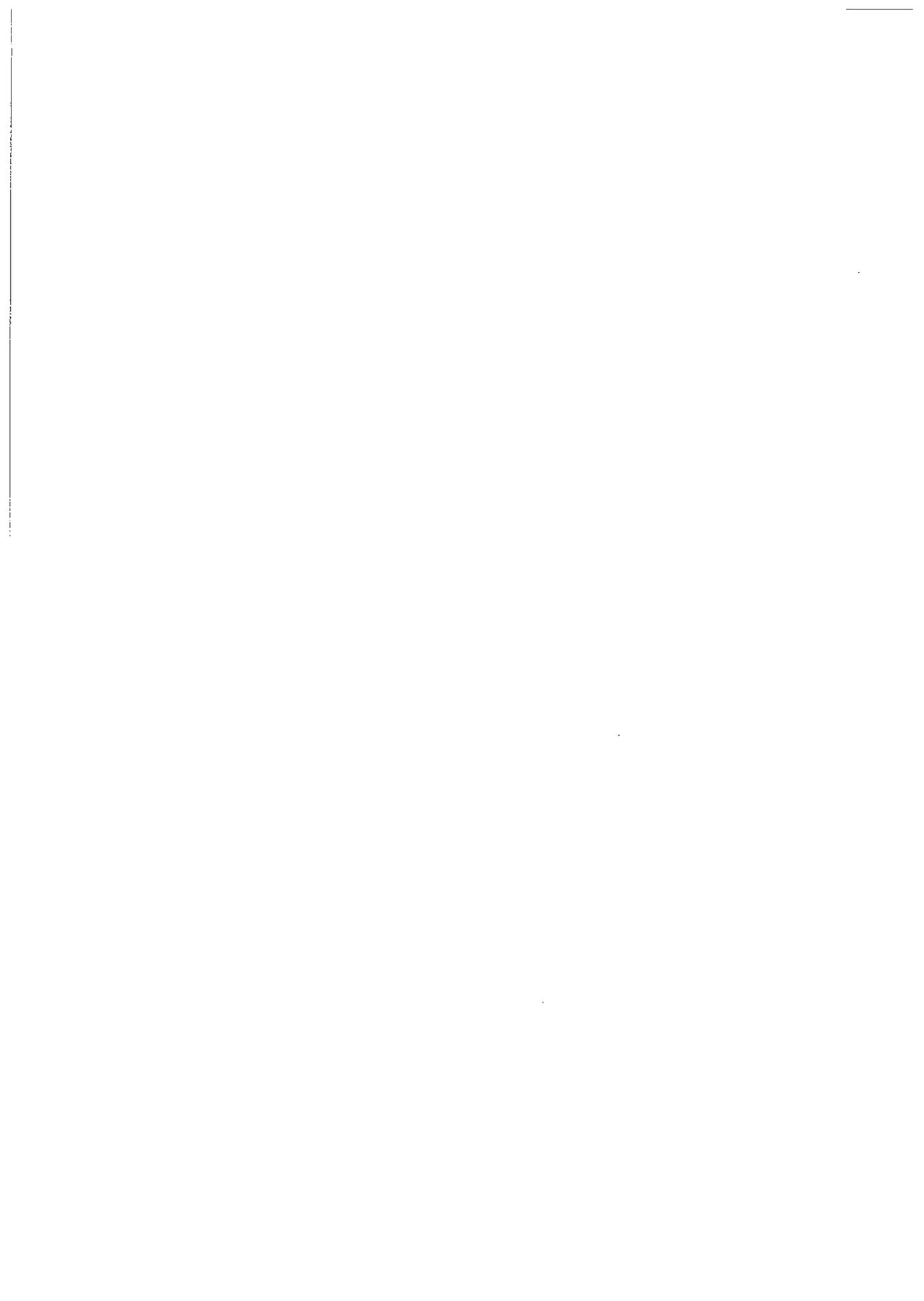
あんとう、子ぬ今あ姉さんやししが、後おお母さんなたんでい。

げたつて。貰いなさいといったが、本人は、貰つてはいけないと働いて儲けて返したそうだよ。

そして金を返して、父親が「この育てた子どもを妻にしてくれ」と親が頼んだら「もう金まで貰つて行って成功したのに娘まであげるのか」とその人は言った。「どうして私があげるのでもいいだろう」「無礼になりますかね」と言ったら、「そうではない、無礼ではないよ、貰わなかつたら無礼だよ貰いなさい」と貰わされたつてよ。

それで、その子は嫁さんになり、後はお母さんにもなつたつてよ。

第二編 資料



話者別一覽表

凡例

- 一、話者番号は話者の数を表わす番号である。話者の配列は調査班の若い順に並べたが割り付け前後したものもある。
- 二、話者欄には、話者の氏名を示し、できるだけ写真を載せた。
- 三、住所欄については、話者のすべてが読谷村に住所を有するので、字名と番地を記入した。生年月日は、便宜上M(明治)、T(大正)、S(昭和)の略号を用いた。
- 四、話型番号に○を付したのは、翻字資料が掲載されているところを示す。
- 五、話型名欄のへゝはモチーフ名を表わす。話は調査年月日の古い順に、テープ収録順に並べた。また、同話者による同じ話の再録分については調査の古い順に並記した。
- 六、語りの欄の○印は方言、×印は共通語、△印は方言共通語混じりの語りを表わす。
- 七、テープ欄には字ごとに編集したテープ番号を示した。
- 八、調査欄には調査年月日を示した。

話者番号	話者名	住所 生年月日	話型番号	話型名	翻字番号	掲載頁	語り	テープ番号	調査月日
1	松田英徳	大湾三九一 M26・6・30	①	雀孝行	1		○	1A1	S52・2・25
			②	雨蛙不孝			○	1A2	〃
			③	子供の肝〈仲順流り〉	23		○	1A3	〃
			④	天人女房〈銘苅子〉	14		○	1A4	〃
			⑤	鬼餅由来	6		○	1A5	〃
			⑥	大湾のビジュル石			○	1A6	〃
			⑦	モイ親方〈勉強十立ちしよん〉			○	1A7	〃
			⑧	モイ親方〈出たものは切る〉			○	1A8	〃
			⑨	モイ親方〈難題〉	43		○	1A9	〃
			⑩	モイ親方〈二日殿様〉			○	1A10	〃
			⑪	赤犬子	56		○	1A11	〃
			⑫	アカマタ婿入			○	1A13	〃
			⑬	鳩料理	49		○	1A14	〃

5	4	
<p style="text-align: center;">宮城 カマド</p> 	<p style="text-align: center;">松田 カマド</p> 	
<p style="text-align: right;">大湾四二〇 M 23・2・11</p>	<p style="text-align: right;">大湾三六八 M 33・4・10</p>	
<p style="text-align: right;">① 2 3 4 5 6 7 8 9 ⑩ ⑪ ⑫ 13</p>	<p style="text-align: right;">① ② ③ ④</p>	<p style="text-align: right;">③ ④ ⑤</p>
<p>雀孝行 亀に助けられた人 烏孝行 猫の首吊り 鬼餅由来 久良波首里殿内 歌い骸骨へ竹のどくろへ キジムナーへ魚取りへ アカマタ婿入 子供の肝へ仲順流れへ 真玉橋の人柱 クスケー由来 継子の麦突き</p>	<p>アカマタ婿入へ浜下り由来へ 蛇婿入へ涙水御嶽へ 死んだ娘へ南風原外間の一人娘へ 犬婿入へ大将の首へ</p>	<p>ものいう牛へカンカー由来へ 産婆の始まり アカマタ婿入へ浜下り由来へ</p>
<p style="text-align: right;">2</p>	<p style="text-align: right;">10 73 75 74</p>	<p style="text-align: right;">9 78</p>
<p style="text-align: right;">○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ △ ○ ○</p>	<p style="text-align: right;">× × × ×</p>	<p style="text-align: right;">○ ○ △</p>
<p style="text-align: right;">2 A 13 2 A 12 2 A 11 2 A 10 2 A 9 2 A 8 2 A 7 2 A 6 2 A 5 2 A 4 2 A 3 2 A 2</p>	<p style="text-align: right;">1 B 9 1 B 8 1 B 7 1 B 6</p>	<p style="text-align: right;">1 B 5 1 B 4 1 B 3</p>
<p style="text-align: right;">S 52・2・25 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃</p>	<p style="text-align: right;">S 52・2・25 〃 〃 〃</p>	<p style="text-align: right;">〃 〃 〃</p>

										6									
										山城 幸成									
																			
										大湾六三三 T 4・8・5									
⑬ ⑭ 16 15 ⑭ ⑬ ⑫ ⑪ 10 9 8 ⑦ 6 5 ④ ③ ② 1										23 22 21 20 19 ⑱ 17 16 15 ⑲									
格言 大歳の客 誠な人に矢はたたない 塩縁起 塩縁起 鬼餅由来 アカマタ婿入 ハジチ由来 あるのが普通 あるのが普通 六尺ふんどし 果て無し話へ人を飽きさせた話 お茶二杯 継子の豆拾い 城間ナークカへ致富 鳩料理 大湾のビジュル石 渡嘉敷ペークーへ碁打ち										兄弟の仲直り 城間ナークカへ盗人 下男と牛 渡嘉敷ペークーへ尾類通い十褒美の片荷 モーイ親方へ難題 モーイ親方へ出たものは切る 白銀堂の忘れ刀 子は宝 叔母捨もっこ 山原と団亀									
46 51										17 76 40 39									
11										35 79 25									
										41									
										20									
○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ △										○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○									
4 B 2										2 A 23									
4 B 7										2 A 22									
4 B 6										2 A 21									
2 B 5										2 A 20									
2 B 4										2 A 19									
2 B 3										2 A 18									
2 B 2										2 A 17									
2 B 1										2 A 16									
4 A 5										2 A 15									
2 A 31										2 A 14									
2 A 30																			
2 A 28																			
2 B 28																			
4 B 4																			
2 A 27																			
2 A 26																			
2 A 25																			
2 A 24																			
S 52										S 52									
" 6										" 6									
" 19										" 19									
S 52										S 52									
" 6										" 6									
" 19										" 19									
S 52										S 52									
" 6										" 6									
" 19										" 19									

10	9	8	7
糸 数 カマド	 大 城 平 順	 松 田 秋 祿	 仲 宗 根 カ マ ド
大湾四〇三 M 39・6・10	大湾四〇七 M 33・12・4	大湾四三四 M 27・11・9	大湾三九六一 M 27・11・27
④ ③ ② 1	3 ② ①	2 1	3 ② 1
雀孝行 鬼餅由来 子供の肝 〈仲順流れ〉 姥捨山	クスケー由来 雀孝行 迷信をなくすための話	大湾・渡慶次当原 大湾・渡慶次当原	大湾の始まり 雀孝行 ハジチの話
31 22 7	4 33		3
○ ○ ○ ○	× × ×	○ ×	○ ○ ○
3 3 3 3 A A A A 8 3 2 1	3 2 2 B B B 13 12 11	2 2 B B 10 9	2 2 2 B B B 8 7 6
” ” ” S ” ” ” 52 ” ” ” 2 ” ” ” 25	” ” ” S ” ” ” 52 ” ” ” 2 ” ” ” 25	” ” ” S ” ” ” 52 ” ” ” 2 ” ” ” 25	” ” ” S ” ” ” 52 ” ” ” 2 ” ” ” 25

13	12	11	
松田源蔵	宮城信康	松田カマド	
			
M 大湾四六三 31・7・6	T 大湾三八四 5・3・19	M 大湾四四一 33・3・15	
⑥ 5 4 3 2 1	1	⑤ 4 3 2 ①	⑤
ヤクミール城 雀孝行 アカマタ婿入 ハブは神の使い 大湾部落の始まり 吉屋チルへ身売り十御茶屋御殿	クスクエー由来	キジムナーと尻 クスクエー由来 犬の話へ主人を殺した犬 人に化けた豚 継子の嫁入	アカマタ婿入
58		18 13	12
○ ○ ○ ○ ○ ○	△	○ ○ ○ ○ ○	○
3 3 3 3 3 3 A A A A A A 17 16 15 14 13 12	3 A 6	3 3 3 3 3 A A A A A 11 9 7 5 4	3 A 10
S 52 ・ 2 ・ 25	S 52 ・ 2 ・ 25	S 52 ・ 2 ・ 25	S 52 ・ 2 ・ 25
〃 〃 〃 〃 〃		〃 〃 〃 〃	

18	17	
 <p>松田 文太郎</p>	 <p>松田 源宜</p>	
<p>比 謝 征 一 M 42・11・10</p>	<p>大 湾 三 六 三 M 41・1・2</p>	
<p>① 2 3</p>	<p>1 ② 3 ④</p>	
<p>大湾の名の由来 馬のケンカ ウガンジュの木を切ったらバチが当たる</p>	<p>真玉橋によせた歌 姥捨山 渡嘉敷ベークーの歌 渡嘉敷ベークーへ基打ち</p>	
<p>60</p>	<p>45 32</p>	
<p>× × ×</p>	<p>○ ○ ○ ○</p>	
<p>5 B 5 B 5 B 15 9 8</p>	<p>5 A 5 A 5 A 5 A 9 6 3 2</p>	
<p>S 52 ” ” 6 19</p>	<p>S 52 ” ” ” 6 19</p>	

話型一覽表

凡例 一、昔話の分類は『日本昔話集成』に従って分類し、動物昔話、本格昔話、笑話の順に並べた。

二、話型名は『日本昔話名彙』（柳田国男監修）『日本昔話集成』に対応する話になるべくその話型名に従ったが「アカマタ婿入」「真玉橋の人柱」など地域に密着した題名についてはそれを用いた。その他の話型については、調査及び編集者が付した話型名を用いた。へへはモチーフ名を示す。

三、上段は話型名、下段の数字は話数を表わす。

9	8	7	6	5	4	3	2	1		5	4	3	2	1				
子育て幽霊	五月五日由来	鬼女房	天人女房	キジムナー〈魚取り〉	キジムナー〈屁嫌い〉	アカマタ婿入〈浜下り由来〉	アカマタ婿入	鬼餅由来	本格昔話	烏孝行	犬の足	十二支由来	雨蛙不孝	雀孝行				
1	3	1	4	1	1	2	4	4		1	1	1	1	9				
28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10
風の子	人に化けた豚	塩縁起	クスケー由来	姥捨山〈難題〉	姥捨山	炭焼長者〈初婚型〉	城間ナーカ〈妻取り〉	城間ナーカ〈致富〉	城間ナーカ〈盗人〉	大歳の火〈遺骨は黄金〉	大歳の客	猿の赤尻	子供の肝〈仲順流り〉	兄弟の仲直り〈猪型〉	継母話〈土は金よりも宝〉	継子話〈豆拾い〉	継子話〈麦突き〉	
1	1	2	5	2	2	1	1	1	4	1	1	1	3	2	1	1	1	1
11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1			33	32	31	30	29	
渡嘉敷ペークー〈低頭門十鳩汁〉	渡嘉敷ペークー〈味噌と花鉢〉	渡嘉敷ペークー〈褒美の片荷〉	渡嘉敷ペークー〈尾類通い十褒美の片荷〉	渡嘉敷ペークー〈碁打ち〉	モーイ親方〈殿様の難題〉	モーイ親方〈嫁取り〉	モーイ親方〈勉強十立ちしよん〉	モーイ親方〈出たものは切る〉	モーイ親方〈一日殿様〉	モーイ親方〈難題〉	笑話		額にあつたもの	果て無し話〈人を飽きれさせた話〉	六尺ふんどし	真玉橋によせた歌	真玉橋の人柱	
1	1	2	1	3	1	1	1	2	1	1			1	1	1	1	3	

◇大湾の民話調査者名簿

沖縄国際大学口承文芸研究会

遠藤庄治・鈴木信一・手登根政子・阿波根初美・知花利江子・金

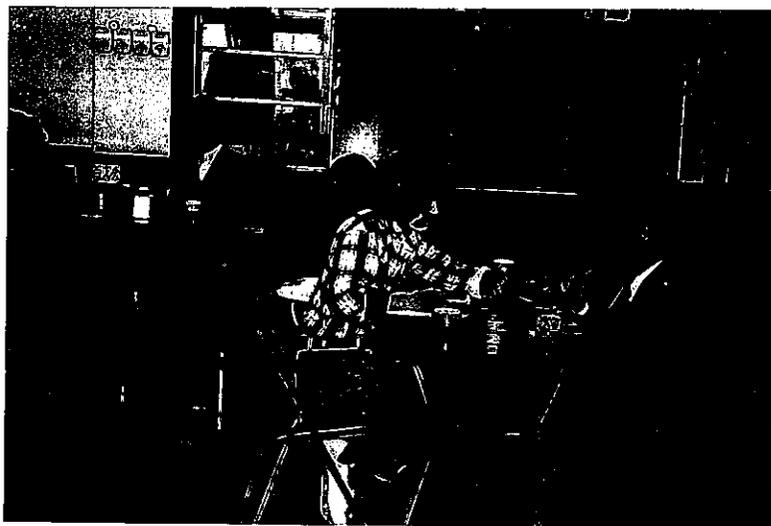
城清美・辺土名朝三・山城悦子・新垣修子・仲村渠清美・佐和田

茂美・運天悦子・富村朝夫・米須美音子・石嶺まさ美

渡慶次勲・上間清美・新里律子

読谷ゆうがおの会（読谷村立歴史民俗資料館）

知花春美



大湾公民館での民話調査 昭和52（1977）

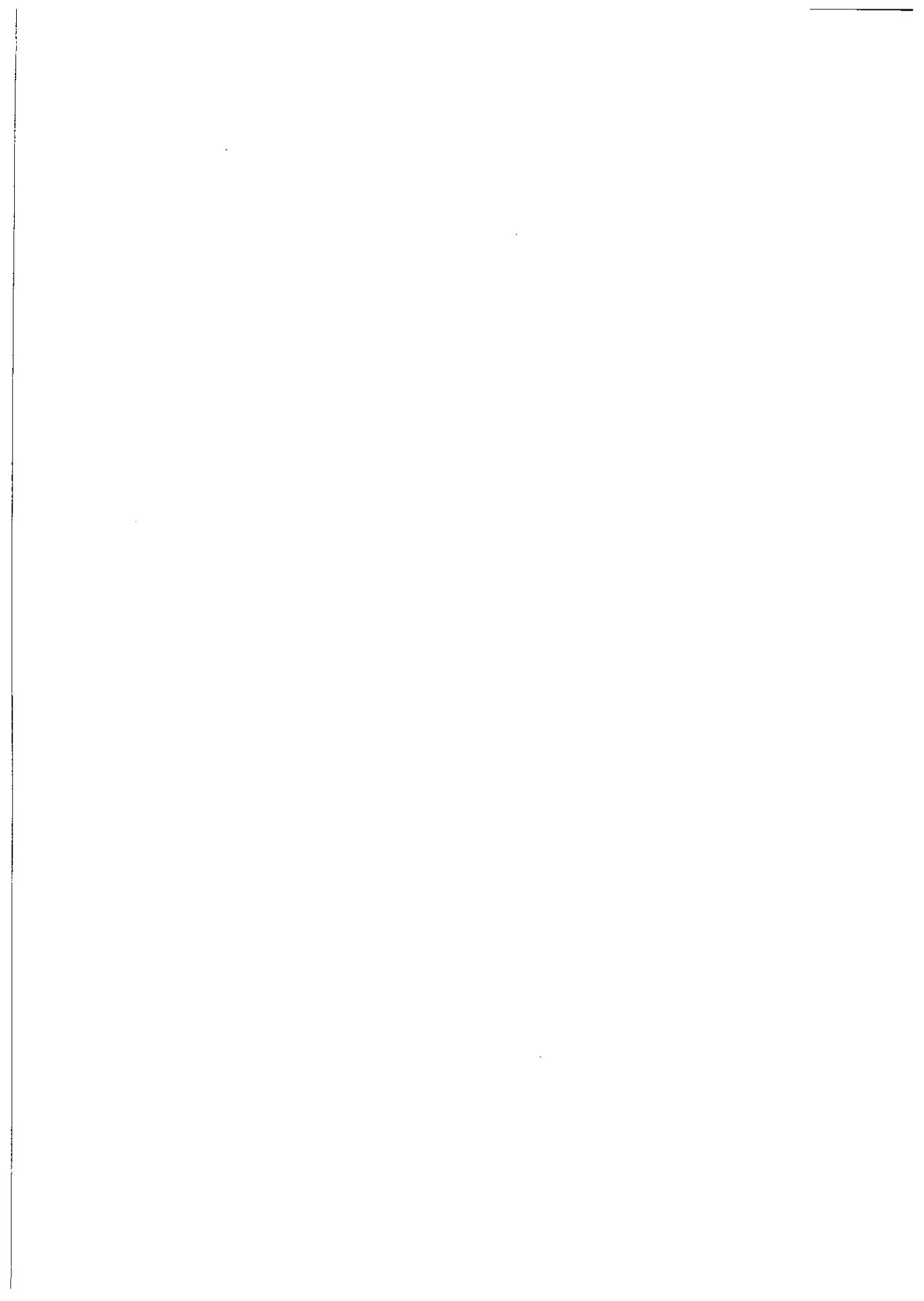
翻字・対訳者一覧表

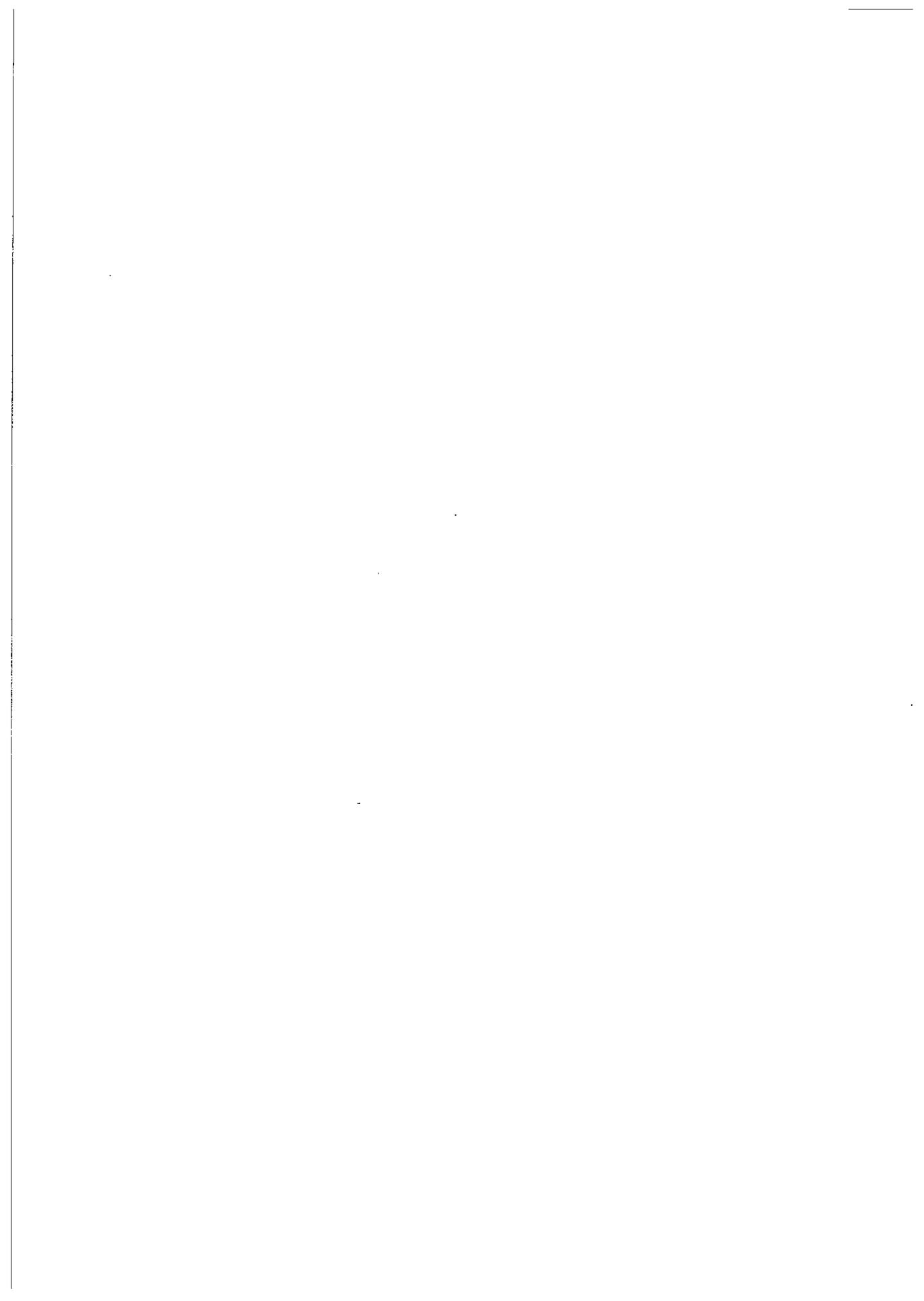
9	8	7	6	5	4	3	2	1	番号	翻字・対訳者名
菊地尚子 嘉手納町字水釜 四五六	伊藝弘子 那覇市首里汀良 町一五五	大浜洋子 那覇市三原一 二六一メゾン みはら五〇五	島袋智子 沖繩市美里 一八六〇	安里和子 北谷町字桑江 四七八一三	津波古米子 嘉手納町字屋良 六七一三	島袋喜美子 座喜味一四七	上原ヨシ 波平一八五	国吉トミ 楚辺一三二七五	番号	翻字
69	32	30	27	2	45	22	5	47	話柄名	話者名
ハジチ由来	姥捨山	炭焼長者〈初婚型〉	城間ナーカ〈妻取り〉	雀孝行	渡嘉敷ベークー〈碁打ち〉	子供の肝〈仲順流り〉	犬の足	渡嘉敷ベークー〈鳩汁〉	松田源蔵	山内繁茂
松田英徳	松田源宜	宮城官正	松田源蔵	宮城カマド	松田源宜	糸数カマド	松田源蔵	松田源蔵	松田源蔵	松田源蔵
102	44	42	38	2	70	32	5	72	掲載頁	

17	16	15	14	13	12	11	10
玉城琳子 楚辺一三九五 二二四	玉城和美 長浜一七八〇三	名嘉真宜勝 波平三一九	松田美奈 楚辺一六七五一	知花春美 長浜一七九四一	村山友江 喜名三〇七四	知花孝子 大木三七三二一	仲里咲子 伊良皆四九二
38 35 34 25 19 17 11 3	9	55 53	41 36 6	66 65 61 59	21 20	54 23	76 1
雀孝行 アカマタ婿入 継子の豆拾い 継子話へ土は金よりも宝 大歳の客 クスケー由来 塩縁起 真玉橋の人柱 六尺フンドシ 果て無し話へ人を飽きれさせた話	アカマタ婿入〈浜下り由来〉	山田ヌン殿内 多幸山フェーレー	真玉橋の人柱 モイー親方〈難題〉	天川泉の殿様 天川坂の由来 比謝の名の始まり 大湾の名の始まり	兄弟の仲直り 子供の肝〈仲順流れ〉	子供の肝〈仲順流れ〉 山田ヌン殿内	雀孝行 お茶二杯
山城幸成 山城幸成 宮城カマド 山城幸成 宮城カマド 山城幸成 津波古只一 山城幸成 山城幸成 仲宗根カマド	宮城シズエ	津波古只一	宮城カマド 宮城官正 松田英徳	松田源蔵 松田源蔵 松田源蔵 松田源蔵	宮城カマド 宮城カマド	松田英徳 松田英徳	山城幸成 松田英徳
61 57 56 48 47 36 22 20 13 3	11	82 79	63 49 6	98 98 94 92	28 26	81 33	115 1

												18																							
												知花 大木一三 めぐみ	玉城 琳子																						
52	51	50	49	48	46	44	43	42	37	33	31	29	28	26	24	18	16	15	14	13	12	10	8	7	4	79	78	70							
ビジュル岩の話												雀孝行 鬼餅由来 美女に化けたアカマタ(煙草) アカマタ婿入(浜下り由来) アカマタ婿入 キジムナーと尻 天人女房(銘苅子) 鬼女房 五月五日由来 継子の嫁入 猿の赤尻 大歳の火(遺骨は黄金) 城間ナーカ 城間ナーカ(盗人) 姥捨山 クスケー由来 真玉橋の人柱 モイ親方(殿様の難題) モイ親方(難題) 渡嘉敷ベークー(味噌と花鉢) 渡嘉敷ベークー(後生の礼儀) 鳩料理 山原と団亀 大湾のビジュル石												夫振岩 産婆の始まり 誠な人に矢は立たない											
津波古	山城	松田	松田	山内	山城	松田	松田	津波古	津波古	大城	糸数	松田	山内	松田	宮城	松田	津波古	宮城	松田	松田	糸数	松田	宮城	糸数	大城	山城	宮城	松田							
只一	幸成	英徳	英徳	繁茂	幸成	源蔵	英徳	只一	只一	平順	カマド	英徳	繁茂	源蔵	官正	カマド	只一	官正	英徳	カマド	カマド	カマド	官正	カマド	カマド	平順	幸成	シズエ	英徳						
77	76	75	74	73	71	68	67	65	51	45	43	41	40	37	35	21	18	16	15	14	14	12	9	8	4	119	118	104							

												知花 めぐみ											
81	80	77	75	74	73	72	71	68	67	64	63	62	60	58	57	56							
貧乏人の話												赤犬子 今帰仁按司(タケーサーガマ) 吉屋チルー(身売り十御茶屋御殿) 大湾の名の由来 宮古地の始まり 親見原由来 焚字炉 芋の伝来(野国総管) 煙草の始まり 北谷王子 屋良の阿麻和利 蛇婿人(涙水御嶽) 犬婿人(大将の首) 死んだ娘(南風原按司の一人娘) ハブ除け呪文 お茶の子の始まり											
松田	松田	山城	山城	松田	松田	松田	松田	松田	松田	松田	松田	松田	松田	松田	松田	松田							
源蔵	源蔵	加那	加那	カマド	カマド	カマド	繁茂	英徳	源蔵	源蔵	繁茂	繁茂	繁茂	文太郎	源蔵	英徳							
122	120	116	114	112	109	106	105	101	100	97	96	94	93	89	87	84							



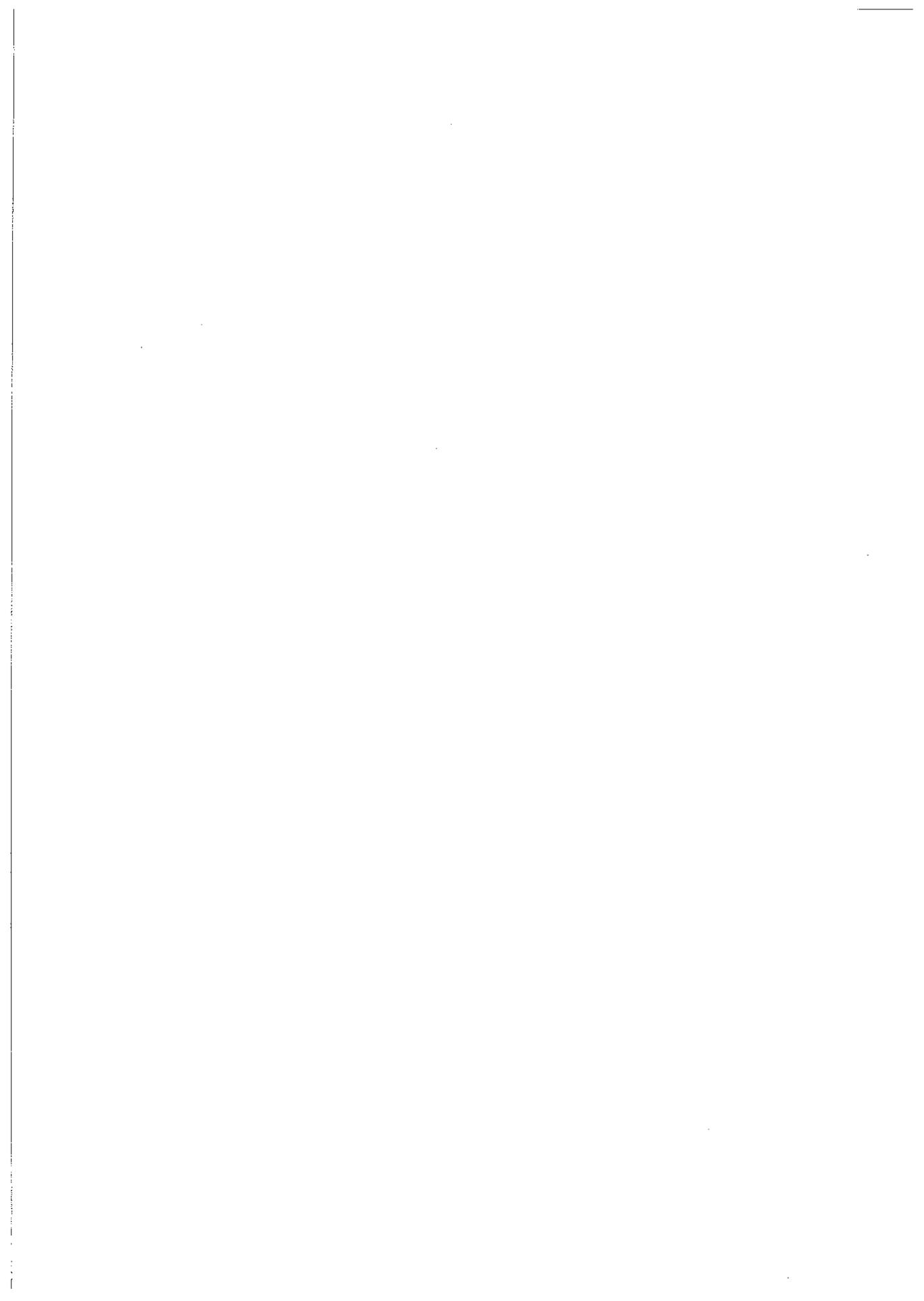


古堅の民話

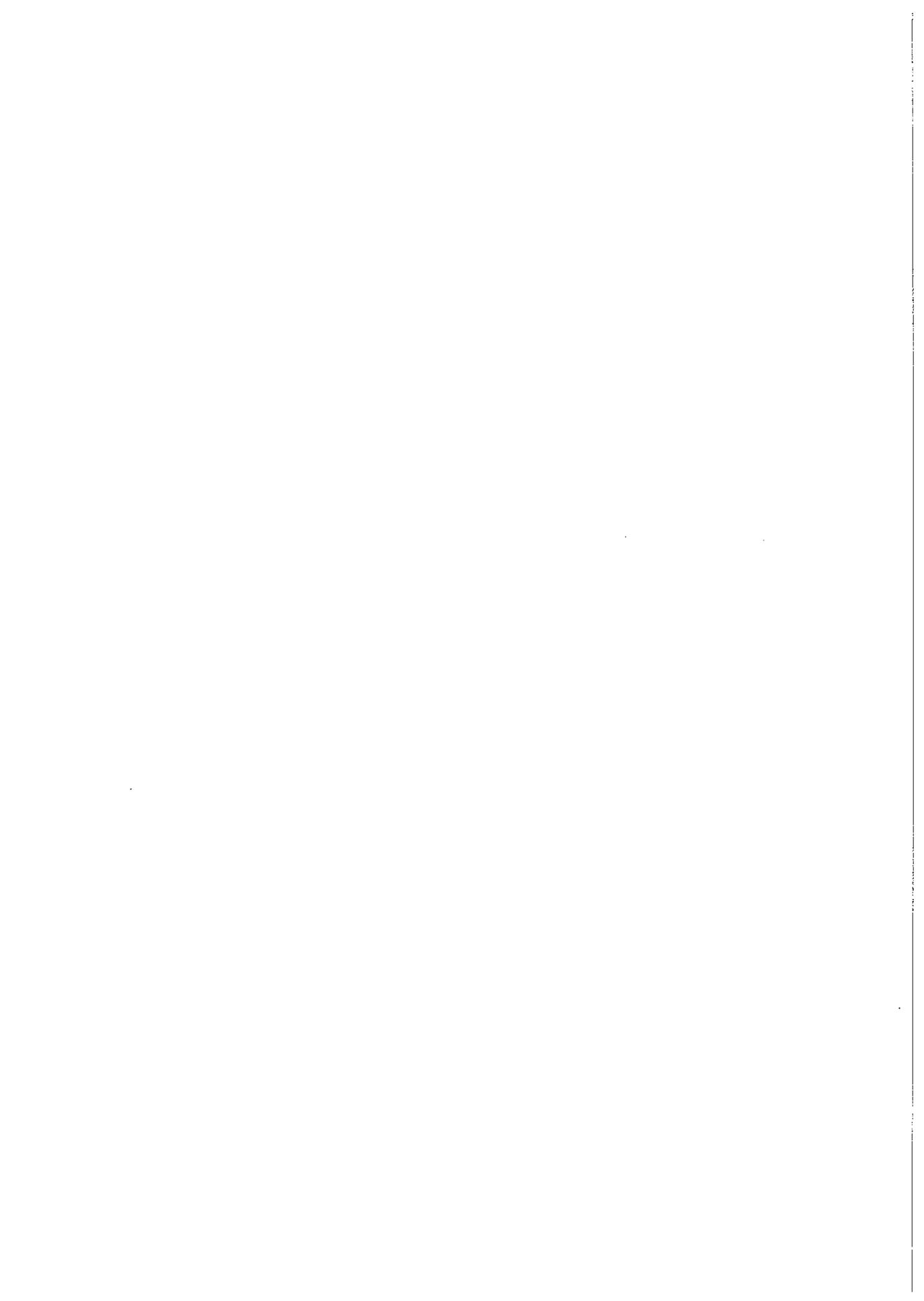
大湾西原



縮尺 1/3,000



第一編 翻字資料



1 雀孝行

話者 金城ウシ(明治三十四年二月二十日生)

翻字・対訳 国吉トミ

ウングサそーる鳥よ、その鳥は親が死にがーたーやぐとう来なさいりちやぐとう、直ぐフクター着けて来たわけさー、その鳥は。

クラーや倉ぬはし食てい、うれークラーや人の住んでる所に。またもう一人の鳥はね、川原に住んでる絹着物オール着けてる鳥がいるさー。それは必ず死んでもいいからりちねー、きれいな着物着けて行って親孝行あらんてーん。その時はもう死んでるからね。

そのクラーの鳥は親孝行だからりちよ、倉ぬ物食てい生ちきりち。いぎたーうまからむる歩ちゆせー。あれーまた、川原ばたから寂しく歩いておる。それ親孝行でなかつたり。

ウズラのような鳥ね、その鳥は親が危篤なので来なさいと言ったら、すぐにフクターを着けたまま来たわけさ、その鳥は。

クラーは倉のすみで食事をして、このクラーは人の住んで居る所でね。またもう一羽の鳥は、川原に住んでいる絹の着物を着けてる鳥がいるでしょう。あの鳥は死に目に会わなくてもいいからと言って、必ずきれいな着物を着けてから行ったので親孝行ではなかつたそうだよ。その時はもう死んでいたよ。

そのクラーは親孝行だから、倉の物を食べて生きなさいと。私達の近くから歩くでしょう。またもう一羽の鳥は、川原から寂しく歩いてるでしょう。あれは親孝行ではなかつたからね。

採集S 52・2・26 読谷村民話調査団第九班(前田逸子・上間京美)

注① フクター ぼろ着。

注② クラー雀。

2

雀孝行

話者 阿波根 ツル (明治三十六年三月三日生)

翻字・対訳 玉城和美

親が病ろーにクラーや支度はしないで来たがね、またチジュヤーは、きれいな着物をきて来る時には親は死んでいた。親不孝や。

倉下なーし歩ちゆい、またチジュヤーや親不孝者りち、海ばたからキイキイ泣いていた。

親が病気で伏せている時にクラーは着の身着のまま
で来たが、チジュヤーは、きれいな着物を着て来た時
には、親は死んでいた。それで親不孝者だと。
(親孝行な子は)倉の下を歩き、親不孝のチジュヤー
は、海のそばを歩きキイキイ泣いていたよ。

採集 S 52・2・26 読谷村民話調査団第十一班 大宜見光一

注 チジュヤー 浜千鳥。

3 雀孝行

話者 池原 幸子（大正二年六月二十八日生）

翻字・対訳 玉城 和美

うれー兄弟がやたらー。とにかくある昔、クラーや
じこー貧乏者ぬ子なていよー、またくぬチビファイ
や金持人ぬ子やてーるふーじー。

あんしさぐとうなクラーや、見らん親ぬ今大事な
いんどーりちさぐとう、直ぐフクター重びとーるまま、
顔ん洗ーんまーまー行ぢやーい親ぬミウテイー見ち、
くぬチジュヤーやなー美ら装いし立派んに装いんりさー
なかい、親ぬミウテイーや見じーさんなたぐとう。

今度おなーえーりん、祖母ぬが言みそーちやるむ
んやらー、「なーいやーや、親孝行せーぐとう金持ぬ
倉ぬ中んじ米突ちよーてい食みよー。また、くぬチジュ
ヤーや、いやーや浜んじチビファイしや泣ち暮らし
よー」りち言いちきらりやーなかい、あんなたんりち。
クラーや金持人ぬ米倉んじ米突ち食たんりぬ話やんり。

これは兄弟だったのか。昔、クラーはとても貧乏人
の子どもで、またチビファイは金持ちの子どもであつ
たらしい。

そこでクラーは、親が危篤で大変だと聞くとフクター
を重ねたまま、顔も洗わずに行つて親の死に目に間に
合つたが、チジュヤーは立派に装う為に、親の死に目
に間に合わなかつた。

今度は多分、祖母が言ったのか、「クラーお前は、
親孝行なので金持ちの倉の中で米を啄んで食べなさい。
そしてチジュヤーは、浜でお尻を振つて泣いて暮らし
なさい」と言いつけられて、そうなつたよ。クラーは
金持ちの米倉で米を啄んで食べたという話だつたよ。

注 ミーウテイー 臨終。死の呼称の一つ。別にミークータン・ミーウトウイ（目を閉じた）とも言う。

※ チビファイファイはチジュヤーのことをいつている。いつもお尻を振っているので話者はそう語ったかもしれない。

4 雀 孝 行

あれーカーラカンジュヤーが、親ぬミーウトウイ、うりする危篤んち呼だぐとう。カーラカンジュヤーや布たていてーし織てい着ちからる行ちゆるんち、美ら装いしから行ちゆんちやぐとう。

あんさーなかいまた、雀えあんしやくとうんり言ち。うぬうまから歩ちゆしよ、クラーぐわーや、あれー直ぐ行ぢやぐとう「いやーや倉なーし、食物お食り歩きよー」んち。

あんしさーなかい、あれー人ぬ家んかい入つち、食物お食まりーん、倉からん食まりーんりしが。カーラカンジューや美ら装いし、「いやー海なーし歩きよー」んち、川原ぬ側なーし歩ちやんでい。うつびる話聞

話者 阿波根 ウ シ（明治四十二年二月二日生）

翻字・対訳 玉 城 琳 子

あれはカーラカンジュヤーに、親が危篤なので臨終に間に合うように帰つて来なさいと呼んだそう。カーラカンジュヤーは織りかけの布は織つて着けて行くといつて、またきれいにして行こうとしたつて。

それからまた、雀にも早く帰つて来なさいといつて。その辺から歩いていけるクラーよー、あれはすぐに行つたので「お前は倉から、食物を食べて歩きなさい」と（親から遺言があつた）。

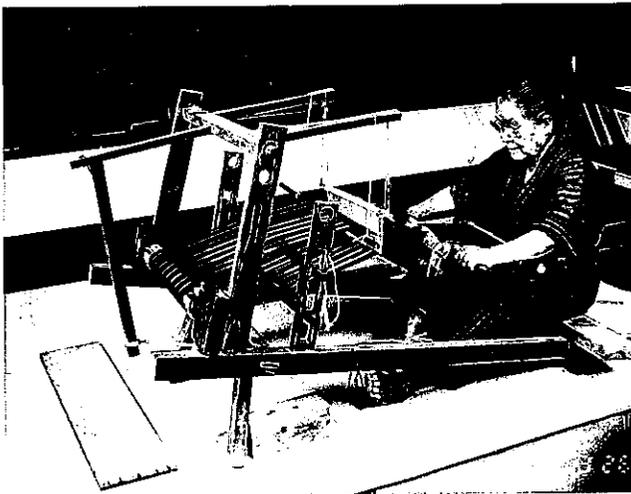
そういうことで、クラーは人の家に入って食物が食べられ、倉からも食べられるというが。カーラカンジューはきれいな格好して、「お前は海辺から歩きなさいよ」と言われ、川原の側から歩いたそうだよ。それだけ話

ちやる。

注 カーラカンジューヤー カーラカンジュー 川蟬。



雀



地 機

は聞いたよ。

採集S 52・5・22 読谷村民話調査団第十三班〈宮里光雄・伊波百合子〉

雨蛙不孝

話者 阿波根 ツル (明治三十六年三月三日生)

翻字・対訳 上原ヨシ

親ぬ頑丈さい間、むる親とう反対やたんりよ。「くれー
私が死にねーまた海ばたんかい送いるはじ」りちさ
ぐとう、反対にまた「亡ちからんちよーん、親ぬ事さ
んれーならん」りちてー、海んかい持つち行ぢゃんり
がらーやー親ぬ葬い方。

あんしました「私達あ親や流りらんがやー」りち。「海
ばたんかい持つち行き」んでい言ちやぐとう、ガーク
ガークし泣ちゆんりがらー、うぬ蛙が。

親が元気な時は、親とはいつても正反対の事をしてい
たらしいよ。(親は)「これは、私が死んだら(陸に葬っ
てくれと言つたら)海の方に葬るだろう」と思ってい
たが、反対に「死んだあとでも親の言う通りにしよう」
と思ひ、海の方に葬つてあげたらしい親の埋葬は。

そうして「私の親は流れはしないかね」と言ってい
た。(親は、反対の事をするだろうと思ひ)「海の方に
葬りなさい」と言つたら、(本当に海の方に葬り)ガ
ークガークと泣いていたらしいよ、この蛙が。

採集 S 52・2・26 読谷村民話調査団第十一班(大宜見光一)

注 雨蛙 方言でアマガク。雨の前によく鳴く。また雨の前に蛙に似た声で鳴くケラのことか。

6 カワセミ不孝

話者 阿波根 庸 秀 (明治三十三年十二月一日生)

翻字・対訳 玉城 和美

親孝行、またカンジューヤーや言いいるんせー捻くり
者ぬ話。

あんやしが今度お、くぬクラヤ親ぬ言いしえーゆー
聞ちゆい、うぬカンジューヤーりぬむの、親ぬ言い
しえーむるうどうきてーるふーじーやるばー。

いざなーうりが親ん年なてい亡しんしえーる場合ねー
でいさくとう。今度おくぬカンジューヤーぬ、親んりー
しえーとにかくなー当たい前くれーなうぬふーじー
ぬうりるやぐとう、うりさーにそーい。またクラヤ、
ちやーな親ぬかいさつとーぐとう、あれー倉んかい
入つち米食てい何ぬうりんあらんしが、カンジューヤー
ぬうりしーねーな、いわば米ん食さんりぬあたぬ
なーうりやてーるばー。

あんしがいざ亡する場合なかいやカンジューヤーぬ
親あ、「とー私ねーな死にるすぐとう、今度お私ねー川原
ばたんかい死にーるんさー送ていとうらしよー」りち

(クラヤは)親孝行、カンジューヤーは捻れ者であつ
たという話。

そうであるが今度は、クラヤは親の言い付けをよく
聞が、カンジューヤーは、親の言う事をはねのけて
いたらしい。

いざ親が年をとつて亡くなる場合にカンジューヤー
は、親がそうなるというのは当り前と言つていた。ま
たクラヤはいつも親にされているので、あれは倉に入つ
て米を食べてもなんでもないが、カンジューヤーは米
も食べさせないくらいの親不孝者であつたよ。

そうしていざ亡くなる場合に親が、「もう私は死ぬの
で、今度私が死んだら川原ばたに葬つてね」と言つた
ら、カンジューヤーは、今まで私は親の言うこととは

さぐとう、くぬカンジューヤーや、うんにーねーまた
今がやか私ねー親ぬ言いしえーむる反対し、何ん聞か
んてーるむん、なー亡しめんそーらんるないぐとう、
うりうつぴんちよーん親ぬ言いし守てい。あんしな
今度お親ぬな、常平生からうりるそーぐとう、あん
しうりしーるんせー今度お山んじ送いんなーびかーん
考てーるばーてー。あんしがなー川原ばたんじ私ねー
送りよーりちさぐとう。

今度おカンジューヤーや、そういううりうんにーねー
改心せーるばーてー。さーなかい親ぬ言ちえーる通い、
あんさーに川原ばたんじ穴掘ていさぐとう。

今度お言いるんせー、山んじうりせーせー立派ぬう
りやせー川原ぬ側んじるうりせーぐとう。「私達あ親あ、
今時分のーちやー濡りているうがやー、ぬーるそーが
やー」うんにーから後悔しさーにカンジューヤーや海
ばたんじ育ちぬうり。

クラアやまた何処ん所ん選ばんぐとう倉んかい入つ
ちん、クラアや昔、沖繩ぬ風俗なかいや、飛び鳥ぬ入
ねー言いるんせーは浜下りするうぬうりがあたるばー。
あんやしが、クラアぬ入つちえー浜下りんさんていん

みんな反対の事をして、何も聞かなかつたので、もう
亡くなつてしまうのでこれだけでも親の言う事を守ろ
うとしていた。それで親は(カンジューヤーが)、常日
頃からそうなので山に葬りなさいと考えていた。しか
し(反対の事をするだろうと思ひ)親は川原ばたに葬
りなさいと言つたようだ。

今度カンジューヤーは、そういうことがあつて改心
したそうだ。そうして親の言う通りに、川原ばたで穴
を掘つたよ。

今度はずまり、山で葬つていたら良かったのに川原
の側に葬つてしまったので「私の親は、今時分になる
と濡れているのかな」と、その時から後悔してカン
ジューヤーは海の側で育つたということだよ。

クラアが所かまわずに倉に入つても、クラアは昔、
沖繩の風俗には、野鳥が入つたら浜下りする習慣があつ
た。だけど、クラアが入つても浜下りはしなくてもよ
かつたという昔の話があつたよ。

しむんりる昔ぬうりがあたんり。

採集 S 52・2・26 読谷村民話調査団第五班 へ宮里洋子・小橋川清一

注 浜下り 沖縄では野鳥が家の中に入ったら、災いがあると言われてその厄を払い清めるために海浜で仮小屋を作って寝泊る習俗があった。



川蟬

話者 儀間 真 治 (明治三十九年五月三日生)

翻字 玉 城 和 美

昔むかしはね、みんな四よつつずつ付けてあつたそうだよ。名前なまえを付つける時ときにね、足あしなんか、手てなんか作つくる時ときに、この犬いぬはね三みつつしか与あたえていなかつたさ、前まえの足あし二ふたつと後あとの一ひとつと。

そうしたらその神様かみさまが来きてね。これはこうしては出来できないからあの一いち香かう呂ろ、分わかるでしよう、それならこれから一ひとつ取とつてやろうといつてね。その神様かみさまから頂いたいだ足あしだからこれには小しょう便べん出来できないといつて。そうして香かう呂ろは三みつつしか無なかつたつて。

採集 S 52・2・26 読谷村民話調査団第十班 へ山城悦子

8 蚤のみと虱しらみと油あぶら虫むしの由ゆ来らい

話者 儀間 真 治 (明治三十九年五月三日生)

翻字 玉 城 和 美

これはね昔むかしさ、蚤のみとね虱しらみと喧嘩けんかがあつたそうだよ。蚤のみは蹴けるのが得意とくいで虱しらみの胸むねを蹴けつたそうだよ。

そうしてこの虱しらみの胸むねには黒くろい傷跡きずあとが残のこつておるさあ。そうして、蚤のみもまた虱しらみに抱だきつかれてこーぐーごなされたつて。その中なかにねヒーラーヒーラーが分わかそうと思おもつてその中なかに入いつたけれども二人ふたりに踏くんぴらかされて平ひらくなつて、そして臭くさくなつたという。

注① こーぐー 腰の曲がった者。

注② ヒーラー 油虫。

9 烏孝行

話者 奥原松助(明治三十年八月二十四日生)

翻字・対訳 玉城 琳子

実はですねー、子どもが出来たら、ガラサーんりせー
自分ぬ子産しーねー、毛やむる抜ぎていはんりよー。
あんすぐとう、子ぬ大くないしんれー毛や無んなやー
に、今度お飛ぶぬ訳がならんぐとう、飛ぶしがや。あ
れー飛りいくぬむのーあらんせーや。

実は烏というのは、子どもを産んだら羽毛はみんな
抜けるんだって。それで、子どもが大きくなつていく
につれて毛は抜けて、今度は飛んで行こうとするが、
飛ぶことは出来ないでしょう。

あんすぐとう、うんにんからまた子ぬ毛い生いてい、
あまはいくまはい歩ち、親んかい食物啜ていっち食す
んりよ。あれー親ぬ孝お贈とーんりぬ話で。ガラサー
とうせー、あれー本当ぬ親ぬ孝ぬ子。ガラサーや親ぬ
恩返すんり。ガラサーやうぬふーじーぬ意味やさ。

それで、その頃からは子どもの毛も生えてきて、あつ
ちこつち歩いて、親に食物を食わしているつて。子ど
もが親の孝行をやっているという話である。烏として
は、それが本当の親孝行の子どもであると。烏は親の
恩を返すといつてね。これは烏のそのような話だよ。

10 鬼餅由來

話者 島袋利藏(明治二十六年三月二十日生)

翻字・対訳 島袋喜美子

あれーとにかくやー、ある島尻方面えーりりん南方や
てーるばーてーや。あんやしかなー昔、めーりりんぬ事
やぐとう、あぬらーなーウナイ、イキーぬ居とーしが
なー、ウナイや別んかい夫持つち他シマんかい行ぢよー
んてーや、うぬイキーぐわーや鬼なていよ人ぬ。初めー、
あぬらー墓からすんち出じやち人るあさてい食いたし
が、後おなー、うりん居らんてい、食らんないりか
らー自分ぬ女ぬ親までいん食ていよ。あんしすぐ鬼な
とーたんでいよ。

あんし、あぬ村ぬ人が「くれーかんかんやしがやー、
あぬらーうぬウナイ連おていっち解決しみるんねーな
らん」でいちウナイ連絡さーにやー、「あんあんにん」
りちさぐとう、なーウナイやうりやるばーよ。

あれはね、ある島尻方面たぶん南の方の話だったと
思うよ。昔、昔の事だけれども、ウナイとイキーが居
て、ウナイは結婚して他の村に行つていたらしい。そ
のイキーは鬼になつてね。初めは墓から死んだ人を引
きだしてあさつて食べていたが、そのうち誰も居なく
なり食べるものがなくなると自分の母親までも食べて
ね。それで鬼になつていたらしいよ。

そして村の人が「これはこうこうなので、ウナイを
連れて来て解決しないとイケない」とウナイに連絡し
て、「こういう事だから」とウナイに伝えたらびつくり
してね。

あんさーになし、うぬウナイんまた食いんでいちそー
しや、追あぎらつてい來に与那原ぬ浜ぬ所までい、
追あぎいらつてい、天馬ぬあたんでいししが、うまぬ
岩んかい隠くてい命え生ちちよ。あんさーにウナイや
考ていや、あんさーに家んじ、またムーチー支度てい
や、あんさーにうり持つち行ぢ」と、今日や私がムー
チー沢山支度ていちえーぐとう食まさや」といぢ、
自分ぬイキーぬ家んかい行ぢや。あんさーに、崖、チ
リ崖めーなちよ、「とー、うまんかい座れー私がムーチー
食ますぐとう」でいちムーチー食まち。あんさーに食
むるうりそーしすき見じやーに崖んかい押し落とうちや
ぐとううぬ鬼え、うまんじ死じナーナトーンでいるふー
じーやさ。

あんさーに、うりからしだいしだいにくまんかい寄
ていぢやーにやー、私達んでー小さいねー家ぬ軒下に
ウナムーチーでいちよ、ムーチー食れーるうぬカー
サ作やーに、うまんかい鬼ぬ食んが来ぐとう軒下かい
下ぎてい。うぬふーじーし今ちきてい伝説あるばーよ。
うぬふーじーやさあれー。

そうしたらもう、そのウナイまでも食べようとした
が、与那原の浜まで追われてきて、そこに天馬という
のがあつたらしいが、その洞窟に隠れて命は助かった。
そしてウナイは考えて、家でムーチーをこしらえてそ
れを持って行き「さあ、今日は私がムーチーを沢山こ
しらえてきてあるので食べさせてあげるからね」と言っ
て、自分のイキーの家に行つた。そして険しい崖を前
にして、「さあ、ここに座つて私がムーチーをあげるか
ら」と言つてムーチーを食べているそのすきを見て崖
から落としたらその鬼は、そこで死んでしまったとい
うことだよ。

そして、それからしだいにこの方にも伝わつて、
私達が小さい頃には家の軒にウナムーチーと云つて、
ムーチーを食べた後のカーサを（二枚を十字型にあぜ
て）ここに鬼が食べに来るといつて軒下に下げるとい
う。そのような伝説が今でもあるでしょう。そういう
事だよあれは。

注① 鬼餅 オニモチ。ウナームーチーとは鬼餅の意味。一般的には単にムーチーと称している。

注② 島尻 沖縄本島南部と周辺離島からなる。本島の部分は三山分立時代の南山の地域にほぼ相当する。

注③ ウナイ・イキー 日常民俗用語として用いられる。男女兄弟がいる中で、ウナイは姉妹をさし、イキーは兄弟をさす。ウナイがイキーを守護するというオナリ神信仰は有名である。

注④ シマ 村里・部落。

注⑤ 与那原 中城湾の南に面した南部の小さな港町。戦前は山原船の出入りで、賑わった町である。

注⑥ ムーチー 旧暦十二月七日古堅では、ムーチーと称する行事がある。巾約五センチ、長さ十二センチぐらいの餅を作り、月桃の葉に包んで大鍋に蒸して作る。魔除けとしては煮汁は庭にまき、餅を食べた後のサンニンの殻二枚をあせて十字型に軒先に吊るす。子供のいる家庭では子供の分もひもで吊るしたり、男の子には力餅を作ってあげたりする。

注⑦ ナーナトーン 死の別呼。直訳は全て終った。



大金城



ムーチー

翻字 島袋 フジエ

首里しゅりのね赤田あかたにあつた事ことらしいがね。女おんなと男おとこ、二人兄弟ふたりきょうだいが居いたつて。兄あには小さい時ときからちよつと変人へんじんで家うちから飛とび出してね、姿すがた隠かくして。その妹いもうとは非常ひじょうに兄あにの事ことを心配しんぱいしていたらしいよ。その時ときにある人ひとから、「お前まえの兄にいさんはもう鬼おにになつて人を食くうよ」と噂うわさがあつて、それで妹いもうとは非常ひじょうに心配しんぱいしてき。これは人ひとに害がいするんだつたら自分じぶんの手てで処分しよぶんしなければいかないと考かんがえたららしいです。

で、兄あにが一番いちばん好きすきなのが十二月じゅうにがつに作るムーチーで、これを持もつて行いつて、どうにかしなければいかんというふういもうとに妹いもうとが考かんがえて、ムーチーを沢山たくさん作つくつて兄あにの居いる洞穴ほらあなに行いき呼よび出して「今日きょうは、貴方あなたの好きすきなムーチーを持もつて来たきたので沢山たくさん食たべなさい」と言いつて。そして兄あには喜よろこんで食たべたららしいね。

その時ときに、妹いもうとは下したを開あけてそのままにしていたらしい。そうしたら兄あにがね、「お前まえは上うへも下したも口くちがあるが下の口したのくちは何なにか」と言いうたら「上うへはムーチーを食たべる口くち、下したは鬼おにを食たべる口くちだ」と言いうたら、その兄あには驚おどろいて、もう男女だんじょの区く別べつも知らなかつたららしい兄あには。で驚おどろいて、もうムーチーを万ばん事じ食たべる時ときに言いわれたもんだから、もう自分じぶんは鬼おにということを分わかつて一いっ生しょう懸命けんめいに逃にげる時ときにのどに餅もちを詰つままらせて、崖がけがあつたらしいが、その崖がけから転ころげ落おちて、それで首里赤田しゅりあかたのホーハイムーチーは出でたつて。

採集S52・2・26 読谷村民話調査団第五班(宮里洋子・小橋川清)一

注① 首里 那覇の東部に位置し、地域全域が高台になって、山紫水明で名所旧跡に富む。かつての王城の所在地で、首里親国といわれ
ていた。

注② 赤田 那覇市首里の町名、鳥堀と崎山には生まれへ首里三箇形成。

注③ ホーハイムーチー 一般的にはムーチーと称しているが、この伝説のように(陰部をさらける)したことから、ホーハイムーチーとも呼ばれることがある。古堅では旧暦十二月七日となっている。

12 アカマタ^{注④} 婿入^{注⑤}へカマンタ^{注⑥}十浜下^{注⑦}り

話者 奥原松助(明治三十年八月二十四日生)

翻字・対訳 玉城琳子

「ええ、隣の人(ひと)がですね、「いやーが男(いなか)あ、本(ほん)当(とう)に男(いなか)ん
り思(おも)とーみ」り言(い)ちやぐとう、「本(ほん)当(とう)の美(うつく)しやん」り。
そのアカマターが長(ちやう)男(なん)やいぎさん、くりが。」

「何がんでー、食(く)物(ぶつ)煮(に)ち食(か)みーねー、昔(むかし)え、カマンタ
んちあいびたせーや、鍋(なべ)蓋(ふた)。ありがあぬ、使(つか)てい後(あと)お
道(みち)んかい捨(し)ていーたんりよ。」

「あんさぐとう、上(い)ぬ人(ひと)ぬ「くれー、かんし道(みち)んかい
捨(し)ていーねー、後(あと)お人(ひと)お歩(あ)からんないさー」んち考(かん)考(考)てー
みせーるばーて。「くぬカマンタ、うまんかいうんぐとう
し捨(し)ていーねー大(だい)事(じ)どーいっただーや。うりが下(した)うとー」

「実は、隣の人(ひと)がですね、「お前は(お前は)その男(いなか)が、本(ほん)当(とう)に男(いなか)ん
と思(おも)っているのか」と聞(き)いたら、「本(ほん)当(とう)に美(うつく)男子(なんし)である」
と答(こた)えた。美(うつく)男子(なんし)はそのアカマターと、その人(ひと)との長(ちやう)
男(なん)であるそうだ。」

「どうしてかと言(い)うとね、昔(むかし)、食(く)事(じ)を作(つく)って食(く)べる時(とき)
には鍋(なべ)の蓋(ふた)にカマンタとありましたでしよう。それを
使(つか)った後(あと)に道(みち)に捨(し)てたんだって。」

「そうしたら、上(い)の人(ひと)が「これは、このように道(みち)に捨(し)
てたら、後(あと)は人(ひと)が歩(あ)けなくなるね」と考(かん)考(考)えていたそう
です。「このカマンタ、ここに捨(し)てたらもう大(だい)変(へん)だよ、
お前(まへ)達は。その下(した)でアカマターが孵(ふ)化(か)して人(ひと)を騙(だま)す

ていアカマターぬ孵化いねー、人騙すんどー」でい言ちやぐとう、「ああ、あんやいびんなー」りち。うんにーから、木んかいかんし下ぎいる事なてい、道ねー捨ていらんたんりよ。

あんさーにさぐとう、うりが隣の人が「いったーんかい来る男あ、本当に男んり思とーみ」りちやぐとう、「やいびん」「ちがとーんでー、あんぐとう美らかーぎややし、うれーアカマターんりしるやんどー。うぬカマンタぬ下とーてい孵化とーるアカマターどうやんどー」り言ちやぐとうよ、「はーあらん」でいち言ちやぐとう「とーあんせー、いやーが妊娠そーせー、私がアカマターぬ子んり思とーぐとう、いやー海んかい行ぢやーに海なかい辛さぬ草ぬあせー、うぬ草食みんり。いやー三月三日ねー海かい行ぢやーに砂踏り、なるべくうぬ草ぬあいるんさー、うり食みわるいやーボージャー産すんどー」り言ちやぐとう、本当の話がやーりやーに。

あんし三月三日え、海かい女お下りてい行ちゆんりーせーうぬ意味やんり。三月三日に海かい行ちゆせー、女お浜んじ砂踏らみりりせーうぬ意味になつてい。

よ」と言つたら、「そうですか」と。その時からカマンタは木に下げるようになって、道には捨てなくなつたんだつて。

それから、隣の人が「お前の所に来る男の人は、本当に男の人と思つていのか」と聞いたたら、「そうです」「そうではないですよ、あのように美男子ではあるけれど、あれはアカマターというものであるよ。そのカマンタの下で孵化したアカマターなんだよ」と言つたら「それは違う」と言つたので、(隣の人が)「それでは、お前が妊娠しているのは、私はアカマターの子どもだと思つているので、お前は海へ行つて海に辛い草があるの、それを食べなさい。三月三日には海へ行つて砂を踏み、なるべくその草があつたら、それを食べたら子どもが産まれるよ」と言つたら、本当なのかなーと思つた。

そういうことで三月三日には、女の人は海へ行くよになつたという。三月三日に海に行くのは、女は浜で砂を踏みなさいということはそのようである。

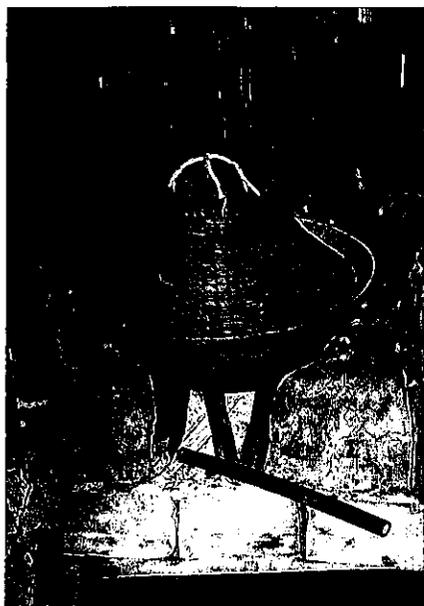
注① アカマター 琉球列島中央部の固有種で奄美大島、加計呂麻島、喜界島、徳之島、沖永良部、与論島、久米島、渡名喜島、沖繩本島とその属島(浜比嘉島、伊計島、宮城島)に広く分布している無毒蛇で体長一三〇cm内外である。人家周辺から耕作地及び山地にかけて、広い範囲に生息している普通種で、主として夜間活動する。

注② カマンタ 農家でさつま芋等を煮るシンメーナービ(四枚鍋)等の鍋蓋、茅やわらを竹ひごで編んで作る。

注③ 浜下り(ハマウリ) 海浜に下りて災厄を払い清める習俗。旧暦三月三日にごちそうを持って浜辺に行き、潮に手足を浸して不浄を清め、健康を祈願して楽しく遊ぶ行事。三月三日(サンクワチサンニチー)ともいう。

※ 「そのアカマターが長男やいざさん、くりが、」ここでは語り違いと思われる(美男子)はそのアカマターとその人との長男である。

※ 「三月三日」は浜下りともいう。



カマンタ

翻字 玉城和美

きれいな娘が畑に行っている時にこつちにきれいな赤い鉢巻した男がね現れて、いつもこの女の所に来てお話ししていたそうですよ。

そしてからにねー、この娘は、もうこの男に惚れこんで毎日畑に通って行つてからに、ある夜自分の家に連れて行つて、きれいな男に化けているから。いつも夜中なつて、話声がしていると云つて。親がね、「何でかね、娘は一人だのにも話声がするかねー」と不思議に思つて。そして節穴からすつと見てみると、これは蛇が赤い鉢巻に見えたわけよ、このきれいな男に女がは。

そして、「ねえ、ちよつと来てごらん」と云つて「これひと考えしないといかんねー」といつて親が心配して、この女呼び出して「あんたはね、あつちにいるのは誰だと思つているの」と言つたら「何でいつも畑に行つて知つているあの男ですよ」と自分の親に言つてからに。「あ、そうですか。あんたがはきれいな男に見えるんだね、あんたは騙されているよ。これとは別れて来させない方法があるから、あんたも注意しなさいよ」と云つて。

したらその証拠に親がこの針に糸を通して。昔は芭蕉の糸、これで夜なべしてよ親は。そして夜なべするふりして、「あんたはこの男の鉢巻している鬘にね、そつと知らんふりしてこの針さしこんでおきなさいね」と親が教えて。そしてからに女はこの男帰してね。また後からついてくる芭蕉の糸、ザルの一杯入れてすつとこれが行くでしよう。これからすつと出してからにね、つないで後から糸たよつて行つたからね、畑の石の積まれている所に入つて行きよつたつてよ。

そしてこの女はもう「本当だね、お母さんが言うのは本当だね」と云つて感心してね。それから「三月、どうし

たらいいかね、これもう身をもっているらしいけど、このアカマターの子ども産むのかねー」と親が心配してね。ある三月三日なつたから、親がこの女の子連れてね、「女はあの浜の砂踏んだら嘉例だから、遊んできよーねー」つて。そうして浜の砂踏ましてからに、この娘はアカマターの子ども沢山産んであつたそうですよ。三月三日は女の節句といつてそれから海は嘉例といつて浜下りその時からきているそうですよ。

採集 S 52・2・26 読谷村民話調査団第十一班（大宜見光一）

注 芭蕉 繊維を取るリュウキウバシヨウ。芭蕉布の原料となる。方言名ウー。

14 字 を 書 く ア カ マ タ ー

話者 阿波根 ウ シ（明治四十二年二月二日生）

翻字・対訳 玉城 和美

小便しーねー、山んじん何処んじん小便すせーやー。
今る便所んかいさーんあれーならんある。くんなげー
や道ぬすばーにん何処にん小便すたせーやー。

山んじ小便しーが行ちーにん必じ、うまんじやトウ
ンペーとうとうし三回のーしつから小便やうりし。あ
んにんねーあれーうぬ小便する所んかいや、アカマ
ターが来なかい。必じ騙さらんていん、小便せーぬ所

小便する時には、山であろうと何処であろうと小便
するでしょう。今は便所にしないといけないけれども。
昔は道の側でも何処でも小便したでしょう。

山で小便しに行く時にも必ず、そこで唾を三回して
からするよ。そうでないと小便した所にアカマターが
くるんだつて。必ずしもそういうことがなくても、小
便した所にアカマターが字を書くと、その子どもを産

んかい字い書ちやーなかいしーねー、アカマター子産
すぐとう、若させー女んりしえーやー、小便しーねー
必じトウンペー三回なーやしーよー。

15 アカマタ 婿入へ蛙報恩

カマンタぬ下うてい育ちうりそーるアカマターや、
人騙すんり。そういう話があたる。

あぐとう、今度お山んかい登てい行ぢ岩ぬ下うてい
うりし、これが千年、万年生ちちうりしさぐとう、う
りが今度お人に化きやーにあんし言わば女騙ちあんし
うりしみーたんり。あんさぐとう、とにかくなー騙さつ
ているうぐとう、アカマターぬうりん妊娠受きてーる
ばーてー。あんしされー今度お、くりうりさせー南風
原外間やるばーてー。

これー三月三日ぬうぬうりやしが、南風原外間ぬ言

むので、若い女の人は、小便をする時には必ず唾を三
回はしなさいねと。

採集S 52・2・26 読谷村民話調査団第九班 前田逸子・上間京美

話者 阿波根 庸 秀 (明治三十三年十二月一日生)

翻字・対訳 玉城 和美

カマンタの下で育ったアカマターは、人を騙すとい
う話があつたよ。

それがあつて、今度は山に登り岩の下で、千年も万
年も生きて、それが今度は人に化けて女を騙したそう
だよ。そしたら、そこでアカマターに騙されて妊娠し
たらしい。そうしたら今度は、それを痛めつけたのが
南風原外間という人だつたよ。

これは三月三日の事だけれど、南風原外間というと

わばくぬ人おな―非常に慈善家んかいりやししが、昔え、北谷ぬんかい大村り言いたんよ。うまぬ田ブクうぬ通ていうりする場合に、今度おアカマターぬ、言いるんせ―アタビーて、うりかんし目がきていそる場合に、くぬ南風原外間ぬちようどうかんし田ぬ畦道かんし通ていめんせ―る場合にな―今度おうりしさにアカマターや追ひ払ていあんしさぐと、くぬアタビチャーや助か―たん。

あんしさぐと、くり南風原外間ぬ許さらんというそいううりがあたしがて―、アカマターぬ化きているやぐと。―私が今、食いんりちうりそ―るアタビチ助きてい、私ね―や―さしみたるうぬ恨め―晴らちとうらさんむ―ならん」りぬうりさ―に南風原外間ぬ女子騙ちよ―るば―。あんししさぐと今度おまた、アタビチャーや助きらつと―と助きらつたる恩義え是非贈りわるやる」りぬうぬうり。

今度お、アカマターやまた南風原外間ぬまたくりん化きていうりし行ぢや―に、くぬ腹ぬ内なかいりりせ―くれ―、三月三日ないるんさ―浜んかい連おてい行ぢ、直ぐあぬ黒砂踏んぴらし。あんし―るんせ―自

ても慈善家で、昔は、今の北谷に大村といつていた。その大村の田んぼの畦道を南風原外間が通っている時に、蛙がアカマターにじつと睨まれて食われようとしている所を、南風原外間が追ひ払つたので、この蛙は助かつたよ。

そしたら、その南風原外間が許せないという事になつてね、アカマターが化けてのことだから。「私が今、食べようとしている蛙を助けて、私をひもじくさせた、この恨みは晴らさないといけない」と南風原外間の娘を騙してね。そして今度はまた、蛙は助けられたので「助けられた恩は是非返さないといけない」と思った。

今度、アカマターは化けて南風原外間の（娘を騙して）身ごもらせたので、三月三日になったら浜に連れ行つて、すぐ黒砂を踏ませた。そうすると自然に下りたそうだよ。

然にまいほーてい下るすぐとうりるうりやたんりる。

あんぐとう、うりからくぬ三月三日や言いるんせー
首里、那覇ぬ踏んしち子産すんりうりさーに。昔ぬ士
族ぬ女ん子、ちようど言いるんせーなー外んかい出じや
さん、ちゃー家あうとーていウーミーとういんり習ちゃ
い、また言わば何が昔なーくぬ学問りるうれーいるん
なむんうりしみたいし外に絶対出じやさんたんり。

あんやし、三月三日ないねーそういう昔からのう
りがあぐとう、今度お浜んかい連おてい行ぢ黒砂踏ま
しんりるそういううりから三月三日や始またんりさ。

そうして、それからは三月三日になると首里、那覇
では砂を踏ませて子どもを産ますそうだよ。昔の士族
の娘は、外出もさせずいつも家の方でウミー（殿様）
をとるために、いろんな学問も教えたりして外には絶
対出さなかつたようだ。

そうであるが、三月三日になったらそういう昔から
の事があるので、今度は浜に連れて行って黒砂を踏ま
せるということで三月三日は始まつたらしいよ。

採集 S 52・2・26 読谷村民話調査団第五班（宮里洋子・小橋川清一）

注① 南風原外間 全島でも屈指の豪農といわれる。勝連町南風原の外間家で大富豪。

注② 北谷町大村 北谷町の字、一九五六年（昭和三十一年）字玉代勢と字伝道が合併。戦前はこれに字北谷を加え北谷三箇と称した。

注③ 北谷ぬ田ブク 北谷町北谷にあった広大な良田地帯の名称。戦後米軍基地として敷きならし跡形もない。

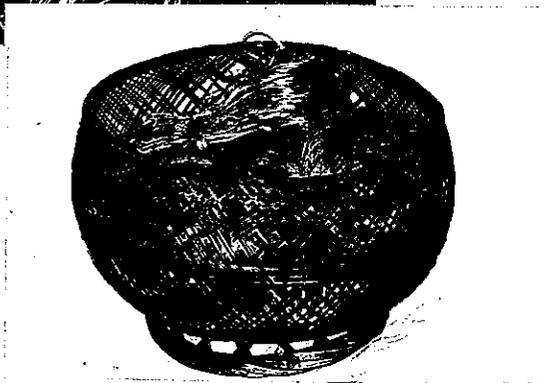
注④ 那覇 琉球王府時代の王都、首里の港町として発達、廃藩置県を機に、政治の中心が首里から移り県都となった。



南風原外間



芭蕉の木



ウーとウーバラー

16 キジムナーへ魚取り十尻へ

話者 阿波根 ウ シ (明治四十二年二月二日生)

翻字・対訳 玉城 和美

キジムナーとう友達ないねーて、魚捕いが行ぢやー
なかい金持すりよ。あまん尻ひーにる置つちやんぎー
んりーせーやー。あんしやぐとう、キジムナーやてー。
うりとう友達しーねー、うりせーわやーり思いねー
よ、タコやちやーガンガラガンラしーねーよキジム
ナー来んないんり。キジムナーやタコーいっぺー怖る
さすんでい。

あんすぐとう、キジムナーとう友達しーねー金持す
んでい。キジムナーとう友達しーねー、じこー魚捕い
んでいよ。ちやつさな魚捕ていちーねー、必じ片目
な一抜がつとーんでい。うぬ目い抜がつとーる魚お、
必じキジムナー一繕んし捕つてーしやんり。

あんさーなかい金持しよ。せーわからーなーにりてい
てー。しーねー「尻いひつちやいしーねー海ぬ中んじ
置つちやんぎーぐとう、尻いひんなよー」りちかきー
んりよ。

キジムナーと友達になつてね、魚を捕りに行くとき
持ちになるよ。向こうで尻をすると置いてけぼりにす
るらしいよ。そうだからね、キジムナーは。

それでキジムナーと友達になつてね、そして魚捕り
に行くのが嫌になつたら、タコをいつもガンガラガ
ンガラしたらキジムナーは来なくなるらしいよ。キジム
ナーはタコをとて怖がるつて。

それから、キジムナーと友達になると金持ちになる
んだつて。キジムナーと友達になつたら、たくさんの
魚が捕れるつてよ。沢山魚を捕るらしいが、必ず片目
が抜かれていたそうだよ。その片目が抜かれた魚は、
キジムナーと一緒に取つたものであつたつて。

そして金持ちになつて。金持ちになるともう飽きて
しまつてね。そして「海で尻をすると置いていかれる
ので、尻はするなよ」と約束していたよ。

あんしすぐとう、うんにのーあまんじうりとう切り
れーやー思いねーよー、タクやちゃーゴンゴロゴンゴ
ロしーねーよキジムナーや逃んぎーんり。タコーいっ
ぺー怖るさすんでい。

ありとーなー魚捕いがー行からんばー。魚捕いがー
行ぢやんでーがんなーでいきらんばーてー。あんし今
度おありがる捕つていとちうらちよーせーやーキジムナー
がる。ありが捕いせー必じ片目なー抜きーんりよ、魚お。

注 キジムナー 木の精。古木に宿ると言われ、人間と友達になつて魚取りを手伝つてあげる。タコや屁が嫌いだとされる。

17 天人女房 〈銘苺子〉

話者 池原幸子 (大正二年六月二十八日生)

翻字・対訳 島袋 フジエ

きれいな美女が降りて来てね。

そして着物を全部、裸になつて松の枝に下げてから髪を洗つてそこで浴びていたそうですよ。浴びている時に漁

だから、その時にこのキジムナーと縁を切りたいと
思つたら、タコをいつもゴンゴロゴンゴロしたらキジ
ムナーは逃げたそうさ。タコをとて怖がるそうだよ。

(そのようにしたので) キジムナーともう魚取りに
は行けないわけだよ。一人で魚を捕りに行つても何も
捕れなかつたよ。今まではキジムナーが魚を捕つてく
れていたでしょう。あれが捕るのは必ず片目は抜かれ
ていたそうだよ、魚は。

採集 S52・2・26 読谷村民話調査団第九班 〈前田逸子・上間京美〉

師が見て、「こんなにきれいな着物があるかね、世の中にこんなきれいな着物つて何処にあるかね」と珍らしく見ていたそうですよ。それがこの着物を取つてからそこを見たらもう美女が居るでしょう。欲が出たのか知れないけどこれを家を持って帰つて隠してからに、これ天女には帰れなくなつて、でその男と一緒に住んでいたそうですよ。それで子どもが出来て、この子どもが大きくなつてから、「お母さんの着物見たことないかね」と言つたら、「お父さんがきれいにトランクみたいなものに隠してあるから、私が出してくる」と言つてその子どもが出したから、「お母さんはもうこれで天に帰らなければいけないから、あんた方はお父さんの言う事をよく聞いて立派に成長しなさい」と言つて。着物をつけたら天に舞い上がつて。

採集S52・2・26 読谷村民話調査団第十一班〈大宜見光一〉

注 天人女房 羽衣伝説でも知られている。

18 天人女房 〈銘子〉

話者 波平

秀 (大正四年八月三十日生)

翻字 玉城和美

子守ね、一番上の姉さんが下の男の子、子どもをおんぶして子守する歌に、

泣くなよー泣くなよー アンマー飛衣装やー

天井ぬ裏なかい 隠ちえーんどー隠ちえーんどー

と言つて。

子守しながらある日、男の親が天井にすつと見に行つて、また降りて来るのを見て不思議に思つてね子どもが。「何かあるのかな、何置いてあるのかな。お父さんはいつもこちから降りたり来たりしているが」と言つて。不思議に思つて、お父さんが居ない時にすつと行つてみたそうです。いつもアンマーが言っている話「アンマーの着物分らないね、飛衣装分らないね」といつて聞いているがこれの事だな」と言つてね子どもが。

そして知らんふりしてある日、子守歌にこんなして

アンマー飛衣装や 天井の屋根裏に

隠してあるから 泣かないで泣かないで

と言つて。

そしてこの歌をお母さんが聞いて「あは、あはこちにあるんだな」とつてこれ着けて天に昇つてね。この兄弟二人は、お母さんが「諦めなさいね、あんた方もお父さんと一緒に幸福に暮らさないね。お母さんは天の人だから上がって行きますからこれでさようならね、さようなら」と言つて、天に上がっていったそうですよ。

採集S52・2・26 読谷村民話調査団第十一班「大宜見光一」

注 アンマー お母さんのこと。平民についていう。

翻字・対訳 玉城 琳 子

あれ、悪者なかい、三人なかい助きらつてい、うぬ
 恩納松金おんなましがにでいる人お助たすきらつてい、鬼おになかい騙だまさつ
 とし助たすきらつたせーやー。あんさーんかい、うぬ由
 来記れいぢえうりるやんどー。あれー菖蒲そうぶぬ葉ふちなかい受うきてい、
 お待まちちさびらりんねー五月五日ごがつごにちぬ由来記ゆれいぢやんよーや。

そー人ひと美ちよちよらかーぎやせーや、あんしやぐとるうれー
 うりするはじどー。えー恩納松金おんなましがにりみせーぬ人ひとお、合あ
 点ていのーさん。「いやーうまから見みちんれー」り見みちやぐ
 とう、あんしうりさーいうぬ女いんな殺ころさつたせーや。あん
 さぐとう、なー坊主ぼうちぬ助たすきいんちすしがな、坊主ぼうちぬ
 人ひと助たすきららん、何なんんすせーやー。あんしそーし、うぬ
 女いんなぬ達たちがてー、なーちやーしん助たすきららんよーそーぬ
 場ば合あいに、チチ鐘かねぬ中なかかい入いつていん、ちやーししん、
 すぐなー坊主ぼうちぬ願ねがていんなーさんしが。うぬ菖蒲そうぶぬ下した
 んかい、うぬ幽霊ゆうりぬ達たちが三人出みでていつちて、あんし
 菖蒲そうぶぬ葉ふちさーに、うんぐとううんぐとうしーねー、う

あれは、恩納松金が悪者に騙されている所を、三人
 の女の人に助けられたでしょう。そういうことで、そ
 の由来記はその話であるよ。あまがしを菖蒲の葉に受
 けて、お待ちしていますという五月五日の由来記であ
 るよ。

(化けた鬼は) 本当の人のようにとても美しかった
 ので、よけいに思いが募ったかもしれないよ。でも恩
 納松金は納得しなかったよ。「お前は、ここから見ても
 なさい」と見てみたらその女は殺されていてね。それ
 で、もう坊主がも助けようとするが、恩納松金を助け
 ることがなかった。どんなに坊主が鐘の中に入れても、
 どんなに願っても助けることが出来ないでいた。その
 時に、前に殺された三人の女達の霊が現れて、菖蒲の
 葉で仰ぐと、その時酔って死んでしまったよ、鬼は。

れーな酔やーなかないなー死ぬるばーて、鬼え。

あんさぐとう、うぬ坊主が「いやーやうぬ女ぬ達や
助きらつとーぐとう、いやーうぬ女ぬ達あ恩義忘てー
ならんや。五月五日ねー、必じあまがし作てい、菖蒲
ぬ葉受きていや、祀りしーよやー」んち、うぬ坊主人
かい、言いちきらつたぐとう。

あんさーい、うぬ五月五日ぬあまがしぬ由来記え、
鬼ぬ、うりんかい助きらつたる由来記やる。大湾うてい
すたんよ。あんすぐとう、五月五日ないねーや、男あ
サージ被てい、うま村々むるすせー。

そのおかげで、恩納松金は助かった。そういうこと
で、坊主が「お前は女達に助けられたので、三人の女
の恩を忘れてはいけない。五月五日になると、必ずあ
まがしを作つて、菖蒲の葉に受けて祀りなさい」と言
いつけたそうです。

それで、五月五日のあまがしの由来記は、三人の女
の霊に助けられたという話である。大湾ではしていた
よ。それで五月五日になると、男がタオルを被り、村々
では芝居をやっていたそうだよ。

採集S 52・5・22 読谷村民話調査団第十三班（宮里光雄・伊波百合子）

注① 五月五日 旧暦五月五日に行われる行事で菖蒲の節句である。あまがしを作り菖蒲で箸を作つて仏壇に供えた。

注② 大湾 読谷村の南端に位置し、嘉手納町と比謝川を隔てて接している。

※ ここで恩納松金は中城若松の語り違いか？

中城若松、組踊「執心鐘入」の主人公。現在、北中城村安谷屋の小高い丘に若松の墓と称するものがある。伝承上の人物とされるが、地元では父金丸（のちの尚円王）と安谷屋ノロとの間に生まれた子ともいわれている。

20 夫婦の赤い糸

話者 阿波根 ウシ (明治四十二年二月二日生)

翻字・対訳 宮城 昭美

うれーうぬ人おうりやしが、お爺さんが山ぬ底うとー
てい、赤とう白とうぬ綱縋おいるばーてー。

うぬ侍が、「この綱は何するねー」つて言つたら「こ
の綱、女とう男とうぬ縁組ぬ綱やんどー」りちやぐとう、

「あんせー私あ妻ないせー誰やがやー」りちやぐとう、
「いやー妻ないせーあまんじ薪掃ちゆしやさ」りち。

「いやー妻ないせーあまんじ薪掃ちゆしやさ」りち。
神様やんてーうぬお爺さんの。このお爺さんが、あん
言ちされー「うんとーるカンター赤ぶさーやな童あ、
私あ妻ないんなー」りやーなかいナイフぐわーさーな
かい殺ちやぐとう、うれー死に血ぬありそーしぶち
くんなたぐとう、うぬお爺さんが助きやーい美らーな
とーるばーてー。うまんかい傷入りーるばーてー。

あんさーに帰りにうぬうれー家かい帰てい行ちやが
ちーな、うぬ侍やありするばーてー。女んかい化き
ていハブぬ、あんさーにうぬハブんかい騙さーるばー
てー。あんさーなかい家んかい帰てい行ちーるんせー

それは、その人というのは、お爺さんが山の底で、
赤と白とで綱を縋つていたんだつて。

ある侍が、「この綱は何するものか」と聞いたたら「こ
の綱はね女と男との縁組の綱なんだよ」と言つたら、
「それなら私の妻になる人は誰ですかね」と言うと、

「あなたの妻になる人は、ほらあそこで薪をかき集め
ている人だよ」と。そのお爺さんというのは神様だつ
たのでしようね。このお爺さんがそう言うので「こん
なカンター髪赤毛の汚らしい子どもが、私の妻にな
るねー」と言つてナイフで傷つけて、その子どもは死
にそうになり血だらけで気絶したので、そのお爺さん
が助けてあげて大きくなり美人になつていたそうだよ。

そしてその侍は、家に帰る時に女に化けたハブに騙
されるわけだよ。そうして家に帰つて行つたら、毎日、
もうそのハブに惑わされてやせてしまったのでウナイ
が出ていつて、節穴から見るとハブだったが、普通に

な—うりしな—毎日^{めいじち}うぬハブなかいうりさつてい、よ—
がりていそ—に、自分^{じぶん}ぬウナイ^{注⑥}が出^でじてい来^{ちや}い節^{ふし}穴^{しほ}み—
み—ぐわ—から見^みじ—ね—ハブやしが、普通^{ふつう}見^みじ—ね—
うりないんり。

あんさぐとう、「な—」大事^{いちでいじ}なと—んりや—なかい
うりが呼^ゆば—なかい「いや—や、うれ—本^{ほん}当^{とう}ぬうれ—
あらんど—、人間^{にんじ}の—あらんど—、あれ—ハブどうや
んど—」でいちやぐとううぬ男^{いさか}あ魂^{たま}拔^はぎや—なかい、
「と—見^みちんれ—」でいち見^みちやぐとうな—、ありな
と—るば—て—、ハブなたぐとう。「な—大事^{いちでいじ}なと—つ
さ—」り。アカマター^{注⑥}あらんハブやたんで—。トグチ
ヌハブグワー^{なま}りち今^{いま}居^うせ—。

あんさぐとううぬハブの—、うんぐとう—し化^ばきた
ぐとうウナイがて—、「いや—やうぬうりんかい行^いぢや—
なかいや煙^{たばく}草^{くさ}吹^ふちや—なかい煙^{たばく}草^{くさ}しくぬ煙^{さばし}えうりんか
い吹^ふちくわ—しよ—」りちやぐとう。吹^ふちくわ—ちやぐ
とう、うり酔^いいや—なかい、な—直^しぐ行^いぢてい来^ちね—
またウナイが塩^ま水^{すみ}たりや—な、塩^ま水^{すみ}さ—なかんしかん
しいし追^い払^はてい。あんさ—なかいうぬハボ—追^い払^は
ていさくとう、うれ—また家^やかい帰^けてい来^ちつから—な—、

見ると女の人だったそうだ。

そしたら、「これは大変だね」と言^いつてその侍^侍を呼^よん
で「あんたは、これは本^{ほん}当^{とう}の人間^{人間}ではないよ、あれは
ハブなんだよ」と言^いつたらその男^男はたいそうびつくり
して、「ほら、見てごらん」と言^いわれ見^みると、ハブになっ
ていたそうだよ。「もう大変^{大変}なことになっている」と。
アカマターではなくてハブだったつて。トグチのハブ
グワー^{グワー}といつて今^{いま}もいるよ。

だからそのハブが、こんなふう^{ふう}に化^けけていたのでウ
ナイが、「あんたは、そこに行^いつて煙^{たばく}草^{くさ}の煙^{たばく}を(女性^{女性}に
化^けけたハブに)吹^ふきつけなさい」と言^いつた。煙^{たばく}を吹^ふ
つけたら、そのハブは酔^いつぱらつて、すぐに出^でて来^きて
ウナイが塩^ま水^{すみ}を準備^{準備}し、それを撒^まいてそのハブを追^い
払^はつたそうだ。そのようにしてそのハブを追^い払^はつた
ので、その侍^侍は家^家に帰^けつてからは、誰^誰が言^いう事^事も聞^き
わけだよ。

うんにーからーなー誰たが言いいしん聞きちゆるばーてー。

あんとう、うぬ女いなーまた妻としみーんちさくとう、
うぬ妻とさーなかい、花はぐわー水みかきーがーちーなー「あ
んし、いやー前め額ひえーぬ傷きえ誰たがさが」りちやぐとう
「山やかい薪た取んいがりち行んぢやーなかいあんしさつたん
どー」りちやぐとう。「えー、あんどうやんなー」りやー
なかい、「あんしえー私わがせーる傷きやさやー許ゆるちとうら
しよー」りち。うんにーからうりし仲な良かく暮くらちよー。
うんぐとうーする芝し居ばぬあたんよー渡と具ぐ知ちなかい。

そうしたら、また美女になったその女を妻にさせよ
うとしたわけで、その人を妻にして、花に水をかけて
いる時に「どうして、貴方の額の傷は誰に付けられた
のか」と言ったら「山に薪を取りに行った時に傷付け
られたんだよ」と言った。「あ、そうだったのか」と言っ
て「それは私が傷つけたもんだね、許して下さいね」
と。それから仲良く暮らしたという事だよ。そうい
う芝居が渡具知であつたよ。

採集S52・2・26 読谷村民話調査団第九班（前田逸子・上間京美）

注① カンター 髪の毛がバサバサしていること。

注② ウナイ 尻頁参照

注③ アカマター 尻頁参照

注④ 渡具知 読谷村の比謝河口にある字。戦前は名称地渡具知泊城を有する半農半魚の部落であつた。

21 子育て幽霊へウチカビ由來

話者 池原幸子(大正二年六月二十八日生)

翻字・対訳 玉城和美

結婚やさーんよく、ちよーどう遊ばがちー妊娠てい
さぐとう。えーりんなーけー亡しがさるむんやらーけ
亡ちやぐとう、墓ぬ中んじ埋みたぐとう、墓ぬ中うとー
てい産まりてい。

あんしさぐとう、なーうぬ童や、なー生ちちうぬ女
ぬ親ぬ毎日店ぐわーんかいなー何んりから菓子ぐわー
る買いが来るむんやらー買てい来しが、取いるかじぐ
とううぬウチカビやいびんよー。ウチカビ打つちゆせー
やー紙あんじゆせーやー。翌日ないねーうりなてーしー
しーいよー。

後ぬぬずみねー、うさん思やーなかうぬ人ぬ追てい
行ぢ見ちやぐとう、墓ぬ中んかい入つちはいぎーたん
りよ。「あはー、くれー本当ぬ人おあらんさやー」りち。
あんさぐとうな童が、「ンガンガー」泣ちやぐとう
やー、うぬ人ぬ「あんしうまんかい赤ちゃんぬ入つちよー
ぐとう出じやちとうらし」りち、皆し出じやちやんり

(ある人が)結婚はしていないのに妊娠したようだ。
その人は、多分亡くなったと思われたのか墓に埋葬さ
れて、その墓の中で子どもが産まれた。

そうしたら、その子どもは、もう生きていたらしく
母親が毎日お店に何かお菓子を買いに来るが、(お金
を貰うたびにウチカビだった。ウチカビね、紙を火に
あぶるでしょう。翌日見てみると本当のお金ではなく
てウチカビになっていたよ。

後は、不思議に思いその人を追って行って見てみる
と、墓の中に入って行つたよ。「あ、これは本当の人で
はないな」と。そうするともう子どもが、「ンガン
ガー」と泣いていたので、その人が「そこに赤ちゃん
が入っているので出してくれないか」と言つて、皆で
出したという話を聞いたよ。それでウチカビは打つそ

ある話や聞はなしちやんよー。あんしうぬウチカビエー打うつち
ありすんり。

うだよ。

採集 S 52・2・26 読谷村民話調査団第十一班 大官見光 一

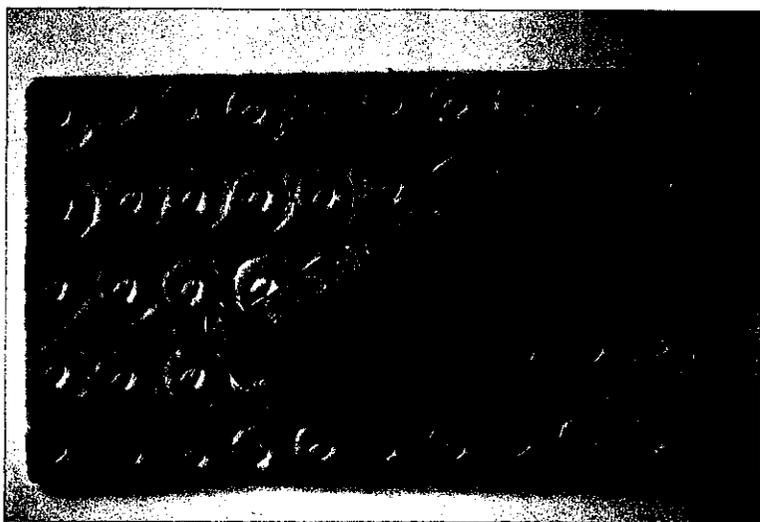
注 ウチカビ 紙銭のことで、以前は店から褐色のウチカビを

買って、それに丸い銭の型をしたウチカビウツチャーと称

するもので、縦五個横七個に打って使用したが、現在では、

打たれたものが店で用意されている。焼しやう香かう事ことや清せい明めい祭さい等

に用いている。



ウチカビとウチカビウツチャー

22 継子のハブ除け呪文

話者 比嘉好子(明治四十二年六月五日生)

翻字・対訳 安里和子

あぬー潮汲みーがやらちやぐとう、「何時ぬー間ねー潮お汲り来よー」り言ちやぐとう、うぬ、潮汲り来がちー、道中うてい火事ぬ出したぐとう、くぬ潮さーに山ぬ焼きとーせー消ちやぐとう、今度おうまー蛇ぬ居てーるばーてー。蛇が生ちちやーにうりひちやぐとう。

今度おなー、うぬ継子なかい大変粗末さりやーに、「うんなげーなー潮汲りつち、うりすんなー」りち、大変粗末さりやーに、家から直ぐ外んかい出じやさつてい、なー大変ぬ雨降い、風吹いに外んかい出じやち、ガタガターしみらつてい出じやさつたぐとう。

今度おうぬ蛇ぬまた、継子助きーる為なかい、自分ぬ命生ちちやる為なかい、うぬ親やまた足噛うたんりからやー。あんさーに足噛うていうりさくとう、今度おうぬ子ぬ来ねー治てい、居らんあいねーまた痛りさくとう、「くれーなーいっさい何がらやいるする」でい言やーに、あんし、呼びていありさくとう。なー蛇ぬる、

あの、潮汲みに行かせて「何時までには潮を汲んで帰って来いよ」と潮汲みに行かされると、途中で火事になったので、その潮水で山の火事を消したら、そこに蛇が居たんでしようね。それで蛇は、命拾いをして助かったそうです。

今度は、その継子は大変粗末にされて、「そんなに時間をかけて潮を汲んで来るのか」と、とても粗末にされて、雨も降り、風も強いのに家から外に出されて、ガタガタ震えていた。

今度はその助けられた蛇が、継子を助ける為に自分の命を救ってくれた恩返しにと、その継子の足に噛みついたそうだよ。そうしたら今度は、その子が来ると治つて、居なくなるとまた痛みだしたので、「これは何か訳がある」と考えて継子を呼んだ。もうこの蛇が、そうしているのです、その子の前では痛まないのに、居

んちやありやぐとう、うぬ子ぬ前なちよーる間あ痛まんしが、居らんないーねーまた痛れしーしーさぐとう。「なーくれーあたまに何がらやいるする」んりやーに、うんにーからな、継子んうりし助きてい、また蛇ぬ御礼しちゃんりちぬ話うすうす聞かちやしが。

23 継子話 へ麦突き二十日月

継親が、「この大麥ね、これを二十日の月が上るまでに搗きなさい」とこの継子に言つて。あんし継子んかい「いやーや、くり麦うつき搗きわるいやーや寝んしいんどー」でいちな親ぬうりさぐとう。なーていーちん麦えや空搗ちすぐとう、ていーちんなー実やならん、後おな「かんし哀りやるやー」んち涙ぬ落ていてーうぬ白んかい落ていてーうい、落ていてーうい目涙ばんない落ていたぐとう、うんにーからー湿きぬ麦んか

なくなるとまた痛みだした。そうしたので、「もうこれは何か理由があるに違いない」と言つて、それから継子を助けてやつて、また蛇にもお礼をしたという話をおぼろげに聞いたよ。

採集S52・2・26 読谷村民話調査団第三班 阿波根初美

話者 波平 秀 (大正四年八月三十日生)

翻字・対訳 菊地尚子

継親がね、「この大麥を二十日月が上るまでに搗きなさい」と継子に言つてね。「お前は、この大麥を搗き終わらないと寝かせないよ」と継親に言われた。空搗きするので大麥はなかなか実にならなかつた。「なんと哀れだなー」と思い涙がこぼれては落ち、こぼれては落ちしている、白に落ちた涙が大麥に湿みたと思うとその大麥はすべて、二十日夜の月が上るまでに搗き終わつて実になつていたという話、それだけ聞いたよ。

いうりさーなかい麦むぎん実みなてい搗ちち二十はち日か夜ゆいぬ月ちちぬ上あが
いとう麦むぎや実みなとーたんりる話はなし、うつびる聞ちちよーん
どー。

継ま子まが粗すそ末こんされて、二十はち日か夜ゆいぬ月ちちぬ上あがいぬな
か
い搗ちきんりちやぐとう、二十はち日か夜ゆいぬ神かみ様さまんなーうぬ継ま
子まぬ粗すそ末こんさりーぎいし、これ知しつてからに助たすけたわ
けでしよう。

継子が継親に粗末にされて、二十日夜の月の上るま
でにと言われたもんだから、それを知った二十日夜の
神様が継子を助けてあげたわけでしょう。

採集 S 52・2・26 読谷村民話調査団第十一班〈大宜見光一〉

注 月二十日(チチハチカ) ハチカヂチ(二十日月)月の名称で(三日月)、ジューグヤー(十五夜)、ハチカヂチ(二十日)などの呼
び方がある。

24 継ま子こ話ばなし〈麦むぎと涙なみだ〉

話者 奥原松助(明治三十年八月二十四日生)

翻字・対訳 津波古 米子

言いいるんせー、継ま子まんかい麦むぎ搗ちかちやるばーてー。
麦むぎ搗ちかちやぐとう、「うぬ麦むぎえ、当あたい前め食たべられるよう
にし搗ちきよー」んでい言いやつたぐとう。なかなか皮かあ

継子に麦搗きをさせたそうですよ。麦搗きをさせて、
「その麦は、すぐに食べられるようにして搗きなさい」
と言われた。なかなか皮は剝けなくて、継子はどうし

剥きらんぐとうてー、剥からんなたぐとうかんし涙流ち、「あんし難儀し、哀りやるやー」んち、非常に心配そーたんり。

あんし、涙ぬ落ていていすぐ麦濡だちやぐとう、あぬだーうぬ麦え、涙ぬ落ていてい濡でいとーぬ所お皮剥きてーるばーてー。「あはー、くぬ麦んでいせー、水かきてい搗ちゆしやさやー」りち、うんにーんから、麦え、皮剥けるようになったんり。麦えうぬ意味なてい、あれー水入つてい皮あ剥ちゆる事なたんり。

ようもなくなつて継子は涙を流し、「こんなに難儀し、哀れだねー」と、非常に心配していたそうである。

そうすると、涙が落ちてその麦を濡らしたら、その麦は、涙が落ちて濡れている所は皮が剥けたらしいよ。「あ、そうか。この麦というのは、水をかけながら搗くものなんだね」その時から麦は皮が剥けるようになったよ。麦はそういうことで、水を入れて皮を剥く事になつたつてよ。

25 継子話 へ雪払い十カセカケ

昔ね、ウナイ、イキー産さーなかい女ぬ親あけー亡ち、あんしえーなうれー後妻、男ぬ親あとうめいみそーやーなかいうぬ継母んかいじこー粗末んさつていよー。うぬ男ん子跡継やぐとうりやーに粗末のーさー

採集S52・2・26 読谷村民話調査団第十二班 へ山入端孝子・遠藤庄治

話者 波平 秀 (大正四年八月三十日生)

翻字・対訳 玉城和美

昔ね、ウナイとイキーを産んで女の親は亡くなり、そして父親は後妻をむかえて、その継親にとても粗末にされていたらしい。男の子は跡継ぎなので粗末にしないが女の子は粗末にしていたようだ。

んしがうぬ女ん子びかーん粗末んしよ。

あんさーにあるいっぺー昔は、雪も降ったそうですよ沖繩や。あられとか雪払えりちよ、じこーな雪ぬばんない降いぎーによ、なーいっぺーみつくわさるあぐとうてーなー継親ぬ。あんさーに「いやーやや、雪払り。庭ぬ雪積むとーぐとうや、木ぬ葉から何から雪ぬーん積むとーぐとう、いやーや雪払り」りち。

あんさーになー直ぐ泣ちやがちーな「うんぐとーる雪、霜にやー情無ん親あ。何んち私にんかいくんぐとうぬやー雪ぬ降いぬ晩にあんし「雪払り」りち言みせーがや情え無みそーらん」りやーに、あいなー泣ちやがちー雪ん払いていあんし泣ちうまんかい座ちえー泣ちえー私ねー。

あるうぬ日雪払い終わていさぐとう、「雪え払いみしていー」りち、なーうまんかい来に継母ぬ、「とー雪払たらー今細かきり」りち、なーばんじ雪ん降いぎーるむんぬ「細かきり」りち言ち。あんさーなかいまたうぬ総んかきーがちー直ぐな、巻ちやがちーなーしぐ泣ち。「私ねー何んちかんし粗末んさらんあらーならんがやー、私てらむのーやー。私ねー片時ん早くあぬ

そうして昔は、沖繩も雪が降ったそうですよ。あられとか雪払いといて、とても雪の降る時に、継親がはとても憎らしいと思つていたのでね。「あんたは、雪払いしなさい、庭の雪が積もつていたので木の葉も雪も払いなさい」と。

そして泣きながら「こんな雪や霜のある日に情けない親だ。どうしてこんな雪の降る晩に『雪払いをしなさい』というのだらう情けないな」と泣きながら雪払いをして座つたりしていた。

ある日雪払いも終わると、「雪払いは終つたか」と継母が来て今度は「雪払いが終わつたならすぐに総かけなさい」と言つて、ちようど雪の降る時に「総をかけなさい」と言われてね。そして総をかけ、巻きながら泣いて。「私はどうしてこんなに粗末にされなければならぬのかね、私とした事が。私は片時も早くあの世に行つてゐるアンマーの所に行つた方がいい」と。

世んかい行ぢよーるアンマー所んかい行ぢゆせーまし」
りち。

あんさーに、親んかいたたちやい殺ちやいし。「いやー
やなまうつさる認えかきてい置ちえーんなー」りちや
ぐとう「半分るかきてい置ちえーびる」りちさぐとう。
「うぬいやーぐとーるむのー食物食じくする人間おあ
らんぐとう、いやー今日限りうまから出していき」
りち親んかいすんち出ぢやさつたぐとう、行ぢゆん所お
無らんやーにあぬ世んかい出ぢよーる女ぬ親ぬ墓ぬ
クルマトーバルりち、うぬ墓ぬ親ぬ所んかい出ぢ「ア
ンマーあぬらー私ねーや、暮らちん暮らさらん近頃お
男ぬ親ぬ後アンマーとうめいみそーなかいしたつちんた
たらん、暮らちん暮らさらん私ねーアンマーとうま
ないんどーやーアンマー」りち、あんし墓ぬ前んじ倒
りていさぐとう「ただー許ちえーならん」りち「うん
ぐとーし人ぬ後んかい入つち来ていただー許ちえー
ならん」りちやーに直ぐ戒みーんりやーに。

うぬまた男弟ぐわーぬ居しが、うぬ弟ぐわーやな
ちやーなアンマーんかい姉ぬ粗末んさりーぎーしな
見ぢやーなかい、うぬウミーやいつペー寒さそーん、

そうして、親にたたかれたり暴力を振るわれて。

「お前はまだこれだけしか認かけてないのか」と言っ
たら「半分しかかけてないです」と言った。そうした
ら「お前は、食事をする資格がないので今日限りここ
から出て行きなさい」と母親から追い出されたが、行
くあても無くあの世に行っている母親の墓のクルマトー
バルという墓の前に行き「アンマー、私は近頃は暮ら
しもままならない、父親が後妻をむかえて立場も全く
なく、暮らしもままならないので私はアンマーと一緒に
に居たいよアンマー」と墓の前で倒れたら「これはた
だは許せない、こうして後妻に入ったのに許せない」
とすぐに戒めてあげると言つてね。

また弟が居るが、その弟はいつも姉が粗末にされて
いるのを見て、ウミーはとても寒がつているし、着物
も無く寒くて雪も降るので、弟は着物を持って行き着

着物着ちえー無ん寒さぐとうやー雪ん降いるさぎーぐ
とう、弟ぬ着物ん持つち行ぢ着しーんりち。うぬ確
かにアンマー所んかいる行ぢよーるはじりやーに、墓
ぬ前んかいましたなーうぬ着物ん持つち行ぢやーに姉んか
い着しーるばーてー。

あんし着しーしが「いやーやちよーんやー、私ねー
あぬ私一人しうんぐとうしありすぐとう、いやーや家
かい帰り」りち。「私ねーウミーとうままないん私ねー
ウミーとうるままやる、一緒私ねーままないさ家かい
帰らん」りやーに墓んかい二人うつちやかえーぐわー
し寝んとーしがーよ。

あんさーに女ぬ親ぬ、幻ぬ現わりやーに「あきさみ
よーくぬ二人や私が産し子あらんがやー、私が産し子
るやしがやー、うんぐとうーし戒みらつていや、くれー
うんぐとうし粗末んすさやー。親ぬたつちんたたらん
所んかい二人ぐーなうち、あんし苦しみてーな
らんむー」りち。「今日うてい私があぬ後妻戒みーん」
りやーにうぬ幻えただ一目ぐわーうまんかい現わりやー
に。

あんさーになー家んかい行ちゆるばーてーうぬ幻ぬ

けさせるといつてね。確かにアンマーの所に行つてい
るはずだからと、墓まで行つて姉に着せようと思つて
いた。

そうして着物を着せるが(姉は)「私は一人ここに居
るから、お前一人でも家に帰りなさい」と言つて。(弟
は)「私もウミーと一緒に居る、家には帰らない」と言つ
て墓の前に二人寄り添つて寝て居たよ。

そしたら母親の幻が現れて「あ、もうこの二人は私
が産んだ子ではないかな、私が産んだ子たちだけだ
もこうして戒められて、こうして粗末にされて。これ
では親の立場もない、二人とも苦しめてはならない」
と。「今日中に私が後妻をこらしめてあげよう」と少し
の間その母親の幻が現れてね。

そうしてその幻は家の方に行き、その継母の気を狂

出じやーに、うぬ女ぬ継親所んかい行ぢうりふりらすんよー。うぬ親ぬうりよー「私が悪いびんどー」し直ぐうんにーからうぬ墓ぬ前んかいよ来しがてー、私がるうりやるでいちなー直ぐ踊ていうぬ後妻ぬアンマーや来しが。

またうぬあんさーに、男ぬ親んなー直ぐ用事かいめんそーちよーる場合にるやぐとう、用事かい戻やーやしが、「今日や何がらー家かい行つちん行からん立つちん立たらん、くれー胸騒じさぎーしがやー、何やがやーくれー先ぬ妻ぬ何がらあいるすたがやー、子ぬ達ぬ何がらあいるすたがやー」りやーに墓んかい行ぢやぐとう兄弟二人うまんかいうつ倒りとーせーやー。

あんしさぐとう、うぬ男ぬ親ぬ、ユタハーメー頼まーにくり御供ぎらするばーよ。

受水走水 とうんきーてい

今からさびらんどー 粗末んさびらんどー

しくぬ、御願のー御供ぎていなー悪さいびーてーぐとうりち御願御供ぎたぐとう、うんにーからー女ぬ親ん死じよーるあぬ世んかい行ぢよーる親んいーちゃんりち

ぬ話。

わたした。その継母が「私が悪い事をしました」と言つて墓の方に来て踊つたりしたよ、気が狂っているのですね。

そして、父親は用事に出掛けて戻つて来るが、「今日何か胸騒ぎがして家に入ろうにも入れない、これは先妻に何かあつたのか、それとも子供達に何かあつたのか」と言つて墓に行つてみると姉弟二人そこに倒れていたそうだ。

そうしたら父親はユタに頼んでお祈りをさせてね。

受水走水を 飛び越えて

これからは 粗末にしません

悪うございましたと拝んだら、それからは亡くなつてあの世に行っている母親も成仏したという話。

注① ウナイ・イキー 152頁参照

注② 綴 布を織る時の経糸。

注③ アンマー 166頁参照

注④ ウミー 姉のこと。

注⑤ ユタ 沖繩本島におけるト占を専業とする巫女。ときたま、男性もいる。与那城村屋慶名はユタどころとして知られている。新築の日取りや、結婚式の日取り、その他家に不幸があった場合、ユタの家に行く。手数料は、シムンジシレー(氣持次第)とするが、相場は三、〇〇〇〜一〇、〇〇〇円前後である。

注⑥ 受水走水 沖繩本島南部の玉城村百名にある泉。

注⑦ 御願 神仏に願をかけること。古有信仰の一つで、火の神の拝みは旧暦の一日と十五日にかまど(現在は灰を入れた香炉)にウブクや水を供え線香をたいてウガンをする。

26 継子念仏

話者 池原幸子(大正二年六月二十八日生)

翻字・対訳 玉城和美

くれー男いみが子ぐわるやてーんてーやー。なーえーりん五いち
ちぬ場合ばいに女いなかぬうや親おやぬけー亡ましみそーち、あんさぐとう

これは男の子だったんでしょね。おそらく五歳の時に母親が亡くなったらしいが、七歳の時に思い出し

七ちぬ年ねー思んじやさーなかないなー女ぬ親搜めーい
が国々様々巡てーるばーてー。

巡ていん、自分ぬ女ぬ親んかい似ちよーみせーる人お
一人んめんそーらんなやーなかない。今度お戻ていなー
国々歩ちんめんそーらんむー家かい行きわるないさり
やーなかない、家かいくぬ戻てい来んりしーに、仲順
大主りいみせーる人。うぬ人お死じけー亡しみそーち
一週間や、あんしからまた生ち身うとーてい一週間、
くぬ人おむる交替交替やんしえーみたんりよ、仲順大
主りいみせーる人お。

あんさぐとう、うぬ人はいいちやていさぐとう「何
が童、いやーや何処かい行ぢやが」りちやぐとう、

五ちぬ年ねー女ぬ親ぬけー亡しみそーち

七ちぬ年なたぐとう 思出じやさーに

国々様々 搜めーてい歩ちやしが

自分ぬ親んかい 似ちよーみせーる人お

一人んめんそーらん

りやーに、なー家かい戻てい行ちゆる際るやし、仲
順大主さーに見していとらしみそーらんなーりちや
ぐとう、うぬ仲順大主が言みせーる

母親を搜しに国々様々巡つたようだ。

巡つてみても、自分の母親に似た人は一人も見当た
らなかつた。そこで国々歩いてもないので家に戻つ
て来る時に、仲順大主という人(に会つた)。その人は
死んだけれども一週間はこの世、一週間はあの世と交
互に行き来していたそうです。

そこで、仲順大主に出会つたので「どうしたんだ童、
何処に行つたのか」と言われて

五歳の時に 母親が亡くなり、

七歳の時に 母親を思い出し

様々 搜して歩いたが

自分の母親に 似た人は

一人も居ないよ

と、もう家に帰ろうとしているのですが、どうか仲順
大主で見させてくれませんかと言つたら、仲順大主が
言うには

いやー女ぬ親やー まるめー拜まらん

七月ぬ七夕や 中又十日んじる拜まりんどー

りち。うんにーねー

後生ぬ御墓ぬ七門ん 開ちゆぐとう

うぬ時にや

五ちぬ管串 切りちやめーてい

また

七ちぬ管串ん ぬち貯めーてい

あんさーい

左ぬ袖せー かんし押し隠ち

うし離さーなかい なーかんし袖ぬ中から

あんさーなかい、うんにーにや拜みーるんせー、いやー

女ぬ親拜まりんどーりちやぐとう、なーうぬ人ぬ言み

せーるぐとう、七月ぬ七夕にただ一目拜らんでい、管

串ぬ中から一目拜り。

あんさぐとう、「何がアンマーやうまんかいめーる」

「何がいやーやうまんかい来るあていなくまーいやー

が来る所おあらんどーやー」りち言ちやぐとう「近頃

や、父親やあぬ後妻アンマーとうめーみそーやーな

かいやあんし私ねー暮らさらん、私にんアンマーと共

お前の母親の本当の姿は 拜まれないが

七月の七夕 中の十日には拜まれるよ

と。その時には

後生の墓の七門を 開けるので

その時には

五つの竹管を 切っておいて

また

七つの竹管を 集めて

そして

左の袖で こう押し隠して

そして押し離して 袖の中から

そうして、その時に拜むとあんたの親は拜まれるよ

と言ったら、その人が言った通り七月の七夕にただ一

目拜んで、管串の中から一目拜んだって。

そうすると、「何でアンマーはそこに居るの」「ここ

はお前が来る所ではないよ」と言ったら「近頃は、父

親が後妻をむかえて暮らせないので、私もアンマーと

一緒にいたくて来たんだよ」と言ったら「どうしてそ

んな事を言うのか、あなたは長男で跡継ぎでしよう」

にないんりちる来んどーや」りちやぐとう「何んちいやーやーあんし物言いが、いやん一人るなかぐし」りち。うり長男やしえーや跡継しぬ子やしえー。「いやん一人る長男りちたていていあぐとうや、うぬあんしえーならん」

七月正月しちぐわちそーぐわちないるんさー

水ぬ初々みづ はちぼちぼん 供てい御供しま うちまぎりよー

また

茶ぬ初々ちやー はちぼちん 供てい呉しまりよー

また

食物ぬ初々むん はちぼちん 供てい呉しまりよー

アーケージューんかいなてい 来ちいるんさー

うきとうらしよー

また

ハーベールになてい 来ちいるんさーやー

女ぬ親いぬやとう思うむりよ

また

夏ぬ雨降なつ あみふいねーやー 雨あみんでい思うむんなよー

女ぬ親いぬやぬ うりる

冬ぬ霜ふゆ しむだちん 霜しむんり思うむんなよー

といつて。これは長男で跡継ぎの子でしょう。「お前を長男としてあるから、そうしてはいけないよ」

七月正月しちぐわちそーぐわちになつたら

最初に水のお初みづを 供しまえてね

また

お茶のお初ちやも 供しまえてね

また

食事のお初むんも 供しまえてね

私がトンボになつて来たら

さしあげてね

また

蝶々になつて 飛とんで来たら

母親と思おむいなさいね

また

夏の雨の日も ただの雨とは思うむうなよ

母親の涙と 思おむいなさいね

冬の霜柱ふゆ しむを ただの霜とは思うむうなよ

うるる私が涙とう 思りよー

りちさぐとう「あはー、私一人しなかふし立たててい
あさやー。あんせーんちゃんーアンマーとーままなら
んむー」りち家かい帰けいてい行いぢよ、うりからありさん
りる事ことやるばーてー。

私の涙だと 思いなさい

と言つて「あ、そうか私一人を跡継ぎにしてあるんだ
ね。お母さんとは一緒になれないね」と言つて家に帰つ
たという話だよ。

採集S52・2・26 読谷村民話調査団第十一班へ大宜見光一

注① 仲順大主 大王は中城間切仲順村(現北中城村仲順)の創始者

である。大主の時代に、王位を英祖に譲つて野に降つた義本王
が国頭の奥地から読谷山に移りそこに寄遇していたころ、大主
の善政を噂に聞いて、王は仲順に身を寄せ大主の厚遇を受けて
晩年を過ごしたということである。

注② 七月七夕(シチグワチ タナバタ) 旧暦七月七日の行事、墓

の掃除をし盆が近づいた事を報告する。

注③ 墓の七門 墓のジョー(門)がナナチ(七つ)あること。後生

の世界に行くには七門、いわゆる七つの関所を越えていくとい
う信仰。実際には墓の門は一つで、まれに三つあるのがある。

注④ ハチバチ お初。

注⑤ なかふし(なかぐし) 後継。



受水走水



仲順大主の墓

嫁と姑へうどんはミミズ

話者 池原幸子（大正二年六月二十八日生）

翻字・対訳 玉城和美

嫁ぬミミズ御差ぎたぐとうてー、夫ぬ畑から帰てい
来に見ちやぐとうなーミミズるぼーろない御差がいぎ
さい。

あんさぐとう、夫おたまし抜きやーなかい「私あ親あ
粗末んしや、あんしミミズ呉んなー」りち「お母さん、
うれーミミズるやぐとう御差がんなけー」りち「い
ん」りやーなかい、直ぐマツカイんうちゆるさーな
い目やふらちよーたんりる話てー。

うれなー大事なミミズエー薬んり。あんさーに、今
ちきていミミズエーじこー病氣そーしが達が取持
ちよーるばー。

嫁が姑にミミズをあげていたら、夫が帰つて来てそ
れを見たらミミズをボロボロと食べていたよ。

それで、夫はびっくりしてね「私の親を粗末にして、
ミミズをあげるとは」と言つて「お母さん、これはミ
ミズなので食べないで下さい」「えー」とびっくりして、
すぐお椀をほうり投げ（盲である母の）目が見えたと
いう話。

ミミズはとても薬だつて。それで、今でも病氣して
いる人達は愛用しているそうだよ。

兄弟の仲直り

話者 阿波根 ウシ (明治四十二年二月二日生)

翻字・対訳 玉城和美

昔ぬ人お、兄弟や血筋え切つちん切らんしが、友達えちびふいやんりーせーや、うぬふーじーぬ話ちやーうりやたしが。

うぬ話りーせー兄弟二人居しが、友達んまた一番友達が居ていうぬ兄弟や一番友達とーゆーすしが。

あんしうりやるばーてー、屋良ムルチぬ畑んかいマージンりがらー何りがらー植いてーたぐとう、むる無んなていさぐとう、なーうれー人ぬるうちゆ食いるりちなーそーたぐとう、「人ぬるかんし食いがやーひるまさぬ、人ぬる食いんてー」りち。あま山番しーがイラナ研じふかさーなかい兄弟行ぢやぐとう。あんさーなかい、うぬ人なてい見いていてーうぬ屋良ムルチぬ蛇がうちゆ食いしが、シナジやてーるばーてーうちゆ食いしが、人なてい見いていさぐとう。

うれー隠つきとーてい、夜うぬ首たつ切つちやぐとう、

昔の人は、兄弟の縁は切つても切れないが、友達はその話といた。そうではないという話があつたよ。

その話というのはある兄弟が二人居るが、また一番の友達も居てその兄弟が一番の友達とは気が合つてよくしていた。

そしてそんな時に、屋良ムルチの畑にもちきびか何か植えてあつたらしいが、それがみんな無くなつて、これは人間が食べてあるといて、「人間が食べるのかね不思議だね、人間が食べるんだらうね」と。それでその山番をしに鎌を研いで兄弟が行つた。そうしたら屋良ムルチの蛇が食べているのは、ウナギだつたけれども人に見えてね。

そして隠れていて、夜になつてからその首を落と

今度おうれーなー人生ち人お殺ちやんりち兄弟ねーい
かん、友達ぬ所んかい行ぢやぐとう「人生ち物、私ねー
殺ちねーんさ、ちゃーさらーましやが」りち友達んか
い尋ねたぐとう、うぬ友達が「いやーあんし人殺ちえー
れーちやーすが、あんしえー私が分からんむん」んち
友達えなー知らんふーなーしそーしが、あんし兄弟ん
かい問たぐとう「うれーあんし誰にん聞かちえーない
んなー」りち「二人さーなひじみーする、うんぐとうー
しうりしえーないんなー」りち兄弟やなー。「一番友達
のーなー」あんしえーなーいやーや仕方あないんなー」
りちやしが、うぬ兄弟やなー「あんしえーうんぐとう
しえー大事やさ」りちやなかい、初めー仲あ悪さぬ兄
弟やしが、「なーうんぐとうーしうんな場合やなー兄弟
やなー兄弟ぬるうりやる」りち、「血筋え切つちん切ら
らん」りちうぬふーじーやるばーてー。

あんさーなかい一緒行ぢやぐとうウナジやたんり。
切つちえーしえーイチムシやたぐとう、あんしえー人お
あらんせーりやーにあんしる兄弟話いあたる。

したら、今度は生きている人を殺したと兄弟の所には
行かず、友達の所に行き「私は生きている人を殺して
しまった、どうしたらいいか」と友達に尋ねたら、「あ
んたは人を殺してあるんだたらどうするね、私は知
らないよ」と友達は知らんふりをしたが、兄弟に聞い
たら「これは誰にも聞かせてはいけないよ、二人で片
付けよう。こんなしてはいけないよ」と言つてその兄
弟は言った。一番の友達は「仕方がない」とそつけな
い返事をしたが、兄弟は「こうしては大変だね」といっ
て、初めは仲の悪い兄弟だったが、「こんな場合は兄弟
がしか助けてくれない」、「肉親は切つても切れないよ」
と。

そして一緒に行つてみるとウナギだったらしい。切
り落としたのは生き物で、人間ではなかったという兄
弟話があつたよ。

注① 血筋え切つちん切ららん 血筋は父親同志が兄弟であることを言っている。いわゆる兄弟の縁は切つても切れないということ。

注② 屋良ムルチ 嘉手納町屋良にある。俗にムルチグムイと称し、比謝川の支流である茂呂木川上流の知花へぬける県道十六号線沿いの森の中にある。この溪潭は、昔は約千坪の広さがあったといわれるが、米軍基地拡張で半分埋め立てられた。



屋良ムルチ

29 兄弟の仲直り

話者 比嘉好子 (明治四十二年六月五日生)

翻字・対訳 玉城和美

あのーとつても自分ぬ兄弟とーてー、じこー仲が悪
さぬ、うぬある兄ぬがさらー弟がるさらー、自分ぬ

とても仲が悪い兄弟が居て、その兄がやったのか弟
がやったのか、自分の兄弟と友達との心を見る為に山

兄弟とう友達とうぬ心見れーに山んかい鉄砲さーに
山猪る射つてーしが、「いえー私ねーなー今日や人射い
てーぐとう、りかー緒片付ていくー」り言ちやぐとう、
うぬ友達え「はあー、人射いていから私ねーうれーちや
んならん、片付がん行かんぞー」り言ちやぐとう。

またうぬいつペーなーすぐ仲が悪さぬ兄弟や「あき
さみよー、あんやていから、りかあんしえー早くなー
片付ていくー、人ぬ見らんまーる片付ていくー」り言
いしえー。友達のはにぬきとーしが兄弟やまた直ぐ
いっペー固さぬ兄弟やし、なーめーめー兄弟りち「り
か」りち。

あんすぐとう、うりが事から出して「人を食むる
間るやる、友達りしえー、哀れ苦さに何んなーちわめー
ねー兄弟るやんどー」りち親達かぬ話聞かちえーたん
よ。あんすぐとう「兄弟いつペー仲良くし、うりしー
よーやー」りち、うりからの話聞ちやる覚やさ。

で山猪を射つてあるんだが、「今日私は人を射つてある
ので、一緒に片付けてこよう」と言ったら、友達は「大
変だ、人を射つてあるのなら私は出来ない、片付けに
は行かないよ」と言った。

また大変仲の悪い兄弟は「もう大変だ、そうだった
ら早く片付けてこよう、人が見ない間に片付けてこよ
う」と言った。友達は耳もかさずにはねのけたが、兄
弟は大変仲の悪い兄弟だけれども、やっぱり兄弟なの
で「さあ、行こう」と。

それで、その時から「他人は食べる間だけで、哀れ
で苦しい時にこそ兄弟だよ」と親達から話聞かされた
よ。だから「兄弟はとも仲良くしなさいよ」と、話
を聞いた覚えがあるよ。

翻字・対訳 島 袋 智 子

これは子どもこどもの親孝行おやこころであるかないのかの肝試ちむだめしや
ぐとう、ありやるばーてーなー。

是非じひ、仲順大主ちゆんじゆんおほすいが始めはじ何やたがー、うぬ病びやうき氣きるや
みしえーたがやー仲順大主ちゆんじゆんおほすいが。うぬ乳ち飲ぬまん間ま、う
りならん、親おやあ生いちからんでゐるもくろくやはじめー
やたのーあらに。

あんさぐとう、「子捨こわひていやーに、あぬ乳ち飲ぬまし」
りち、親おやんかい乳ち飲ぬましんでい言いち、子供達こわぬちやあ肝ちむみ
れーに言いちやぐとう。始めはじー長男ちやうなんから、「いやー子こや捨ひ
ていやーに、私わんにんかい乳ち飲ぬまし」んちやぐとう、
「ならん」でいち。また、今度こんどお次男じなぬんかいあん言いちや
ぐとう、次男じなぬならん。あんとう、三男さんなんぬんかい言いちや
ぐとう、三男さんなんぬまた親孝行うやこころやてーるばーてー。親孝行うやこころ
なやーなかい、「子こあ若わかさる間まあ、産なし代げえるんせーま
た産なする、親おやあまたとう拝うがまりる親おやああらんぐとう
やー、是非じひ、自分じぶんぬ乳ち飲ぬまし親おやあ立派りっぱ育ていーん」

これは子どもが親孝行であるのかないのかこれは心
試しだよ、心試しの話だからね。

仲順大主という人が、病氣びやうきだったのか何だったのか、
是非、その乳を飲まないと親は生きていけないからと
いうもくろみが初めはあつたんでしよう。

そうして、「子どもを捨てて、親に乳を飲まなさい」
と言つて、子供達の心を確かめるために言つたわけ。
始めは長男から、「お前の子どもは捨ててから、私に乳
を飲ましてくれ」と言つたら、「出来ない」と言つた。
また、今度は次男にそう言つたら、次男も出来ないと。
三男に言つたら、三男はまた親孝行だったようだね。
親孝行だったので、「子どもは若い間はまた産み代える
ことも出来るが、親はまたと拝める親ではないですか
ら、是非、乳を飲まして親を立派に育てる(病氣も治
す)」と三男夫婦が言つた。

りる三男ぬ夫婦ぬ言ちやぐとう。

今度お、うまからな一子ん埋すい、な一うまんかい埋みーる事なたぐとう、今ね一な一すぐ、うつき一掘てーぐとうな一、今ね一さこ一立派ぐわ一掘てーんや一りち埋ずみーんりしーね一、うまから黄金ぬ出じてい。親孝行なや一に、あんし宝あうぬ人ぬ親ぬ孝行や三男ぬんかいありさんどーりるうり、由来記、見じんしち、聞ちんそ一さ。

注① 仲順流り 念仏歌でエイサーや芝居で歌われる。

注② 仲順大主 186頁参照

31 子供こどもの肝きもへ仲順流りちゆんじゆんなが

仲順大主ちゆんじゆんおんすーが童達わらばいたあ、子ん達ちやあ三人居みつちやいうしが、うぬ三人みつちやいぬ子こぬ肝ちむだめ試ちむだめしすんりち。

今度は、そこに子どもを埋める事になったから、これだけ掘って、いいくらいに掘ったからと埋めようとしたら、そこから黄金が出てきた。親孝行だったから、その宝は親孝行の三男がもらったという由来記があつて、(芝居でも)見たし、聞いたこともあるよ。

採集S 52・2・26 読谷村民話調査団第三班(阿波根初美)

話者 知名定雄(昭和七年十二月一日生)

翻字・対訳 玉城和美

仲順大主には子どもが三人居るが、この三人の子どもの心を試してみようとしていた。

その中でもう仲順大主は年も取つたし、食べる物も食べられないので子供達の、その子を捨ててお乳を大主に分けてくれと、それでしかもう私は生きられないんだと。

やつぱりその心試しではあるんだけど、そう言つたら長男も子どもを捨ててまでは親の孝行はしたくないと、次男もやつぱりその通りであると。しかし三男はそうでなかつた。三男は子どもというのはまだ年も若いしいくらでも産めるが、親というのはまたとは拝まれななんだと。だから子どもを捨てて、お乳はお父さんにあげようと。

したら、じゃーその子どもの捨て場所を指定しよう。「東森の三本松の下んかい三尺穴掘てい埋みりよー」と。したらその夫婦はその場所に行つて、そこで穴を掘つて埋めるといふ事なんです。一尺掘つたら子どもは無邪気だから何も知らないで笑つておるんだと、二尺掘つてもやつぱりそのまた自分が埋められるというのを知らない。親はもう非常に嘆き悲しむんだけど、きつと三尺掘つたらその黄金の壺に鍬が当たつたということです。

仲順大主は年を取つて、食べ物も食べられないので子供達に自分の子を捨てて私に乳を分けてくれ、それでしか私はもう生きられないと言つて。

それは心試しであるのだけれども、そう言つたら長男も次男も子どもを捨ててまでは親の孝行は出来ないと言つた。しかし三男はそうではなくてね。年も若いのでいくらでも子どもは産めるが、親というものは二度とは拝めない。だから子どもを捨てて、お父さんに乳をあげると言つた。

そうしたら、子どもの捨て場所を指定した。「東の森の三本松の下に三尺穴を掘つて埋めなさい」と言つた。そうしたら夫婦はその場所に行つて、一尺掘つても二尺掘つても、その子は自分が埋められるとは知らないものだから無邪気に笑つていた。親は非常に嘆き悲しむんだけど、三尺掘つたら黄金の壺に鍬があつたそう。

猿長者

それを掘当てて大変喜んで。これがあれば親もやっばりその子どもを捨てずにこれで親の孝行も出来るんだと。そういう事で、親子かえったということだけども。実際は、仲順大主の子供達の誰が本当に私の後をみてくれるかという心試しであった。

採集 S 52・2・26 読谷村民話調査団第五班 へ宮里洋子・小橋川清一

それを掘りあてて大変喜んでそうです。これがあれば子どもを捨てずに親の孝行も出来るという事だった。実際には、仲順大主の子供達の誰が私の後を見てくれるかという心試しであったよ。

話者 島 袋 利 蔵 (明治二十六年三月二十日生)

翻字・対訳 松 田 美 奈

湯う沸かち若くなんそーれーりち。正月やぐとう年一ぺんぬ正月やぐとうやー。

うれー例えば、大和やていん神拝みねー身体や清潔にしりわる拜まぎーさや。あんぐとう言いせー若水迎ていかんしすせーうりやるばーてー、トウシエーユルカジ ワカクナインリヌチム。

あんさーに、立派清潔し正月ん迎えて御馳走んすりぬちむ。あんしうぬ例やしがや、あんしさぐとう若

湯を沸かして若くなつて下さいとってね。年に一度の正月なのでね。

例えば、大和などでも神様を拜む時には身体をきれいにしてから拜むでしょう。言わば若水で浴びると、年齢は重ねても若くなるということだよ。

それで、きれいにして正月も迎えて御馳走もするということである。そのような習わしがあつて、若水を

水迎たぐとう若くなてい、ちやートウシエー ユルカ
ジ ユテイイチユシガヤ。

あんさぐとう、またうぬある悪魔ぬ爺さんのうり話
聞ち、またうりが真似しさぐとうやー、あんさーにう
りん若水迎てい。うれー悪魔ぬ人やぐとうや、あんさー
にうりん若水迎ていさぐとうなー、あれー尻焼ち石に
うりさつてい猿なてい、さんりるうりやるばーやさ。
あれー悪魔ぬお爺さんやせーやー、あんさぐとう自分
ぬ思いぬぐとー、うれー通らんばー。

あんさーに 誠そーぬ人お若水んあんしさぐとう、
トウシエー ユルカジリ ワカクナイシガヤー。悪魔
そーる人お、なーありが真似またとういんりさーにあ
れー尻ん焼かつてい、猿なてい、なーイチムシンかい
なたんりぬ伝説やるばーやさ。

迎えたら、年齢を重ねるごとに若くなつていくのにね。

そうしたら、意地悪のお爺さんがその話を聞いて、
真似をして若水を迎えてね。その人は意地悪い人なの
で、若水を迎えたら焼き石で尻を焼かれて猿になつた
よ。意地悪なお爺さんなので、それで自分の思い通り
にはならないわけだよ。

だから誠実な人は若水を迎えると、年齢を重ねるご
とに若くなるが。意地悪な人は、真似をしようとして
尻を焼かれて猿になつて、動物になつたという伝説が
あるよ。

注 若水迎（ワカミジンケー） 元旦の朝は、まず「若水汲み」からはじまる。これをワカミジンケーという。

元旦の早朝、ウプガー（産井戸）と称する村で一番古い重要な井戸から、ワカミジ（若水）を迎える風習がある。読谷村では、若水
を汲みに行く時に生芋の大きなものを三箇井戸の神に供える。汲んで来た若水で、家族の者が洗顔し、茶を沸かして仏前に供える。

※ トウシエー ユルカジ ワカクナイン 年齢は重ねても若くなる。

採集S52・2・26 読谷村民話調査団第三班（阿波根初美）

トウシエー ユルカジ ユテイイチユシガ 年齢を重ねるごとに 若くなるが。

33 猿 長 者 へ若水由来

話者 奥 原 山 登 (明治四十年十月二十九日生)

翻字・対訳 玉 城 和 美

大昔おおむかしあつた話はなしですがね。ちようど大晦日おおみそかの晩ばんにあるお爺さんおじいが、みすばらしい姿すがたをして金持かねもちの家うちを方々ほうほう歩いて「一夜いちやを泊とめてくれ」と行いったら、何処どこでも断ことわられて泊とめてもらわなかつた。

である貧ますしい家うちにお願ねがいしたら、そこのお爺さんおじいとお婆さんおばあが居おりましたがね、快こころよく迎むかえて、「じゃ泊とまって下さくだい」と言いつて。そこに泊とまって翌日よくじつ起きてみたら「昨夜ゆうべあんた方がたにお世話せわになつたが、何なにをお礼れいにするかな」と言いつたら「いいえ、私達わたしたち何も欲ほしくありませんがとにかく若わかくなりたいい」そう言いつたら「じゃー早はやく若水わかみずを持もつてきなさい」と言いつたら、若水わかみずを温ぬくめて顔かおや身からだを拭ふいたらみるうちに二人ふたりは元もとの十七じゅうしち、八歳はちに若返わかがえつた。

そうしたら隣となりの人々ひとびとは、このお爺さんおじい、お婆さんおばあが急きゆうに若わかくなつたのを聞きいて、「あ、昨夜ゆうべこうこうだつたと」「じゃー家うちにもその人ひと来ていたが、泊とめておけば良よかつたな」と後あとのまつりであつた。「しかしどうにかして呼よび戻もどして、そのお爺さんおじいを迎むかえて来てくれないか、そしてうちも若わかくなりたいい」と。

そうしたから、その若わかくなつた人々ひとびとが追おつかけてそのお爺さんおじいを案内あんないして来て「昨夜ゆうべは泊とめないでどうもすいませんでしたが、私達わたしたちもああ言いうふうに若わかくなりたいから是非ぜひ若わかくしてくれませんか」と言いうたら「じゃー水みずを汲くんできなさい」と。そして水みずを汲くんできてその中なかに薬くすりみたいな物ものを入れて、何なにしたら皆みんなお猿さるになつてしまつてもう山やまの方に皆逃みんなげて行いつたつて。

だから今度はその泊めてもらった若い方にね、「心が悪い連中はこういうふうには猿になって皆山に逃げたからね、こつちの家の財産はみんなあんた方貰いなさい」と言つて貰つたら幸いですよ。

でしばらくしたら猿になつて全部そこに来て「私の物を返せ、私の物を返せ」とその猿が言つた。でその後からその白髪のお爺さんは来て「どうねー異常無いか」と言つたら、「実はこういうでいつも猿が『私の物を返せ、私の物を返せ』と言つて来ますよ」と言つたら「そうね、じゃー、丸いその黒い石をうんと火に焼いて、いつもその猿が来る所に置いておきなさい」と。そうしたらその猿はいつもの所に来て「私の物を返して」と座ろうとしたら焼石があるんだが、そこにお尻を焼いて、お猿のお尻は今だに赤いつてという話があるんですよ。だから心はきれいに持ちなさいつていう、いわゆる若水由来記があるらしいですよ。

採集 S 52・2・26 読谷村民話調査団第五班 〔宮里洋子・小橋川清〕

34 猿 長者 〔若水由来〕

話者 奥原松助 (明治三十年八月二十四日生)

翻字・対訳 玉城琳子

まー、うりん良い精神ぬ人とう、悪い精神ぬ話などー
いびんや。

まあ、これも良い精神の人と悪い精神の人の話になつて
ているね。

何がんでー、なー言いるんせー神様やし金持人ぬ
家んかい行ぢ、うりから貧乏者ぬ家かい行ぢさぐと。うぬ
言いるんせー、神様が金持人ぬ家かい行ぢやぐと。

どういふことか、いわゆる神様が金持ちの家へ行つて、
それから貧乏者の家へ行つた。いえば神様が金持ちの家
に行つてね。(金持ちの主人に)「今日は大晦日

「今日や年ぬ晩ぬんやれー、うまかい泊まらすんりせー
ないるばーい。あぬ前ぬ家ぐわーんれー行ぢ泊まれー」
んり言ぢやくとう「泊まらさんむん、ならん」りち。

なー大變貧乏者ぬ家かい行ぢやーに、「今日泊まらち
呉らんなーくまんかい」りちやくとう、「私達あ何ん無
らん、年の晩のーえいびーしが貧乏者なてい何ん無や
びらんさー」りちやくとう。「無んていんしむぐとう」

「あんせーなー、一緒憩てい呉みそーり」りち、うぬ
家んかい泊またぐとう。「いったーや何う欲さが」んり
言ぢさぐとう「何う欲さーねーやびらん」あらん、今日
や年ぬ晩やくとう、いやーが欲さし呉いんどー」りちや
ぐとう、「とーあんせー、なー年ぬ晩やくとう、米ぬ
物、飯え炊ち貫らち呉みそーり」とーあんせー、鍋ん
かい水汲みんけー」りち水汲みんちさぐとう、うりか
ら、水汲みんち火い燃ちやれーご飯なとーびたんりよー。

あんさぐとう、うりからまた「おかぞー何うましが」
りちやくとう「あぬだー、今日やなー年の晩のーやし
が肉ぐわー少てぬん無らん、貧乏者るやいびーぐとう、
肉本当おありわるやいびーしが」あんやんなー」りち、
鍋んかい水入つてい沸かちやくとう肉ジューシーなちえー

の晩なので、ここに泊めることは出来ない。あの前の
家にも行って泊まりなさい」と言つて「泊めること
は出来ない」と言われた。

そしてとても貧乏者の家へ行つて、「今晚、ここに泊
めてくれないか」と言つたら、「私の家は何も無いよ、
年の晩ですが貧乏者なので何も無いですよ」と言つた。
「無くてもいいよ」と。「それなら一緒に休んで下さい」
とその家に泊まったそうです。（その神様が）「お前達
は何が一番欲しいか」と聞いたら「何も欲しい物はあ
りません」「いや、今日は大晦日の晩なので、お前が欲
しい物あげるよ」と言つて、「それでは、年の晩なので、
米の物、ご飯を炊いてもらいましようかね」「それじゃ、
鍋に水を入れなさい」と水を入れて、それから火を燃
やしたらご飯が出来上がっていったつて。

そうして、それからまた「おかずは何がいいか」と
聞いたら「今日は年の晩ではあるが、本当は肉がある
べきなのに、貧乏者なので少しの肉も無い」「そうなの
か」と、鍋に水を入れて沸かしたら肉ジューシーが出
来ていたつて。肉が入っていたつて。そしたら「あー、

たなり。肉ぬ出しとーたなり。あんさぐとう「あはー、
うりが本当ぬ不思議なむんやつさー。うんぐとう年寄
ぬ、何がら水汲みんきでー肉んないん、ご飯ぬんない
せー。不思議なむんやつさー」りち。「人間おいつペー
銭貰ゆしとう、若くないしとうじろーますが」りちや
ぐとう。「若さいねー働きねー銭お儲きらりーびぐとう、
なるべく若くなち呉みそーり」りちやぐとう。「あんや
んなー、とー、若くなれーやーんり思とーるんさー鍋
んかい水入つていむげーらち、うぬ水さーにいつたー
浴みれーやー」りちやぐとう。うんぐとー年寄ぬ十八、九歳
ぬ二才ぐわーなていよ。なーいつペー若ぐわーなとー
ぎさんて。

あんさぐとう、うぬ金持人ぬ家かい行ぢやーにさぐ
とう「何が、いやー並びぬるでーさに」りちやぐとう
「うー」何あんし、昨日まれー、うんぐとうおお年寄
ぬあんし若くなていなー」りちやぐとう「実え、かん
しし、うぬ今日や元旦やぐとう、うぬ水汲りつち湯風
呂入りりちやぐとう、うり、暖ち浴みたぐとう、うん
ぐとう若ぐわーなとーびつさー」りち。「ひるましむん
やー」りち。「あんし、うぬタンメー何処かい行いたが」

これは本当に不思議なことだ。こんな年寄りが、鍋に
水を入れなさいと言うと肉が出てくるし、ご飯も炊け
るし不思議なことだ」と。「人はたくさん金を貰うのと、
若くなるのとどちらがよいか」と聞いた。「若かったら
働いて金儲けも出来るのであるべく若くして下さい」
と言った。「そうなのか、若くなりたいと思つてゐるな
ら鍋に水を入れて沸かして、その若水でお前達は浴び
なさいね」と言つた。すると、あんな年寄りが十八、
九歳の青年になつてね。もうとても若くなつたんだつ
て。

それから、その金持ちの家へ行つたら「どうした、
隣近所の者ではないか」と言つたので「そうです」「ど
うして、昨日までのあんなに年寄りが、そんなに若く
なるなんて」と言つたら「実は、今日は元旦なので水
を汲んできてお風呂にはいりなさいと言われて、その
水を暖めて浴びたら、このように若くなつてゐるん
ですよ」と。「不思議なことだ」と。「それで、そのタン
メーは何処へ行つたか」「帰つて行きました」「まあ、

「行いみせーびたんれー」はあ、今までー追てい行けー話ないきに「りち。追てい行ぢやぐとう、うぬタンメーんかい、(うれー、やな精神やせーや、人泊まらさん。今日、年ぬ晩やれーうまんかい泊まらさんりち、泊まらさんぐとう)行ぢやーに、「何私達あ並べーむる若ぐわーなとーぬむんぬ、私達あ若くなち呉みそーらんなー」りちやぐとう「しめーさに」りやーに「あー、若くなち呉り」あんやみりやーに、うりから、引つ返ちやーに、うつたー若水し洗ちやぐとう、猿んかいな、金持人ぬ欲ぐわーの所はですぬ。

それから庭なかい黒石ぬあたんりよー。あんさぐとう、なー猿なたぐとう、うぬ黒石ぬ上んじ座ちえーういういさぐとう、うぬ為に、あぬ猿や尻え黒なてい。火傷そーに石なとーせーやー猿。

やな精神持つちやーに、あんぐとうし猿んかい。人からる猿になとーんりーせー、うぬ為やるふーじーやびっさー。

今でしたら追いかけて行けば話が出来るでしょう」と追いかけて行って、そのタンメーに(金持ちは精神が悪くて人も泊めない。今日は年の晩なので泊めなかつた)「どうして、私達の隣の人は皆若くなっているが、私達も若くしてくれませんか」と言ったら「いいでしょう」と言つて「ああ、若くして下さい」「ああ、そうか」と言つて、引き返して来てその人達を若水で浴びせたら猿になつてね、金持ちで欲ばりな所は。

それから庭に黒石があつたつて。そして、もう猿になつたので、その黒石の上に座つたりして、それで猿の尻は黒くなつたつて。火傷するくらい石は熱くなつているのでね。

根性が悪くて猿になつたつて。人間が猿になつたつていうのは、その為だと言われているよ。

注① 年ぬ晩 大みそかの晩。

注② 黒石（クルイサー） 方言でマリーイサーともいう。黒色の堅い石、力だめしの石として使うこともある。

※ タンメー ここでは神様のこと。

35 城間ナーカ盗人

話者 奥原山登（明治四十年十月二十九日生）

翻字 玉城和美

ある所にね、人を助けてあだにならんというんだがねー。

そこは非常に金持ちだったつて。大晦日の晩に泥棒が天井に隠れていたつて。こつちの主人やみんなが寝たら何か取つて行こうと思つて、もう自分の家は何も無くて、子も沢山居ながら何も無いので大きい所かろうと思つてその天井の裏に忍んでいたつて。

でその主人はそれを見て妻に、「年取る時のお膳立ては一つ増やしてこい」と。何でそんな事を言うかなーと思つたらしいよ。でお膳一つは別に揃えてきたつて。

でみんな年を取つて、子供達もまたこの下男も家へ早く帰らなさいと帰して、皆居なくなつてから「天井裏に忍んでいる、父ちゃん降りて来なさい」と言われた。そうしたらその泥棒もびっくりしてガタガタ震えて、もう見られてから仕方が無いと降りて来て、「で何の事情があつてここに居るか」と言つたら「自分は非常に貧しくて、米買うお金も無い、肉買う金も無いような年の晩であるが、この大きなお金持ちの家を頼つて泥棒して子供達を喜ばそうと思つて。実はこうこうでありました」と真面目に言うたらしいよ。

そうしたらその主人は、「あ、そうだったかよく分かった。で年も取つて、そうして子供達に与える米もお肉も

持たしてあげるから」と言ったらその泥棒が、もうボロボロ泣いて、「この御恩はどうして返しますかね」と言った。そうしたら、その御恩は「あんた方の子供達が成長して沢山畑を耕して芋を沢山作って。そして昔は、朝はその若水迎えるといつて川の所に水を汲みに来るさーね、その時にお芋二つづつ持ってきてその川に供えなさい」と。そうしたら「はい」と言つて。そうして子供達にね「こうした御恩はそのお芋で返してと向こうの主人が言うから、よく働いて大きいお芋作って二つづつ供えなさい」とそう言つて諭したからこれがね、その子供達も随分大金持ちになつたつて。

そうしたら村中が、向こうに元旦の朝、若水迎える時にねお芋を供えていけば金持ちになるから言うて、その部落にその家一カ所しか井戸は無かつたつて。で、村中の人が、お芋持つて来るからむこー働かなくてもね大変金持ちになつたつて。

採集S 52・2・26 読谷村民話調査団第五班へ宮里洋子・小橋川清一

注① 城間ナーカ 城間は浦添市字城間。ナーカは屋号、沖縄本島および周辺離島によく伝えられている大金持ち。

注② 年の晩 21頁参照

注③ 若水迎 196頁参照

翻字 玉城和美

城間ナカはね、どういふふうになつたかといへば。向この城間ナカの人々は、もう心も立派な人でね。年の夜の日にさし、お正月の年取る時に泥棒しに入つた人がいて。それがね子も沢山いるが、この着物なんかも買つてこれない、金も無くて御馳走も作られない。どうしようも出来ないで、そのままそこに行つて金を盗んできて、子供達の着物も買つてやろうといふことで城間ナカの中に入つていたそうだよ。

だからこれ天井に上がつてね、そうして年の夕飯といつてね、おかずと御飯を持ってきた時に、その御主人が「今日は二人分入れてきなさい」と城間ナカの人は言つたから「これ珍しいね」と、その召し使ひの人達は、「一人居るのに二人がもの作つてくるというのは珍しいね」と言つて。

そうしてこの年を取る時にさ、これ今古いけどあのヒルをかみてからお箸使うさ、年取るのは。そうして、その人は天井に上がつていのは分かつておるのだから、「さあ、あんたも早く降りてきて私と一緒に年をとりなさい」と。だから見られておると思つてさ、仕方なく降りて来て「私は実はこうこうで心配で。本当は金を盗みに来ましてあれども、御主人が分かつておりますから家の事情は後でお詫びします」と言つて、そして家が心配という事情で来ておるんだから。そうであつたら金もこつちからやる。お米もこつちから持つて行つて、肉なんか持つて行つて、お正月やりなさいとどういふふうにやつたという話を私は聞いています。

採集S52・2・26 読谷村民話調査団第十班(山城悦子)

※ ヒルをかみてから、こうお箸を使うさ、年取るのは

年を取る時には、お膳にヒル（ニンニク）を添えていたので、まずそれをいただいてから夕飯を食べた。

37 坊主御主と城間ナーカ

話者 池原幸子（大正二年六月二十八日生）

翻字・対訳 玉城和美

とにかく城間ナーカりぬ所、城間ナーカぬ金持そーみせーてー。うまー主がてー隠居しみそーなかい、「百姓りるむのーちやーし暮らちよーみせーがやー」りち。くれー王様やしがや国々様々巡てい歩ちみそーちやぐとう、ある城間ナーカんかいめんせーちえーるふーじーてー。うぬ人坊主御主やまたいつべー女とうやーやみせーたんりよ。

あんさーい、くぬ城間ナーカりる所ぬ使者ぬ達ぬ「城間ナーカぬ道具おなー道具までいん変わてい」りちさぐとうてーくぬ坊主御主やゆく勘とうみそーち、「あはーアンマー道具ぬ変わてい、あまぬ道具お変わてい」りちやぐとう、今度おなー何がらぬ変わとーんりむやーなかいうぬ坊主御主や入つちめんそーやーに、

城間ナーカという所が金持ちになつたというのはね。それは坊主御主が隠居して、「百姓はどういう暮らしをしているのだろうか」と。その人は王様だけれども国々様々立ち寄つて、そして城間ナーカという所に行つたそうさ。その坊主御主はまたとても女好きでもあつたらしいよ。

そうして、その城間ナーカの使用人達が「城間ナーカは道具まで変わつてい」と言つたので坊主御主は勘違いして、「ああ、アンマの道具は変わつてい」と思い夫が畑に行くのを見届けてから、その家に入つて行つてその妻に「あなたの道具は変わつてい」るそうなので、一夜を共にしたい」と言われ共にしたらし

夫ぬ畑かい行ちゆし見じみそーちてー「いやー道具お
変わとーんりぐとう、私とう一夜お寝んでー」りち「一
回のー寝んでー」りち寝んでーるふーじーや。

あんしさぐとう、夫ぬ畑から戻ていめんそーちやー
んり。あんしさぐとう、「何がやー私達あ家庭やあんしいつ
そーや家んみちくみらんむぬ、みちやとーるやー」り
やーに節穴から見ちやぐとう、城間ナーカぬアンマー
とうくぬ坊主御主りみせーる人とう寝んとーみせーた
んりよ。

あんしさぐとう、なー妻えやーいつペーなーすぐ哀り
し夫ぬ帰てい來ぐとう何んちが返答しむらー分から
ん。「あんせー私ねーなーあんあんし、坊主御主とうけー
寝たんんどー」りち、夫んかい返答せーんてーなー正直
ばる言らりーせー見いらつとーぐとう。あんしされー
「坊主御主や王様るやみせーぐとうや、いやーや王様
とう寝んじゆるあたいやれーやー私やか上るやぐとう」
りち許ちえーみせーるふーじーよ夫ぬ。

あんしさぐとう 坊主御主がなー城間ぬ土地やむるだー
王様ぬ勝手いるやせーや。うり呉みそーやなかいあん
し金持しみそーちやんりる話。あんし今ちきてい、代々

い。

そしたら、畑に行つていた夫が帰つて來たそうだ。
そうしたら「どうして開け放している家が、今日に限つ
て閉められているのかね」と節穴からのぞくと妻と御
主が寝ていたそうです。

そうしたら、もう妻はとても哀れんで（辛くて）夫
が帰つてきたら何と返答していいか分からなかった。
「こうこうで、私は坊主御主と共にしたよ」と、見ら
れているのだから正直に言ったそうだ。そうしたら（夫
は）「坊主御主は王様なので、あなたは王様と寝るくら
いだから私よりも上であるよ」と夫は許したそうだ。

それで、城間ナーカの土地は全部王様の権限なので
ね。それを貰つて金持ちになつたという話だよ。そし
て現在でも代々続いて土地、畑の多いのは城間ナーカ

続き今、土地、畑ぬ多させー城間ナーカやみせーるふー
じーどー。

であるらしいよ。

採集S 52・2・26 読谷村民話調査団第十一班〈大宜見光一〉

注 坊主大王 尚瀬王(一七八七—一八三四)のこと。尚穆王の第一王子尚哲の第四王子で具志頭王子と称す。一八〇四年から一八二七年にかけて王位につく。四十二歳で城間に隠居し、坊主御主といわれる。農耕に親しんで農作物を那覇の市場に売らしたという。尚瀬王は「坊主御主」になって生活苦にあえぐ各地の農民を見てまわり最後に読谷村喜名に落ちついたという説もある。喜名には彼が作ったと伝えられる「坊主井戸」がある。

※ アンマー ここでは城間ナーカの妻。

38 城間ナーカ〈盗人〉

話者 波平

秀(大正四年八月三十日生)

翻字・対訳 玉城和美

うぬ城間ナーカ、うぬある貧乏、盗人ぬよー、なー
じー貧乏人ぬてーな、正月する金無らんせーやー。
あんさーに、こーがーきーさーなかい「今日やなー城
間ナーカりる所ぬ金持人んかいやー盗るしーが入やー
にあまんじ盗るしわるやつさー」りやーに。あんさー

城間ナーカという所に、ある貧乏の盗人が、正月を
するのにお金もないでしょうその貧乏人は。そして、
ほう被りをして「今日は城間ナーカという金持ちの家
に泥棒に入ろう」と言つて。それでほう被りをして昼
間のうちに裏座に入つてね。その釜の後ろに潜んで

になーこーがーきーし昼うていなーうまぬくちゃんか
い入つちよーてーるばーてー。うぬ釜ぬ後んかいすく
ろーてーるばーてーなー。

あんしがうぬ城間ナーカぬ主え、うまんかい盗人ぬ
入ちよーんりぬ事分かとーみせーしが、何んりん言み
そーらん。あんしなー、夜なたぐとうなー「とー早く
なー使用人達んうまんかい今集まてい来よー、早く一緒
年ん取つていからになーめーめー家かい行きよー」り
ち。

あんさーなかい「とー皆集まとーみ、うつさるやりー、
巨人あうつさるやりー、年取いせーうつさるやりー」
りち、あんしなー皆かいなー直ぐ金ん何んなー貫らちえー
みせーるばーてーやー。うぬ家かい持つち行ちゆる土産
んぬーんあんし支度てい準備し。」とー釜ぬ後んかい居
るやー人んうまんかい出してい来わ、うまつち年取れー
わ「りちなー良い人るやみせーぐとう心ぬ出来いてい。
あんし、「うまんかい出していつち年取れーわ」とー
あん言ちやぐとうなー「あいえーなー私ねー見いらつ
とーさやー」りち。

あんさーにうぬ盗人おなー「くれーんちやなー大事

いたつて。

しかしその城間ナーカの主人は、そこに盗人が入っ
ている事は分かつていたらしいが、何も言わなかった。
そして、夜になり(城間ナーカの主人は)「使用人達よ
早く集まって来なさい、一緒に年を取つてそれぞれ家
もに帰りなさい」と。

そして「皆集まっているか、これだけか、年を取る
のはこれだけか」と言つて、皆にお金も分け与えて。
それから家に持ち帰る土産も支度して準備してね。「そ
れから釜の後ろに隠れている人もここに出て来なさい、
出て来て年を取りなさい」と言つて、この人はとても
心の出来た人であった。「もう大変なことだ。ああ、も
う私は見られているんだね」と。

それからその盗人は「これはもう大変なことになつ

やさやー。見いらつていからーあんせー仕方あならんむなー」りち、なー隠つくていん隠つきらんなやーに直ぐうまんかいなーうつちんとうーし「悪さいびーたん。私ねーなー今日う食めーは明日あちやーすがやーりる暮し方さーに童達あ食物食まするうりん無らん正月んしみーるうりん無らんやーなかい、くまぬ城間ナーカりするうぬ殿内かいうんちえーむんしーが今日や来びたん訳やいびーさ」りち、うぬ主人かいい訳てい、うぬ盗人ぬ御辞儀はいさぐとう、「とーうれーやー、くまーあるナーカー城間ナーカりち、あぬ家名んちやんとう上れーからの呉てーみせーぐとうやー、うれー皆が物るやぐとう、金持え浮世ぬ回いむんどうやぐとうやー。いったーん盗人りん思んよーい、同ぬ人るやぐとう、とーちゆふあーらうまうてい年ん取つてい食物ん食りから、また家かいんお土産ん持たすぐとう持ち行ぢ童達あん正月しみれーい」りち帰てい行ぢ正月さぐとう。

うぬ城間ナーカりる家庭えーや、いちまでいんみーまんじみそーやなかい。ちやー城間ナーカりち、あるナーカー城間ナーカりち金持えーちやー続ち、世ぬあ

た。見られたから仕方がない」と言つて、隠れても隠れられなくなつてすぐに出て来てうつむいて「悪うございました。私は今日は食べても、明日はどうして暮らすか子供達に食事をさせる事も出来ない、正月をさせる事も出来ないの、この城間ナーカの御殿に拝借しに来た訳であります」と言いい訳をしてお詫びをしたので、「ここはねあるナーカ城間ナーカと言つて、屋号もちゃんと上の方から付けられているのでこれは皆の物だから、金は天下の回りものだからね。あなたも盗人とは思わないで、皆な平等だからここで良い年を迎えて御馳走も食べて、それから家の方にもお土産を持たせるので子供達も正月をさせなさい」と言つたそう

だ。

それからこの城間ナーカの家庭は、いつまでも見守られてね。この城間ナーカは、あるナーカ城間ナーカといつて富が続き、いつの世までも金持ちであつた

ぬとうとうーみ金持そーみせーたんりぬ話。

そうです。

採集S 52・2・26 読谷村民話調査団第十一班（大宜見光一）

注 うんちえーむん 物を拝借する。

39 坊主御主

話者 比嘉利益（明治三十年七月八日生）

翻字・対訳 玉城琳子

田舎んかいめんそーやーにや、田舎、何処がやたら
分らんしが。

（坊主御主が）田舎はどこだったのか、そこへ行っ
たそうなんですよ。

家来ん達が田舎ん所かい来ぬむん、くりかーぬ話上
手頼りちやーに、慰みいんそーらしわるやつさーりち、
あり話上手ぬ来泊まやーなかい、二人連おてい行ぢや
んりよ、御主ぬ所んかい。

家来達がせっかく田舎に来ているので、田舎の話上
手を頼んできて坊主御主の相手をさせようとして、そ
こでその話上手の人が来て泊まって、二人を御主の所
へ連れて行ったそうです。

あんさぐとう、「とー御主やなー寂さそーみせーぐとう、
二人思い思いぬ話し慰みりどー」り言ちやぐとう、「うー」
りち。一人がむのー、「あぬひやー、マヤー」りちやぐ
とう、「あぬひやー、ウエンチュ」ただうつびやたんり。

そうしたら、「もう御主は寂しそうだから、二人で心
の内を話して慰めてあげて下さいよ」と家来が言うのと、
「はい」と返事して。一人が「それ、ネコ」と言った
ら、（一人が）「それネズミ」ただそれだけだつて。ネ

マヤーぬ前うてい、ウエンチヨーよ、そーから出ざしめーんり。あんさーに、御主や、じこーふくいみせーたんり。「私ねーな、あんすか敬とーさや」んち。

うぬ人おマヤーなとるばーて。うつたーウエンチユなとるばーて。ウエンチユぬマヤーぬ前うてえー、叫ららんなとーるばーて。御主ん、また頭へーさぬばーて。

ちやー百姓装し、野菜作てい上手やたんりよ。道端うとーてい畑しませーたんりしが。

またすぐ、大魚かんし担みてい片はらんかい担みてい来しが居たんり。あんさぐとう、うりがー坊主御主んちえー分かとーるばー。「えー、ウスメー」り言いたんりよ。「うー」り言いたんりまた御主や。「舟えー時やクチぬじくー、くり担みとーていとうらしみそーれー」り言いたんりよ。「何が、うまんかい置ちよーけー」り言いたんり。「おお、くれー坊主御主かい御差ぎいーしやぬむん、地面んかい置ちーねー御無礼ないびーぐとう、私がクチぬじ来ぬ間、担みとーちみそーれー」り言ちやぐとう。なーあん言いぬむんりち仕方ならん担みとーたんりよ。あんさーにウージぬ中からでいがらー山ぬ

コの前でネズミをひそかに出してね。それで御主はとも自慢して喜んでいたそうだ。「私はとても敬われている」と。

御主はネコになつてです。話上手はネズミになつていわけですよ。ネズミはネコの前では、言葉も出なくなつた。御主もまた頭が良かったんでしようね。

いつも（坊主御主が）百姓の装いをして道端で畑仕事をしていたそうですが、野菜作りが上手であつた。

また、ある人が大きな魚を担いで側に来たそうです。すると、その人は坊主御主であることは最初から知つていたそうです。「おい、ウスメー」と呼んだらしい。

「はい」と御主が返事したそうです。（百姓が）「舟のクチをはずしてくる間、一時この魚を担いでいてくれませんか」とお願いしたそうです。「そこに置いておきなさい」と御主が言うと「これは坊主御主に差し上げるといので、地面になんか置いたら失礼になるので、私が船のクチをぬいてくる間担いでいて下さい」とお願いしたそうです。もうそういうことなら仕方がないと担いでいたそうです。そうしてその人がキビ畑の中

中^{ちゆう}かいでい^いがら^ら行^いぢ^ぢャー^ャに、用^{ゆう}事^じお^お済^じま^まち^ちえ^えー^る
ば^ーて。わ^わぎ^ぎと^とう^うる^るや^やぐ^ぐと^とう^う何^{なん}ん^んあ^あん^んね^ねー^あら^らん^んし^しが^が
る^る行^いぢ^ぢョ^ョー^ぐと^とう^う。「に^にへ^へい^いび^びー^たん^んど^どー^りち^ち、取^とり^りや^やー^に
担^かみて^い行^いいた^んり^よ。

と^とー^あん^んさ^さぐ^ぐと^とう^うま^また^た御^ご主^{しゅ}や^や、と^とー^うれ^れー^私に^んか^か
い^いぬ^ぬ御^ご差^さぎ^ぎむ^むん^んや^やて^てー^ぬむ^むん^ん早^{はや}く^くな^なー^行ぢ^ぢ座^ざち^ちョ^ョー^か
ん^んあ^あら^らん^んあ^あれ^れー^なら^らん^んり^りや^やー^なか^かい^い、側^{そば}な^なー^りー^くん^ん
も^もー^さー^い走^はえ^えー^なや^やー^に、家^やん^んじ^じ着^ち物^{ぶつ}ち^ちん^ん替^かて^い座^ざ
ち^ちョ^ョー^みせ^せー^たん^んり^り。う^うり^りが^がー^坊主^{ぼしゅ}御^ご主^{しゅ}り^りち^ち分^わか^かて^い
る^い言^いち^ちョ^ョー^んり^りん^んど^どー。う^うつ^つさ^さ、敬^{うや}ま^まー^とー^さや^やー^ん
ち^ち、じ^じコ^コー^面白^{うま}し^しみ^みせ^せー^たん^んり^り。

注 ウスメー お祖父さん。平民の祖父。

※ 「うー」 はい。目上の人に対して承諾を表す語。

※ 「舟ぬクチ」 舟の名称には前はヒー・後はトゥムがある。クチにあたる部分は、漁をやっている古老に聞くと、「舟ぬクチ」という名称は無いとのこと。よって、語者の語り違いだと思われる。

だ^だった^たか^か山^{さん}の^の中^{ちゆう}だ^だった^たの^のか^かそ^そこ^こに^に入^いっ^て、用^{ゆう}足^{そく}し^しを^を済^じ
ま^まして^て来^きた^たわ^わけ^けさ^さ。(そ^その^の人^{ひと}は)用^{ゆう}事^じも^もな^ない^いの^のに^にわ^わぎ^ぎと^と
行^いっ^てい^いる^るか^から。「あ^あり^りが^がと^とう^うご^ござ^ざい^いま^ました^た」と^と言^いっ^て、
御^ご主^{しゅ}か^から^ら取^とっ^て担^かい^いで^で行^いっ^たん^んだ^だつ^つて。

そ^そう^うし^したら^ら御^ご主^{しゅ}は、自^じ分^{ぶん}へ^へ送^{くわ}り^り物^{ぶつ}だ^だか^から^ら早^{はや}く^く家^かへ^へ帰^{かえ}っ^て
て^て着^き替^かえ^えて^て座^ざつ^つて^てお^おこ^こう^うと^と思^{おも}っ^て、男^{おとこ}よ^{より}も^も先^ま回^{まわ}り^りし^し
て^て家^かで^で待^{まち}っ^てい^いた^たそ^そう^うで^です。そ^その^の人^{ひと}は^は坊^{ぼしゅ}主^{しゅ}だ^だと^と分^わ
か^かつ^つて^て話^わは^はし^して^てい^いる^るの^のに^にね。(坊^{ぼしゅ}主^{しゅ}は)自^じ分^{ぶん}が^がと^と
も^も尊^{そん}敬^{けい}さ^され^れて^てい^いる^るん^んだ^だと^と喜^{よろこ}ん^んで^でい^いた^たそ^そう^うだ^だよ。

採集S 52・5・22 読谷村民話調査団第十二班(山城悦子・松元久幸)

翻字・対訳 玉 城 琳 子

金持人ぬ女ん子ぬ、うぬ炭焼ちやー妻なとーるばーて。うぬ炭焼ちやーん、また知恵おまんどーてーるばー。

炭お作てい売いねー、くまきーや取い拾てい、「私が、結婚式する場合に、いったーやくぬ錢ぐわー持つちち呉りよー、私にんかい取らしよー」りちやぐとう炭焼ちやーや。「あんやんなー」あんし、むる延びてい買たいぬーさいそーせーむる結婚式ぬ場合に持ちちやんりよ。

あんさぐとう、妻なとーせ金持人やせーや。あんさぐとう、うりがあぬうんぐとーぬ貧乏者ぬなー炭焼ちやー妻るなとーるむんぬ、心配がそーら分からんむんりち、母ぬ親ぬ黄金ムルシよ、うり米ぬ中んかい入つてい持たしさぐとう。「なー食むしん無んむん、私達あ家あ行ち米ぐわー取つてい来んなー」り、夫んかい言ちやぐとう。「親ぬ家から貰せー、うんぐとー難しいむのーねんしがあんせーなー行ちゆんでー」んち行ちや

金持ちの家の娘が、炭焼きの妻になつたつて。その炭焼きは、またとても賢くてね。

炭を焼いて売る時に、その細かい炭は拾つて、「私が結婚式あげる時に、貴方はその代金を私に持つてきなさいね」と炭焼きが言った。「それでいいのか」と、支払いを延ばして買つていった人は結婚式の時に代金を持つてきたつて。

そうしたら、妻になつていいる人は金持ちなのでね。それで、娘が貧乏者の炭焼きの妻になつて苦労しているかもしれないと思つて、娘の母親は黄金ムルシを(金のかたまり)米の中に入れて持たしたんだつて。「もう食べる物もないので、私達の家へ行つて米を貰つてきてくれないか」と(妻が)夫に言った。「親の家から貰つてくるのは、とても恥ずかしいことだけど行くことにしようか」と(米を貰いに)行つたそうです。米を貰つ

ぐとう。米取つていち後お、うぬ妻ぬ一生懸命なうぬ米かちやーそんぎさんてー。かちやーちやぐとう、「何が、いやーうんぐとうする」りちさぐとう、「何ん入つちがうらー」りち。

「あぎじやびよー、いったーアンマーや。私にんかい重さしみてい、石ひやー米ぬ中んかい入つてい持たちやー、道中んかいはん投ぎたせー取やーに」り言ちやぐとう「あいえー」りちなー、妻えすぐなーじこーうりそーぎさんてー、「今取ていくー」り言ちやぐとう。「あーあれー、私が、魚釣すん所にいっぺーまんり」り言ちやぐとう「何処なかいうりがあが」んり言ちされー「必しあん」り。あんさーに「本当にあみ」り言ちやぐとう「あんり」り。行ぢ取らやー」り言ちやぐとう、本当んちや取いが行ぢやぐとう黄金やたんり。海なかい石なていあるぐとーんて、黄金が。

あんさぐとう、あぬだーうりがあぬ妻え妊娠そうせーや。妊娠とーぐとう、「いったー食みぶーやあらん。うぬボージャーが生まりていから、うれー取いがくーよー」り言ちやぐとう、「ひー」りち、ボージャーが生まりていから取いが行ぢやぐとう、うれー取らつたんりよ。

てくると、妻は一生懸命その米をかき混ぜていたつて。妻が米をかき混ぜていると、「どうして、お前はそんなことをしているのか」と言つたので、「何かが入っているかもしれないので」と言つた。

「大変だよ、お前の母親は。私に石の入つた重い米を持たして、道中で取つて投げすてたよ」と夫が言つたので「えー」と言つて、妻は非常にびっくりして、「今、それを取つてきて」と言つた。「あれは、私が魚釣りをする所にたくさんあるよ」と言うので「何処にそれがあるの」と妻が聞いてみると「必ずある」と。そして「本当にあるのか」と聞くと「ある」と。「それでは、そこに行つて取ろうか」と言うので、取りに行つたら本当に黄金だつたつて。海の中では黄金が石にみえてね。

また、炭焼きの妻は妊娠しているのでね。妊娠していたので、「貴方の食果報ではないよ。子どもが生まれてから黄金を取りに来なさい」と言われると、「えー」と言つて、子どもが生まれてから黄金を取りに行つたら、それが取れたそうです。

あんすぐとう、うんにーからる「子ぬ食ぶー、親ぬ食ぶー」りせーあんど。ポージャーが生まりとーくとうりち、あぬだー、うぬ黄金取らつてい。子ぬ食ぶーや親ぬ食ぶーうぬポージャー食ぶーやてーん。あんしるうぬ言葉なかい、「子ぬ食ぶー、親ぬ食ぶー」食みぶーり言いるばーて。子あ得ぬあてーるばー。うぬふーじーぬ話ぬあいびーたんどー。うぬ炭焼ちやー、貧乏者やしが、「貧乏者やくとうりち、うせーるな」り言ゆる言葉、うりから出じとんふーじやびたさー。

41 藁しべ長者

親ぬ譲りんちやー、親ぬ譲りんち、藁シンビー一ち取らちえーたんりや。あんし、かんし取らさつたぐとう、「あきさびよなー、うり一ちし。あー考えるでーいちやる」んち、人お考えるでーいちどーりせー、うりや

だから、その時から「子どもの食果報、親の食果報」とあるよ。子どもが生まれたからといって、その黄金が入って。子どもの食果報である、親の食果報は子どもの食果報であった。だからこの言葉に「子の食果報、親の食果報」と言っているよ。子どもは得があつたんでしようね。そんな話があつたよ。その炭焼きは、とても貧乏者だけど、「貧乏者といって、馬鹿にするな」という言葉は、それから出たそうですよ。

採集S52・2・26 読谷村民話調査団第十二班 へ山入端孝子・遠藤庄治

話者 奥原松助 (明治三十年八月二十四日生)

翻字・対訳 玉城琳子

親の譲りといつてね、藁シベを一本譲り受けたつて。藁シベを渡されたので、「どうしようかな、それ一本では。もう考えが何よりも大切である」といって、人間は考えが第一というのは、こういうことなんでしよう

るぐとーんてー。

あぬだー、味噌売やー所んかいりがらーん行ぢやんりよ。うぬ、藁シンブーーち持つち行ぢやぐとう、「えー童あ、いやー藁シンブー私にんか貰らし」「あー、いやーちやんだー貰らさん。味噌ぐわーとう換いみそれー」んち、あんさーいうぬ味噌ぐわーとう換てい藁シンブー取てーぬばーて。

うれー取らち、うぬ味噌ぐわー自分ぬ取つていさぐとう。味噌お持つちやーに、また、あぬだー鍋ヌクー所んたがや、鍛冶屋あ所んでいがらー行ぢやんり。鍋ヌクー所んかい行ぢやぐとう、うぬ味噌お必要やせーやー、鍋ヌクーかいしりくわーち。あんさぐとう、「いやー、味噌貰らせー」り言ちやぐとう、「あぎじやびよー、うり味噌貰らすんなー。鉄とう換いみそれー」んち、あんし、鉄とう換てい、自分や鉄取てい、味噌おうりんかい取らちえーるばーてー。

あんさぐとう、うぬ鉄え持つちやーに鍛冶屋んかい行ぢ、「いやーむのー、うぬ鉄え上等ぐわーでーむん、私にんかい貰らせーひや」り言ちやぐとう、「あんせーならん、シーグぐわーとう換り」りち「とーあんせー、

ね。

あの、味噌売りの所へ行つたつて。その人は藁シベ一本持つてそこへ行つたらね、「おい子どもよ、お前の藁シベ私にくれ」「いや、ただで譲ることは出来ない。味噌と交換して下さい」と言つて、それで味噌と藁シベを取り換えたわけだよ。

藁シベはあげて、その味噌を自分は取つてね。味噌を持つて、今度は鍋細工の所だったか、鍛冶屋の所だったかそこへ行つたつて。鍋細工の所へ行くと、その味噌は必要だからね、鍋の修理には。そうしたら、その人が「おまえの味噌譲らないか」と言われて、「たいへん、この味噌はあげられない。鉄と交換して下さい」と鉄と交換して、自分は鉄を取つて、相手に味噌をあげてね。

それからまた、その鉄を持つて鍛冶屋へ行き「お前の鉄は上等だね、私に譲らないか」と言われて「そんなことは出来ない、小刀と交換してくれ」と。「それならこの小刀と交換しよう」と言つた。それで小刀と交

うぬシীগとう換らやー」んち。あんしシীগとう換
てい、うぬシীগ持つちうりから出世さんりぬ話てー。

菓シンブー、一ちぬ金持りせー。

人お自分ぬ頭働かしりせー、うぬ知恵やぬぐとーびー
さー。うぬ考えぬ、やつぱり強さてーるばーやびんよ。
あんしる、菓シンブー、一ちさーに成功さんりせー、
うぬ意味やぬぐとーん。考えぬあてーるばて。

採集S 52・2・26 読谷村民話調査団第十二班へ山入端孝子・遠藤庄治

注① 菓シンブー イネの穂の芯。方言で菓シンブー、また菓シンブーという。

注② ナービナクー 鍋釜の修繕をする人。戦後まで民間をまわって「ナービナクーサピラ」(鍋の修繕をしましょう)と、大声をはり
上げて歩きまわった行商人がいた。

42 姥 捨 山

話者 波 平 秀 (大正四年八月十日生)

翻字・対訳 玉 城 和 美

これは、あの昔、六十一歳ないねー年寄やなー上々
から空き墓んじ入りーし、必要無んぐとーりち。

これは昔、六十一歳の老人になると王府の方から入
り用がないから空き墓に入れなさいと言われていた。

あるな―男いしが子ことういつペー愛あなさしそーる親うやっふん子こやし
が、な―仕しかた方かたなくに女いながぬ親うや連なおてい行いんぢ。今いま家やうてい
仕し事ごとんせーわーばんじないるあたあいぬろくじやうあま六十ろくじやうあま歳さい余あまとーく
とうんりちる、うれー上いからな―六十ろくじやうあま歳さい余あまいぬ人ひとお、
うぬ番ばん地ち調しらびや―ないかい直しぐ巡めぐていつち、居ういね―家や
族いんじやし直しぐ所ところ 払はらしちさりーたいんりや―に大だい事じりや―に
な―仕しかた方かたなくにあんしみて―ならんりち、親うやから願ねがてい
うぬ子こんかい「早へいくな―私わんね―や、な―覚かく悟ごそーぐとう
連なおてい行いんぢとうらさんな―」りちさぐとうー、背う負ふ
し行いんぢ、な―山やまんかい連なおてい行いんぢや―に筵むしろぐわーん
何なんん持もつち行いんぢ敷しち、な―うぬ子こあな―忍しのばらんうつ
返かえてい見みじえ女いながぬ親うやあかちらちえーういしさぐとう。
仕しかた方かたなくな―また「家やかいとー早へいく夕ゆ暮くらんまーるいや―
家やかい行いきよー」りち。あんし家やかい行いんぢ。

うぬ女いながぬ親うや、な―また子こぬ事ことん思おもい、あぬ道みち迷まいし―
ね―ならんまた家やかい道みちん搜ため―てい行いきわるやいり
や―に歩あちやがち―直しぐ木きぬ枝えだぐわーやかんしむる折う
てい捨ひていて―うい、おお―ぬ木きぬ枝えだ折うて―捨していて―
し―し―、うぬ行いちやがち―さぐとう。うぬまた帰かえり
に道みち迷まいさんぐとうりや―ないかい。

そしてとても仲なの良よい親おや子こが居いたが、仕しかた方かたなくに母はは
親おやを連なれて行いつたそうだ。今いまでも家やで仕し事ごとをさせたら
充ち分ぶん出で来きるくらいなのに六十ろくじやうあま歳さい過あぎだからといつてね、
これは王わう府ふから六十ろくじやうあま歳さい過あぎの人はその人の住す所しよを調しらべ
てすぐ回かえつて来きて、居いると家や族いんじやし全ぜん員いん所しよ払はらいをさせるの
で大だい変へんだと言いつて親おやの方かたら子こどもに願ねがつて「私わんは、
覚かく悟ごしているので早へいく連なれて行いつてくれ」といつたの
で、子こどもは母はは親おやをおんぶして山やまの方かたへ連なれて行いつて
ムシロを敷しいてあげたが、その子こどもは忍しのびなくて振ふ
り返かえつて母はは親おやを見たりしていた。もう仕しかた方かたなく「夕ゆ暮く
れになる前まへに帰かえりなさい」といわれて家やに帰かえつた。

また母はは親おやは、子こどもの事ことを思おもい、道みち迷まいしないよう
にと歩あきながらすぐ木きの枝えだを折うつて捨してながら行いつた。
そうすると帰かえりに道みちに迷まう事ことはないということだつた
よ。

うぬ嫡子えなー泣く泣くうぬ親とう別りてい、家か
い行ちゆんりしーに「女ぬ親ぬ知恵お、んちやなーか
なーんむんなーりち。子ぬ私わが道迷いしみるん考えり
やーにうんぐとう木ぬ枝ん目印に折てい捨ていていとう
らちえーさ」りち。親ん、いかな年寄やていん宝やし
がやーり思とーいがちなー連おてい行ぢ。

あんし、あるなー男ん子あなー肝ぬ忍ばらん、ある
村ぬ会議ぬあやーなかうまうてい、何りる話、「黒繩
御用りーねー何んち、ちやーしさらーましがやー」り
ち皆上からぬ言い付きてーなー、うり黒繩御用りち、
御用さつていそーちやぐとう。「ちやーしさらましがやー」
り、うり女ぬ親んかいそーぬぎてい女ぬ親のー分か
ぬはじりやーにあんしそーしが。

とーなーくれー何んしむぐとうやー女ぬ親連おてい
行ぢ、家ぬ床さぬ中んかい穴掘やーなかうまかい
ちよーきわるやつさーりち、うぬ女ぬ親ああんさーに
隠くわち食物んかやーち食まちや子ぬ。「なーあんしん
山やかーましやぐとうよーアンマー辛抱し」りち隠くわ
ちうち、食物ん食まち。

あんし分からんぬーがあいねー、うぬアンマーから

そして長男は泣く泣く母親と別かれて、家に行こう
とする時に「母親の知恵にはかなわな、私が道迷い
しないようにと木の枝を目印に折って捨ててくれたん
だね」と。いくら年老いても宝なものと思つていな
がら連れて行つたからね。

そして、その長男は気持ちが悪くなくて、ある村
の会議での話で、「黒繩御用とはどうしたらいいか」と
王府から言い付けで黒繩御用というのがあつた。「どう
したらいいか」と、母親だつたら分かるはずだと急い
でいつてたずねようとした。

そうしたらどうでもいいから母親を連れて来て、家
の床下に穴を掘りそこにおいておこうと考え、その母
親を隠して食べ物も運んであげていた。「それでも山よ
りはまじだと思つたのでお母さん辛抱してよ」と隠して
おき食べ物もあげて。

そうして分からない事があると、そのお母さんから

何んちちよーしが、村うていぬ話ぬうりやしが「くれーや、縄巻ちやーにやー焼ちや、うぬまま鉄んかい広ぎやーに焼ちうり触いんさーよーい持つち行ぢしーるんせー黒縄御用なとーさ」りちさくとう。うりんなー当たてい、うりん年寄りの考え。

またなー「ちえー、宮古りる所んかい山ぬあぬらーうり持つち来りちやぐとう、丸懐しーし持つち来りちやぐとう、」木てーうり持つち来る運ぶる船が無らんせーやーうぬ船造てい呉みそーれー、私が丸懐しーし持つちやーびぐとう」りちまたうりん申し出じりりち上ぬ人んかい。あんさくとううりん親ぬ考え。「あん言れー」りちさくとう、「あはー、んちやうぬ船ぬありわる積りん来らりーさや」「うりんあさやー」「うまーまたうり船造いるうひなーぬ木、丸懐ししちゆーる木や船や造ららんむー」りやーにあんし上ぬ人おうりん詫びし。なー「ちん解ち。うぬ女ぬ親んかい習い方さくとううりん親ぬ習ち。

あんさーなかい「いえーいやーや、いあん一人さーなかいうりちやーし考たが」りち上ぬ人んかい長男のー呼ばりやーに言らつたぐとう、「うれー私考あいびら

聞いて、村での会議でも「これは縄を巻いて燃やして鉄板の上に広げて、そのまま触らないように持つて行くと黒縄御用になっているさ」と。それも解いてね、これも年寄りの考え。

そしてもう一つ、宮古という所に山がありそれを持つてきなさいという、丸ごと持つてきなさいと言ったら、「その木を運ぶ船が無いのでその船を造つて下さい、そうしたら私が丸ごと山を持つて来ますから」とこれも申し出なさいと王府から言われた。それも親の考え。「そう言いなさい」と言ったら、「そうだ、その船があつたら積んでも来れるね」「それもそうだね」「船を造る大きな木を丸ごと壊して持つてこないと船は造れないよ」とこれも王府の人は詫びた。これも母親に教わつて解いたよ。

そうしたら「どうして貴方は、一人でそれを考えたのか」と長男は王府の人から呼ばれて聞かれたが、「これは私の考えではありません、実は私の母親の所に行つ

ん、あぬ実え私達あ女ぬ親ぬ所んじや聞ちやーびたん
どー」りちやぐとう、「とーあんせー年寄や宝やぐとう
や頭ぬまーらし、年ぬ甲や龜ぬ甲りちや年寄や今から
宝るやぐとう、絶対六十歳なていん捨ていーが行ぢえー
ならんぐとう呼び戻ち来」りち、あんさーなかいうぬ
親んなー一緒ん暮らすぬ事なたんり。

て聞きました」と言ったら「それじゃ年寄りは宝なの
で、頭の回転、年の功は龜の甲といって年寄りは今か
らは宝なので、絶対六十歳になつても捨てにいつては
いけない、呼び戻して来なさい」と言つて、それから
親も一緒に暮らす事になつたそうだと。

採集 S 52・2・26 読谷村民話調査団第十一班（大宜見光一）

注 姥捨山 沖縄の伝説では、六〇歳を過ぎると、アムートウヌシチャに捨てた。アムートウ（畦あるいは岩屋）

43 姥捨山

話者 奥原松助（明治三十年八月二十四日生）

翻字・対訳 玉城琳子

六十歳余れーから、年寄や必要あらんりやーに、く
ぬ畑ぬ畦んかい持つちんじ、立派わんれーかたすしが。
くれー、いふーなむん注文さつてい、なーちやーさ
らましがりんち非常に困難そーる場合に、うぬ年寄ん
かい行ぢやーに、「かんしうりさつとーびしが、ちやー

六十歳を過ぎたら、年寄りは必要がないといつて、
畑の畦に捨てられたつてよ。

ある日、難題がおきたので、もうどうしていいのか
若者たちはとても困つて、捨てられた年寄りの所へ行つ
て、「このような注文がきているけど、どうしたらいい

さらーましやいびがやー」「はー、とーうぬあたいやどう
易むんでーる。何があんせー、繩縋てい御膳ぬんかい
たくり置ち焼ちるんせー、立派な灰繩どーや」りちや
ぐとう。

「あんでーびーるい」りち、若さしが考いさん、う
ぬ六十歳余とーみせーぬ年寄ぬ考てい話さぐとう、「あ
んるやいびーるい」りち考やーにさぐとう、「年寄必要
でいやんむんなー」りやーに。

うんにんから、くぬ年寄うんちけーさんりぬ話ぬあ
いびーたしが本当がら、何がら、うれー私にん分かや
びらん。

でしようか」と聞いた。「まあ、このくらいは簡単なこ
とだ。それじゃ、繩を縋つてお膳にたんで置いて燃
やすと、立派な灰繩になつてゐる」と教えた。

「そうですか」と言つて、若者たちが解けない問題を
六十歳余る年寄りが解いたと言つと、「そうだったのか」
と考えなおして、「年寄りも大事であるね」と言つてね。

その時から、捨てられた年寄りは家に連れ戻されて
大事にされたという話がありました。が、本当だったの
か、それは私にもわかりません。

採集 S 52・2・26 読谷村民話調査団第十二班へ山入端孝子・遠藤庄治

44 逆立ち幽霊へ十六日由来

話者 奥原山登（明治四十年十月二十九日生）

翻字 玉城和美

ある所に非常に美人の妻をもつた夫が、あまり自分の妻がきれいであるので浮気はしないか、人に取られはしないかと恋の病をおこして寝たつきりした夫がいた。

で妻は非常に心配してお医者さんなりいろいろやつたが、その病気は全然無いというので、どうしたことかと思つて、ある日夫に「貴方は、お医者さんがおね、何の病気ももつて無いというのに何故寝たきりで起きないか」と言つたら「実は、わしはお前があまりきれいで、俺を振り捨てて別の男の前に行きはせんかと心配して私は寝ている」と言つたら、妻は「私はそんな女ではありません、じゃー貴方の病気が治る事があつたら私は姿を失つてもかまいませんから」と言つたら「よろしい」と言うたから、その女は決意して自分の鼻を刺つたと。鼻もーになつたぞうだ。「こうなれば別の男の所に行く事も出来ないし、また別の男が惚れる事もないでしょう。これで満足したでしょう」と言つたら、男も安心してしばらくは、病気も治つて暮らしていたが、月日のたつにつれ妻は醜い鼻もーになつたからね。

今度は自分が浮気して、辻を通つてその辻の女と仲良くなつて。でその辻の女の方が、はるかに自分の妻よりもきれいだから、今度はどうにかして自分の妻を殺して、その辻から連れて来た女と同棲しようという一つの企みを持つてしまつて。そしてその辻の女が、「じゃーあれを殺害するには私が良い考えがあるから、毒をね飲ましてやるから」と。

で今度はその鼻もーになつた妻に「あんたは元はきれいだつたが、今は鼻もーになつて醜い女になっているからこの薬を飲んだら元通り鼻が生えてくる薬であるから飲んでくれ」と言つたらその妻もね、「じゃーまた鼻でも生える薬があればこれは飲みましょう」と。そしてその薬は飲んだが、実はそれは毒でとうとうその場で死んでしまつた。

で葬むつて。したら十六日には、友達やら近所の人が集まつて線香たてに來たらそのお供え物のウサンデーを配つて、ある人が餅を食べたら腐つてゐるからね、「この餅はいつ作つたものか」と「いやこれは昨夜作つたもの」「腐つて食べられない、何かこれは意味があるね」と言つて。そして別の物も食べたならみんな腐つてゐるね、「これには確か何かがある」と言つてゐる時にそこに現れたのが、その鼻もーの元の妻が現れていた。

そうしたからこの男は怒って、「死んでまでもまたここに現れるか」と言つて、それで墓を開けて黒綱でもつて縛つて出られんようにしたつて。

そうしたらもうその女は悔くて、どうにかして敵を討ちたいけれども括られていてでしよう。で非常に苦しんで、人によく見られて幽霊が出るといふうわさが首里中に広がつてね。である侍がこれは許してはおけない、化け物か本当の人間かを確かめてみようと思つてその人が行つてみたらやつぱしその女が墓の中で「助けて下さい、助けて下さい」と言つて。「お前は何か非常に深い事情があるからね」「是非墓を開けて私を助けて下さい、私は括られていますから」と。でその侍は「じゃーその意味をここで聞かせ」と言つたら、今までの一部始終を話したらしいよ。そうしたら、その侍はあまり気の毒になつて、墓を開けて見たら黒綱で括られていた。「じゃーはずしてあげよう」「でもう一つお願いがあります聞いて下さい」「何か」と言つたら「向こうの家にはね、その魔除けという符札が貼られている。あれを是非立て書き換えて、私の入れるようにして下さい」でその侍は「そうね」と言つて家に行つて、「このあんだ方の符札は間違つているから書き換えてあげよう」と言つて新しく買った符札をはいで、その侍がただ書いて。そうしたらその鼻もーになつた妻はね、幽霊は入つて来て。

したら今、辻から連れてきた女が鼻もーにそっくり見えたらしいよ。それでその夫は真つ先にその幽霊を切つたつもりだが、実はその辻から来ていたその女を切つてしまつて。そして自分も自害してね、全滅したという十六日の話があつたわけです。

採集S52・2・26 読谷村民話調査団第五班 宮里洋子・小橋川清一

注① 十六日(ジュウロクニチ)旧暦一月十六日は後生の正月で墓前祭を行う。昨年(せんねん)の十六日以後に死者を出した所は、墓前祭と自宅での焼香がある。

注② 辻 那覇にあつた遊郭の名、沖縄各地の、多くは農漁村の貧しい家々から幼少の時売られてきた。またはそこで生れ育ち、性を

売る”ことをなりわいとする女たちだけで形づくっている社会であり、「花ぬ島」ともよばれていた。本土人、中国人、首里、那覇の上流人を相手とした高級な遊郭であった。

注③ ウサンデー おさがり。神仏への供物をさげること。直会なおらい。

注④ 首里 153頁参照

注⑤ 符札（フーフグ） 家や屋敷の中に悪風が入ってこないようにと、家の中柱や出入口などに張る。

※ 鼻もー ここでは鼻をそり落としてないこと。

45 逆立ち幽霊

話者 奥原松助（明治三十年八月二十四日生）

翻字・対訳 玉城琳子

病気びんきさぐとうや、妻とうじえ、大変美らかーぎやたんりよ。
やぐとう、「人ちよおなーあんし病気びんきし、なー早へいくなー治ら
んどうあれーならんれー」り言いちやぐとう、「何なぬ思おもい
があが」り言いちやぐとう、「私わんなかいや、私わがけー死しに
ねー、いやー誰たあ妻とうじないがやーんち、ちやーうりびけー
る考かんげとーる他ふかねー考かんげとーせー無なん「あんやんな」りち。
あんさぐとう「あんすか、貴方うんじやが気きにかかとーるん
さーやー、私わんねー鼻はなうすていんしむん。いかなしん夫うとお

（夫が）病気してですね、妻はとても美人だったつてよ。それで、「人がこんな病気にして、早く治つてもらわないといけない、何の心配があるの」と言つたら「私は、自分が死んでしまつたら、君は誰の妻になるのかと、いつもそればかり考えて他に考えていることはないよ」「そうね」と。
そうしたら（妻は）「そんなにまでして、あなたが心配しているんでしたら、私は鼻を切り落としてもいい。

持ったん」り言ちやぐとう。

なうりから女おな、夫んで一死なすやかねー自分ぬやなかーぎないせーましんりやーに、すぐ鼻打てい鼻もーなてーぎさんてー。

あんさぐとう、なーやなかーぎないせーや。人お鼻が無んないねーやなかーぎなたくとう、なうんにーから夫んやすんじてい、病気えむる治とるばてー。治ていさぐとう、「なうんぐとうやなかーぎうんとーしーなていねーらん。うれーはんなぎらんあれーならん」りち。うんぐとう、やなかーぎー捨ていらねーならん、妻しねー大事、私ねーはんなぎたぐとう。うぬ女おなー病気し、けー亡しよ。

あんさーになーいちぐうぬ夫ぬ前なかい逆になてい反対に来るばて。来ぐとう、「あきさびよな、くれー死じからうまんかい来んむーな」大事な大事なことんなー逆立ち幽霊」りち。あんさーに、「うれー、足ぬあぐとうるうまんかい来る」りち墓んかい行ぢやーによ、すぐ鉄釘打つちくでーぎさんてー。あんしし、逆立ち幽霊りせー話ぬあたんよ。

絶対に結婚はしません」と言つたそうです。

もうそれから妻は、夫が死ぬよりは自分が醜い顔になつた方がまだましだといつて、鼻を折つて鼻が無くなつたそうです。

そうしたら、もう醜くなつているでしょう。妻は鼻が無くなつて醜くなつているので、もうその時から夫の病気もみんな治つてね。病気が治つたので、「もうこんなに醜くなつている(妻は)捨てないといけない」と。妻にしておいては大変だといつて、追い出してしまつたそうです。その妻はもう病気して死んでね。

それからいつも夫の前に逆になつて現れたそうです。妻が現れたので、「大変だ、これは死んでからもここに現れてもう大変なことになつている。逆立ち幽霊だ」と。また、「これは足があるからここに現れるんだ」と墓へ行つてね、すぐ釘を打ちこんだそうです。そういうことで逆立ち幽霊の話があつたよ。

46 身代わり 観音観音 焼御観音焼御観音

話者 阿波根 庸 秀 (明治三十三年十二月一日生)

翻字・対訳 島袋 智子

焼御観音やきうくわんぬんというのはよー、観音様かんのんさまです。この女いなかお、親うや早く失うしなてい。あんし、なー非常ひじょうに困窮くんきゆうぬ育すだちしうりそーしが。今度こんどお是非じひど自分自分くる自分自分ぬうれー、うりさんでーならんでいるうりし、あるなー金持えいさんちゆ人やぬ家やんかい女じよーしちや中あしえーるばー。

くぬ家やや、元々むとつむとつ、観音かんのんいっペー信しんじとーる家ややしが、うりがうりしから、うまぬ主人しゅじんぬあんまりそういううぬ、信仰しんこうぬ無なんやーに、くれーあま置うちくま置うちなー、観音くわんぬんぬ祀まつりん何なんさん、置うつちやんぎていせーし。くぬまた、女じよーしちや中あなていそーるうれー、「ああ、観音くわんぬんさま様、御神うかみか加那志がなしるやる、あんし捨ひてい置うちにしあんしんないがやー」んでいるうりしさくとう。なー、あまにんくまにんむる置うつちやんぎーほーりーるさつとーぐとう、なー自分自分ぬちやーうりする、言いいるんしえー、昔むかしぬうれー、台所だいどころんかいシムんでいたしえー、シムんかいいっばーんじ箱はくんかいうりし。

焼御観音焼御観音というのはね、観音様観音様です。この女女は、親親を早く失失つていた。そうして、もう非常非常に貧乏貧乏な育育ちしていたわけ。それで、是非是非自分で自分自分のことはしなといけないということ、ある金持金持ちの女中女中になつたわけ。

この家は、もともと観音様観音様をととも信信じている家家だが、この女中女中が来てから、ここの主人主人はあまりそういう信仰信仰はなくなつて、観音様観音様をあつちに置き、こつちに置きして観音様観音様の祀祀りも何何もなく置きつばなしにしていた。もう、この女中女中になつている人は、「ああ、観音様観音様は神様神様なのに、こんな置きつばなしにしていいのかなあ」と言言つて。そうして、置きつばなしにされていたから、もう自分がいつもいる、いわば昔昔の台所台所にはシムといつていたから、シムの片隅片隅に箱箱に入れておいた。

うれーまた、毎日な、拝^{うが}り信^{しん}じていうりそーてーるばー。くりが、うまぬ女主人^{いなかしゅじん}ぬんかい知^しりやーに、あんし、「いやーや、ちゃーうぬ箱^{はく}ぬ前^めんじうりさぎーしが、何^ぬぬ入^いつちよーが」んりる事^{こと}うりさつていさぐとう、「あつ、何^やんうれーあいびらん、私^わが何^やんうりし盗^{ぬす}りし、うまんかいうりせーるむぬんあいびらん。何^やんあいびらんくとう」んでいちそーしが、「なー、いやーや疑^{うた}げーぬうりやくとう」でいるうりさーに。今^{こんど}度^どお、「箱^{はく}開^あきり」んち箱^{はく}開^あきらさつていさぐとう、自^じ分^{ぶん}ぬ言^いいるんしえー、親^{うやふあ}祖^{ふじ}先^{せん}からかんし信^{しん}じてーる観^{くわん}音^{おん}ぬうまんかいうりさつとーるばー。くりが、本^{ほん}当^{とう}ぬイージョーやあらん、仏^{ぶつ}像^{ぞう}やてーるばー。

あんししさくとう、「いやーや、私^わ達^たがうりし私^わ達^たが人^{しん}信^{しん}じらんむんぬ、うり信^{しん}じてい何^やすがんでいる、いやーがうんぐとうし、うりする訳^{わけ}ぬあみ。許^{ゆる}さらん」りち。

あんさーに、うまから追^おい出^いじやさりーるあたぬうり、折^せ檻^{かん}さつてい。あんしん、「私^わにん、今^{いま}がえかくまうていくり拜^{うが}りそーぐとう、私^わにん自^じ分^{ぶん}ぬ自^じ分^{ぶん}むつちゆるあたぬうりまで、私^わねー置^おちよーてい呉^くそー

そうして、この女中は、毎日拜^{うが}んで信^{しん}じていたわけ。このことが、その家の女主人^{いなかしゅじん}に知^しれて、「お前は、いつもその箱の前^{まへ}でそうしているが、何^{なに}が入^いつてゐるのか」と言^いつて叱^{おこ}られたから、「いや、何でもありません、私^わが盗^{ぬす}んでここに入^いれたものではありません。何でもありませんから」と言^いつてゐるが、「もう、お前^{まへ}には疑^{うた}いがある」と言^いつて、「箱^{はく}を開^あけろ」と言^いつて、箱^{はく}を開^あけさせたから、自分のいわば、親^{うやふあ}祖^{ふじ}先^{せん}から信^{しん}じていた観^{くわん}音^{おん}がそこに入^いつていたわけ。これは、本^{ほん}当^{とう}のイージョーではなく仏^{ぶつ}像^{ぞう}だったわけ。

そうして、「お前は、私^わ達^たが放^{はな}つて置^おいて私^わ達^たがもこれを信^{しん}じないのに、これを信^{しん}じてどうするか、お前^{まへ}がそんなことをするわけにはいかん。許^{ゆる}さない」と言^いつて。

そうして、そこから追^おい出^いされるくらい折^せ檻^{かん}された。それでも、「私は、今までここでそれを拜^{うが}んでゐるので、私^わが自^じ分^{ぶん}で働^{はたら}ける間は、ここに置^おいて下さい」と言^いつて、どんなにか願^{ねが}ったが聞^ききいれなかつた。あととは、

「らんち、何回願なんちがていんうれーさん。あとー、昔んかしぬ、
そういう金持えいさんちや人やくとう、火鉢ひばち何ぬーらんちんあいるす
てーさに、昔んかしや火灯籠ひどうるめい何ぬーらんちんあてーぐとう、う
りんかいうりつし、また火灯ひちやうやていん火鉢ひばちやていん、
茶ちやうぐわーうりさい何ぬさいするうりやしが、火箸ひばしえうま
んかいかんし立たていていうりしえーし、「いやーや、ふ
るとう口くちとう悪わつさぐとう」んでいやーに、顔ちやうんかい火
箸ばしたつくわーちやんでい。

あんししさくとう今こんど度どおうりが、うりさりーねー痛や
みんすい、なーしうりそーしが、うりなかい傷きずえちやつ
ぴんちかんたんでい。うぬ女じよ中ちやあ女いなんかいや。あんし、
あとうにし、くぬ箱はこんかいうりさつとーる観音くわんぬん見けんちさ
くとう、観音くわんぬんぬすぐうまなかい、火箸ひばしぬ型かたぬ入いつちや
んでい。あんさぐとう、本ほん当とうぬまささる観音くわんぬん様さまやみしえー
てーるばーてー。あんさぐとう、本ほん当とうぬ観音くわんぬんのー、く
まるやるんでいるうりからうりさーに。

あぬ、ひーじい女じよ中ちやあ顔ちやうんかいる、口くちん悪わつさい、いやー
や精神せいしんぬん悪わつさくとうりやーにたつくわーちるあしが、
うぬ女じよ中ちやあぬ顔ちやうなかいや、何ぬ傷きずん無なんしが、観音くわんぬんぬ
またうまなかい火箸ひばしぬうりが付ちちやんり。

昔んかしの金持えいさんちやちは、火鉢ひばちなど、また灯籠ひどうるめいとかあつたから、
それにお茶を沸わかかしたり何なんしたりして、また火箸ひばしをそ
こに立てておいてあつたから、「お前は、育そだちと口くちが悪わる
いから」と言いつて、顔ちやうに火箸ひばしをくつつけたつて。

そうして今こんど度は、そうされたら痛いたいはずだが、その
女中にようぢゆうには少しの傷きずもつかなくつたそうだ。そうして、
あとで、箱はこに納いれめられている観音くわんぬんを見ると、観音くわんぬんのそ
こに箸しよの型かたが入いれつていたつて。そうして、本ほん当とうに崇高そんかう
な観音くわんぬん様さまであられるわけ。それでここが本ほん当とうの観音くわんぬんで
あると。

それからして、いつも女中にようぢゆうの顔ちやうに、お前は口くちも悪い
精神せいしんも悪いからとくつつけられたわけだが、その女中にようぢゆう
の顔ちやうには、何なんの傷きずも無いが、観音くわんぬんのそこには火箸ひばしの跡あと
がついていたつて。

あんさぐとう、くりが本^{ふん}当^とぬまささみしえーる御^{くわん}観^{ぬん}音
やみしえーんでいち。あんさーに、あまからんくまか
らんない、くぬ言^いいせー、うぬ御^{くわん}音^{ぬん}ぬうり、またあま
んかいん、くまんかいんかんし広^{ひろ}がていさくとう。う
りが、焼^{やき}御^{くわん}観^{ぬん}音^ぬ話^{はなし}。

それで、これが本当の崇高な観音様であられると。
そうして、あそこもここもと、この観音が広がっていつ
たつて。これが焼御観音の話。

採集 S 52・2・26 読谷村民話調査団第五班〈宮里洋子・小橋川清〉

※「イージョー」 観音。

47 子^こ供^{ども}の寿^{じゆ}命^{みよ}〈米^{べい}寿^{じゆ}由^ゆ来^{らい}〉

話者 儀 間 真 治 (明治三十九年五月三日生)

翻字 玉 城 和 美

ある部^ぶ落^{らく}にね十八^{じゅうはち}歳^{さい}なる青^{せい}年^{ねん}がさ、親^{おや}孝^{こう}行^{こう}者^{もん}でそれから働^{はたら}き者^{もん}で、それから顔^{かほ}も立^{りつ}派^ぱな好^{こう}男^{だん}子^しでね。それが牛^{うし}を
持^もつて畑^{はたけ}を耕^{たがや}していたそうだ。

そうする時^{とき}に、この天^{てん}のニーフアぬ星^{ほし}というのは、生^いきている人^{ひと}の面^{めん}倒^{だう}をみる星^{ほし}でる。またウマヌファぬ星^{ほし}は
後^ご生^{そう}、死^しんだ人^{ひと}をおさめる星^{ほし}である。この若^{わか}いのがこの牛^{うし}を持^もつていつて、スキを使^{つか}つて畑^{はたけ}を耕^{たがや}す所^{ところ}にこの星^{ほし}が降^お
りて来^きてさ。そうしてこのウマヌファぬ星^{ほし}が「あ、この子^こは可^か哀^{わい}相^{そう}ね、もう十八^{じゅうはち}歳^{さい}の運^{うん}命^{めい}であるがこんな働^{はたら}き者^{もん}
で可^か哀^{わい}相^{そう}ね」と言^いつてそのニーフアぬ星^{ほし}に伝^{つた}えてさ。二^{ふた}人^{たり}そこの側^{そば}を通^{とお}つて行^いつたそうだ。

それからそのお爺さんがね畑帰り、その後からついて来たそう。そのお爺さんがそれを聞いて、こんな恐ろしい事は無いと言つて心配して、早くもうその子のお母さんに知らせたいと言つた時に、お母さんはこの子の弁当さ、十二時の昼飯、これを持ってくる時に、「ちよつと待つてくれ」と言つてね、お母さんを止めて。「何ですか」と言つたら「実はここ通りよつた人がね、貴方の子は十八歳しか生きられない」と。

そうしたらもうお母さんは心配してどうすればいいかと言つてね、その持つていたその弁当もそこに降ろして、そうしてそのお爺さんに、「その人達は何処に行きよつたか」と聞いたさ。「今そこに行つておるんだから追いつくかも知れないから行つてみなさい」とそのお爺さんは言うてね。そしてもうお母さんは、一生懸命その人達の後を追つて行つたさ。追つて行つたらそのニーヌファぬ星の人がいて、それからウマヌファぬ星は何処に行つたか分からなけれどね、その人に聞いてみたそうだよ。「あんた方が今さつき見た男の子は、本当に十八歳しか生きられないか」と言うたら、「これはそうらしいよ」と言つた。このお母さんは「これは、どうすれば長く生きられるか」とその人に願つたそうだよ。

願つたら、「これは何月のまた何日はね、天からウマヌファぬ星が降りてくるから、その時にこの死んだ何をするんだから。この人が帳簿をやつてゐる時に聞かないから、帳簿もおさめて休んだ時にちよつと願つてごらんさい」と。「御馳走もこしらえて、酒も持つてきて願つてみなさい」と言うて、このニーヌファの星の方が教えたそうですよ。

だからこのお母さんは、さつそく家へ帰つてその日にちを待つてき、御馳走をこしらえて酒なんか持つて行つてさ。したらそのウマヌファぬ星はちゃんと聞いて、「この先私の子が 十八歳の運命であるという事を聞いて私は心配で今日はお願いに参つた」そうしたら「貴方もそんなに心配して願ひにきたらもう八年間は延びてやろう」と。

そうして、この十八歳だから、この八の字は上の方に書いたそうですよ。それから八十八歳になつたお祝い。そ

れからね八十八歳はちじゅうはちさいになつたらね終りだと言つて。昔は死んだ形かたちで、立派りっぱな物ものを着けて顔かほもタオルを被かぶせてね死んだ何なにして。昔むかしの線香せんこうねー、重箱じゅうばこを持もつて本当ほんとうの死しんだ人ひとの何なにをおくつてね。

それから翌日よくじつは、御飯ごはんをね赤あかいのを染そめて白ぬじと言いつてね。それから大おおきなタライたらいに米こめを山盛やまもりして、その中なかにあのトーカチとかちの赤あかい紙かみを巻まいてね。それを中なかの方ほうに立たてて御馳走ごちそうも沢山たくさん作つくつてそれからこの白ぬじとトーカチ注③を皆みなにお土産みやげに持もたしたがね。

採集S52・2・26 読谷村民話調査団第十班〈山城悦子〉

注① ニーヌファぬ星 北の方角の星。

注② ウマヌファぬ星 南の方角の星。

ニーヌファ、ウマヌファ 沖繩では、子、丑、寅・・・の十二支の神がいて、それぞれの方角を司る神がいると観念している。特に子こ(北)と午うま(南)は重要視されている。

注③ トーカチ 数え年八十八歳の米寿の祝い。旧暦八月八日におこなわれる。

現在でも親戚、隣近所、知人を招いて盛大に酒宴を催す。



米寿祝

塩が一番おいしい

話者 波平

秀 (大正四年八月十日生)

翻字・対訳 玉城 和美

これはね御馳走作るといつてね、ある昔の人の話。

あんしあの御馳走は取り寄せたが、これはどうして
な―食りんあんし美味くん無んや―、味ん無んどうや―
りちある人ぬ考え起くさ―に。

な―、くぬ海ぬ潮汲ま―に炊ち、考え起くさ―にど―、
炊ちや―なかいさぐとう、うぬ塩ぬ固や―に、「あは―
くり入り―ね―ちや―ないがや―」りち入つてい食ら
ぐとう、うんに―からうぬ御馳走や魚やていん肉やてい
ん、カマブクやていん何やていん、豆腐やていんうり
入りらんかじれ―、な―美味さむの―ならんどうあく
とう。世界ぬ美味しいものは塩といつて出来たそうで
すよ。

これは昔の人の御馳走を作るといつ話だよ。

そして御馳走は取り寄せたが、これはどうした事か
食べてもあまり美味しくないし味もないね、とある人
が考えてね。

そして、この海の潮を汲んで考えを起こして炊いた
らね、その潮水が固くなつたので、「ああ、そうかこれ
を入れたらどうなるかね―」といつて入れて食べて見
ると、その時から御馳走は魚でも、肉でもカマボコで
も豆腐でもそれを入れない限り美味しくならなかつた。
だから世界の美味しいものは塩というそうです。

49 貧乏神と福の神

話者 波平 秀(大正四年八月十日生)

翻字・対訳 知花孝子

ある働き者ぬ若者ぬよ居たんりしがて。ちやつ
さ働ちんむる金持えーしーうーさん。なー貧乏。貧乏
やなーちやー、貧乏やてーるばーてー。

あんしなー天井裏んかいガサガサさぐとう、「何が、
誰やが」りちささぐとう「私ねーや、いったー家んかい
や、昔から籠とーる貧乏ぬ神でいしやんどー」でいち
さぐとう。あんしんなー心お出来とーせーやーうまぬ
夫婦や働ち者んやしが、「やん、いやー貧乏ぬ神んでい
しやるばーい、あんしえーなー私達あ二人や寂つさる
あるむんいやーんー緒暮さやー」んりやーに、あんさー
にうまうてい暮ちさぐとう。

ある金持ぬ神りやーに、福の神りやーにてーじこー
肥とーる神様が、うまかいちやひなぬ袋担みていてー
来しがよ「はいこんばんわ、こんばんわ」し来しが「は
いどなたですか」り言ちささぐとう「私ねーやー福ぬ神、
福ぬ神んりしやしがや、いったー家んかい泊まらちとう

ある働き者の若者が居たそうだ。どんなに働いても
金持ちにはなれず貧乏だった。貧乏はいつになっても
貧乏だったらしい。

それから天井裏でガサガサしたので、「何で、誰かい
るのか」と言ったら「私はね、貴方の家に昔から居る
貧乏の神というものだよ」と言ったそうだよ。そして
とても心が良く働きの夫婦だけれども、「そうか、
お前は貧乏神というものね、それじゃ私達二人では寂
しいので貴方も一緒に暮らさないか」と、ここで暮ら
していたそうだ。

そこへ金持ちの神様、福の神とってとても肥えた
神様が来て「はいこんばんわ、こんばんわ」「はいどな
たですか」と言ったら「私はね福の神、福の神という
ものだが貴方の家に泊めてくれないか」と来た。そし
て「泊めてくれないか」と言ったら「えーここは貧乏

らし」りち来るばーよや。あんし」泊まらち呉らん」
りちやぐとう「いー、くまー貧乏神ぬや居しが、いやー
や泊まらせーならんさーや」りちやぐとう、「あいえー、
私にん泊まらしーるんせー徳ちちゆる事ぬあしがやー」
りち。あんしうぬ金持ぬ神え言ちえーるばーてー。

あんさぐとう、またうぬ貧乏ぬ神りる人ぬ「私がる
先うまんかい入つちよーるむんや、いやーが来る訳ぬ
あみ」りち。あんさーに、「とーあんせー力勝負、喧嘩
しや、勝つちゆしがうまぬ家んかい入しやさ」りやー
に。「とーあんせーり喧嘩んだ」りやーに、なーうぬ貧
乏ぬ神とう金持ぬ神とう喧嘩しよ。あんさぐとう、「あ
れあれー」うぬ夫婦さーにて、「あれあれーこの貧乏
神は負けそうだよ、負けそうだよ」りやーに、「あれー
肥てい、くぬ貧乏神や、よーがりとーるむぬかないる
訳え無んしが、りー、私達ん加勢さー」りやーにうぬ
夫婦が、あんしうぬ貧乏神ぬ加勢せーるばーてー。加
勢さーなかい追い出じやちさぐとうよー金持ぬ神、追
い出じやちやぐとう、「あんしちやーしん私ねー入りら
んばーるやりー、私ねーあんしえーうまんかい入りら
んばーるやりー」りちやぐとう「いいん、入りらん、

神がいるので、貴方を泊めるわけにはいきません」と
言つたら「ああ、私も泊めてくれたら徳があるのにねー」
とその福の神は言つたそうです。

そうしたら、その貧乏神という人は「私が先にここ
に入っているのにお前が入るわけがあるね」と言つて。
「それじゃ力勝負、喧嘩をして勝つた人がこの家に入
ればいい」と。「それじゃ喧嘩をしてみよう」と貧乏神
と金持ちの神とが喧嘩してね。この夫婦二人がその
喧嘩を見ていて「あれあれ負けそうだよ、負けそうだ
よ」と言つて「あれは肥えて、この貧乏神はやせてい
るので勝つ訳がない、私達も加勢しよう」と夫婦がこ
の貧乏神の加勢をして金持ちの神を追い出したら、「ど
うしても私をここに入れていつもりね」と言つたら「そ
うだよ入れない、私達三人居るほうがいいから」「ああ、
貧乏の神はずつと貧乏だね、私のような福の神を追い
出すのにお前達はずつと貧乏だね」それから金持ちに
なれずにつつと貧乏だったそうだよ。

私達三人居とーちゆせーまし」りちさぐとー「あいえー
やー貧乏ぬ神えちやー貧乏やさやー」りやーに「私ぐ
とー福ぬ神追い出じやするむん、いつたーちやー貧乏
やさ」りやーに、うりから金持えしーうーさん、ちやー
貧乏ぬ神やたんり。

50 下男が成功した話

話者 奥原松助(明治三十年八月二十四日生)

翻字・対訳 玉城琳子

いつペーぬふゆーな者やし、働ちやーなたん。こ
んな事あいびーたんよ。

まあ、下男二人居るばーて。御奉公人二人居るばー
て。うぬ一人ぬ御奉公人のー、大事な利口な者、ふゆー
な者やるばーてーさい。一人やまた、じこー働ちやー
なたぐとー、うりが、くぬ働ちやーんかい習しぎさん
てーさい。

習しよーぬ、「いやーや何んならんさー」「何やが」

とても怠け者が、働き者になったという話がありま
したよ。

下男が二人居たって。一人の下男は、とても利口で
怠け者だった。もう一人の下男は、とても働き者であつ
たので、怠け者の下男が、働き者の下男に教えたそう
です。

その教え方が、「お前は何も出来ない」「どうしてか」

採集 S 52・2・26 読谷村民話調査団第十六班(大宜見光一)

りちやぐとう、「あぬだー、少なーや頭ぬ痛んとか、腹ぬ痛んりち寝じーるんせー、あぬ米飯ん食むぬむんぬやー。いちぐ芋びけーん食り、ちやーにーじゃ芋食り、あんせーあらんさーや」りち。「あんし、痛まん腹痛んり言いなー」り言ちやぐとう「痛んり言いなー、誰がん分らんせー」り言ちやぐとう「あんせー、あんなるやん」とー、私ねー明日や起きいぐとう、あんせー、いやー寝りよー、腹ぬ痛むんち寝りよー」りち「本当なー」りちさぐとう。「あぬだー、私が明日あ寝じゆぐとう、あんせーいやー行ぢてい草刈ていくーわやー」りちやぐとう「うー」りちうぬふゆーな者、草刈いが行ぢえーてーさい。

うり、ちやーし分かつたがり言いなー、うぬ主人ぬ女ん子ぬ、雨ぬ降たぐとう、かんし立つちよーるばーてー。自分ぬ軒下ぐわーかい、アシヤギぐわーぬ下んかい、立つちよーていさぐとう聞ちやーによ、「いふな話すつさー」りち聞ちやーに。うり、親んかい言ちえーるばーてーぎさんでーさい。

うぬ為に、「クエーインぬ食てい後、エーインぬ食いん」りーせー、うぬだー、うぬ話から出じたんりぬ話

と言うと、「少しは頭が痛いとか、お腹が痛いとかいつて寝ていたら、お米の御飯もたべられるのに。いつになつても虫くい芋食べて、それではいけないよ」と。「どうして、痛くもないお腹を痛いと言うのか」と言つたら、「痛いと言つたら、誰も分らないよ」と言われて「そうか、そうなのか」「それでは、私が明日は起きるので、お前は腹が痛いと言いなさいね」「本当ですか」と言つた。それで「あー、私が明日寝るので、お前は起きて草刈りしておいでよ」と言つたら「はい」とその怠け者は草刈りに行つたそうです。

それをどうして分かつたかと言うとね、それを主人の娘が、雨が降つたので離れの家の軒下に立つていたら、「変な話をするね」と聞いていたつて。それを主人に教えたんでしようね。

その為に、「クエーインが食べた後、エーインが食べる」というのは、この話から出たという伝え話もあり

あいやさびたさー。「クエーインぬ食てい後、エーインぬ食いん」りせ、うぬふーじでーさ。あんさーい、二人大事ぬなー働ちやーなたんりしがよ。「とーあんせー、いやー良いむん聞ちえーさ」り主人の起きやーにうぬ女ん子から聞ちやーに。「うれーな、かんしさんあれーくつたーがーなー治らん、ちやーふゆーすんりやーに」すぐヤブーぬ家かい行じ。

昔え、ヤブーんち、うぬ鍼ぐわーたていやーが居いびーたんよ、私達までー覚とーしが。あんさぐとう、うまんかい行ぢやーに「えー私達あ、うぬいほーな事、私達あ使とーる童達あ言いつさー」りち。「何がぬーやが」「はーいやーや、痛んていん腹痛むんりち寝んとーきよーや。草刈ていちゆーくとう」りやーに。「今日、いつペーゆう働ちやーぬ童があんまさんりち寝んとーさー」「あんやんなー」「うり、ちやーしん治ちくらんあれーな、大事でー」りち言ちさぐとうよー。

あんさーい、ヤブーやなー来に「いやー、何が何処ぬ痛むが」「腹痛ぬ痛むんさい」りちやぐとう。あんさーい、手や摺みていんち「くれー、腹痛ぬ熱」りち、「腹痛ぬ熱出じとーさー。くれーヤブーぬ家行ぢ、ヤブー頼

ましたよ。「クエーインが食べた後、エーインが食べる」というのは、そのようなことであるよ。それから二人とも大変な働き者になったというが。「そうか、お前は良い事聞いたね」と主人は起きて娘から聞いたそうです。主人は「下男たちがいつも怠けようとばかり考えているので、どうにかしないといけない」とすぐヤブーの家へ相談に行つた。

昔は、ヤブーといつて鍼医者が居たよ、私達まではよく覚えてるが。そうしたら、そこへ行つて「私達に在下男が、変な事を言つてい」と。「それは何か」「お前は、痛くなくても腹が痛いといつて寝ておきなさいよ。私が草刈つてくるから」と言つてね。「今日は、とてもよく働く子どもが気分が悪いといつて寝ている」「そうか」「どうしても治してやらないと大変だ」と言つて。

それから、ヤブーが来て「お前はどこが痛いのか」「お腹が痛い」と言つた。そこで、手を摺んでみて「これはお腹の熱」といつて、「君はお腹の熱が出ていよ。これはヤブーの家へ行つて、ヤブーを頼んでこないと

りくーらんでーならんでー」りち、「とー、アンマー、
早くなーヤブー頼りくーわ、大事やさなー」りち。あ
んさーいさぐとう、だーあれーなー、あんまさんりち
寝んとーぐとう、起きてい逃んぎーるわけーならんどー
やー。

あんさーい、ヤブーや来い、手や掴みやーい「はっ
さびよー、くれーじこー熱れーむん。なーくれーヤ
チューんし、鍼たていらんあれーならんれー」りちよ
うたい。すぐ、鍼たつてい、ちやつびなーフーチ置ち
きてい、なーわちやくどうやぐとうよーたい。わざとう
治すんりちでーぐとう、ちやつびなーヤーチューしえー
ぎさんてー皆掴みてい。「あきさみよなー、今からーけー
治とーぐとう、今から寝んじやびらんどー」し叫たん
りよーたい。

あんさーにまた、うぬふゆーな者お「一大事なー、
寝んじんでしーね。うんぐとうし、焼かりーしやん」
りやーによーたい。あんさーに、あぬだー、うりん治
いんやーたい、うぬまた働ちやーりしん治ていよーさ
い、二人ぐりーなー成功者なたんりぬ話ぬあえーさび
たんどー。

いけない」と言つて、「アンマー、早くヤブーを頼んで
おいで、大変だよ」と。そしたらもう、下男は気分が
悪いと寝ているので、起きて逃げることも出来なくなっ
てね。

それからヤブーが来て、手を触つて「大変だ、これ
は高熱だ。これはお灸をして、鍼を射たないといけな
い」と。すぐわざと鍼を射つて、大きいお灸を皆で押
さえてやった。「もう大変だ、もう治っているの、今
からは寝ません」と言つて大声で叫んでいたつて。

それからまた怠け者も「大変だ、もう寝たりしたら
お灸をやられる」と言つてね。そして怠け者も働き者
も治つて、二人は成功者になったという話があった。

あんさーに、「クエーインぬ食てい後、エーインぬ食いせー」うぬたつぴやんり。「いやー為なかい、私ねー、大事なたぬむん。いやーかい習せーりやーに、だー、身体いつペー鍼たていらつてい、ヤチューンさつたせー」り言やびたんりよ。あんしうぬ、「クエーインぬ食てい後お、エーインぬ食いん」りせー、あんやんりぬ話ぬあいびたさー。

それで、「クエーインが食べた後、エーインが食べる」というのはそういうことである。「お前のおかげで、私は大変な目にあつたよ。君に教えるつもりが、身体いつぱい鍼射たれてね。お灸もやられたよ」と言っていたそうです。それで、「クエーインが食べた後は、エーインが食べる」というのはそういう話があつたからだよ。

採集S 52・5・22 読谷村民話調査団第十一班へ渡慶次勲・新垣修子

注① 下男 ジニン、ンージャ、またはンジャツクワ(下男下女)ともいって、農村における奉行人。戦前まで富豪から借金し、その身代金によって使われていた。大体男子十三―二〇歳頃まで奉行させた。

注② アシヤギ 離れ小屋。

注③ ヤブー 鍼灸師。

注④ アンマー 16頁参照

注⑤ ヤーチュー(やいと) お灸のことで焼くという意味からきている。

注⑥ フーチ お灸する時に置いて火をつけるもの。

※ クエーインぬ食てい後、エーインぬ食いん

努力する(果報) 犬が食べた後に、なまけ者(エーイン)が食にありつくこと。

翻字・対訳 大浜洋子

親ぬ、なーじこーうりさりやーに、親んかい王様が
 るやがやー、灰繩とう雄鶏ぬ卵とう持ち来りち、言い
 付きらつたぐとう。んちや、雄鶏りしえー卵無んせー
 やー。また灰繩んりいしん、なかなか溶きてい無んな
 いしえー。

あんし、うりさぐとうな親ぬ行ちゆる際なたぐとう、
 子ぬ頭あちりてい、親ぬ代わい「何がモーヤー、いやー
 親る来んりちえーるむん、いやーが来る」りちやぐとう、
 「私あ親あ産催し、寝んとーいびーん」りちやぐとう、
 「男ぬんひやー産催すんちあみ」りちやぐとう、「何
 があんし、雄鶏ぬん卵産すんりちあいびーみ」りち返
 ち。

また、繩ぬ灰繩持つち来んりちやぐとう、繩焼ちやー
 ない、直ぐうぬまま持つち行ち、子ぬうりしちやん
 りちる話聞ちやさモーイ親方ぬ。

また直ぐうりしよ、ふりむん真似し、「小便しえーな

親が、難題に困らされて、親に王様から、灰繩と雄
 鶏の卵を持って来なさいと言いつけられた。そういえ
 ば、雄鶏は卵を産まないでしょう。また灰繩というの
 も、すぐ溶けてなくなるでしょう。

それで、親がいよいよ行く事になって、息子(モー
 イ)の頭は大変賢かったので、親の代わりに行ったら
 「何でモーイ、お前の親に来いと言ったのに、お前が
 来たのか」と言ったら、「私の親は産気づいて、寝てお
 ります」と答えると、「男が産気づくことがあるか」と
 言うので、「それでは、どうして雄鶏が卵を産むとい
 うのがあるんですか」と返した。

また、繩、灰繩を持って来いと言ったら、繩を焼い
 てそのまま持つて行って、子どもが解決したという話
 聞いたよモーイ親方の。

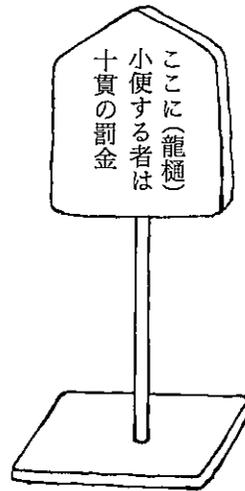
それから、氣違いの振りをして、「小便をしてはいけ

らんどー」り言ち、うり書かつとーる 所んかい小便
ひちうりやたんとうか、鶏ぐわーおーらしーがんうり
担みていはいぎーたんち、うんなむぬんむる昔ぬ話てー。
昔ん人ぬ話聞ちよーるばーてー。

ない」と書かれた所に小便をしてしまったとか、鬩鶏
をしに鶏を担いで行ったりと、そんな事も昔の話でね。
昔の人の話を聞いたわけだよ。

採集 S 52・2・26 読谷村民話調査団第三班〈阿波根初美〉

注 モーイ親方 本名は伊野波盛平で毛氏八世。親方の位にあり伊野波親方と呼ばれ三司官職につき、知行高三百二十石都合四百石を賜う、同十月美御殿大親職に任ぜられる。十貫というのは今の二十銭。



52 モーイ親方〈勉強十雄鶏の卵〉

話者 儀間 真治 (明治三十九年五月三日生)

翻字 玉城 和美

モーイという人はもう非常に優秀で、偉い人間であるから。あの人がやった事は、親の方が「勉強してくれ、勉強してくれ」と言つて勧めておるけど、夜は床下の中で勉強して昼は遊んで。だから人に馬鹿にされておる、見ら

れておるわけさ。

だから今度はそのお父さんが、内地の方の話だが呼ばれた時に、問題を出してそれを饒波ぬモーイが行つて、雄鶏の卵を持つて来いといつて向こうからされたさあ。

だから今度、お父さんの代わりに行つておるんだから「あなたは何でお父さんと呼んでおるのにあんたが来たね」と言われたから「お父さんは産催しておるから来られないつて」。雄鶏ぬ卵、男が子産まないでしょう。だからこれ理屈では当たつておると言つていた。

採集S 52・2・26 読谷村民話調査団第十班〈山城悦子〉

53 モーイ親方〈勉強・灰縄〉

話者 阿波根 ツル (明治三十六年三月三日生)

翻字・対訳 玉城 和美

じこーふりた真似そーていよー、夜なーや勉強し。
床さぬ中い親ぬ見ちやぐとう、ドウクスぬうつま溜
まとーたんりがらーや。

とても氣違いの振りをして、夜になると勉強をして
いた。床下を親がみけると、ローソクが沢山溜まっ
ていたつて。

あんしふりむん、ふりむんさつとーしが、灰縄御用
りち御用ぬあたぐとうてー。あんさぐとう、なーちやー
し外すがやーりちなーいっペー心労そーにてー「私が
外さびん」りち親んかい。「うりいやーぐとーるふりむ

そして氣違ひと言われていたが、灰縄御用というの
があつてね。そうしたら、それをどう解いたらいいか
とても心労している時に「私が解いてみせます」と親
に言った。「お前みたいな氣違ひが、どうして解くんだ

んぬ、ちゃーし外すが「りちさぐとうよ」「私がゆー分か
かいびん」りち。あまんじ縄直ぐうぬまま燃ちてー灰
なち、あんしさーいうぬモーイ親方ぬうれー外ちうり
免たんりぬ話。ただ私ねーうつびる分かいんどー、話
聞ちよーぐとう。

54 モーイ親方〈難題十立ちしよん〉

とにかく、親加那志ぬ薩摩んかいぬ、何から返答しー
が行ちゆんちよーるばーて。薩摩ぬ国から北ぬ森とう
灰縄注文ぬあたぐとう。

んちやうぬ灰縄んれー、灰しえー縄あ絢ららんせー
や。絢ららんぐとう、非常に心配し。うりから雄鶏ぬ
卵、うりん注文ぬあるばーて。沖縄あ負かすぬ考えどう
やぐとう。

あんさぐとう、なターリーヤかんし「大事なとー

ね」と言う。「私がよく分かります」と。あそこで縄
をそのまま燃やして灰にして、これをモーイ親方は解
いてそれを免れたようです。ただ私はこれだけ分かる
よ、話聞いたからね。

採集S52・2・26 読谷村民話調査団第十一班〈大宜見光一〉

話者 奥原松助(明治三十年八月二十四日生)

翻字・対訳 玉城琳子

とにかく、父親が薩摩の国へ何か返答に行くことに
なつたんですつて。薩摩の国から北の森と灰縄の注文
があつてですね。

灰縄というのは、灰では縄は絢えないでしょう。絢
えないので、どうしたらいいか心配してね。それから
雄鶏の卵、それも注文があつたつて。沖縄に勝つ考え
なのでね。

それで、もうターリーは「大変なことになっている、

さー、くれーなー注文りせー私達がならん。ちゃーさ
らましが「りちよ、頭いたみてい寝んとーみせーるばー
に、うぬモーヤーんりせー枕ばぬんかい来「何がさい
ターリー、貴方寝んとーみせーる」りち、「いやーぐとー
ぬ者、何分かいが、ふりむん」りち、「ごーぐちさぐとー
「薩摩ぬ国からや、うんな注文来に、人お哀りそー
せー分からん」りちやぐとー「あきちやびよー、ター
リーうりん心配すんなー、うなーたいぐわーぬむん」
でい言ちやぐとー。

うぬ人ぬ、「いやーぐとーぬふりむんぬひやー「何ん
心配すんな」りちあたみひやー」りちやぐとー。「とー、
うれー、ターリーがーならん、私が行ちやびさ。ター
リーが行ちねーならんしが、私が行ちねー直ぐ通てい
ちやーびんどー」りちやぐとー「いやー、ふりむんでえ
とーてい、いやーんかい、うりないみ大事やさや。いやー
たつ殺してみてい」りちやぐとー「あー、どう易むん」
りち笑たぐとー、珍ましいむんやさー、うんにーから
ターリー、いつペーたまし抜きとーるばー。

あんすぐとー、あぬだー、薩摩ぬ国んじえー、「何が、
ターリーやめんそーらん、いやーが来せーちやーやが」

この注文は私達には解けない。どうしたらいいのかな
あ」と、頭を悩ませて寝ていると、モーイが枕元に来
て「どうしてターリーは寝ているんですか」と声をか
けると、「お前みたいな者に何が分かるか、この気違い」
と怒った。「薩摩の国から、こんな注文がきて、私が心
配していることも分からないで」と言うともう、ター
リーそれを心配しているのか、こんな簡単な事を」と
モーイが言った。

ターリーが、「お前みたいな気違いが、『何も心配す
るな』とお前に言えるのか」と言った。「それはターリー
には出来ない、私が行きますよ。ターリーが行ったら
解けないが、私が行つてすぐ解いてきますよ」とモー
イが言うとも「お前みたいな気違いに、それが解けたら
大変だ。お前は殺されてしまうぞ」と言ったら「ああ、
容易いものだ」と笑ったので珍しいことに、その時か
ら父親はとてびつくりしたようだ。

それから薩摩の国へ行つたら、「どうしてターリーが
来ないで、お前が来たのはどういうことか」と聞かれ

りち。「はーなー、ターリーや産催しし、なーちやーしんめんせーさびらんさー」「男ぬんひやー、子産すんりちんあみ」りち打ち首すんちさぐとう「ははー、貴方達あや、何ん分かん。あんするむんぬ、雄鶏ぬ卵りせー、何がうれー何処から出したぬむんやいびが」りち直ぐにうれーモーヤーがたつけーちよーるばーてー。「とーあんせーしむん」りち。

あんさぐとう、「いやー、灰繩持つちちー」りちやぐとう「はあ、うれーどう易むんやいびん。幾ヒルやいびーがやー、御膳持つちめんそーれ。今作てい御差ぎら」りちやくとう、なうにねー、あまー驚るちよーぬばー。「繩うまんかい、立派から巻ち火い付きてい燃しねー灰繩なとーびん」りちやぐとう。「なー、うりんゆたさん、んちや、いやーが言る通いあんやるむん」りち、うりん免たんりよ。

あんさーに、今度お、「北ぬ森持たすみ」りちやぐとう「あー、持たさびんどー。直ぐ持つち来びんどー、うり積むぬ船持たち呉みそーり。船ぬあれー、直ぐ今にん乗して来びぐとう」りちやぐとう。なー、うぬ船りちえー無やびらんせーや、森積むぬ船りちえー。うつ

て「そうですね、ターリーは産気づいて、もうどうしても来ることが出来ません」「男が子どもを産むということがあるか」と言つて打首にしようとしたら、「はあ、貴方達は何も分かつていない。それなのに、雄鶏の卵というの、それはどういふことですか」とすぐにモーイは返答したつて。「もうそれではよい」と。

それからまた、「お前は灰繩は持つてきたか」と言うのと「それはとても容易いことです。幾ヒルですかね、お膳持つてきて下さい。今作つてさしあげましょう」と言つと、その時は、薩摩の国の王様は驚いていたつて。「繩をお膳に立派に巻いて置いて、火を付けて燃やしたら灰繩になつていよ」と言つた。「それもよろしい、君が言う通りだ」とそれも免がれたつて。

そうして今度は、「北の森持つてきたか」と聞いたたら「あー、持たしますよ。すぐ持つて来ますよ、その森を積む船を貸して下さい。船があつたら、今すぐにも積んで行きますよ」と言つた。もう、森を積む船と云うのはないでしょう。そうして何度もモーイにして

ちえーひつちえー、うりモーヤーにむる的打たとーた
んりよ。

あんやぐとう、うんにからる、うぬモーヤーんりせー、
有名な人やみせーたんり。やっぱりな、何んくいむ
る考やーに、うりぬ考えてーる通いんかい。

首里なかいや龍樋又泉んちあいびーせーや、龍樋又
泉んち。あり親方ぬ前ぬ達が、皆集りてい協議し、「う
まんかい小便すせー十銭」りち貼り紙し。うまんかい
小便すせー十銭りちさぐとう、わざとう小便し、あ
んさーに、銭おうまんかい十銭置ちきいたんりよ。

「いやーがうんぐとうし、うまんかい小便すんなー」
「あい十銭のー置ちきてーびん。罰金のー十銭なとー
びたせー。明日十銭のーあぐとう、また、五貫のーあ
ぐとう持つちちやーに、また小便しわるやつさー」り
ちやぐとう。

なーうんにーから、どうまんぎていたまし抜きとー
ぬばー。「とーな、一大事なとーん、明日来に小便す
んりうぬ泉かい。殿様ぬ御差がある水かい小便し行ちゆ
んり、な一大事なとーん」りちいつペー心配そーぬ場合
ねー「えーモーヤー、くれーちやーしさらーましがやー」

やられたつて。

そうして、その時から、モーイはとて有名になつ
たつて。やっぱりいろいろ考えて、モーイの考え通り
になつたそうですよ。

また首里に龍樋の泉がありますよ、龍樋の泉とい
つて。そのことで親方達が皆集まって協議して、「この泉
に小便する者は十銭」と貼り紙をした。ここに小便す
る者は十銭と言つたので、わざとそこに小便をやつて、
それからそこに十銭置いていたつて。

「お前が、そこに小便しているのか」「十銭は置いて
ありますよ。罰金十銭となつていてしょう。明日も
十銭もあり、また五貫もあるので持ってきて小便しな
いといけないな」と言つた。

(親方達は、)もうその時からあわてふためいてね。

「もう大変なことになつていてるよ、明日もモーイが来
てその泉に小便するつて。殿様の飲み水に小便してい
くつて、もう大変な事になつていてる」と言つて、とて
も心配している時に、「おいモーイ、これはどうしたら

り、うぬモーヤーがいつペー笑わらいびたんりよ。『とき
に協議じんぎしれー』りーねー、誰たがやていん小便しべいさびらん
しが、五貫ごくわんりしぬ銭ぜいお、童ぬわらび、持もつちちやーい小便しべい
りちよーびんてー。殿様とのさまあ小便御差しべいごさがやーやぬむん」
りち直しぐ、げーそーびたん。

いいのかな」と相談したら、モーイがとても笑ったん
だつて。『小便する者は協議する』と立て看板したら
誰も小便はしないが、五貫というお金は、子どもでも
持ってきて小便しなさいと言っているようなものだ。
殿様は小便を飲むのが好きだよ』と言つてすぐ、口ご
たえしていたつて。

採集S 52・2・26 読谷村民話調査団第十二班 へ山入端孝子、遠藤庄治

注① 親加那志(うやがなし) お父さんのことをいつている。ターリーと同一人物。

注② 薩摩 旧国名。今の鹿児島県西部。

注③ ターリー お父さんのこと。(ここではモーイの父親)

注④ ヒル(尋) チュヒル(二尋)は一八〇センチメートルで、大人が両腕を広げた長さ。

注⑤ 首里 153頁参照

注⑥ 龍樋ヌ泉(ドゥーヒヌカー) 首里城内、瑞泉門の下にある竜の形をした樋。その口から湧く清水は、水量が豊富で味もよく中山
第一と称せられた。中山伝信録の著者、徐葆光によって書かれた碑が側に立っていた。

翻字・対訳 伊藝 弘子

王加那志とう、博打ん何ん友達なてい打つちゆしがや、あんし、博打ん何ん打つちゆしが、碁ん何ん打つちゆしが「はいくまかい、うねひやー、うねひやー、うねひやー」し、いーひやーあーひやーし王んかい言いたんりよ。

あんさくとう、うぬ王ぬ家来ね、昔、摂政三司官ちめんせーたんでい、官ぬ大達が。「くれー人民でいるむん、王んかい『うねひやー、いえーひやー』りちすせーうれーかんせーならんしが」でいち、ひちきたくとうよー。今度お、「ゆたさいびーん、あんねーさびらんどー」んち、碁んし、一ち一ちうまかい打つちゆさやー、碁打つちやーに、あんし、「悪さいびーたん、王くまんかいちよーびーんどー、とー貴方ぬ番どー」し、王ぬ打つちゆさやー、「うねひやー、いえーひやー」でい打つちゆさこー王や樂しみや無んたんでい。

あんさくとう、うぬ王ぬ、「くれー、あんせー何ん面白

王様とね、友達になつて博打や碁などを打つて「はいここに、それここに、これここに、飛んでここに」とおいこら、あれこらと王に言つていたそうだよ。

すると、その王様の家来たちがね、昔は、摂政三司官つて居られたそうだよ、官のお偉い方が。「こいつは平民たる者が、王に向かつて『はいここに、それここに』などと言う言葉使いをするのは、それではいけないだが」と、咎めたそうだよ。そしたら今度は、「承知いたしました、それではいたしません」と、碁は一つ一つ打つだろう、一石打つと、それから、「悪うございました、ここに打つてありますよ、さあ貴方様の番でございますよ」と王様は打つと、「おいこら、ほいこら」と言つて打つ時よりも碁は、楽しくなかつたそうだよ。それで、その王様が、「碁は、そんなでは何も面白く

無んくとうやー、『はい、いーひゃー、あーひゃー』し
んしむくとうありが言るまま、言葉あ 咎みらんどもー」
んちやくとう、うんにーからー御免なてい、摂政三司官
ぬん、うりやたんでい。

あんさーに、「いーひゃー、あーひゃー」さーに、ちゃー
一緒博打打つちゆたんでい。

うれー、競争しんしむくとう、「いーひゃー」しーわ
る樂しみんやさにやー、「うーうー」んち、うまかい持っ
ちんじ打つち。あんさーに、王やなー何ん樂しみや無
んり。咎みらんたんでいどーんでい。

ないから、『はいこら、あいこら』、してもいいから、
あいつの言う通りにして、言葉を咎めるなよ」とおっ
しゃったので、それからは、お許しなつて摂政三司官
も見ぬふりをしていた。

それで、「はいこら、あれこら」と、いつも一緒に、
博打を打っていたそうだよ。

碁は、競争をしてもいいから、「はいこら」するのが
樂しみでもあるのだから、「はい」と言つて、打つて。
だから、王様はもう（形式ばつては）ちつとも樂しく
ないと。そしてペークーの無礼を咎めなかつたそうだ
よ。

採集 S 52・2・26 読谷村民話調査団第三班〈阿波根初美〉

注① 渡嘉敷ペークー 渡嘉敷親雲上。尚敬王三一年（一七五〇年）首里赤田村の渡嘉敷兼倫の三男に生まれ、和名を兼副という、兼副は長じて花当の職を奉じていたが、二七歳の時鹿兒島へ行き、和歌、書道、生花、謡、剣道、茶道等の諸芸道を修得して七年後に帰朝し、尚穆王の世子、尚哲公の仮右筆となり、翌年右筆となった。尚育王十四年（一八四一年）九二歳の時、北谷間切真栄城の名島を賜わり、「真栄城」に改姓。尚育王十七年（一八四四年）旧曆三月二四日九五歳で桑江之前の奄で死す。

注② 摂政三司官 摂政は首里王府の役職名。三司官は首里王府の役職名、および位階名で三司官は親方の中から選挙し、薩摩の承諾を受けて任命した。その上には摂政がいるが形式的で政治の実権は三司官が握つた。

※ 「うぬひゃー、いえーひゃー」 相手をののしつて返事する語。

渡嘉敷ペークーへ欠け茶碗

話者 島袋利藏(明治二十六年三月二十日生)

翻字・対訳 宮城昭美

湯飲み茶碗やさや、新品やさしが王ん前なちよーてい、
たつ欠つちゆんでいよ。たつ欠ちーねー、茶あ注じ御
差ぎたくとうやー、「うまから御差がり」でいちやぐとう。

「何がペークー、いやーあんしする」でいちやぐとう、
「くまー、一般人民ぬ飲れーる所やくとう、くぬ欠
ちえーる所、あ誰がん飲まん新品やくとうやー、うま
から茶あ御差がり」でいち。

様々ありが話んあるばーよー。あんぐとう、当たい
前んちわざとうたつ欠つちやーに、うまから茶あ御
差がりんりち。うりん理屈者どうやるばー、あんぐとう。

湯飲み茶碗をね、新しいのを王の目の前で欠いたそ
うだ。欠いた茶碗にお茶を注いで差し上げて、「ここか
らお飲みになって下さい」と言った。「どうしてペークー、
お前はこのようなことをするのか」と言ったら、「ここ
は一般人民が飲まれたところだが、この欠いた所は誰
も口をつけてない新しいところだから、そこからお茶
を飲まれて下さい」と言った。

様々なペークーにまつわる話はあるよ。あのように、
あたり前のことだと思つてわざと欠けさせて、そこか
らお茶をお飲みになって下さいと言つた。ペークーは
理屈者なんだろうね。あのようなことをするぐらいだ
から。

翻字・対訳 玉城 和美

吸物ぬあぐとう食みーが来りちやぐとう「うー」りち、それ食みーが行ぢやぐとう、実やな味すんでい女中達がうちゆ食り無らん。

今度おな、済まんりぬ事なやーなかい大根切つち入ったぐとう、「あ、くまぬ鳩ぬ吸物りーしえーかんしうりやさやー」りち。「美味さいてペークー」りちやぐとう「うーいっペー美味さいびーたん。うんぐとーり鳩お、私達あ家ぬ前にんじこーあいびんどー」りちやぐとう、うりから「えーあんしえー取いが行かやー」
 「うー、あんしえー歩ちめんせーみ」りち行ぢやぐとう。あみ持つち行ぢやぐとう。大根取つたぐとう「何が大根るやんむな」りちやぐとう「私ねー貴方達てー鳩お、くりるやいびーたんむ」りち。うりからなばりやい鳩ぬ肉やあんなたんり。渡嘉敷ペークーの話聞いたよ。

そして、王様んかいや首えうちやがてーんらんしが

吸物があるので食べに来なさいといわれて「はい」と言つて食べに行つたら、中の実は女中達が味見をする為に食べて無くなつていた。

今度は、済まないと思ひ大根を切つて入れたら、「この鳩の吸物はこんなものだね」と言つて。「美味しかったねーペークー」と王様が言つたら「はい、とても美味しかったですよ。こういう鳩は、私の家の前にも沢山ありますよ」と言つたら、「それでは取りにいきましよう」「はい、そうしたら歩いて行きますか」と言つて網を持つて行つた。そうして大根を取つたら「何で大根じゃないか」と言つたので「私はお宅で食べた鳩は、これでしたよ」と言つた。それからばれて鳩の肉はそうだったという渡嘉敷ペークーの話は聞いたよ。

そして、王様には首をあげた事はないけれどね渡嘉

渡嘉敷ペークーや。どうくから知恵ぬ強さぬ家ぬ門、
かんし門があしえー、ありからかんしうっちんとーる
し入せーやー。

あんさぐとう、王様あかんしうっちんち「王様んか
い私ねー御辞儀さつたるむん、今日や王様んかい御辞儀
下ぎらつとーるむん」んちやぐとう、「何が私ねー、いやー
んかい首下ぎたる事お無んしがペークー」りちやぐとう、
「あ、貴方お入っちめーに、私にんかいかんし『はい
ペークー』りちめんしえーたせー」。王様あ「いやーねー
かなーんさー」りち、ちゃーあんしやたん何ぬーりち
話しみせーぎたぐとう。

敷ペークーは。とても知恵があつて家には門があり、
あれからはうつむいて入っていくでしょう。

そうしたら、王様はこうしてうつむいて「私はお辞
儀をされたよ、今日は王様にお辞儀をされたよ」と言っ
たら、「何で私は、お前に首を下げた事はないよペークー」
と言ったら、「貴方は入って来る時に、私にこうして『は
いペークー』と言って入って来たでしょう」と。王様
は「お前には勝てないなあ」と、いつもそうであった
という話をしていたよ。

採集 S 52・2・26 読谷村民話調査団第九班 前田逸子・上間京美

※ 「うー」目上に対して承諾。肯定・同意を表わす語。「はい、ええ、はあ」に相当する「えー」目下に対して、承諾、同意を表わす。

翻字・対訳 玉城琳子

渡嘉敷ペークーと御主と碁打ち、大変良い勝負やたりよ。うんない碁のいっちなさうない渡嘉敷ペークーが、すぐ御主ぬ顔んかいトウンペーしーくわーさんりーしが、何ん面あひらんたんり。

またなうぬ御主が、ペークーや脳ん使とーんりやーにうりる試すぬ為なかい、だてん上役ぬ来い、家あみつちやきしみてい、御馳走すがてい、むる出じゃちえーんち、配膳ぬ終わたぐとう。皆便所かいらち、一人な一人な立つちやーい、うり一人残ちなげーん誰ん来んたんりよ。側からむる見ちよーたんり。節ぎ穴から。

あんしな、来んなたぐとうペークーや自分一人さーに「えー、ペークー」「ふー」「御主ぬ指示りせーや、食めーや」んち、「うー、御馳走さびら」りち食りよ。あんさーに、またあんしん皆来んなたぐとう「えー、ペークー」んち、「ふー」「御主ぬ支度いみせーせー、

渡嘉敷ペークーと御主との碁打ちは、大変に良い勝負だったという。それから碁のことで渡嘉敷ペークーが、御主の顔に唾を飛ばしたそうだが、なんの顔色も変えなかつたという。

また御主も、ペークーは頭を使っているといつてそれを試す為に、たくさん役人達を家にいっぱい招待して、御馳走も準備して全部出して配膳も終わった。そうしたら皆便所へと一人一人立って行って、ペークー一人残して長い間誰も来なかつた。節穴から皆見えていた。

そして、誰も来なくなつたのでペークーは一人で「おい、ペークー」「はい」「御主の招待だから食べなさい」と言つて、「はい、御馳走になりましょう」と言つて食べた。それでも、皆が来なかつたので「おい、ペークー」「はい」「御主が準備したものを、お前一人で食

いやー一人食れーならん。家かい持つちんじ 妻子に
ん食ませー。うまんかいあせー、むる入つていいけー」
り言いたんりよ。あんさぐとう、むる入つていはやー
に、うまんかい残とーる臣下ぬ達や、何んくい食みは
じきてい目はとーたんり。

採集 S 52・5・22 読谷村民話調査団第十二班 へ松元久幸・山城悦子

べてはいけない。家に持つていつて妻子にも食べさせ
なさい。そこにあるものは全部入れて持つていきなさ
い」と言った。それで全部入れて持つていつたので、
そこに残っている役人達は、御馳走を食べそびれて目
を丸くしていつた。

注 御主 王様。

※ 「えー」 23頁参照 「ふー」 目上の人を敬い、額ずくときに発する言葉 「うー」 23頁参照。

59 渡嘉敷ペークー へ馬勝負

話者 比嘉利益 (明治三十年七月八日生)

翻字・対訳 玉城琳子

馬勝負ぬあたぐとう、ペークーや雌馬乗てい行ぢや
なかい一等等なたんりよ。あんさぐとう、文句出じやー
に、「何が雌馬乗てい来ねー、いつたー何馬乗てい来ん
りせー無んたさに」りち、うりんまた負かちやんり。

馬勝負があつたので、ペークーは雌馬を乗つて行つ
て一等になった。そうしたら、皆から文句が出たので、
「どうして雌馬を乗つてきたけど、君達ほどの馬を乗つ
て来なさいということは無かつたんじやないか」と、
それもまた (ペークーが) 負かしたそうだよ。

60 渡嘉敷ペークー〈低頭門〉

話者 比嘉利益（明治三十年七月八日生）

翻字・対訳 玉城琳子

御主、毎日な御主なかい御辞儀びけしならん。
私にんかい御辞儀しみらしわるりや、「何時ぬ何日にや、私達んかいめんそーち呉みそーりよ」りち、「な、う取い持ちさびーぐとう」りちやぐとう、めんそーちやんりよ。

御主に、毎日御辞儀ばかりしてはいけない。自分に御辞儀をさせようとして、「何月何日に、私達の家にいらして下さい。御馳走を準備しておきますので」と言つたから、御主はペークーの家へ行つたつて。

あんさーい、門やガジマルぐわーさーに立派ん低つてん困らつとーるガジマルぐわーあたんりぐとう、うまからな、ひくりめんそー来ぐとう、「今日やな、御主が私にんかい御辞儀しみせーたんど」すたんり。

それで、門はガジマルの木で立派に低く困られていて、そこからしゃがんで入つて来たので、「今日はもう、御主が私に御辞儀をやりましたよ」と得意げになつていたつて。

翻字・対訳 玉城琳子

「今日や月ぬ吸物御差ぎーぐとう、必じめんそーち
呉みそーりよー」りちやぐとう、御主や「月ぬ吸物り
せー食れーんらん。ちやんぐとーるがやー」んち、あ
まんかいめんそーちやんりよ、ペークー達かい。

あんされー、十五日ぬ月ぬまっさかいそーにやたん
りぐとう、すぐ高御膳なかいスンカン置いて、水入っ
てい庭んかい出じゃちよ。何時ぐるりちやたんりぐとう。
月ぬまっさかいそーぬ場合に、月ぬマカイんかいへー
りんちよーぬばーてー。「くり御差がり」んりーたんり。
「また、的打たつたさやー」り言みせーたんり。

「今日は月の吸い物を御馳走するので、必ずいらつ
しゃって下さいね」と言ったら、御主は「月の吸い物
というものは食べたことがない。どういふものかなあ」
と、ペークーの家へ行つたそうです。

そうしたら、十五日の月が満月できれいな夜だった
ようで、すぐ高御膳にスンカンを置いて、それに水を
入れて庭に出した。何時頃と約束してあつたのでね。
月が満月の時に、その月が椀の中に映っていったって。
「これを食べて下さい」と言つたつて。「また、してや
られたね」と言つていたそうです。

採集 S52・5・22 読谷村民話調査団第十二班 へ松元久幸・山城悦子

翻字・対訳 玉城琳子

また大根で。なー御主ぬ所なかい皆ありさーなかい、皆が物おサーザーぬ肉ぬ入つちよーしが御主、ペークーぬ物お、むる大根びけーんやたんりよ。「今日ぬサーザーぬ肉え美味さんやーペークー」りちやぐとう、「うー、御馳走さびたんどー」りち。

あんさーに、「私達あ畑んかいめんそーれ。すぐ一時間ねー持たらん持ちするか取いびんどー」りち、「必じめんそーりよー」りちやぐとう、「何月何日やー」りちやたんりしが。あんしめんそーちやぐとう、むる家来ぬ達あブイぐわー、竹ヒルなー切つち持たさーなかい、くまんかいめんそーれりやーに連おてい行ぢやぐとう、大根畑かい行ぢ、「くまにんうーい、くまにんうーい」りち、むる大根すぐてーびーたんり。また、的打たつたんり。

また大根よ。御主の所に皆行つたら、皆の物は鴨の肉が入っているのに御主とペークの物は、全部大根ばかり入っていたつて。「今日の鴨の肉はおいしいねペークー」と言つたら「はい、御馳走になりましたよ」と言つた。

そうしたら、「私達の畑に来て下さい。一時間には持てないほど取れますよ」と、「必ずいらつしやつて下さい」と言つて、「何月何日にね」と約束した。そしてペークの所へ行つたら、家来たち皆に竹を数丈づつ切つて持たして、ここに来て下さいと大根畑に連れて行つて、「ここにもある、ここにもある」と、大根をたたいていたつて。また、してやられたと。

63 渡嘉敷ペークー 褒美の片荷

話者 比嘉利益(明治三十年七月八日生)

翻字・対訳 玉城琳子

妻ぬ「今日や米え無らんで、お父さん」りちやぐとう、
「んだあんせー、貰ていくーいー」りち御主所んかい
行ぢやーに。「米ぬ無らんどーすぐとう、うへー呉とー
ちみそーらんなー」りちやぐとう「持つち行けー」ん
ち。馬持つち行ぢよーんりぐとうやー、よーがり馬ぐわー。
あんさーに「一俵持つち取らしえー」りちさぐとう、
一俵持つち取らちやぐとう、片方んかいたつくわー
ちえー馬ぐわー転ばちえーういし、何回んあんしさぐ
とう「かかいむくわいし、かんせー持たでいーびらん
さー」りちやぐとう、「くりひや、なー一俵いみとーさ
やー」んち、またなー一俵持つち取らちやぐとう、
うんにーねーなー、また持つち二カ所かい積さーにま
た持つちはいたんり。

妻が「今日は米も無いよ、お父さん」と言ったので、
「それじゃー、貰ってこようね」といって御主の所に
行った。「米が無いので、少し分けてもらえないですか」
といったら「持つて行きなさい」と言った。馬を連れ
て行ったらしいよ、やせた馬を。
そこで(御主が)「一俵持つてきてあげなさい」と言っ
たので、一俵を持つてきてあげたら、片方に積んで馬
を引っぱっては転ばしたりして、何回もそうして「転
んだりぶつかつたりして、これでは運びにくいですね」
と言ったので、「大変だ、もう一俵要求しているんだねー」
と言ってまたもう一俵持つてきてあげたら、その時は
二カ所に積んで帰っていったという。

64 渡嘉敷ペークーへ味噌と花鉢

話者 比嘉利益（明治三十年七月八日生）

翻字・対訳 玉城琳子

「今日、味噌チユマカイ持たすぐとう、持つちんじ
食むみペークー」りちやぐとう、「はーなー、うすりし
みとーちみそーれー」りち。マカイ盛やーぎ味噌持た
ちやぐとう、うりがあか昼間でーぐとう「持つちー行
ちゆすがやー」りちくるり居たんりよ。

うぬ御主ぬ、あたらさそーぬ花木、庭んじ折ていちゃー
なかい刺さーに「花木るすーもーしちゃんどー」りち、
堂々とう持つち行いたんり。

「今日、味噌を一杯持たすので、持って行って食べ
るかペークー」と言ったら、「はい、御馳走させて下さ
い」と。腕に味噌を盛ってあげたら、それが真昼間な
ので「持つて行けるかなー」と試していたそうです。

御主が、大事にしていた花木を庭に行つて折つてき
て刺して「花木を貰ってきたんだよ」といつて、堂々
と持つて行ったんだつて。

採集S 52・5・22 読谷村民話調査団第十二班（松本久幸・山城悦子）

注 すーもー 少し分けてもらう。

65 渡嘉敷ペークーへ味噌と花鉢

話者 奥原松助(明治三十年八月二十四日生)

翻字・対訳 玉城琳子

あんし知恵持ちやししが、ちやぬあたいたい知恵おあがやーんち、うりから、うり困らしわるやつさーりち、じこーなー上ぬ人お考とーみせーしが。

あんさーに味噌よ、昔え買っているあつちゆたさ。「いったー味噌ん買てー食みゆさんはじでーむん、あぬだーアヤーん二人、持つちんじ食めーやー」んち、マカイかい味噌ぐわー立派ぐわー入つていよ、持たちやぐとや。

あんさぐとや、男ぬなー味噌持つち歩ちゆせー、うんぐとーる恥じかしい事お無やびらんせーや。あんしマカイ持つち。「うしりみそーち、にいふえーでーびる。アヤーんかい味噌御差ぎてい御馳走さびら」りちさぐとやよ、庭んかい回やーに、一番殿様ぬ上等ぬ花木ちん折ていよ、すぐうぬ味噌ぬ上かい刺ち。

「今日や、ちやーぬ良い日がやたらー殿様ぬうんぐとーぬ上等ぬ花木くてーびーせーさー」りち堂々と道

(渡嘉敷ペークは)賢くてね、どのくらい賢いのかねーと、上の方はペークーを困らしてみようとしたつて。

それで味噌ね、昔は買つて食べていたよ。(上の人)が「君達は味噌を買つて食べることは出来ないはずだから、アヤーと二人分持つていって食べなさい」と言つて、腕に味噌をちゃんと入れて持たしたそうですよ。

それから、男の人が味噌を持つて歩くということは、そのような恥ずかしい事はないですよ。それから腕を持つて、「御馳走ささせていただきます、有難うございます。アヤーにも味噌を御馳走させます」と言つと、庭に回つて行つて、殿様が一番大事にしている花木を折つてね、すぐその味噌の上に刺して。

「今日はどんなに良い日だったのか、殿様がこんな上等の花木をくれている」と堂々と道から持つて。そ

から持つち。うり味噌おな―土ぬ事るあいびせーや。
「あつさびよー。あんし上等ぬ花木、いや―貰ていちえー
る」りち誰がやていん見じるすたる、味噌持つちよー
んりちよーせー分かやびらんたんりよ。くりねー、ま
たんの打たつたぬむん。またんさつたぬむんりやーに。

採集S52・2・26 読谷村民話調査団第十二班(山入端孝子・遠藤庄治)

注 アヤー 土族でいうお母さんのこと。

66 勝連バ―マ―マ―へハルア―サ

話者 阿波根 庸 秀 (明治三十年十二月一日生)

翻字・対訳 辺土名 初 美

勝連バ―マ―や、いつペーるぐて―大が、今ぬ暴行、
力さ―に世の中うりしそーるうりなてい。くりんまた、
言わばウナイイキー居くとう、うぬウナイぬ、「とにかく
くくり、くんぐとうし世の中うてい暴りらちうりし―
ね―世ぬ中ぬ為えあらんむん。くれー、私さ―に始末
しとうらしわるやる」んでい、そういううりから出

勝連バ―マ―は、とつても力持ちで、今で言う暴行、
力で世の中を支配している人だった。彼にはまた、言
わばウナイイキーが居たから、そのウナイが、「とにかく
くこれは、こんなして世の中で暴れさせていたら世の
中の為にならない。これは、私が始末しないとけな
い」という、そういうことから出た話で。

じてい。

くんなげーや、畑^{はたけ}なかい畑^{はたけ}アーサンちあたし。くれー
非常に^{ひじょう}乾燥^{かんそう}しみやーに、あんしうり言^いわばな、美味^{まい}
さるぐとうてー、うりし。くれーまた塩^まお沢^せ山^{さん}入りやー
に塩^{すいぢやう}辛^{しん}くうりするばーてー。あんし、「あーくれー、何^{なに}
がいやーや、ちやーし作^{ちやく}たが」とか何^{なに}んち、うりん勝^{かつ}
連^{ちん}バーマーいちやしんな、食^かみちきてーるばーてー。

あんしさくとう、今^{こん}度^どお、塩^まおあんし入^いつちるうい
しが、なーうれー塩^{すいぢやう}辛^{しん}さんでい思^うんぐとう食^かみとうん
ばさーに、後^{あと}お水^{みづ}欲^ぶしくなていうりされー、なーくれー
水^{みづ}え飲^ぬでいん飲^ぬでいん水^{みづ}欲^ぶさーうしらんなやーに、後^{あと}お
腹^{はら}いっばい水^{みづ}え飲^ぬみとうばさーに、後^{あと}おうりそーる場^ば合^あ
に、「なまさみ」でいやーに。あんし、言^いわば、妹^{いもうと}な
かいうりさつたんでい、ことういううりがあたるばー。

昔は、畑に畑アーサといつてあつたでしょう。これ
を非常に乾燥させて、そうしてとつても美味しいよう
に調理してね。これにはまた塩を沢山入れて塩辛くし
てあるわけ。そうしたら、「ああ、これはどうしたんだ
あんたは、どんなして作つたか」とか何とか言いなが
ら、これを勝連バーマーはどんなしてでも食べきつた
わけだね。

そうしたから、今度は塩がこんなに入っているのに、
もうこれは塩辛いとも思わないで食べ尽くしたから、
水が欲しくなり、もうこれは水を飲んでも飲んでも水
欲しさはうえなくなつて、後は腹いっばい水を飲み尽
くして、後はそうやつて(苦しんでいる)時に、「もう
しないか」と言つて。そうやつて妹に懲らしめられた
という、ことういう話があつたわけ。

採集 S 52・2・26 読谷村民話調査団第五班(宮里洋子・小橋川清)

注① 勝連バーマ 尚穆王時代の人。前浜三良、一七〇四年に勝連村平安名に生まれ、浜掟(浜の行政責任者)をしていたので、勝連バー
マと呼ばれた。後に勝連間切地頭代となる。

注② ハルアーサ 念珠藻。原野から採つたハルアーサは乾燥させて保存し食べる時には水でもどしてから炒めて食べた。

67 尻^へひり嫁^{よめ}

話者 波平 秀 (大正四年八月十日生)

翻字・対訳 松田美奈

あぬー親子^{うやつくわ}ぬ話^{はなし}やるばーてー。どくく女^{いなが}ん子^{ぐわ}ぬ尻^ひひ
らーなたぐとう、「くれーなー夫^{うとこ}ん持^むたさりーがてー
なーくぬマージュー^注や」りち。あんし尻^ひやひつちやぐ
とう「^{※あしど}踵^{あしど}どーマージュー、踵^{あしど}どーマージュー」り
ち、あんさーにあぬ何^ぬが、行^いちーにん「踵^{あしど}どーマ
ジュー、踵^{あしど}どーマージュー」りちなー夫^{うとこ}持^むつち行^いちー
ねーうんぐとうーし女^{いなが}ぬ親^{うや}ぬうりさーに「覚^{ういび}とーみ、
覚^{ういび}とーみ 踵^{あしど}どーマージュー足^{ひさ}ぬ踵^{あしど}お尻^{ちび}んかい当^あてい
せー忘^わんなよー」りちよーるばーてーなーどくく尻^ひひー
ぐとう。あんさーなかい、「踵^{あしど}どーマージュー」りる
うれー言^いい伝^たえある。

女^{いなが}おじこーよーがりとーたりたんりよ。「何^ぬがいやーや何^ぬ
んちよーがりとーが」りちやぐとうてー「なー尻^ひにじ

あのー親子の話^{はなし}なんだけどね。娘^{むすめ}がとてもおならを
する人^{ひと}だつたので、「これは嫁^{よめ}にも行^いけるかなこのマ
ジューは」と言^いつた。そして尻^ひをしたので「尻^ひをやっ
たら踵^{あしど}だよマージュー」と言^いつて、そして嫁^{よめ}に行^いつて
も「踵^{あしど}だよマージュー、踵^{あしど}だよマージュー」と母親^{はは}の
言^いつた通り「覚^{ういび}えているねー、覚^{ういび}えているねマージュー、
足の踵^{あしど}を尻^ひに当^あてる事^{こと}を忘^われるなよ」と言^いつているよ
もうとても尻^ひひりなのでね。それで、「踵^{あしど}だよマージュー」
という言^いい伝^たえがある。

また女^{いなが}の人^{ひと}はとてもやせていたそうです。「どうして
お前はこんな^いにやせているのか」と聞^きいたら「尻^ひを我^{われ}

とーびん」りちやんりよ。あんされー」屁にじれーぬー
さいし屁やひれー」りちやぐとう「直ぐくるちちり病
んめーるないさい」りちやぐとう、黒煙巻ちゃーちよー
たんり夫ぬ家んじ。

慢しています」と言つたそうだ。すると「屁は我慢し
ないで屁はしなさい、すぐ青冷めて病気になるよ」と
言つたらその嫁は夫の家で黒煙りを巻くくらいの屁を
したそうだよ。

採集S52・2・26 読谷村民話調査団第十一班〈大宜見光一〉

注 マージュー 娘の名前。

※ アードウーどーマージュー 「踵栓をして慎しみなさいよ、マージュー」という意。

68 山原と団亀

話者 比嘉好子(明治四十二年六月五日生)

翻字・対訳 玉城和美

あれーよ、旅は何べんも行くが、亀によ道中でその
亀の上に糞までーんーてー。あんさぐとう、うぬ亀ぬ
歩ちやぐとう

あれはね、旅は何度も行くが、道中で亀の上に糞を
したんでしようね。そうしたら、その亀が歩いたので

山原ぬ旅や 幾旅ん来しが
糞ぬ歩ちゆせー なーら当たてーんらん

山原の旅は 幾旅もしたが

糞が歩くのは まだ出会つた事がないよ

りちうぬ亀んかいたまたぐとう、うぬ亀ぬ歩ちちやぐとう

とこの亀に糞をしてその亀が歩いたのでそう言つたは

あん言ちえーるばーよー、うぬありやるばーてー。

ずよ、そういう事だつたはずだよ。

採集S 52・2・26 読谷村民話調査団第三班〈阿波根初美〉

注 山原 沖縄本島北部国頭地方のこと。山が多いのでそう呼ばれている。

69 山原と団亀

話者 儀間 真治 (明治三十九年五月三日生)

翻字 比嘉葉子

首里^{すり}なんかの^{ひと}人がね、山原^{やんばる}の方^{ほう}に行^いつて、それは、まあ夜^{よる}であつたか分^わかんけれどね、それが上^{うへ}でやったわけさー。それが見^みてみたら歩^{ある}いたんだから、そういう話^{はなし}だつてね。それが上^{うへ}に便^{べん}をやつて、これが歩^{ある}いておるわけさー。

山原^{やんばる}ぬ旅^{なび}や 幾^{いく}旅^{なび}んさしが

糞^{くす}ぬ歩^{あつ}ちゆしや 今^{こん}度^{どう}初^{はじ}み

山原^{やんばる}の旅^{なび}はね、幾^{いく}度^どもしたけれど、それが歩^{ある}くのは初^{はじ}めてというさー。

採集S 52・2・26 読谷村民話調査団第十班〈山城悦子〉

注 首里 153頁参照

※ それ 亀。

70 山原と団亀

話者 波平 秀 (大正四年八月十日生)

翻字・対訳 松田美奈

山原ぬ旅や 幾旅んさしが

山原の旅は 幾旅もしたが

糞ぬ歩ちゆせー 今度はじみ

糞が歩くのは 今度初めて

りちよー。「何があんし糞ぬ歩ちゆんりちあがやー」りち調びたぐとう亀なとーたんり。亀ぬ上んかい糞までーたんりよ、あんさーに糞ぬ歩ちえるばーてー。

といて。「どうして糞が歩くというのがあるのかね」と調べて見ると亀だったらしい。亀の上に糞をしてあつたよ、それが歩いたという事だよ。

71 十五夜の餅

話者 島袋利蔵 (明治二十六年三月二十日生)

翻字・対訳 玉城和美

隣ぬ家から餅持ちちやくとうや、うぬ坊主ぬ家ん

隣の家から坊主の家に餅を持って来たそうさ。そう

かい。あんしさぐとう、うぬ一休和尚りぬ小坊主えくまーどうくからちりてい、ガチんやてーるばーてー、ちりとーぐとう。餅え半分ぬ引つ切てい引つ切ていう

したら、この一休和尚という小坊主はとても賢くて、食いしん坊だったらしい。餅を半分に切つては食べ切つては食べしていた。

ちゆ食ていやー。

「あんぐとうな親坊主え帰てい來ぐとう。昔え、言葉しえー責みらん、歌さーにしうんなむんさーに言じ返答すたるばー。あんさぐとう親坊主ぬよ、

十五夜の月が 三日月になるか

りちやぐとうや、うぬ小坊主え

雲に隠れて 今に出る

りち出じとーたなりよ。半分の餅え引つ切らつとーせーやーうちゆ食り、私が食てーんどりぬちむんかいなとーるばーてー。

あんさぐとうや親坊主え、「くれー私やか上るやんむなー」りちなし、あんさーに何ん咎みーんさんたなりぬ話やさ。一休主、二休主りち、なーなーめー賢い人や仏教編み出しやするばー。

そこへ親坊主が帰つて來てね。昔は、言葉では責めないで歌を詠んで返答したりしていた。そうすると親坊主がね、

十五夜の月が 三日月になるか

と言つたらこの小坊主は

雲に隠れて 今に出る

と言つたらしいよ。半分の餅は食べて引きち切られているので、私が食べたよという意味になっているよ。

そうしたら親坊主が、「これは私よりも賢いね」と、何も咎めなかつたという話だよ。一休主、二休主といつて、賢い人はそれぞれに仏教を編み出すようだよ。

採集S52・2・26 読谷村民話調査団第三班〈阿波根初美〉

注 十五夜 旧曆の八月十五日の月拜みをしフチャギ(あずきをつけた細長い餅)を仏壇に供える。地域によっては村アシビが催される。

何ゆなりがりれーや、あれー昔むかし、鹿兒島かごしまあ島津家しまづけぬ
 沖繩うちなあ攻しみーがちやぐとうや。初はじめてえ島尻しまじりから攻しみーん
 りすが、あま堅守けんまむらつとーぐとう、入いりーさん国頭くにがみ
 からさーに攻しみていつち。

沖繩うちなあ野蛮やばんぬ国くにやぐとう、鉄砲てつぱうさーに国頭くにがみや。あん
 し沖繩うちなぬ戦いくさや、農民のうみんぬ達ちやあクルマボまーさーによ、戦たたか
 ていあんそーたんりよー。なー大事だいじりる事こと分からんやー
 鉄砲てつぱうさーに射いらりーぎーしが、なかなか死しななんたんり
 よ。大事だいじえ分からんるあぐとう。

あんし、しだいしだいにうまにかいなーくまちえー
 なーちようどう読谷山ゆんたんざ、くままでい来るちよばーよー。あ
 んし、くりかー辺ひんぬ人ひとお大木おおきりる所ところんかい避難ひなんし
 ていやー。あま大木おおきでいる所ところあ沢山だてんぬ大木おおきぬ生まいでい
 やー、ふちやーていつペーそーん所ところやたんりよー。

あんし、大木おおきぬ武士ぶしぬ大木おおき守まもていやー。あんさーに
 そーしが、うぬ内地ないちぬ島津家しまづけぬ軍隊ぐんたいうままでー来ちうさ

それはどうなっているのかというと、昔、鹿兒島の
 島津家が沖繩を攻めてきた。最初は島尻から攻めよう
 としたが、あそこは堅く守られていて、入ることが出
 来ず国頭から攻めてきた。

沖繩は野蛮な国なので、鉄砲で(射たれようとして
 いた)国頭では。そして沖繩の戦いは、農民達がクル
 マボで戦っていたそうさ。鉄砲で射たれようとして
 いるが、なかなか死ななかつたそうさ。大変とは知ら
 ないからね。

そして、しだいしだいにこの読谷山、ここまで来た
 ようだ。それで、この辺の人々を大木という所に避難
 させた。あの大木というところは、とても大きな木が
 おい繁っている所であった。

そして、大木にいるその武士が大木を守っていた。
 そのようにしたので、内地の島津家の軍隊はここまで

んやー。あんさーに徳ぬあてーる武士りちや、徳ぬある武士ぬ守てい、なうぬ恩返しとうし徳武佐ぬウカミ造らつとーんり。

来ることが出来なかつた。そうして徳がある武士といつて、徳のある武士が守つて、その恩返しとして徳武佐のウガンジュが造られているということだよ。

採集S 52・2・26 読谷村民話調査団第三班（阿波根初美）

注① 徳武佐 現在の大本部落の山手にあり、今から約六百年前に三山戦国の時代に中今婦仁按司が戦い敗れ追われてここに身を隠し、余命を全うしたと伝えられている。毎年旧暦の九月になると、各地から今婦仁按司の子孫が参拝にやってくる。

注② 島尻 157頁参照

注③ 国頭 沖縄本島北部を指す。

注④ クルマポー 麦や豆などの脱穀用具、日に干した豆をムシロの上に積んで、クルマポーでたたいて実を落とした。使い方は短い方の棒を手を持って振りあげ振りおろす。

注⑤ 読谷山 戦前までの村名で、戦後読谷に改名。沖縄本島中部の西海岸に面し、

国道58号沿に位置している。

注⑥ 大木 読谷村の南側に位置している。



徳武佐

この古堅ふるけんの部落はらくさ、これはどつから出できたかという事ことをね。私わたし子孫しそんでないけどよ、私わたしは寄留人きりゅうにんだから。

ここはあの、今帰仁親方いまきじんあかたの子こ、孫うまがだよ古堅ふるけんは。島袋しまぶくと池原いけはらねそれから伊波いは、この人達ひとたちから始はじまっているさ。

これは今帰仁いまきじんは、城しろのうぬめし大主おほぬし。その家来けらいの一番強いちばんこゝろい人ひとさ、本部大原むつおほといつてその城しろに居いたつて。その人ひとが強つよいのだから、そこに向むかつて行いかないわけさ。だからこの今帰仁いまきじん若按司わかあじは、そこからは追おわれて来きてこの大木おおきの徳武佐とくぶさといふ所ところね。

この徳武佐とくぶさは何なんといつてこの徳武佐とくぶさつて名前なまえか聞きいたら、大木おおきは大きな木きが沢山たくさんあつたそうだよ、その下したで命いのちを助たすかつたという。徳武佐とくぶさといつて今いまあるんだが、そこで命いのちを凌しのいで、してこれは自分じぶんの親達おやたちの骨こつでも敵てきに取とらしては出来できないと、泊とま城しろといつてあるがそこに持もつてきてあつた。

そうしてその子こから、大湾城おほわんぐくといつてあるがその城しろの世話せわして、ここも長男ちやうなんは臆病おくびやうで、次男じなんに城しろを守まもらせ。そうしてその城しろもやつぱし負まけておるわけさ。そして長男ちやうなんはずつと向むこうで死しんで、次男じなんはそこで亡なくなつておるさ。その人達ひとたちの子こから古堅ふるけんは広ひろがとーびん。

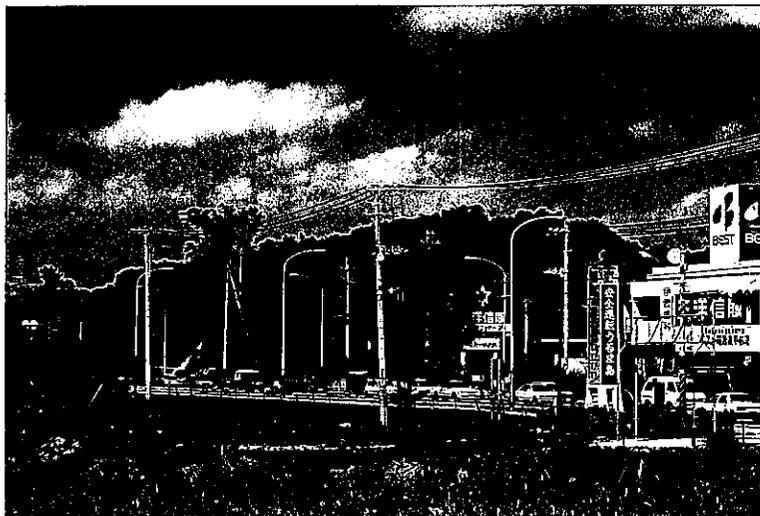
採集 S 52・2・26 読谷村民話調査団第十班 へ山城悦子

注① 古堅 読谷村の比謝川に面した字。

注② 今帰仁親方 北山監守と同じと思われる。

注③ 本部大原 モトブタイハラ ？一四一六(？)尚思紹十二(本部大原とも表記する。沖縄本島の北部でもつとも勢力のあつた今

注④ 大湾城 ウフグシクのこと。長田川の河口にある。
帰仁城主攀安知の腹心。勇力きわめて強しといわれた。



大湾グシク遠景



ウフグシクの拝所

74 宮古の始まり

話者 阿波根 ウ シ (明治四十二年二月二日生)

翻字・対訳 玉城和美

昔はじこーうんなむのー厳きびさたんりせーやー。ある男いきがとうりさーなかい、なー身み分ぶお男いきがあしちややい女いながお上いやしが、うぬ女いながとうぐーなやーなかいりさぐとう男いきがあ打ち首くびないんりちそーしが、女いながお打ち首くびならんよーい、船ふねんかい乗ぬしやーなかい島流しまながしさつたぐとう宮古なぐ、八重山えいんかい着ちちえーるばーてー。

宮古なぐ、八重山えいんかい着ちちやぐとう、うれー妊娠かさぎとーてーるばーてーうぬ女いながお。妊娠かさぎたぐとう、あまぬ洞窟がまんじ産なちやぐとう誰たにん見みいららんよーい産なちやぐとう。うれーなー王おうぬ女いながん子こやせーやー。

あんさぐとう、あまー犬いんぬ白しろ犬いんぬよー、神様かみさまやるばーてー。ちやーしん犬いんぬおつばい飲ぬまちえーしーしーし、うぬ赤あかちゃんぐわーや。親うややなー、うぬまま産さん後ごぬうりし誰たがん見んらんせーやー死ししえーるばーてー。死しじやぐとう犬いんぬ、「一時いっとちは育すだてていとうらし」りぬ神人かみんちゆ注⑥か。あんさーなかい、うれー行んぢやーなかいうぬ子こ助たきてい

昔はこんなものとても厳きびしかつたそうだよ。ある男いきがとい仲なつになり、身み分ぶは男いきがの方が下したで女いながの方が上うへであつたが、その女いながと仲なつ良よくなつたので男いきがは打ち首くびにされ、女いながは打ち首くびにはならず、船ふねに乗のせられ島流しまながしにされて宮古なぐか八重山えいに着ちいたらしいよ。

宮古なぐ、八重山えいに着ちいたら、この女いながは妊娠かさぎしていたらしい。妊娠かさぎしていたので向むかこうの洞窟がまで誰たにも見みられず子どもを産うんだらしい。これはもう王おうの娘むすめでしょう。

そうしたら、あそこの白しろい犬いんは神様かみさまだったわけでしょうね。そして赤あかちゃんに犬いんの乳ちちを飲のませたりしたんでしよう。そして母親ははは、誰たがも世話よちやしないので産う後の肥立こちが悪わるくてすぐに死しんでしまったらしい。そうすると神人かみんちゆ注⑥が犬いんに、「一時いっとちは育すだててくれ」と言いって。それで、犬いんは行いつてその子こを助たけてきてね。その神人かみんちゆ注⑥が犬いん

ちやーい。うぬ神人ぬ犬お見してーるばーてー。

に世話をさせてあるわけさ。

あんさーなかい、うり連おてい来なかい見していさ

そして、犬を連れてきて世話させたから宮古、八重

ぐとう宮古、八重山あ犬ぬ子りち。

山は犬の子だといっている。

採集S 52・2・26 読谷村民話調査団第九班(前田逸子・上間京美)

注① 宮古(ナーク) 琉球列島の南西に位置している。ナーク、ミヤークとも呼ぶ。

注② 八重山 琉球列島の南端に位置している。エーマ、エイマとも呼ぶ。

注③ 神人(カミンチュ) 根神、祝如など御嶽等の祭祀をつかさどる人々。

75 護佐丸と阿麻和利

話者 島 袋 利 蔵(明治二十六年三月二十日生)

翻字・対訳 玉 城 和 美

沖繩あ取れーやーりうりやるばーてー。ありんなー

沖繩を支配しようとしてね。護佐丸は企みがあつて

また沢山文句ぬあせーやー、護佐丸が護佐丸ぬ初めー

初め山田城で城を構えて居たが、首里城が見えないと

山田城んじ城探とーしが、あまからー首里城お見い

いつて座喜味に来た。そしてここからも見えないといつ

らんりち、また座喜味んかい来。とーうまからん見い

て、今度は中城で城を探して、建築の最中に首里の王

らんりち、今度おまたあま中城城んじ城探いしが、

から様子を探る為に斥候を行かせるわけです。護佐丸

建築ばんじぬ場合にやーまた首里ぬ王から斥候やらす

が背かない為に、戦をしかけようとしていた。

るばーよー。護佐丸お謀反さんが為に、なー戦グプロウうつちさぎーんり。

あまーなー城るばんない造いぎいーぐとうやー、鍛冶屋や何からぐわんぐわんしせーんばーてー。あんしうぬ斥候ぬ臆病なやーによ、あんさーになー「確かにあんやん」りちやーに。本当やあねーあらん、あれー護佐丸お忠臣るやし、あんさーに「あんやん」りちなー王んかい返事えせーるばーてーやー沖繩あ王んかい。

「阿麻和利、うれーなー謀反さぎーんどー」りちさぐとう。また何んりがこの護佐丸や、「あぬらー本當ぬ忠臣やぐとう王ぬ旗印持つちよーぐとう、うりんかい手向けーせーならん」りやーに自害し。子ぐわー一人やなー切らんりしーねー笑てーういさぐとう、あんさーにあぬらー殺さらんない、うぬ乳母ぬやー「私にかい呉ていくみそーり」りちやぐとう「あんしえーあんしー」んち。

乳母りーしえー、くぬ島尻ぬ国吉ヌヒャーりち大武士ぬやーウナイやたんりよ。あんさーに、うりが取やーに自分ぬイキーなー島尻ぬ一本柱国吉ヌヒャーあさやー、

そして向こうは城を作っている最中でね、鍛冶屋などがガンガンしていた。そしてその斥候は臆病者で「確かにそうである」と言っていたが本当はそうではなくて、あの護佐丸は忠臣であるが、「そうである」という王に返事はしたよ。

「阿麻和利、この護佐丸は謀反するよ」と言った。この護佐丸は、「その王の旗頭を持った阿麻和利が本當の忠臣だから手向かつてはならない」と自害したよ。そして子どもも切ろうとしたが笑ったりしたので、殺せずにいると乳母が「私に育てさせて下さい」と言ったので、「それではそうしなさい」と言った。

乳母というのは、島尻の国吉ヌヒャーといって武士の家の娘であつたらしい。そして、その国吉ヌヒャーが護佐丸の子どもを育てあげて、後々は仇討ちをする

ありんじかかていうぬ護佐丸ぬ子育ていあぎていあり

さーに、後々おあんさーにちち討つちゆぬ事なたぐとう。

うままり来に楚辺ぬエンミ毛りぬ所うてい追い押

していや、「エンミ」りちやぐとう、うまー楚辺、ウシ

ナー造てーぬ所あエンミ毛りち名付きてーんり。あ

んさーにうまんじ殺ちやぐとうやー、楚辺上びなかい

屋良墓ぐわーりちあたんよー。あれーあまつち骨お置

ちえーんりる話私達あ小さいねー見いが行ぢやんよー。

あんぐとう楚辺ぬウシナー造てーるエンミ毛や、あ

れー阿麻和利がうまうてい「エンミ」りち、「悪さいび

ん」りちエンミしうまうてい追い押していちやるうり

やんりよ。あんさーにあまーシ高さぐとうんちや畑

んならん、あんさーまウシナー造てい楚辺村ぬありや

たんり。うまー本当や阿麻和利あまんじ捕みらつたん

ことになった。

そして楚辺のエンミ毛という所まで攻めてきて、そこで「悪うございました」と言ったので、そこは楚辺の闘牛場が造られている辺りをエンミ毛と名付けたという。そこで殺したので、楚辺の上の方に屋良墓というのがあつたよ。あそこに骨を置いているという話だったので、小さい時に私達は見に行つたよ。

それで楚辺の闘牛場を造つてあるエンミ毛という所は、阿麻和利がそこで「エンミ」「悪うございました」と言った所で、そこは神聖な場所でも出来ないもので、楚辺の村の人は闘牛場を造つたそうだ。そこは、本当は阿麻和利が捕つた所である。

採集S 52・2・26 読谷村民話調査団第三班（阿波根初美）

注① 護佐丸 一四二〇年代の英雄、護佐丸はもと大北（読谷山、恩納）地方を領し、最初山田城にいたが、後に座喜味に城を築いて移つ

た。ここで北山地方をおさえ、長浜港を利用して南蛮貿易を行つたといわれる。更に、その娘が尚巴志の妃（夏氏大宗由来記には尚泰久の妃）となり、北山も一四一六年に滅亡したので、一四四〇年頃に中城城を築造して移つた。

注② 阿麻和利 北谷屋良村に十五世紀初頭に生を受け

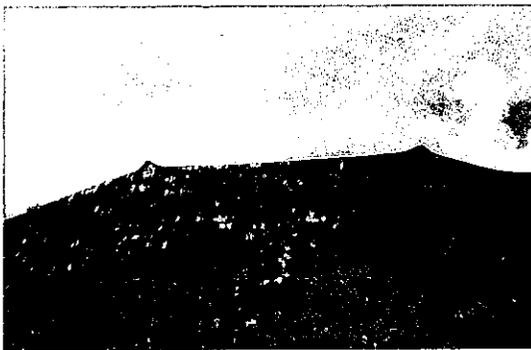
た英雄である。十歳の頃まで体が弱く、山に捨児されていたが、山中で蜘蛛が巣をはるのをみて網をつくりだしたという。成長の後、勝連按司につかえたが、勝連按司茂知附を亡ぼし勝連城主となる。また、海外貿易なども盛にしたとされるが、護佐丸や第一尚氏と対立抗争し、一四五八年に越来按司(鬼大城)にひきいられた軍勢に亡ぼされた。阿麻和利の墓と称されるものが読谷村大木のエンミ原にある。

注③ 山田グスク 座喜味城から直線距離にして約4km東北の地にある。恩納村字山田の東方を通る国道五八号線の東側に平行して走る琉球石灰岩の丘陵の北端部に山田城跡は立地する。十四〜十五世紀頃護佐丸が築城したといわれ、座喜味城が築城された一四二〇年頃には廃城になった可能性が強い。

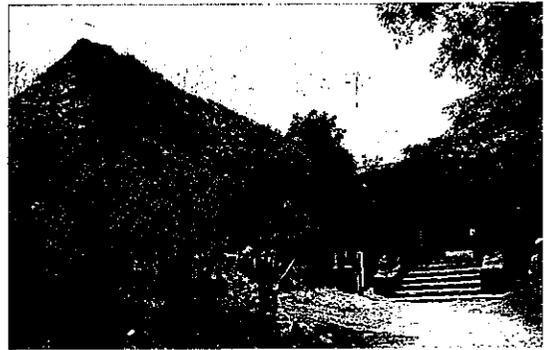
注④ 首里城 那覇市首里当蔵にある。中山王の居城であった。城の創建年代は不明であるが、尚巴志三山統一後の築城ではないかといわれる。今次大戦で壊滅され、僅かに城壁の一部を残すのみとなった。一九九二年に修復、復元された。



エンミモ一



首里城



中城城跡

注⑤ 座喜味城 読谷村字座喜味の城原にあり、一四二〇

年頃に護佐丸によって築造されたものである。護佐丸は、この城の北上眼下の長浜港を利用して、南方貿易をし巨大な富を得たといわれる。しかし、まもなくして、座喜味城のはるか東南の中城へ移り、一四四〇年頃そこに名城・中城を築いた。座喜味城跡は、現在は城壁だけが残っているが国指定史跡で環境整備もすすみ、松林の奥深くたたずみ、風光明媚なところで訪れる人も多い。

注⑥ 中城城 中城村に十五世紀初期から中期にかけて築城された。

注⑦ 島尻 応頁参照

注⑧ エンミ毛 現在の読谷村楚辺部落で、古堅小学校西側一帯の原名。そこに阿麻和利の墓がある。「エンミ」とは方言で「降参する」という意で、阿麻和利が首里の追手に討ち取られる際の言葉が小字名として使われるようになったといわれている。

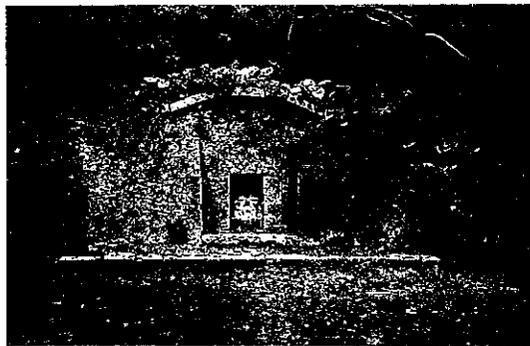
注⑨ シジ セジともいう。霊力のこと。



座喜味城跡



山田グスク



護佐丸の墓 (中城村)

翻字・対訳 玉城和美

とにかくあれー侍ぬ子やしがや、阿麻和利ん。やし
 がなー七ちなるかだゆーぐわーなていや、何んならん。
 なーうぬ親ん達が、山ぬ中んじ置つちやんぎてい食物お
 持つち行ぢ呉てーういし生ちちよーたんりよ。

あんしが、あぬらーうぬ山ぬ中うとーい蜘蛛あ認めか
 きーし見ちよーうり、「くれーくり蜘蛛あ認めかきーねーう
 ぬ昆虫やうりんかい掛かやーにや、うりが、餌ないさ
 やー」りち、うり考えてい今度お網りしえー編み出じや
 ちや。しぜんしぜん健康なたぐとう、なー武勇ん何
 んくいかなくてい、あんし勝連方面ぬ人んかい、網作てい
 魚ん取つてい呉たぐとうやーあんしそーたんりよ。

あんししさぐとう、ちやーしうぬ人ぬ恩義え贈いが
 やーりちありかー勝連方面ぬ人おや考とーたんりー
 しが、また阿麻和利りる人ぬやー「私あ恩じ贈いねー、
 贈らやーり思いらー、何月に何日にや皆松明付きてい
 浜から浜んかい行ち戻やーし歩きよーり。あんしーる

とにかく阿麻和利の侍の子でね。しかし七つになつ
 ても身体が弱くて何も出来なかつた。もうその親達は、
 山の中に置き去りにして物を持って行つては食べさせ
 たりして生かしていたつて。

それが、その山の中で蜘蛛が糸を張るのを見てね、「蜘蛛
 が糸を張ると昆虫などがこれにかかつて、餌になるん
 だね」と言つて、それを見て考えて網という物を編み
 出してね。しだいに健康になり武勇も備わつて、勝連
 方面の人にも網を作つて魚も取つてあげたりしていた
 そうだよ。

そうしたら勝連方面の人は、この人への恩はどうし
 て返そうかと思つていたら、その阿麻和利という人が
 「私に恩返しをしようと思つていたらね、何月の何日
 に皆松明を付けて浜から行つたり来たりして歩きなさ
 い。そうしたら私への恩は返せるから」と。あの辺り

んせー私あ恩じえ贈いぐとう」りちしやー。なー何月に何日、何時から何時まんぐらまでい松明付きやーに、浜からいちゃんだありかー辺ぬ人民のーむる行ち戻やーし歩ちゆたんりよ。

あんさーにしさぐとう、うぬ場合にうぬ阿麻和利りしえー勝連城址ぬんかい入つちよーぐとうやー、ありがうま勤みぐわーふーじーそーぐとうやー。あんさーに「うぬ按司がうまんかい押し掛きてい来しが、一大事やしが」りち崖んかい呼び出じやしやーに「なーうつさん松明付きてーぐとう、なー何がらんぐとうあさやー」「あんしあんやさやー」りちうんにーに油断伺がやーに按司え押し落とうちやぐとうやー按司え全滅さぐとう、自分ぬ按司んないあんあんそーるばー。本当は阿麻和利りーぬ人お、元々侍ぬ子やんりよ。屋良ぬアマンジャー、ありがグワンソー言いるんせー北谷屋良村かわんだとーんどーする話んあさ、伝道なかいうぬふーじーやんり。

の人達は皆何月の何日、何時から何時まで松明を付けて、浜からただ行ったり来たりして歩いていたらしいよ。

そうして、その場合に阿麻和利は勝連城跡に勤めていたそうです。そうして「この按司がここに押し寄せて来たたら大変だよ」といつて崖に呼び出して「こんなに松明を付けてあるので、何かあるんだろうなあ」「そうだね」とそんなすきを見て按司を押し落として全滅させて、自分が按司になったそうさ。

本当は阿麻和利という人は、元々は侍の子どもだったよ。屋良のアマンジャー、あの人の先祖は北谷屋良村が奉っているという話もあるよ、伝道に奉っている話だよ。

採集S52・2・26 読谷村民話調査団第三班（阿波根初美）

注② 勝連 沖繩本島中央部より東方に突き出たところ。

注③ 勝連城址 与勝半島の中央部勝連町南風原にあつて、中城湾をまたいで南の方には中城城跡が望見される。首里第一尚氏尚泰久（一四五四—一四六〇）時代、勝連按司阿麻和利の居城であつた。

注④ 按司 位階名。元は地方に一城をかまえて割処したが、尚真王時代に首里に中央集権が敷かれた際、首里に集められ、一間切を領する身分となつた。

注⑤ アマンジャー 阿麻和利のこと。

注⑥ グアンス 元祖・先祖を祀つた位牌のこと。

注⑦ 北谷屋良村 戦後、北谷村から分離して嘉手納町に加わる。

注⑧ 伝道（リンドー） 北谷間切の富豪。屋号。

77 屋 良 ム ル 子 注

話者 阿波根 ウ シ（明治四十二年二月二日生）

翻字・対訳 玉 城 和 美

なー雨ぬ降らんたいぬーさいしーねー、必じうれー
寅年ぬ生まりてーる子、美ら女てー何人りちあんし
連おらつてい行ぢやーなかい、食しんぬんせーまたう
まー雨、風吹ちよーるばーてー。

もう雨が降らなかつたりすると、必ず寅年生まれの子、きれいな女の人を何人といつて連れて行って、蛇に食わせるところは雨、風が吹くわけさ。

うぬ話や、やっぱし金持人ぬ家ぬ女ん子が当たとー

この話は、金持ちの家の娘に当たっているが「私達

しが「私達あ一人女ん子るやるむん」りち。金し貧乏人
ぬ子、親助ぎ一ぬ為に買らつてい行ぢやぐとう。うぬ
親ん達や貧乏人ぬ女なや一なかいうりやせーや一、泣
ちや一なかい親孝行やぐとうあんし食りーが行ちゆし
が、神様が助ぎ一るば一。な一あんぐとう子ぬ誠や
ぐとううぬ子あ助かてい、黄金神様から貰つてうま一
金持さんり。親孝行ぬ子やぐとう。

採集S 52・2・26 読谷村民話調査団第九班 前田逸子・上間京美

注 屋良ムルチ 100頁参照

78 嘉手納チナーの話

話者 儀間真治 (明治三十九年五月三日生)

翻字 玉城和美

昔の戦の場合にね、この比謝橋の上に、天川板といつてあつたよ。その戦の場合に、敵に追われていた時に下の方から敵は攻みて来るのをね、粥湯を炊いて流したそうだからこの坂を。そうしたら向こうの敵は、腹は減つておるんだからその流してある粥を食べてね命を助かつて。

今中央公民館の所、そこは山だったがその上に大きな黒石があつた。その人が追われているんだから宝持つて

逃げるわけも出来ないから、そこに宝を埋ずんでね。わしのように力持ちでこの石を持ちきれぬ人がいたらその宝をとりなさいという、なんでその石を。

採集S 52・2・26 読谷村民話調査団第十班 へ山城悦子

注① 嘉手納チナー 大武士のこと。

注② 比謝橋 嘉手納町と読谷村の境を流れる比謝川にかかっている橋。戦前までは石橋であった。

注③ 天川坂 読谷村から嘉手納に差しかかる急な坂道。戦前は石畳だった。

79 赤犬子 へ暗川発見

話者 波平 秀 (大正四年八月十日生)

翻字・対訳 玉城和美

字楚辺あきそべんかいよー、赤犬あかいなあ飼からとーたんりようぬ女いんなぬ。あんさーなかい赤犬あかいなが毎日ゆにちなー暗川くらがや昔んかしぬ誰たがん分わからん場合ばいにてーなー、あんしうぬ犬いぬお浴あみてい出いじてい来ちやし、「何処まんじうぬ犬いぬお浴あみていちえーういすがやー」りち、あんしさーなかいひるまさしうぬ女いんなぬ、うぬ犬いぬぬ行いちゆる所ところ追おいて行いぢ見みちやれー水みづぬまんでい。

字楚辺にね、女の人赤い犬を飼っていたそうだよ。そして昔、暗川が誰もまだ分からない場合に、毎日その犬が浴びては出て来るのを見て、「何処でこの犬は浴びてきたりするのかなあ」と、不思議に思いその女の人は、犬の後を追って行くと水がたくさんあつた。

な、かーま暗さるかーまかーまロウソク付きてい
行ちゆるうまー暗やみやしが、うまんかい入つち行ぢやー
にロウソク付きてい行ぢやれー直ぐ湧く水まんてい。
あんさーい楚辺ぬ部落おうまから暗川りち、どうく暗
さぬ暗川りち付きてーるばーてー、楚辺暗川りち。
あんされー赤犬子お昔水ゆ求みたる楚辺ぬ赤犬子
りちうりがしたいやるばー。うぬ赤犬が楚辺ぬ暗川や
搜めーていとうらちゃんり。

とても暗くてずっとローソクを付けて行くくらの
暗やみだけれども、ローソクを付けて行って見るとす
ぐ湧き水が沢山あつた。それで楚辺の部落はここから
暗川といって、とても暗いので暗川と付けてあるんで
しょうね、楚辺暗川と。
そうしたら赤犬子は昔、水を求めた楚辺の赤犬子と
いってこれがでかしているといっていた。この赤犬が
楚辺暗川は搜し出してくれたという話だよ。

採集S52・2・26 読谷村民話調査団第十二班(大宜見光一)

注① 赤犬子 伝説上の人物、赤犬子の字を当てる。母は読谷村楚辺部落の屋嘉(屋号)のチルーで、恋人の子を身ごもったので、村人から愛犬の赤犬との子供であると言われ、村に居たたまれず津軽島で、赤犬子を出産したと言われている。赤犬子に関する伝説は多い。楚辺部落では、中国に使者としておもむき五穀を持ち帰った恩人としてあがめている。

注② 楚辺 読谷村の南西部にある字。

注③ 楚辺暗川 旧楚辺部落内で、現在は米軍用地内になっている。鍾乳洞内にある水脈で、現在でも水量は豊富で農業用水として使われている。この暗川は、他のウツカー、カビギンガーとともに、一月の初ウグワンに拜まれている。

その冶金丸でいる刀あ非常に宝刀やくとう、くり是非磨すんでい言ちやるばー、研じゅんちやるばーてー。刀研し、うりが役目、くぬ阿波根でいしが当ていらつていうりしさぐとう、今度おくり、元ぬ江戸んかい刀造いる鍛冶屋ぬ秀りとーしが居ぐとう、うまんじ研がすんちされー、今度おうぬ鍛冶屋ぬ、くぬ宝刀でいぬうれー聞ちんうい、また見ちんうい分かいてーるーばーてー。うり似してい、くぬ冶金丸んかい似しやーに、言いるんせー沖繩んかいや偽ぬ冶金丸持たちえーるばーてー。

あんしさくとう、「くれー本当ぬ冶金丸おあらん」でいるくまぬまた王ん、くり見分けさーに、是非くり取り返ち来んあれーならんでいうり当ていらつてい、あんさーにくれー、「なー、うぬうりどうんやれー、私がうりしちやーびーん」んち。

あんし、うまぬ鍛冶屋なかいや立派んぬなー女ん子

この冶金丸という刀は非常な宝刀だから、これは是非磨くと言つたわけ、研ぐというわけよ。刀研ぎに、その役目を、この阿波根というのが当てられたから、今度これは、元の江戸に刀を造る鍛冶屋の秀れた人がいるから、そこで研がせようとしたら、今度はその鍛冶屋も、これが宝刀だということを聞いているし、また見てもそれが分かつたわけだね。この冶金丸に似せて、言うなれば沖繩には偽の冶金丸を持たしたわけ。

そうしたから、「これは本当の冶金丸ではない」といつてこのまた王も、これを見分けられて、是非これを取り返して来ないといけないという役目を当てられた。そうして、「もう、そういうことならば、私が取り返して来ます」と言つて。

そして、その鍛冶屋には美しい娘が居て、この阿

ぬ居いてい、くぬ阿波根あはぶねんまた、相当男そうとうおとこぶりんぬーんあ
てーるばーてー。あんしし、互たがいに密接みつせつぬ仲なかなてい、
しざくとう、後あとおくぬ鍛冶屋かじやぬ女いなか子こぬうりさーに、
本ほん当とぬ治金丸じがねまるでいし捜とめーい当あていやーに、うれー隠かく
さつているうぐとう、うり捜とめーい当あていやーに、偽にせ
ぬうりとう替けやーにくり持むつちうちうりつしざくとう、
くぬ褒美ほいびなかい京阿波根きやうあはぶねでいち名なあ付ちきらつたんでい。
京きやうは京都きやうとぬ京きやうやるばーてー。あんさくとう、あまんか
い行いんぢ手柄ていがらた立たていたぐとう、京阿波根きやうあはぶねでいち。

波根もまた相当男ぶりもあつたわけだね。それで、互
いに深い仲になつて、そうしたから、後にはこの鍛冶
屋の娘が、本物の治金丸というのを捜し当てて、これ
は隠されているから、それを捜し当てて、偽物と取り
替えてこれを持ち帰つたから、その褒美として京阿波
根という名を付けられたつて。京は京都の京だったわ
け。それで向こうに行つて手柄立てたから、京阿波根
といわれたわけ。

採集S52・2・26 読谷村民話調査団第五班〈宮里洋子・小橋川清一〉

注 京阿波根親方(チヨーフグン親方) 尚真王代の人で虞建極(京阿波根家基)ではないかと思われる。『球陽』に「虞建極、二次京

に赴き、以て剣を磨き並びに討還を為す」とある。チヨーフグン親方の母親は彼を宿しているときに、鉄を煎じて飲んだため鉄人と
して生まれ武勇に秀れていた。

81 ハジチ由来

話者 波平 秀(大正四年八月十日生)

翻字・対訳 玉城和美

くぬハジチ昔ぬ明治時代ぬ人ぬハジチ突ちよーせー
くぬ時とうちからやたんり。大和ぬ国くにかい連そおてい行いかりー
るうり怖うごるささーに、十三歳じゅうさんなつたらね、すぐハジチ
突ちかんあいねーすぐあるばんじないねーなー「大和ん
かいすんかりんどー大事だいじどー」りち、女ぬ達ちやや集あまてい
よハジチ突ちかすたんりよ。

あんさーなかいくぬ大和んかい連そおらりーし怖うごるさ
さーなかい、くぬハジチんりしえー昔ぬ女いおハジチ突ち
ちよーたんりぬ話はなし。

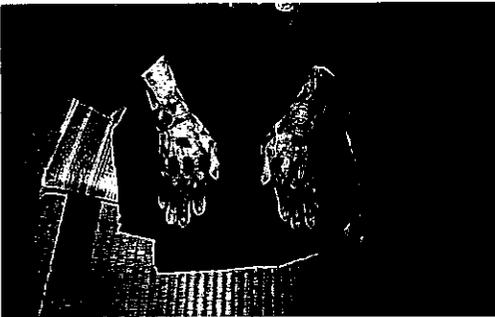
このハジチを明治時代の人が突いているのはこの時
からだそうだよ。大和に連れて行かれるという事でそ
れを怖がつて、十三歳になつたらすぐにハジチを突か
ないと「大和に連れて行かれる大変だ」と言つて、女
達が集まつてハジチ突かしたそうだよ。

そうして大和に連れて行かれるのを怖がつて、昔の
人はハジチを突いたという話です。

採集S52・2・26 読谷村民話調査団第十二班〈大宜見光一〉

注 ハジチ（針突） 明治三十年代頃まで盛んに行なわれていた入墨習俗。年頃十七、八歳

の娘の指甲に、針と墨で施術をした。士族と平民の区別があり、また地域によつても多
少異なつていた。宮古、八重山地方では織物の模様もあつたが、沖縄本島内は指には弓
の矢、手の甲には星形や杵形などの模様がある。これをしてないと後生で困るとか、大
和に連れて行かれるとの伝説がある。



ハジチ

翻字・対訳 村山友江

ハジチぬ話やくぬ話ぬあいびーたつさー。何かんれし、
沖繩や昔え沖繩世るやる大和世やあいびらんしえーやー。

やしが、うぬ大和世ないねー、大和人おハジチりちえー
無びらんしえー。あんすぐとう、沖繩人おハジチりちえー
有いびーしえーや。うぬハジチ突ちよーしや大和人
ぬ妻なてーならんりちるハジチえー突ちやるふーじー
やびーつさー、話や。昔話や、うり聞ちやびーたしが、
大和世なていハジチえー続きたんりぬ話やいびーたん
でー。

むとー、沖繩や味噌、味噌やびんよ。あれー作いる
さびーたんよ。ありまた、手し、う汁ナーピンかい入つ
てい、かんしむんぴーらかちる、昔えさびーたんてー、
うり私達あ覚とーびーしが。うぬ味噌むるさーるやい
びーぐとう、かんし立派くだち、お汁作いる場合にてー。
あんしうぬ為に男んかい対して済まんりち、ハジチえー

ハジチぬ話にはこんな話がありましたね。それは何
かと言うと、沖繩は昔は沖繩世であつて大和世ではあ
りませんでしたよ。

だけど、大和世になったら、大和の人にはハジチと
いうのはないでしょう。しかし、沖繩の人にはハジチ
というのがあるでしょう。そのハジチを突いている人
は大和の人の妻にはなれないということ。ハジチを突
いたらしいですよ、話によれば。そういう昔話を聞い
たが、大和世になってからハジチを突くようになった
らしいですよ。

以前、沖繩は味噌を作っていたんですよ。昔はお汁
鍋に味噌を入れて、手でもみ入れていたそうですが、
これは私達でも覚えていますが。味噌は硬くなつてい
たので、それでちゃんとほぐしてから、お汁を作ってい
たそうだよ。そういうことで、男の人に済まないと思つ
て、ハジチを突いたという人もいますし、またハジチを

突ちちゃんりぬ人んめんしえーい、またハジチ突かんあ
いねー、大和^{やまと}人んかいすんかりーぐとうりち、うぬ
だー、ハジチ突ちちゃんりぬ人んめんせーびーいや、二
ちぬあいびーさ。

あんさーい、大和人^{やまと}おハジチ突かつとーせーなー、
「あつさびよーうれーやー、手^{てい}やうんぐとうるそーる
むん、大和^{やまと}んかい連^そおてい行^んちん妻^{とうじ}えならんどー、何
んならんどー」りち、必^{かな}じ若^{わか}い時^{とき}からうぬハジチや突
ちちゃんりぬ話^{はなし}い有^あいびーたんよー。なー今^{いま}ぬ世^ゆなてい
からハジチりちん無^なびらんしえーやー。うぬ為^{ため}に昔^{かし}
人^{ちよ}おハジチえーむる突^ちかつとーんりぬ話^{はなし}ぬ有^あいびーたつ
さー。

うぬハジチなかい二^たていん有^あいびんよー。錢^{じん}玉^{だま}ぬ入^いつ
ちよーるハジチぬ有^あい、槍^{やい}ぬ型^{かた}ぬ入^いつちよーぬハジチ
ぬん有^あい、二^たていんあいびーしが。うぬふーじーな
話^{はなし}るやびーたつさー。

突かないと、大和の人に連れていかれるので、ハジチ
を突いたという人もいたし、二通りありましたよ。

それで、大和の人はハジチを突いている人は、「あ、
もうこれは手もこんなに汚ないので大和に連れていっ
ても妻には出来ないよ、どうすることも出来ないよ」
と、必^{かな}じ若^{わか}い時からハジチを突いたという話もあった
よ。もう今の世になつてからはハジチというものもな
いでしよう。そのために昔の人はみんなハジチを突い
たという話もありましたよ。

そのハジチにも二通りの型がありますよ。錢玉の型
が入っているハジチもあるし、槍の型が入っているハ
ジチもあるし、二通りあります。そのような話ですよ。

83 吉屋チルルの死

話者 阿波根 庸 秀 (明治三十三年二月一日生)

翻字・対訳 辺土名 初美

うれー吉屋チルル註①が言わば、骨なてい帰けいいる場合ばいぬ
うりやるばー。うれー仲里御殿なかざとうどうらんぬウメ註②ーやしが、うぬ
人ぬちひ請みちひジュリ註③やしが、くぬ吉屋ゆしやが失敗しつぱいしうりさせー、
言いいるんせー京太郎ちよんだら、昔ぬ石嶺いっしんみねなかいあたんりぬうり
やしが、うまぬ京太郎ちよんだらや何ま処いくいん巡めぐていい錢貫せんいてい、
錢持せんぢちやたんでい。

あんすぐとう、言いいるんせー唐旅とうなびさい、大和旅やまとらなびさい
しーに、自分どうじぬ錢ぢのおあていんうまぬ錢借せんかいが行いちゆた
んでいー。うりがうれー、とにかくんな皆かからかんしかき
集あめていうりしえーる錢せんやくとう、くぬ錢ぢのおいつペー、
うりがくんぐとーる世ゆぬ中なかぬ数多あまたぬ人ちひかんしうりせー
る錢せんやくとう、くれー嘉例かりりな錢せんやくとうんち。

あんさーに、うまから唐旅とうなびでいねー唐とうんかいぬ貢みつ
ぎ物持ものぢつち行いぢやい、また大和旅やまとらなびでいねー島津しまづんか
いぬ貢みつぎ物持ものぢつち行いちゆるくぬうり当あたいし、言いいる
んせー、あまーうりつし来ちるんせー親方えいかた部たないぐとう、

これは吉屋チルルが言わば、骨なてい帰る場合の
事だよ。これは仲里御殿のウメーの請めジュリだが、
この吉屋チルルが失敗したのは、言うなれば昔、石嶺
という所に京太郎が居てその京太郎は、あつちこつ
ち巡つてお金を貰つて、金持ちだったそうさ。

それで、言うなれば唐旅したり、大和旅したりする
ときに、そこにお金を借りに行つたそうさ。京太郎の
お金は、とにかく皆からかき集めてあるお金で、京太
郎がこのようにして世の中の数多くの人から貰つたも
のだから、これはめでたいお金だからといつて。

そうして、ここから唐旅という唐への貢ぎ物を持
て行つたり、また大和旅という島津への貢ぎ物を持
て行くこの役目に当たると、言うなれば、向こうに行つ
て来たたら親方の位に付けるから、この親方部になる人

くぬ親方部ないしが達が、言わば、うぬ錢お借いが行ちゆてゝるふーじやしが。そういううりが、言いるんせー、京太郎ぬ大将やるばーてー。

うりが、アンマーとう約束し、「私にんかい吉屋や一夜やていん呼ばちとうらしーるんさー、大金なー、アンマーんかいうりすくとう」んち。あんしーしアンマーとう約束さーに、アンマーやくり騙さりやーに、くりなー合点せーるばーて。

あんし、「あんやんろー」んでー言やんぐーとう銭んまんでいるうい、また言わば、ありんかいんくりんかい化きーる、昔ぬ着物ん何んうったーや持つちるうぐとう、うり着ち吉屋呼びーがんち行ぢさぐとう、止む得なくなーアンマーなかいうりさつていされー。昔ぬまたジュリアンマーんでいせー、自分ぬ買てゝる子あ自分ぬ勝手んでいるうぬうりし、うしうしにんなー、くぬ吉屋やうりんかい呼ばつていさくとううりが後ぬ、うり吉屋や分かてゝるばー。

あんさくとう、「うんぐとゝるちがりが者なかい、私ねー身体汚さつとくとう、今から後お仲里御殿ぬウメーとーなー一切うれーせーならん」り。うりから、心病

達は、言わばその縁起の良いお金を借りに行つたようだ。言うなれば、京太郎の大将だつたわけよ。

京太郎が、アンマーと約束して、「私に吉屋チルーを一晚でも呼ばせてくれたなら、大金をアンマーにあげるから」と言つて、そうやつてアンマーと約束して、アンマーは金を握らされて承知したわけ。

そうして、「こうなんだよ」とは言わないでお金も沢山あるし、また、あれにもこれにも化けれる、昔の着物なども彼たちは持つているから、それを着て吉屋チルーを呼びに来たから、止む得なくもうアンマーに言われていたからね。それに、昔のまたジュリアンマーというのは、自分が買つてある子は自分の勝手という考えで無理やりにも、この吉屋チルーをこれに呼ばさせたからその後で、それが京太郎だということを吉屋チルーは分かつたわけ。

そうしたから、「こんな汚れた者に、私は身体を汚されたから、今から後は仲里御殿のウメーとはもう一切会うことは出来ない」と言つて。それから、心の病氣

気起くさーに、吉屋や死ぬるばーて。あんしし死じぬ後お、とにかく、昔ぬ博打屋とか何とつかぬ所んでー行ぢ墓造てい、うぬアンマーや葬いるさのーあらに。

あんしが、後お、イキーぬ達ぬ、「是非あまなかいりそーてーならん、自分ぬ元ぬ墓んかいりしつくりわるやる」んでいるうりつし、イキーぬ達ぬ洗骨し、あんし持つち帰てい行ちゆる場合に、言いるんせー首里ぬ御茶屋御殿でいる御殿ぬあてーるばーて。あんすぐとう、うれー首里ぬまた侍方ぬ達ぬ時々集まいみそーやーに、うまうてい宴会とか何とつかしうりする場合に、吉屋やイキーぬ達あなかい担みらつていあんしシマンかい帰てい行ちゆる場合に、うぬ御殿ぬ側通ていうりさくとう、急になーイキーぬ達ん、なーしーいっペーるそーさいやー。昔ぬ厨子壺、あれる担みていうりすくとう。

やぐとう、うまうてい降るち、うりする場合なかい、言わば、うまなかいうりんうりし、うったーん憩ていうりそーしが、うまうとーてい、くぬまた御茶屋御殿でいし造てい直ぐ始めぬ場合に、「くぬ御殿ぬ名や何ん

になって、吉屋チルーは死ぬわけよ。そうして、死んで後は、昔の博打屋とか何とつかの所で墓を造つて、そのアンマーが葬つたんでしよう。

だけど、後には、イキーたちが、「是非とも、向こうに置いたままではいけないので、自分の元の墓に移さないといけない」ということで、イキーたちが洗骨して、骨を持つて帰て行く場合に、言うなれば首里に御茶屋御殿という御殿があつたからね。そこはまた、首里の士族の方たちが時々集まられて、そこで宴会とか何とかをする所で、吉屋チルーはイキーたちに担がれて生まれシマに帰て行く場合に、その御殿の側を通りかかると、急にもうイキーたちは、もう難儀しているでしよう。昔の厨子壺ね、あれを担いで行くんだから。

それで、そこで厨子壺を降ろしてね、そうする場合に、彼たちも休んでいるが、そこで、このまた御茶屋御殿というのを造つてすぐの時に、「この御殿の名前は」といつて付けようか」というそのことから出て、も

ち付きーが」んでいるうぬうりから出じやーに、なー
皆相談しうりすんちやしが、「ちやーし付きたらーまし

やがやー」んち、皆考ていうりそーる場合に、今度お、
うぬ甕ぬ歌さんりがらー。歌ぬ始めぬ文句お、

押でい 押みぶさ 首里天加那志

遊でいうちやがゆる 御茶屋御殿

う皆で相談して決めようとするが、「何といて付けた
らしいかねえ」と言つて、皆で考えている場合に、今

度は、この甕が歌つたとかいうよ。歌の始めの文句は、

是非お目にかかりたいものだ 首里の王様よ

遊んでよい所は 御茶屋御殿

採集S52・2・26 読谷村民話調査団第五班（宮里洋子・小橋川清）

注① 吉屋チルー（一六五〇？〜一六六八？）恩納なべと並び称される女流歌人。十三歳（または八歳）のとき、仲島遊郭へ売られ、

ある男と恋仲になるが、抱え主に人の嫌う病者の相手をさせられたため、それを苦に自殺したと伝えられる。

注② ウメー 若殿様。若様。ウメー（御前様。殿様）

注③ 請ジュリ ジュリは遊女。芸（二線・歌）を修得し、客に接待する女性。請ジュリは一人の男を旦那とする妾のようなもので、認められると男の家にも出入りし、本妻とも仲良くした。

注④ 京太郎 チョングラー 明治初期頃まで首里近郊、中、南部までの出かけ人形を使って数々の芸を演じた門付け芸人、およびその芸能をいう。現在沖繩市泡瀬や宜野座村宜野座で保存継承されている。

注⑤ 石嶺 那覇市首里にある。

注⑥ 唐旅 中国を唐といい、沖繩と往来することを俗に唐旅といった。

注⑦ アンマー ジュリアンマーのこと。ジュリアンマー 女郎の抱え親。抱え主はすべて女で、娼妓はこれと母子まがいの関係をむすび、それぞれアンマー、ジュリングワと呼ばれる。

注⑧ 博打屋（バクチャーヤー） 辻原墓地地帯にあった一大洞窟をさしていう。（現那覇市西、沖繩ガス（隣付近）昔多くの博徒が集まっ

て博打を打ったところからその名がついたとある。

注⑨ イキー 152頁参照

注⑩ 洗骨 南島では死後三年目頃に、墓に安置された遺骸を再び取り出して洗い清める儀礼がある。これをシンクチ(洗骨)どかチュラクナスン(美しくする)等と称している。洗骨した骨は厨子甕に収めて、再び墓堂奥に安置する。現在では沖縄本島では火葬が普及し、伝統的な風葬の維持されている周辺離島でしか見られない。

注⑪ 首里 153頁参照

注⑫ 御茶屋御殿 首里崎山町にあった旧家の別邸、東苑のこと。一六七七年築造。御殿は按司地頭が首里にかまえた邸宅の敬称。大きな家、他人の家などの敬称。

注⑬ 厨子甕(ジーシガミ) 洗骨跡の遺骨を納める骨壺。

84 吉屋チルーと炭焼御主前

話者 奥原山登(明治四十年十月二十九日生)

翻字・対訳 玉城和美

吉屋チルーがです、七月に里帰りの場合にね、山田で雨にあつて、そこには炭焼小屋のお爺さんが居て、そこに雨宿りに行って、「しばらく宿を貸して下さい」と言ったらお爺さんは、オーケイして宿を貸らして、

吉屋チルーが、七月の里帰りの時に山田で雨に降られて、炭焼小屋のお爺さんの所に行って「しばらくの間雨宿りをさせて下さい」と言ったら快く雨宿りをさせて、お茶も出したらすよ。そうしたら吉屋チルー



御茶屋御殿

そうしてそのお茶を出したらしいよ、お爺さんが。そうした場合に吉屋チルーが、お茶を飲んでしばらくしてからね

姿見でいジュリぐわ 何処からがやゆら

とお爺さんが言ったらそのチルーは

私や仲島ぬ 吉屋でびる

「あぎじゃび、貴方おあんせージュリぐわーるやみせーびんな」と。しばらくしてお茶を出して今度おまたチルーの方からね

さんびんぬう茶ぬ 白茶なるまでいん

今でいう茶請ぬ 当ていん無らん

しばらく考えてからね、今度はそのお爺さんが、

先月どう搗ちえる 糠味噌どうやしが

大和味噌とう思てい 嘗てい給り

無蔵小んゆいか たき高さあむぬ

我が宿にいもり 思ひ語ら

そのお爺さんはね「これは本当だ」と言つて。「私よりあなたの方が分が上だからね、是非那覇に来て共に語りあいましよう」と言つて別れたらしいです。

はお茶を飲んでしばらくしてから

姿を見たらジュリだが 何処から来たのか

とお爺さんが言つたら

私は仲島の 吉屋チルーですよ

「そうですか、そうしたらあなたはジュリなんですかと。しばらくしてからお茶を出してまたチルーの方から

さんびんのお茶が 白茶になっているのに

いまだにお茶請の 当てはない

しばらく考えてから、今度はお爺さんが

先月搗いた 糠味噌であるが

大和味噌と思つて 食べて下さい

そしてチルーが

貴方は私より 優れている人なので

私の宿にいらして 思いを語りましょう

そのお爺さんは「これは本当だ」と。「私よりも優れているので、是非那覇に来て一緒に語り合いましよう」と言つて別れたらしいです。

それからそのお爺さんは、初めてそのチルーを見て、
本當にこの女は私を好んでいるのかと思つて。そうし
てその鶏を括つて、担いで高い下駄を持つていよいよ
那覇の辻に、仲島に頼つて行つたらしいよ。どの辺で
あつたという事をちゃんと聞いていたから。でその
門に行つて、そのお爺さんが

私や門に立ていてい 寝んだでいみ無蔵や
くねーら語らたる 私 どうやしが
今度またチルーの方から

ゆむ白髪かみてい 高足駄履ろーてい
落ちていてい損なゆし 知らに御主前
と言つたら

吉屋ウミチルーや たき高さあていん
一期下なゆる 女童
罪ん無ん鶏に 繩架きてい置ちえーる
時知らん鶏や 咎やあらに
と返したらしいね。時も分からんで歌う鶏はね罪だか
らという事で。そうしたらチルーは負けてね。

無蔵小ゆいか たき高さあむぬ
内に入りみそーり 思い語ら

それからお爺さんは、初めてチルーを見て、この女
は本當に私の事を好んでいるのかと思つていた。そう
して鶏を括つて、担いで高下駄を履いていよいよ那覇
の仲島に頼つて行つたらしいです。お爺さんはどの辺
りという事もちゃんと聞いた。そしてその門に行つ
て

私を門に立たせて 寝られるか愛しい人よ
この間語り合つた 私だけれど
そして今度はチルーが

身苦しい白髪をして 高下駄をはいて
落ちて怪我をするよ 知らないのかお爺さん
と言つたら

吉屋チルーは 才覚があつても
いつも下になる 女の子だよ
罪もない鶏に 繩を架けておいてあるが
時を知らない鶏は 罪じゃないのかね
と返したそうです。時も知らないで歌う鶏は罪だから
ということだね。そうしたらチルーは負けたそうだよ

貴方は私より 優れているので
中に入って下さい 思いを語り合ひましょう

と言つて中に入った。

と言つて中に入った。

採集 S 52・2・26 読谷村民話調査団第五班 〔宮里洋子・小橋川清〕

注① 仲島 近世から近代初めにかけて遊里として知られる今の泉崎一丁目、西寄りの地。

注② 御主前 ウスメー 自分の父母の父。お祖父さん。またよその年をとった男の人を親しみをこめて呼ぶことばで、ここではお爺さん。



仲島の巨石

85 吉屋チルーへ生涯

話者 波平 秀 (大正四年八月十日生)

翻字・対訳 玉城和美

言^いいるんせー、字^{あざ}ぬ役^{やく}目^め当^あていられて男^いぬ親^{おや}ぬ、あ
んさぐとう、なうぬあまかい、上^いんかい持^もつち行^いちゆ
るうぬ金^{じん}てーなうぬゴムチ^ちりち税^{ぜい}金^{きん}てーいーね。こ
れ持^もつち行^いちゆしが無^ならん、「ちやーすがやーな」り
ち困^{くま}とーる場^ば合^あに集^あちみてーる金^{じん}、長^{ちやう}男^{なん}ぬうち食^{くわ}やー
に、あんさーなかないな泣^なく泣^なくにくぬ吉^{ゆし}屋^やチルーや

言^いつてみれば、字^あの役^{やく}入^いになつてい^いる父^{ちち}親^{おや}が、王^{わう}府^ふ
に持^もつてい^いくお金^{かね}、言^いえ^えば税^{ぜい}金^{きん}ね。そ^{その}のお金^{かね}を長^{ちやう}男^{なん}が
使^{つか}い込^こんでしま^まつて無^ないので、「ど^どうし^しようかなあ」と
困^{くま}つてい^いる時^{とき}に、泣^なく泣^なく童^{どう}である吉^{ゆし}屋^やチルーが「お
父^{ちち}さん、私^{わたし}がジ^じュリ^り売^うりさ^されると、お父^{ちち}さんはそのお
金^{かね}を払^はえるでし^しよう」「親^{おや}の孝^{こう}と思^{おも}つて、行^いつてく^くれる

童んやしが「スーよー、私がやジュリアナんかいうきてい行ちーるんせーやースー、うぬ金ん払いうすさに」
りち「親ぬ孝り思てい、あんしえー行ちとうらすんなー
チルぐわー」りち「行ぢしまびんどー」りち。

あんさーに男ぬ親ぬなー、んちやジュリアンマー相談しーが連おてい行ぢ、うぬ比謝橋ぬ橋来ぐとう「スーよー、うぬ橋え情ん無ん人ぬ造てーんでーやースー」
りち「何が」りちやぐとう「あんしえーうぬ橋ぬ無んあれー、私ねー渡てー行かんていんしむてーせー」りち。うぬ話から昔吉屋ウミチルぬうたびあぬらー

比謝橋ぬ橋や 誰が架きてい置ちえーが
情無ん人ぬ 私渡さとう思てい

架きてい置ちえーさ

りち。あんし歌うまうていさーに、うまうてい中憩いさーにまたなージュリアナんかい売らりーが行ぢ。とージュリアンマーんかいまた「とーアンマーよーうれーなーいへー腹具合んちやーかじかじ病れーういすぐとう、
気いちきとーていやー。私が煎じむん、野草てーなー
フーチバーうり作ていちえーぐとううり飲まちえーう
いしとうらしよ、アンマー」りち頼りジュリアンマー

ねーチルー」と言つたら「行つてもいいですよ」と。

そうしたら父親は、ジュリアンマーに相談しに連れて行き、そして比謝橋の橋の所に来ると「お父さん、この橋は情無い人が造つてあるんでしようねお父さん」「どうしてか」と言うと「この橋が無ければ、私は渡つていなくても良かったのに」と言つてね。この話から昔の吉屋ウミチルの歌で

比謝橋ぬ橋や 誰が架けて置いたか

情けない人が 渡そうと思つて

架けておいてあるよ

と言つて。ここで歌も詠んで、ここでひと休みしてからジュリに売られて行つた。またジュリアンマーに「この子は腹が弱く度々痛んだりするので、気をつけてあげて下さい。私が菓草（フーチバー）を煎じて持つて来てありますのでこれを飲ませたりして下さいね、アンマー」と頼んだ。

んかい。

あんしな一、うまうていん崇みらりや一に良いジュリなてい歌ん上手なてい踊いん上手なてい、な一歌作や一んやい、いつペ一な一ジュリアンマーからん可愛ささつてい。

あんししました、正月なてい、七月なてい親拝みし一がりちな一行ちゆて一るば一て一。道中んかい、あんし行ちゆる場合なかないな一雨ぬ降と一るふ一じ。雨ぬ降ていちやぐとう、

雨や降ていくれば 被る傘持たん

しばしくぬ宿に 借らちたぼり

りち、炭焼ちや一ウスメ一がうまんかい家ぐわ一ぬあて一るば一て一、うまんかい炭焼ちや一ウスメ達んかい入つち行ぢやぐとう、

汚なさやあしが う茶ん飲みジュリぐわ一

「姿見で一ジュリぬぐと一しが何処から来がや一」
りちやぐとう「私ね一や一仲島ぬジュリるやしが吉屋チル一りしやしが、親拝みし一が行ちゆる道中やんど一」
りちさぐとう、

汚なさやあしが う茶ん飲みジュリぐわ一

そして、ここで皆に崇められて歌も踊りも上手になり、歌も詠んだりしたので、ジュリアンマーにもとても可愛がられていた。

ある時、正月か、七月に親拝みしに帰る途中で雨に降られてしまった。雨が降ってきたので

雨が降つて来ても さす傘も持たない

しばらくはこの宿を 借して下さい

と、炭焼きをしているお爺さんの家があつて、そのお爺さん達に入つて行つたら、

汚いけれども お茶も飲みなさいジュリよ

「姿を見たらジュリのようだけれども何処から来たのか」と言つたら「私は仲島のジュリで吉屋チル一といいますが、親のお参りに行く途中です」と言うと、

汚いけれども お茶も飲みなさいジュリよ

りち、茶や出じやちやぐとう茶びかー出じやちえーる
ばーてー。あんされー、

さんびんぬう茶ぬ 白茶なるまでいん

今でいう茶請ぬ 当ていん無らん

りちうぬ吉屋チルーが歌たぐとう、またうぬ炭焼ちやー
ウスメーが、なー頭お切りとーてーるばーてー。味噌
ぐわーよ、何ん出じやすせー無らんたれーなー味噌
ぐわー。

先月る搗ちえーる 糠味噌るやしが

大和味噌とう思てい 嘗ていとうらし

りちまた、なー出じてーるばーてー歌いがちー。「貴方お
私やかんやーたき高さあぐとう、行ちがーなー那覇ん
かい私搜めーていやーめんそーり。貴方とう寝んじや
びーぐとう」りち相談のーさーに。

あんさーにある日、なーいよいよ日や流りていさぐ
とうジュリぬ吉屋チルーりし頼てい、またなー炭焼ちやー
ウスメーや鶏ぐわーよ括んじやーに担みていよー吉屋
チルーんかい食まーしーがりち。あんしなー下駄履り
てーなーちぶいかなぎてい、なー吉屋チルー達あ門ん
かい尋にてい行ちさぐとううぬ吉屋チルーや二階やてー

と、それでお茶ばかり出したようだよ。そうしたら、

さんびんのお茶の 白茶なるまでも

いまだにお茶請の 当てもない

と吉屋チルーが歌つたら、またこの炭焼きのお爺さん
は頭が良かったらしい。何も出すが無かったので味
噌を出してね。

先月搗いた 糠味噌だけでも

大和味噌と思つて 嘗めて下さい

と歌いながら言った。

「貴方は私よりも才能があるので、那覇の方に行く
時には私を尋ねて来て下さい。貴方と寝ますので」と
言つて相談したらしい。

そして、いよいよ月日が流れてジュリの吉屋チルー
を頼つて、その炭焼きのお爺さんは吉屋チルーに食べ
させようと思つて鶏を縛り担いでね。そして下駄を履
き着物の裾をまくり挙げて、吉屋チルーの門に尋ねて
行つたら吉屋チルーは二階に居たらしい。そして、

るばーてー。あんし、

私ねー門に立ていてい 寝んだりーみ貴方や

くねーだ語らたる ウスメーやしが

りち歌さぐとう

うぬ白髪かみてい 高下駄履ろーていや

落ちていていすくなゆしえー 知らにウスメー

りちまた歌さぐとう、あんさぐとうやー

落ちていていすくなていん 私がるすくない

いちぐ下ないる 女童

りちうぬ人お返ちやんり歌。あんさぐとう「貴方お私

やか頭お上やぐとう、中んかい入みそーれ語らいびぐ

とう」りち入つちやんり。あんさーに語らたんりぬ話

はじめーてー

罪ん無ん鶏に 縄かきてい置ちえーる

うぬ吉屋チルーがどーあんし

時知らん鶏や 咎やあらに

りち。うんぐとうしさぐとう、ウスメーやなー何んく

い歌あするかーじ返ちやぐとう、偉いりちうぬ人とう

語らたんり。

あんしジュリアンマーがてー、うぬクンチャーシー

私を門に立てて 寝ることが出来るか貴方は

この間語り合つた お爺さんだが

と歌をすると

白髪で 高下駄を履いて

落ちて転んでしまふよ 知らないのかお爺さん

と歌をしたら、そうしたらね

落ちて転んでしまつても 私が転ぶよ

いつも下になる 女の子だね

とその人は返した。そうしたら「貴方は私よりも優れ

ているので、中に入つて下さい語り合いましよう」と

言つて語り合つたという話だよ。初めはね吉屋チルー

の方からね

罪もない鶏に どうして縄を架けて置いてあるか

と吉屋チルーが言つたら

時を知らない鶏は 罪ではないか

と。そうして吉屋チルーが歌をするたびにお爺さんは

返したので、偉いといつてその人と語つたらしい。

そしてジュリアンマーが、癩病患者に呼ばれて一万

ルんかい呼ばすんりやーに一万貫金おを取やーに。あ
んさーなかい、なーうぬチルーんかいアンマーが「今日
ぬ御客お灯笼お付きんなよーやーチルー、灯笼お付き
らんよーいる呼ばりんどーやーチルー。灯笼付きーねー
うぬ人お恥じかさしや顔んかい何がら」。うぬチルーや
「何んち灯笼付きんなり言がやー」りち不思議に思てい、
あんさーな寝んじえーすんでいしがてー「おー」りち
吉屋チルーやうぬ物乞やーとうー寝んじえーすんでい
しが寝んじやーなかい直ぐ切腹するふーじてーなー。

一万や欲しり 二万金捨ててい
りちよ。うんぐとうさーなかい切腹すんりよ。一万金
欲しむんりだー、生ちちよーるせーなー二万ぬん三万
ぬん儲きーるうりやしが自殺しみとーんりちよーるばー
吉屋チルーがー。

あんさーに、うぬ吉屋チルーが切腹し死じやぐとう
やー墓通ていなー直ぐ毎日泣ち暮らちあんし、一万あ
んさぐとうや。

一万や欲しり 二万金捨ててい
死なば私が墓場 通てい泣くな
りちさぐとう死じから墓ぬ庭うてい歌呼びーたんり。

貫お金を受け取り吉屋チルーに相手をさせたそうです。
そして、チルーにアンマーは「今日の客は灯笼は付け
ないで呼ばれなさいね。その人は恥ずかしがり屋なの
で」と。吉屋チルーは「どうして灯笼を付けないでと
言うのかね」と不思議に思うが、「はい」と言つてその
人と寝たようだがすぐに切腹したそうです。

一万のお金を欲しがって 二万のお金を捨てて
と言つて切腹した。一万を欲しがった為にね、生きて
いたら二万も三万も儲けるはずなのにと自殺させてし
まつてと、吉屋チルーが詠んでいるわけだよ。

そうして、吉屋チルーが切腹して死んでしまったの
で(アンマーは)墓に通つて毎日泣いて暮らしていた。

一万のお金を欲しがって 二万のお金捨てて
死んでから墓場に 通つて泣くなよ

と墓の庭で歌を詠んだそうです。そうしたらアンマー

あんされーうぬアンマーが、

生ちちうる間や わじゆさびていやー

死には博打屋ぬ 土ぬ肥るないさ

りち歌返ちやんりがらーアンマーが返しーさんあれー

大事やるばーてーうつさ。

が、

生きている間は 自由にしていたのに

死ねば博打屋の 土の肥料になるんだね

と歌返したそうさ。アンマーが歌返しきれなかったら

大変だったらしいよ。

採集S 52・2・26 読谷村民話調査団第十一班〈大宜見光一〉

注① ゴムチ (御物) 公有の財産、公金等。

注② スー 平民でいうお父さんのこと。

注③ ジュリアナ 女郎屋のことをいう。

注④ 比謝橋 28頁参照

注⑤ クンチャーシール 癩病患者が住んでいる所。

86 吉屋チルルーへ歌い骸骨

話者 池原幸子 (天正二年六月二十八日生)

翻字・対訳 玉城和美

吉屋チルルー自殺しそーしがてー。昔くぬ吉屋ウミチ
ルーりる人おなー普通ぬ人ねー呼ばらん、やつぱり仲

の吉屋ウミチルルーは普通の人は呼ばれず、仲里里主
吉屋チルルーは自殺してしまつたらしいがね。昔、こ

里里主りみせーる人ぬう侍ぬ大人かい呼ばつとーてー
るふーじてー。うぬ人とう会てーならんむーりやーに
くれー自殺図らてい。

今度おなーあと二、三カ年しつからーイキーぬ達ぬ
恩納村から遺骨取いが行ぢ、遺骨お担みてい甕んかい
うすていなー担みてい、「あんし難事やるむん、りーく
まんかい憩らやー」りち、首里ぬ上、下ぎやーなかい
座ちよーたんりや。憩ていさぐとう、なー首里御城う
とーてー御殿のー出来上がたぐとう「何んち名あ付き
たらーましがやー」り摂政三司官揃ていなー役員ぬ達
揃ていうまぬ名あ付きーんり一人言い言い始まとーみ
せーてーるばーてー。あんしさぐとう、くぬ吉屋チル
遺骨なとーていよー、

拜り拜みぶさや 首里御天加那志
遊りうちやがいる 御茶屋御殿
りち。

あんさーなかい御茶屋御殿りる名あ付きたんりぬ話。
これだけ。

という偉い侍に呼ばれたらしい。その人と会つてはい
けないと思つて、チルーは自殺を図つた。

そして二、三年後吉屋チルーの遺骨を取りに恩納村
からイキーが来て遺骨を甕に入れて担いでいたが、「こ
んなに難儀なのでもうここで休もうね」と、首里の上
(まで来たら)甕を下げて座つていたつて。休んでい
たら、首里の城で御殿が出来たので「何という名前を
付けたらいいか」と摂政三司官の役員が揃つてそれぞ
れ言い合つていたらしい。そうしたら、遺骨になつて
いる吉屋チルーがね、

是非お目にかかりたいものだ 首里の王様よ
遊んで良い所は 御茶屋御殿
と言つた。

それで御茶屋御殿という名前を付けたという話。

注① 恩納村 沖縄本島北部。読谷村と隣接している海洋に沿った細長い村。

注② 首里城 277頁参照

注③ 御殿 王子・按司の家、またはその人をさす敬称。

注④ 摂政三司官 270頁参照

※ 首里ぬ上 首里の上の地域をさしている。

87 黒金座主①

話者 阿波根 ウシ(明治四十二年二月二日生)

翻字・対訳 玉城 和美

くぬ北谷王子①というのは、耳切り坊主②と言うたのは、
あんまり忍術③かけてあれは人騙④したんだろう。あの坊
主は、この人騙⑤したからあの北谷王子は、北谷王子の
妾⑥といつて、あれーはんじ買⑦いたんり、シムチ⑧てー。
あんさぐとうぬ妾⑨やらちさぐとう確⑩かみていさぐとう、
忍術⑪かきていむるあれー人⑫うすいたんりーせーやー、
うぬ坊主⑬よ。

この北谷王子が、耳切り坊主②といったのはね、あま
りに忍術③をかけて人を騙④したんでしようね。あの坊主
は人を騙⑤したから、北谷王子はその事を確⑥かめる為に
自分の妾⑦を易者⑧に行かせた。そうして確⑨かめてみると、
忍術⑩をかけて皆な襲⑪つたらしいよ、この坊主は。

あんさぐとう、後髪⑭ぬやんりとーんりちアンマーとう
やらすせーやー。うぬ北谷王子⑮ぬ妾⑯やらちさぐとう、

そうしたら、後髪⑭が乱⑰れているといつてアンマーと
行⑱かせるでしよう。この北谷王子⑮の妾⑯を行⑲かせると、

後髪ぬゆがつとーたんりやーなかい。あまとー何んあらんたんりーしが、やらちやぐとう確かにやてーんりやーなかい。今度お「あれーちやーしさらーあり負かしようすがやー」りちやしが北谷王子ねーかなーんたんり、黒金座主りぬ坊主え。

くぬ坊主え、あんさーなかい碁う打つちやーなかい、うぬ碁う打つちーに眠いかんししみにうんにーに逃んぎらりしーに、北谷王子ねーかなーんてーるばてー。かなーんしが、うりからなー眠いしみてい忍術かきやーなかい触いんりしーねー「いやーや、私あんしすんりすしが、いやー私にんうりすんなー」りやーなかい、うぬ人お忍術かきーんりすしが、かんし目い覚みやーなかいすせーやー。

あんさーなかい、うりからうぬ碁う打つちにぬ賭きーや、いえーりんなー「いやー私が負かしーねーちやーすん、私が負かしーねーちやーすん」りちぬ賭きーせーてーるばてー。あんさーに耳切らつてい。うんにーに負きやーに耳切らつとーるばてー北谷王子んかい。あんさぐとう耳切り坊主りちなとーせーやー。

あんすぐとううぬ北谷王子ぬあれー、なー耳切り坊

後髪がゆがんでいたといつてたらしい。向こうとは何でもなかつたらしいが、行かせたら確かにだったと言っていた。今度は「あれをどうしたら負かせるか」ということだったが北谷王子にはかなわなかつたらしいよ、黒金座主という坊主は。

この黒金座主という坊主は、碁を打っている時に忍術をかけて眠らせて逃げようとしたが、北谷王子にはかなわなかつたよ。その時から忍術をかけて眠らせて触ろうとする「あんたは、私をこんなふうにするか」としてはいるが、私にもそういう事をするのか」と言つて、その人は忍術をかけようとしたが、目が覚めてからなかつた。

そして、それから碁を打つ時の賭けは、おそらくもう「あなたは私が勝つたらどうか、私が勝つたらどうする」とかいう賭けをしたらしい。それで北谷王子に負けて、耳を切られてしまったので耳切坊主といっているよ。

それで北谷王子は、黒金座主があまりにも悪者なの

主さぐとう、黒金座主がどうくからヤナムンなていや。
 北谷王子が子あ産ちやぐとう、むる居らんたぐとう、
 あんしるウフイキガ、ウフイナグリしえーうりからる
 出じとーんりるばーてー。男が産まりーねー「男産ま
 りとーんどー」しーねむる居らんないたんり。あんさー
 ない男ぬ産まりーねーウフイナグ、女が産まりーねー
 ウフイキガ、あんし反対にむる言いしえーやー。
 あんしさーない助かてい、助かていさぐとうる、
 うぬ耳切り坊主りしえーうぬふーじーからるやる。北谷
 王子ぬうりからる。耳切り坊主ぬうりが立つちゆ
 んどーし話あせーやー。北谷王子が黒金座主え落とう
 ちえーるばーてー。

で耳切り坊主にした。北谷王子が子どもを産んだら皆
 亡くなったので、それでウフイナグ、ウフイキガとい
 う言葉はこれから出ていらいよ。男が産まれ、「男
 が産まれたよ」と言ったら皆亡くなった。それで
 男が産まれたらウフイナグ、女が産まれたらウフイキ
 ガとみんな反対に言うのでしようね。
 そうしたら助かったので、耳切り坊主というのはそ
 う言う事からだよ。それで「耳切り坊主が立つちゆん
 どー」と言う話があつたでしょう。北谷王子が黒金座
 主を落としてあるわけだよ。

採集S52・2・26 読谷村民話調査団第九班 前田逸子・上間京美

注① 黒金座主 尚敬王の頃、護道院(真言宗、現若狭町)の住職をしていた、盛海上人のこと。顔色が浅黒かったので黒金座主と呼
 ばれた。政治批判をしたために、北谷王子に肅清されたという。また別名耳切坊主と呼ばれた。

注② 北谷王子 尚益王の第二子、尚敬王(一七三〜五二)の弟。文武両道にすぐれ、囲碁の名手。北谷間切の領主だが、そこには代
 官を置き、自分は龍潭池のほとりに大村御殿(後の中城御殿)を構えていた。尚家の祖先。

注③ シムチ(スムチ) 主に易書をもとにして人の運や、建築の日取り、方向などを卜占する民間巫者。

※ ウフイキガ、ウフイナグ 大男、大女。

88 ガジャン坂の話し

話者 阿波根 ウシ (明治四十二年二月二日生)

翻字・対訳 玉城 琳子

あまー何処まゐなとーが、ガジャン坂びらりせー。今いまあ、飛行場ひこうじょうんかいかんし登のぼる所ところてーうまー。うまにガジャン坂びらりる所ところぬあせー。

昔むかしえ、何なんちあんしガジャン坂びらり言いちやがりねー、あまから蚊帳かちやう売ういが大和やまとからうまんかい来ちやぐとてー、ガジャンぬうらんうまんかい来ちやい憩ゆつくとーたぐとて、ガジャンぬ咬くやーい。「サツタミヨーヤー、ガジャン」りやーなかいさくとうる、ガジャン坂びらりち付ちきらてい。ガジャン殺ころちやぐとて、ガジャン坂びらりち付ちきとーん何なんぬーんり言いいせーや。昔むかし蚊帳かちやう売うやーが話はなしどうやんりーさい。あんしるあまーガジャン坂びらりち付ちきてーんりさい、ガジャン殺ころさーにる。

あそこは何処まゐになつてゐるかな、ガジャン坂びらりという所ところは。現在、飛行場ひこうじょうへ行く坂びらねそこは。そこをガジャン坂びらりという。

昔むかしは、どうしてガジャン坂びらりと言いつたかというと、大和やまとから蚊帳かちやうを売うりに来きたらね、蚊かはいなくてこの坂びらりまで来てひと休みしてゐると、蚊かに咬くまれてしまった。「サツタミヨーヤー、ガジャン」と言いつたので、ガジャン坂びらりと名な付けられた。蚊かを殺ころしたので、ガジャン坂びらりち付ちけられたと言いわれている。昔むかしの蚊帳かちやう売うりの話はなしである。それであの坂びらりはガジャン坂びらりと付ちけてあるという、蚊かを殺ころしたのでね。

採集 S 52・5・22 読谷村民話調査団第十二班 山城悦子・松元久幸

注 ガジャン坂 那覇市の垣花と小祿を分ける坂道、戦後基地建設などで大きく変容した。

89 蚊かの始はじまり

話者 儀間 真治 (明治三十九年五月三日生)

翻字 玉城 和美

ガジャンはねね沖繩おきなわの人がひとぎ、唐とうに行いつて、ありが泣なくのをね歌うたと例たとえておるさ。「これは珍めづしいね、これ歌上手うたじょうずだね」つて。そしてその袋ふくろにこのガジャンを詰つめてきてガジャン坂びらといつて垣花かぢはな、そこでね、この袋ふくろを切きらしたそうだよ。そこからガジャンはこう広ひろがつた。

採集 S 52・2・26 読谷村民話調査団第十班 へ山城悦子

注① ガジャン 蚊。

注② 垣花 那覇市の町名。国道三三三一号より那覇港の南岸にかけての地域。

90 言葉ことばの使つかい用よう

話者 奥原 松助 (明治三十年八月二十四日生)

翻字・対訳 玉城 琳子

あぬ「言葉ことばあ銭使せんしけい」んりぬ言葉ことばあよー、うりやるばー
て。

あの「言葉は銭使」という言葉はね、このようなことであるよ。

いつペー貧乏者ひんさいわんぬ、「チントウヌウドウ」りーせー

とても貧乏者が、「チントウヌウドウ」と言うのを

分かひみ。「チントウヌウドウ」、じこー貧乏者ぬ言ちえーる言葉。「チントウヌウドウ」りぬ言葉や。

うりから、あぬ、夫ぬうぬ妻んかい「かんし寒ぬむんぬ、チントウヌウドウんれー被しれー」り言ぢやぐと。運玉義留りせー分かいらやー。運玉義留が側んかい居てーるばーて、うまんかい隠くてい。

ひるましむんや。うんぐと貧乏者なかい、チントウヌウドウんちえー聞ちんらん見ちんらんしが、うりがあるやーりち、なーひるまさし聞ぢやーに。運玉義留や、うったーが寝たぬ時分のーな、うまんかいすくり行ぢやーにかちみてい見ぢやぐと、ニクブク。ニクブクリーねー今無んぐとやカシガーてー。藁さーに作らつとーせー、ニクブクリーせー。うり被んとーびたんりよ。

あんさぐと、あんしんちやー貧乏者、うんぐとーぬニクブクんかいウドウぬぐと。し「チントウヌウドウ」りぬ言葉使とーさやーりやーに。金持人ぬ家かい行ぢやーに布団盗りぢやーにやー、うぬ貧乏者なかい被して、うぬニクブクお外んかい持つち行ぢ、は

分かるかね。「チントウヌウドウ」は、とても貧乏者が言つた言葉だよ。「チントウヌウドウ」という言葉は。

それから、夫が妻に「こんなに寒いだから、チントウヌウドウでも被せなさい」と言つたら。「運玉義留というのを分かるかな」。運玉義留が側にいて、そこに隠れていたつて。

不思議なことだ。このような貧乏者に、チントウヌウドウというのは聞いたことも見たこともないのに、それがあるとは不思議だ。運玉義留は、貧乏者が寝た時間を見計らつて、部屋に忍び込んで行つて触つてみるとニクブクね。ニクブクというは今が無いが藁で作られていたカシガーのことだよ。藁で作られていてね、そのニクブクは、それを被つていたそうですよ。

そのようにして貧乏者は、このようなニクブクを布団と思つて「チントウヌウドウ」と言つて使つていたんだねーと。そして金持ちの家へ行つて布団を盗んできて、その貧乏者に被せて、そのニクブクを外に持つて行つて投げ捨てて明け方起きてみたら、当たり前

ん投げやーに睨ちち起きたぐとう、当たたい前ぬ布団被
んとーせーやー。

あんさぐとう、「やー、言葉銭使んち、いがたが『チ
ントウヌウッドウ』りちやぐとう、くんぐとーぬ上等
とう替えてい取らちえーんどー」りち。うれー実え、
運玉義留が替えてーびたんりよ。

やぐとう、「言葉銭使」りぬ言葉、うぬ言葉でーる。
言葉立派使てーたぐとう、やつぱし当たたい前ぬ布団持っ
ちち被して、言葉銭使りどー。

布団を被っていたそうです。

そうしたらね、「言葉は銭使いと言つて、私達が『チ
ントウヌウッドウ』と言つた為に、このように立派な
ものと交換されているんだよ」と。これは実は、運玉
義留が交換したそうなんですよ。

だから、「言葉は銭使い」という言葉はそういうこと
であるよ。言葉をちゃんと使つていたので、やつぱり
当たり前のように布団を持つてきて被せてね、言葉は
銭使いであるつてよ。

採集S 52・2・26 読谷村民話調査団第十二班 へ山入端孝子・遠藤庄治

注① チントウヌウッドウ 上等の布団・ウッドウ（布団）。地方では古布を縫い合わせたもの（フクター ウードウ）や藁やかますや

サトウキビの葉も使った。他にブサチヌウッドウともいう。

注② 運玉義留 運玉義留は民衆の創作した架空の人物だろうといわれる。王家や士族の家だけをねらつて金品を盗み、それらを貧しい
人々に分け与えていたが、最後には運玉森に隠れているところを殺されたということである。

注③ ニクブク 藁縄で編んだむしろ、農家で用いる。

翻字・対訳 比嘉葉子

お茶は必し二回飲むせーましり。慌ていーかーていーし一回飲まーに何処かに行く時があるでしょう。間違げえーぬある場合があんでい。

あんぐとう朝の御茶あよ、じゃっさ何処うていやていんなるべくお、う茶や二回飲むせーましり。あんでいるんやれー、何処かに行つたりする用事があるでしよ、そんな時には間違があるつて。二回飲んだらもう間違いないと。

なーうりん、迷信がやらー何から分からんしが、今ぬ世や、うんなむんや童達が分からんせー。

お茶は必ず二回飲んだ方が良さうだよ。あわてふためいて何処かに行く時があるでしょう。その時には間違があるそうだよ。

だから朝のお茶は、何処であつてもなるべくは、二回飲んだ方が良さうだよ。だから、何処かに出かけたりする用事があるでしょう、そういう時には間違があるそうだよ。二回飲んだら間違いないと。

これも、迷信なのか分からないけれども、今の世の中、こんな事も子供達は分からないからね。

採集 S 52・2・26 読谷村民話調査団第十班 へ山城悦子

92 奥の人と比地の人の話勝負

話者 比嘉利益 (明治三十年七月八日生)

翻字・対訳 玉城琳子

昔、国頭比地なかい話上手ぬ居んや、国頭奥なかい話上手ぬ居たんりしが、比地ぬ話上手ぬ、「国頭奥ぬ話上手と勝負しつくーでわるやつさー」りち、家から出してい行ぢゃんりよ。

あんしーね行ぢゃれー、国頭奥ぬ話上手ぬ畑からめんせーたんり。あんさぐとう「入れー」んち入やーに「何が、ぬーしが来が」んちやぐとう、「貴方から物習しーが来びーしが、習ち呉みそーり」りちやぐとう「何が、ぬーやが」り言ぢゃれー、「どうく珍しい事ぬあていでーびんでー」りち「何が」りち。

「私達あシマから伊江島ぬ後んかい魚網投ぎてい魚釣ちえーしが居びたんでー」りちやぐとう「へー、うれーあんせーどうく珍まし物なー」りち話し。

「くまねーまたやー、うりやかなーひん珍ましい物があんどーやー」「何が、ぬーやいびーが」りちやぐ

昔、国頭の比地に話上手が居て、また国頭の奥にも話上手が居たそうですが、比地の話上手が、「国頭奥の話上手と話勝負をしてくる」ということで、家を出ていったそうです。

そして国頭奥の話上手の所へ行つたら、その人はちようど畑から帰つて来たそうです。そうして「入りなさい」と言われて入つたら「何をしに来たのか」と聞かれたので、「あなたから教わりに来ましたので、教えて下さい」と比地の話上手が言つたら「それは何か」と奥の人が聞いたら「あまりにも珍しい事があつてですな」「どんなことか」と。

(比地の人が)「私達のシマから伊江島の後へ網を投げて魚を釣つた人がいたんですつて」と「へー、それはとても珍らしいことだね」と。

それから、奥の人が「ここには、またそれよりもつと珍しい事があるよ」「何かあるのですか」と比地の人

とう「くまからや、伊江島から首ねーてい、草食いぬ
牛ん居たんでー」んち。

あんさぐとう、なー自分や負きたさやー思とーるばー
てー。なー「ちえー負かするさんみんし」どうく珍ま
さぬ事ぬあいびたさー「りちやぐとう」何が、ぬーや
が「りちやぐとう、「醤油ウーキやいびーしが、どうく
大さぬサバニ浮きてい、醤油かちやーすしが居びたん
でー」りちやぐとう。「どうく、珍まさぬなー、うれー
珍まし物あらんなー」んち。

あんせー、うりがウビ竹やてーさやー、私達あ門か
ら竹一本でーしが夜、昼三日がかいすんち歩ちよーん
どーり言いたんり。

が聞いた。「ここから伊江島へ首を伸ばして、草を食べ
る牛がいたんだつてよ」と（奥の人が）言った。

そこで、もう比地の人は自分は負けだと思つていた
んでしようね。もう一つの話では勝つつもりでいて「と
ても珍しい事がありましたね」と（比地の人が）言う
と、「何でどんなことか」と言ったら「醤油の樽があつ
たんだけど、その樽がとても大きかったので、樽にサ
バニを浮かべて醤油をかき混ぜる人がいましたよ」と
言つた。（比地の人が）「とても珍しいね、これは珍し
い事もあるね」と言つて。

それじゃー、その樽のウビ竹だったんだね、私達の
門から竹一本なんだけど夜、昼三日がかりで引つ張つ
て歩いていたと言つていたつて。

採集S 52・5・22 読谷村民話調査団第十二班 山城悦子・松元久幸

注① 国頭 沖縄県の最北端に位置している。

注② 比地 国頭村の字。

注③ 奥 国頭村最北端の字。

注④ 伊江島 伊江村に属する島。沖縄本島、本部半島の北西約一キロメートルに位置する。

注⑤ サバニ 沖縄を代表する伝統的な漁船。

注⑥ ウビ竹 古くは桶などのたがは、ホウライチクなどを割って带状に巻いて作ったので、この呼び名がある。

93 間男の話

話者 阿波根 ウ シ (明治四十二年二月二日生)

翻字・対訳 玉城 琳子

女おな一男探めーてい置ちきてい、ちゃーうりそーし。うぬ夫ぬ仕事かい行ちーね、またうまんかい出じやちえーうりしーしさい。夫ぬまた来がーたないねー隠みてーしーしーし、うぬカーミンかい入つていさぐとう。

妻が夫以外の男を探して、いつも隠していた。夫が仕事へ行くと、妻は甕の中から男を出してきて、夫が帰ってくる時間になると甕の中に隠したりしていた。

うぬ夫お分かとーてい、帰ていつちから「湯沸かせー、浴みいぐとう」んちさーなかい、湯沸かしみやーなかい、妻え何処がらかい行らさーいうぬ湯やカーミンかい入んちゃーなかい、また「浴みたせー」りやーなかい。うぬ夫お行ちたぐとう、うぬ妻えまた出していつちうれー俵なかい入りやーなかい隠みーせや。あんし死じよーぐとうりやーい片付ていさぐとう。

夫はそれに気付いて、(ある日)家に帰ると「風呂に入るので、お湯を沸かしなさい」とお湯を沸かさせて妻を行事に行かしたすきに夫はお湯を甕に入れて、妻が帰ると「風呂は入った」と言つてね。夫が出かけて行つたので、妻は出てきて男の人を俵に入れて隠してね。そして死んでいると片づけたそうです。

また並びんかい盗るぬ居てい。親子盗るぬ居たぐとう、

また、隣に盗人が居てね。親子盗人が居たので、そ

親子盗るんかい、「難儀なていなー。あつさよー町か
い行ぢ米買おていちやぐとうる、なー暑さぬ」りち、
うまんかい行ぢやーなかい。なー知恵のーまんどーぐ
とう、人んかい、うりんかい片付らちやる話て。あん
しやたんりぬ話。

の親子に「難儀だね。町に行つて米を買つてきたので、
もう暑くて」とそこに行つて。もう知恵を働かせて、
その俵を盗人の親子に片づけさせたという話だよ。

採集S52・5・22 読谷村民話調査団第十三班 へ宮里光雄・伊波百合子

94 流された王女

話者 奥原松助(明治三十年八月二十四日生)

翻字・対訳 玉城琳子

砂辺ぬ年寄りぬ話やいびーたしが。

砂辺の年寄りの話でありましたが。

砂辺ぬ前なかいや、今あブロック家ん何んあいや。

砂辺ぬ前という所は、今はブロックの家とか建つて

うんぐとう、家あ造らつとーびーしが、うま御願(所)

いるが、昔、そこは山で御願所がありましたよ。

ぬあいびーたんよ。元お山やびーたんよ、うまなかい
やうりやびたつさー。

あんし砂辺ぬ村びけーじえー、ポージャヤが生まりー
ねー三線のーむる弾かさたんりよーたい。「何が、ぬー
んち、あんやいびーがやー」んち、私が問うたぐとう

また砂辺の村だけは、子どもが生まれると全く三線
は弾かさなかつたそうですよ。「どうしてですかね」と
私が聞くと、「これは昔あつた話だがね。首里の殿様の

「うれー、事實ある話やし。昔、首里ぬ殿様ぬ女人子ぬ妊娠さーに、船乗して流ちやぐとう砂辺ぬ前ぬ川ぐわーんちあいびんりからやー、うまんかい流りていちゃーに。うまんかい着ちゃーにうまんかい登ていぢ、うまぬ山ぬ中とーてい、子ぬ産まりてい」。あんしさぐとう、うりあらわりいーね大事んちる、三線のー弾からん。

また、砂辺ん人お、あんし皆美らさーあんどりち、話しみせーびたんり。遊び土地えーびたんり。なまるあんぐとう若者達が仕事えーする元お絶対砂辺んりぬ村あ若さる間仕事えーさびらんたんり。むる美ら装いし、遊びん上手やいびたんり。うぬ砂辺ぬ村、実えうぬふーじぬ話ぬあいびたつさー。

娘が妊娠したので、船に乗せられ流したら砂辺ぬ前には小川があつたそうでしたが、そこに流れてきてね。そこに着くと山の上に登って行って、その山の中で子どもを産んだそうです。そうしたら、それがばれたら大変なことになるといって、三線も弾かなかつたそうです。

また、砂辺の人は、皆美人で遊びムラだったという話もあるよ。今は若者は仕事をするが、昔は絶対砂辺の村の若者は、仕事をしなかつたて。皆きれいにして、遊び上手であつたて。その砂辺の村では実はそのような話がありましたよ。

注① 砂辺 北谷町の字。屋取集落である。砂辺の前を含む古層の村で戦前から村芝居の盛んなところで知られている。

注② 首里 3頁参照

※ 砂辺ぬ前 注①参照

採集 S 52・5・22 読谷村民話調査団第十一班 へ渡慶次照・新垣修子

翻字・対訳 知花春美

天川坂あまがびらの所ところや、一人ひとりな二人ふたりな一歩あつかり一歩あつか
あたぬ小道くさみちぐわーやたんりよー。

あんし、また嘉手納かてなあねー嘉手納かてなチナーりぬ大武士でいぶし
ぬよ生うまりていやー。うりが番手ばんていそーに、殺ころちん殺ころち
んなーやあらんやー。石いしさーに何なにさいし殺ころちさぎーし
が、なー四し、五日ごにち、一週いっしゅうかん間かんぬんかかとーるばーよー。

あんしさぐとう、なー島津家しまづけぬ軍隊ぐんたいや、やーさうが
りし自分じぶんくるん倒たりーぬあたいなとーしがやー。

なーうつき沖繩うちなや頭ちやうお悪わるさてーるばー、粥うけめー炊たちやー
にやー、うり流ながらさーに湯ゆゲーシ、来くん事ことりやーにせー
るぐとーんよ。あんしうぬ島津家しまづけぬ軍隊ぐんたいや、やーさう
がりそーに、なーうりん取とりてい食くてい欲ゆくぬあていそー
たんりしがやー。

あんしまた沖繩うちなぬ島尻しまじり方面ほうめんねーや、十六歳じゅうろくない浦うら添そ
添そメーマツまつりる大武士でいぶしぬ居うたんりよー。島尻しまじりえまた武士ぶしん達たち
がまんどーるばー。

天川坂という所は一人、二人が歩けるほどの小さな
道であつたつてよ。

そこで、嘉手納には嘉手納チナーという大武士が生
まれたそうだ。それが番をしているものだから、殺し
ても殺してもこたえなかった。石でやつつけたが、も
う四、五日、一週間もかかったそうだ。

そうすると、もう島津家の軍隊は、ひもじさのあま
り自ら倒れていくさまであつた。

沖繩はそれほど頭が悪かったのか、お粥を炊いて、
それを流して火傷させるつもりでいた。そしてその島
津家の軍隊は、腹をすかせているので、それも取つて
食べて欲があつたそうだ。

それからまた沖繩の島尻方面に、十六歳になる浦添
メーマツという大武士がいたそうだ。島尻には武士が
たくさんいたそうだ。

あんし沖繩ぬ嘉手納ぬ嘉手納チナーりち田舎武士ぬ
居てい、うり守ていあんそーる大丈夫りち、うまんか
い上ぎりち命令さぐとうや、上ぎていんちやくとう、
うまー本當堅固な所なていいるうまー守とーしがや。
うまーなーあまから命令ぬ「上ぎり」りちやくとう
や、上ぎてい行ぢやーにあまんじ戦ていさぐとう。あ
んさーに後お全滅そーしがやー。本當や、あんぐとう
嘉手納チナーりぬ武士ぬ、うまー堅固な所なてい
うまー守とーしが。

そして、沖繩の嘉手納には、嘉手納チナーという田
舎武士がいて、その人が守っていたので大丈夫だから
そこに上げなさいと命令したので、上げてみたらここ
は本當は堅固な所であり守られていた。
そこは「上げなさい」と命令があつたので、上げて
そこで戦つたら全滅した。本當は、嘉手納チナーとい
う武士が、堅固な所であつて守っていたがね。

採集 S 52・2・26 読谷村民話調査団第三班（阿波根初美）

注① 天川坂 283頁参照

注② 嘉手納 沖繩本島中部の西海岸に面し、那覇から北へ二三キロメートルの地点に位置する。一九四八年に北谷村より分村し、嘉手納村としてスタート。

注③ 嘉手納チナー 283頁参照

注④ 島尻 282頁参照

翻字・対訳 玉城和美

うりよ夫婦みづうだな豆腐とうふさーしてー。暗くらさいになー豆腐とうふさーなかい妻とらじえ、豆腐とうふ売ういが毎日めいちなー町まちんかい出でしてーるばーてー、比謝橋ひじやばし辺ひなんかい。

あんし出でしていちやぐと、帰かえりになーうぬある乱らん暴者ぼくわんはつちやかやーに、うぬ女いぬめお乱暴らんぼさつてい強姦ごうかん男いまかんちや達だんかいさつたぐと、「私わんねー家やかい帰けいてい行いかりみ」りやーに、うりあまうてい自殺じさつせーるばーてー、うぬ女いぬめお。

あんさぐと、うぬかんし時とちん遅にかなとーしが、私わ達だあ女いぬめお遅にかまでい豆腐とうふ売ういが出でじ、朝あさ出でじやーにうんなげー来くんしがりち。松明ていびち付けきていよ、うぬ夫うとこおなー妻つま待まつちーがりち、松明ていびち付けきやーなかいウージガールらーし付けきやーに、あんし迎むかいが行いちゆんりしーねーなーある溝みちん何なん処いんくい搜ためーていさぐと、山道やまみちぬうま側そばんかいよ、すぐ自殺じさつ、死しじてーうぬ女いぬめお。あんさーなかいうんにーから「いやーが死しじや私わんにん生いち

これは夫婦で豆腐作りをしていたよ。そして暗いうちに妻は、豆腐を売りに町に出たらしいよ、比謝橋辺りまで。

そうして出て来たが、帰りに乱暴者に出くわしてその女の人は男の人達に乱暴、強姦されたので、「私は家に帰れるはずがない」と、そこで自殺したらしいよ、その女の人は。

それでこんなに時間がたっているのに、私の妻はこんなに遅くまで、朝豆腐を売りに出て行ったまま、こんなに時間がたつても帰って来ないといってね。夫は妻を待つために、さとうきびの枯れ葉で松明をつけそれから迎えに行く途中溝など何処もかも搜したら、山道の側で自殺して死んでしまったよ、その妻は。それから「お前が死んだら私は生きていてもしょうがない」といつて夫婦共死んでしまった。

ちよーていんゆちらーあみ」りち夫婦死なーない。

うぬかんし「妻待つちやー火」りちよ、はじめー男から直ぐ遺念火や出して来ない、また女んあまからかんし二人いちやてーうい、別りてーういしよ。うんぐとーし遺念火い言い伝えぬあるばー。

そしてこの「妻を待つ火」と言つて、最初は男の遺念火から出て来て、そして女の遺念火も出て二人会つたり別れたりしていた。そういうことから遺念火の言い伝えがあるよ。

採集S52・2・26 読谷村民話調査団第十一班(大宜見光一)

注① 遺念火 赤い火の玉で、無念を遂げて死んだ人の靈魂である。タマガイが一般の人々に崇りがあるとして恐れられている反面、イ

ニンピーは哀れさをもつて見られている。

注② 比謝橋 283頁参照

97 人の振り見て我が振り直せ

話者 阿波根 庸 秀 (明治三十三年二月一日生)

翻字・対訳 辺土名 初 美

まじ、くれーはつきり何村、何間切、何村んでー言やらんしが、とにかく隣近所ぬあてい、あんし、一方ぬ家や嫁姑ぬいへー、仲ぬ不和ぬうりがあてーるばー。一方やまた非常に親子、ゆー和氣あいあいとうしうり

まず、これははつきり何村、何間切、何村とは言えないが、とにかく隣近所があつて、そうして、一方の家は嫁姑の仲が少し不和のあれがあつたわけ。一方はまた非常に親子よく和氣あいあいとしていたつて。

そーるうり。

まじ、とにかく、一方ぬ家や、意見、親ぬ言いんせー、何かうりなかい言葉ぬ癖、癖ちきてい、あんしうりする家やんよ。一方ぬ家やまた、うまぬ家ぬ成り行ちえー、嫁姑ぬいつペーゆーうりそーる家やてーるぐとーん。

あんしさくとう、うまぬお爺さん、また主人なり、田舎るやくとう、ちやー畑仕事んかい行ちゆるばー。あんやしがくぬ嫁えまた、言いるんせー童ん達あ物呉たい、またや、昔ぬ沖繩ぬ農業んでいせー牛んちかないん、豚ちかなてい、なーめーめー家なかいうりやくとう、うんなむんうりする為に嫁さのー畑か いや午前中やなー出じらんばーてー。

あんさくとう、親ぬ達あ、また自分ぬ夫ぬ畑から帰てい来るなかいぬ家あ仕事でいせー、女おんちや午前中なかいやしーゆーさんあたいぬうりがあせーや。また洗濯とか何とかぬうりんあいすくとう、嫁え午前中や畑か いや行ちゆーさんしが、自分ぬ親、姑また自分ぬ夫ぬ畑仕事から帰てい来る時分になていさくとう、「あーなーうつてい、親ん自分ぬ夫ん帰てい来る時間

とにかく、一方の家は、意見を親が言ったら、何かそれに言葉の欠点、難癖つけたりする家だよ。一方の家はまた、その家の成り行きは、嫁姑がとっても仲良くしている家だったようだ。

そんなだったから、そこのお爺さんや主人は、田舎だから、いつも畑仕事に出て行くわけ。そうだけどこ嫁はまた、言ってみれば子供達に食事させたり、また、昔の沖繩の農業というのは牛や豚も養って、それぞれの家で飼っているから、その世話をするために嫁さんは畑には午前中はもう出ないわけよ。

それで、親達や、また自分の夫が畑から帰って来る間の家事というのは、女の人は午前中かかっても出来ないくらいの仕事があるでしょう。また洗濯とか何とかの仕事もあるんだから、嫁は午前中は畑には行けなけれど、親、姑または自分の夫が畑仕事から帰って来る時分になったら、「ああ、もうすぐ親も自分の夫も帰って来る時間になっている」と言って、自分は家畜

などーるむん」ち、自分やイチムシぬ物食ちやい、また洗濯さいするうぬ傍らうとーてい、「なー帰ていめんせーる時分やくとう」りち、とにかく、昔ぬ田舎ぬうれー、夏んでーやいねー、ゆー庭なかい窯ぐわー造てい、あんしし、湯沸かちやい何さいするうれーあたるばーてー。

あんししさくとう、「なーめんせーるむん」でいやーに、立派ん湯ぬ準備、湯沸かち、あんしめんせーるんさー、「汗はい水はいしる働ちめんせーるむん、なー水欲しく、茶欲しくんなどーみせーる筈やい」んち、うぬ準備する為なかい、うぬヤックワン窯んかいうりしそーる場合に、今度おまた、姑ぬくれーまた牛馬ぬ草とうか、また山羊とうかぬうりんやくとう、とにかくまちぶいかーふいし、なー沢山畑から草ん何ん集みていめんせーるばー。

あんしーし、なーまちぶいかーふいするあたいぬうりそーぐとう、うぬ人お、うまー見分けーねーみそーらんよーい、直ぐ庭ぬ真ん中からふいたーふいたーし、なー担みていめんそーちよーぐとう、せつかく嫁ぬ茶ぬ準備すんでい湯沸かちうりせーし、ちゆらーくうぬ

に餌をやったり、また洗濯したりするその傍らで、「もう帰っていらつしやる時分だから」と、昔の田舎では夏だったら、よく庭に小さい窯を作つて、湯を沸かしたり何したりするのがあつたわけよ。

そんなだつたから、「もう帰っていらつしやる」と言つて、ちやんと湯を沸かして、そしていらつしやつたら、「汗水流して働いていらつしやつたので、もう水やお茶も欲しくなつていらつしやる筈だ」と言つて、その準備する為に、その薬缶を窯にかけているときに、今度はまた、姑が牛馬の草とか、また山羊の草もだから、とにかくからまりあつて、もう沢山畑から草も何も集めていらつしやるわけ。

そうして、もうからまりあうくらい草を持つているから、その人は、そこを見分けることも出来ないで、すぐ庭の真ん中から揺さぶりながら、もう担いでいらつしやつていから、せつかく嫁がお茶の準備をするといつて湯を沸かしてあるのを、すつかりそのからまり

まちぶいかーぶいそーるうりさーなかいがち倒らちねーらん。あんししさに、またイチムシぬ小屋ぬ前んじ草んうりしとうんけーてい見ちやくとう、なうぬヤツクワンのーちゆらーくかち倒らち無んなどーるばーて。

あんさくとう、「あーとー、うれー、私ねー目んかなーん、うんぐとうし、うりがせつかくうりせーるむんぬなーちゆらーくたたち倒らち無んさやー」でいちうりし。また嫁え「今るめんせーびーていー」ちあんしうりしさくとう、「あー、今日や私ねー、ちゆーくうりんさんぐーとー入っちちやるむのー、いやーがせつかくうりせーるヤツクワン湯ちゆらーくはに倒らち無らん。なーいやーうぬ好意ぬうりんやしが、いやー思いぬいつべーうりしるさるはじやしが、うりん徒になちなーしまんさーやー」んり親あ言みそーちさくとう、今度おまた嫁え、「あー、うれー私がる悪さいびーる。また、貴方がうんぐとーしな草んぬんうりしめんせーしん分からん、うり場所ん立派んうりんさんぐーとーうりしせーたせー、くれー私がる悪さいびーる」んちさくとう、言いるんせー、親あ自分ぬうりせーみしが悪さんりちうりすい、嫁えまた、うりが場所ぬう

あつてゐる草で引つ繰り返してしまつた。そうして、また家畜小屋の前で草を降ろして振り返つて見たら、もうその薬缶はすつかり引つ繰り返つてしまつてゐるわけ。

そうしたから、「ああもう、これは、私は目もよく見えなくてね、こうして嫁がせつかく準備してあるのにすつかり引つ繰り返してしまつたねえ」と言つて(誤つて)。また嫁は「今お帰りですか」と言つたから、「あ、今日は私はよく注意もしないで入つて来たから、あんたがせつかく準備してある薬缶の湯をすつかり引つ繰り返してしまつて。もうあんたの好意なのに、あんたが心を込めて湯を沸かした筈なのに、それを徒にしてしまつて済まないねえ」と親が言われたから、今度はまた嫁は、「ああ、これは私が悪いんです。お母さんがこんなにして草などを持つていらつしやるのも分かんなくて、場所も考えないで湯を沸かしていたのは、これは私が悪いんです」と言つたから、言うなれば、親は自分がそんなされたのが悪かつたと言うし、嫁はまた、自分が場所もちやんと考えないでそうしていたのは私が悪かつたといつて、そうやって互いに自分の

りん立派んうりんさんよーいたただうりさせー私がる悪
さいびーたんち、あんさーに互えに自分ぬせーし悪さ
んち、あんしうりし、互いに言い合ひし。

かんし悪さんちうりする場合に、隣ぬ、今度おま
た、親ぬ何か用事ぬあてーるばーて。あんししめんそー
ちよーる場合に、うりはつちやかてい、「あはー、くま
ぬ家庭や、んちや、そういううりやている嫁姑何ぬう
りん無らん、波ぬ声ん聞からんさやー」りる。うりか
ら隣ぬ家あ、そういううり感じてい、うりしめんそー
やーに「今日、私ねー隣んかい行ぢやしが、なーあま
ぬ家ぬうりんでいせーなー驚ちゆるあたいるやつさー」
りち今度おまた、親子、嫁姑ぬ話しされー、今度おま
た嫁ん、「あはー、うぬふーじーぬうりんあいびーていー」
んち。今度おまた嫁同志そういううりん話んしさくとう、
言わば、うまからそういううり習てい、今度おまた、
うまん立派んぬ家庭作たんりるそういう昔話ぬある
ばー。

したことが悪いと云って、言い合ひしていた。

こんなして悪かったと云ってやっているところに、
今度はまた、隣の家の親が何か用事があったわけでしょ
う。そうしていらつしやつた時に、それに出くわして、
「ほほう、この家庭は、そうか、そういうあれだか
ら嫁姑は何の問題もなく、もめ事も聞こえないんだね
え」と言つて。それから隣の家の人は、そういうこと
を感じて、帰つていつて「今日、私は隣に行つたが、
向こうの家の仲の良さは驚くくらいだよ」と言つて今
度はまた、親子で嫁姑の話をして「あ、そういうこと
もあつたんですか」と。今度はまた、嫁同士でそうい
うことも話したら、そこからそういうことを習つて、
今度は、その家も立派な家庭を作つたという昔話があ
るわけだよ。

注 間切 市町村制以前の行政区画の単位。現行政区画の村にはほぼ相当する。

98 親孝行の話

話者 奥原松助(明治三十年八月二十四日生)

翻字・対訳 玉城琳子

人間というものは、親の恩を返すということは、ちゃーし親ぬ恩返すが、親ぬ話。

「儲きてい御馳走御差ぎいしる親ぬ孝やる。美ら着物着みそーらしする親ぬ孝やる」りちやぐとう「うれー、どうく親ぬ孝で思んさーやー」り親ぬ言ちやぐとう、「あんせー、銭んだてーん儲きやーに私がいつペー贅沢にしみそーらすせー親ぬ孝えーさに」りちやぐとう。「うりん私ねー孝行り思んさー」「はーなー、むる孝行あらんなー」りち子ぬ言ちやぐとう、私が、「いやーが親ぬ孝せーやーんり思いるんさー、私が言いる通いしよーやー」り言ちやぐとう「あんせーさびんてー」りち。

「美ら着物着しーしん有り難く思ん。銭ぬまんどー

人間が親の恩を返すということは、いったいどのように親の恩を返すかという親の話である。

それは「儲けて御馳走を食べさせるのが親孝行である。きれいな着物を着せるのが親孝行である」と言うのと「これは、あまり親孝行とは思わなね」と親が言ったので、「それじゃー、お金をたくさん儲けて、私がいつぱい贅沢にさせることが親孝行でしょう」と言った。そしたら「それも私は親孝行とは思わなね」「どうして、みんな孝行ではないのか」と子どもが聞くと、親が「お前が親孝行をしようと思っているのなら、私の言う通りにしなさい」と言うのと「そうしますよ」と。

それはね「きれいな着物を着せてもらうのも、お金

しん有り難く思ん。やしがいやーが、世間ぬ人とう立派合てい喧嘩きーえんさんよーいすしえー親ぬ孝んり思とん。またん、夜ん、かーま夜中までいん歩かんよーい「なまる来びーる」んち来せー、親ぬ孝んでい思りん。非常に有り難く思いん。いやーが、銭んだてん儲きていだてん使いみそーれーりちん孝行あらんどー。いやーが、盗りんでーしつち使しーねー不孝るないる。孝行あらん」りち親ぬ返答しませーたりんり。

あんさぐとう、なるべく酒ん飲まんよーい、「今る帰てい来びたる」りち、親んかい礼儀しつから、うつペー言いるんせー、ちやつさ寝んとーるりちん心許ち寝んだりーぐとう、心配なく寝んじゆぐとう。うりが親ぬ孝んり思いん。親ぬ孝んりーせーうりるやる。

いやーが贅沢に御馳走呉ていん孝行あらんどー。何食りんしむぐとう、人とうん喧嘩よーい、人ぬ物んけー取らんよーいしーるんせー、うりがいつペー親ぬ孝やんどー。人とう喧嘩さーんあれー、なーうりがいつペー親ぬ孝行やんどー。うりが昔ぬ親ぬ孝ぬ話。

がいつぱいあつても有り難く思わない。でもお前が、世間の人と仲良くして喧嘩もしなければそれが親孝行と思つてゐる。また、夜も遅くまで歩かないで、「今帰つて来ました」と親に挨拶したら、親孝行と思える。非常に有り難く思えるよ。お前が、お金を沢山儲けて使いなさいとくれてもそれは孝行とはいえないよ。お前が、盗みでもして使わしたら不幸にしかならないよ」と親が返したそうです。

それから、なるべく酒も飲まないで、「今帰つて来ました」と親に挨拶して、これだけでも言つてくれたら心配なく寝ることが出来るので。これが親の孝行と思うよ。親孝行というのはそういうものである。

また、お前が贅沢に御馳走させても孝行ではないよ。何を食べてもいいから、人と喧嘩もしないで人の物も盗まなければ、これが本当の親孝行であるよ。人と喧嘩しなければ、もうこれがとても親孝行であるよ。これが昔の親孝行の話である。

翻字・対訳 玉城琳子

昔ぬ、くぬユタんりして。沖繩ん人ぬユタんりし。
久米村スムチ、上^⑤等^⑥りぬ話^⑦があんてー。うりから久米村
ぬスムチえ大^⑧変^⑨上^⑩等^⑪りぬ言葉^⑫。

昔^⑬はです^⑭ね、唐^⑮んかい船^⑯出^⑰じやち行^⑱ちゆたんりせー
や唐^⑲船^⑳りち。うぬ場^㉑合^㉒ねー、子^㉓守^㉔やーが、うぬボ^㉕ージ^㉖ヤ^㉗ー
背^㉘負^㉙そーてい

情^㉚あていからや 海山^㉛ぬ底^㉜ん

尋^㉝にやい 着^㉞ちるする

りち歌^㉟ぐわーせーるばーて。

しちやぐとう殿^㊱様^㊲ぬ歩^㊳ちみせーがちー、珍^㊴しむん、

ボ^㊵ージ^㊶ヤ^㊷ーしかさーたーが

情^㊸あていからや

海山^㊹ぬ底^㊺ん 尋^㊻にやい

着^㊼ちるする

りち歌^㊽すたさーんりやーに

上^㊾ぬ人^㊿ぬ、唐[㋀]んかいうさきー人[㋁]行[㋂]らちやしが船[㋃]え

昔のユタの話である、沖繩の人のユタの話だよ。久
米村の易者が上等という話があるよ。それから久米村
の易者はとても上等ということだよ。

昔はです[㋄]ね、唐[㋅]へ船[㋆]で行[㋇]っていた[㋈]そう[㋉]ですよ、唐[㋊]船[㋋]
とい[㋌]って[㋍]ね。その[㋎]時[㋏]に、子[㋐]ども[㋑]を[㋒]背[㋓]負[㋔]つて[㋕]子[㋖]守[㋗]が[㋘]いた
そう[㋙]だが、

情[㋚]けがあれば 海山[㋛]の底[㋜]を

尋[㋝]ねても 着[㋞]くでしよう

と歌[㋟]を[㋠]詠[㋡]んで[㋢]いた[㋣]そう[㋤]です。

そうしたら殿[㋦]様[㋧]が通[㋨]りが[㋩]かり[㋪]ながら、珍[㋫]らしいもの

だね、子[㋬]守[㋭]達[㋮]が

情[㋯]けがあれば

海山[㋰]の底[㋱]を 尋[㋲]ねても

着[㋳]くでしよう

と歌[㋴]を[㋵]詠[㋶]んで[㋷]いた[㋸]よと[㋹]言[㋺]つて[㋻]ね。

上[㋼]の人[㋽]が、沢[㋾]山[㋿]の人[㌀]を唐[㌁]へ行[㌂]か[㌃]せる[㌄]が船[㌅]が[㌆]帰[㌇]つて[㌈]こ

返てー来んなたぐとう、童達がんちよー、あん言いる
むんぬくれー

海山ぬ底ん 尋にやい

着ちるする

んりせーくれー、是非久米村かい、あまー立派なスム
チさーにあかすんりぬむんあま行らちんりわるやつさー
りち使ちかてい久米村んかい行らちやぐとう久米村ぬ
スムチたまし抜きとーぬぼー。「私ねーなー、うり分か
らんたるむん大事なとーさ。殿様ぬ私にんかい問てい
くーでい言やつとーい、何んち返答さらーましがやー」
りち、なーじこー驚るちよーるばーて。

あんさーに、うぬシムチりしが朝起きてい顔洗いぬ
場合に、親ん子ん牛ぐわーぬ逃んぎてい門んかい繫じ
はいたんりよ。アヤーぬ前から通たぐとう、またお婆
やなーうぬ牛、あんさーに追てい行ぢやぐとう。「今日
ん、私が見ちやしがなかいや、うりやかん他ねー返答
無らん。なー何ならわんしむぐとう、打ち首さらわん
しむぐとうなーうりる返答ないる」んち。

あんさーにあまから来ぐとう、「唐んかい船出じやち
やらちえーしがなー、なまり入つちんくーん。御主加那志前

ないので、子供達でさえ、あんなふう言っているの
で、これは

海山の底も尋ねて

着くでしよう

ということは、これは是非久米村の易者に、あそこは
立派な易者が当てるというので、役人を使って久米村
に行かしたら久米村の易者はびつくりしたそうですよ。
「私にはそれは分からない、大変なことになっている。
殿様が私に聞いて来なさいと言われて来たというし、
どのように返答したらよいか」と、もうとても驚いて
いたそうです。

そこで、その易者が朝起きて顔を洗っている時に、
親子の牛が逃げて門へつらなつて行ったそうです。ア
ヤーの前から通つて行ったので、またお婆さんはその
牛を追つて行った。「今日、私が見たものはこれより他
にはない、返答出来ない。もうどうなつてもよい、打
ち首されてもいいのでもうそれを返答しよう」と。

それからまた殿様の使いが来て、「唐へ船で行つてい
ますが、いまだに帰つてきません。御主加那志前から

が、行方問ていくーりそーびんでー」り言ちやぐとう
「唐船のーくぬうち、後ない先ないし、くぬうち入っ
ちちやーびんどー。心配しそーんなけー、くぬうち
入っちちやーびさ」り言ちやぐとう「あんいち返答そー
ちみそーれ」り言ちやぐとう「あんれーび」りち、帰
てい。あんさーに「久米村スムチえーあん言やびーた
さー」りちやぐとう。「あんやんでい」りち。あんしそー
ねー、うぬだー、言んねーすんねー、船よ後ない先な
いし二ち入っちちやぐとう、うりから久米村ぬシムチえー、
大変取持たつたんりせーうぬ為やんり。

朝起きすしがる得やあんどーりせーうりやんり。う
ぬ言葉やんり。やつぱし、その牛見た為に運が良かつ
たですね。朝寝そーねー、うれー見らんたしが、朝起
きさーにうり見ちやぐとうな、運ぬ豊さぬうりんか
いあたてい。朝起きすせー、あぬだー言葉ぬあんどー
りせーうぬ意味なとーびーてーさー。

唐船ぬめんせーに、後ない先ないし入っち。うぬ牛
ぬ逃んぎていはいし見らんてー大事やいびーてー。久米村
ぬスムチえー、いっぺーゆー当たいんどーすせー、う
ぬ意味でーびる。まさか久米村ぬ人ぬ別にやかんゆー

行方を聞いてきなさいと行かされました」と言う「唐
船は近いうち、遅かれ早かれ入ってきますよ。心配し
ないで下さい、近いうちに入ってきますよ」と。「その
ように返答して下さい」と言ったら「そうですか」と
言つて帰つた。それから「久米村の易者はこのように
言つていたよ」と報告したそうです。（殿様が）「そう
か」と。そうしてうわさをしていたら、船は遅かれ早
かれ二隻入ってきたので、その時から久米村の易者は、
とても上等だと言われたそうですよ。

早起きする者には得があるということは、そういう
ことらしいね。やつぱり、その牛を見たおかげで運が
良かつたんでしようね。朝寝をしていたら、牛を見る
ことはなかつたでしょう。早起きして牛を見たおかげ
で、運が良く牛に出合つて。早起きすることは、得が
あると諺にもあるよ。

唐船が入つて来る時も、遅かれ早かれ入つてきたで
しょう。その牛が逃げて行くのを見ていなかったらも
う大変だよ。久米村の易者は、非常によく当たるとい
うのは、その意味ですよ。まさか久米村の易者が他の

当ていーんりせー、うれーなー、めったに無んはじや。
久米村シムチぬ取持たつたせー、うぬ意味でいい
話やたんどー。朝起きすせー非常に上等んりる言葉。

易者より、立派に当てるといふことは、それはもうめつ
たに無いかもしれない。

久米村の易者が有名になつたのは、その意味があつ
たという話ですね。早起するのが非常に上等だと。

採集S 52・2・26 読谷村民話調査団第十二班 へ山入端孝子・遠藤庄治

注① ユタ 古くから沖縄本島にいる女性のト占者。現在では男性ユタも増えつつある。ユタのことを最近ではムンシリとかハンジとも呼んでいる。新築、結婚、葬式ごとがあると必ずユタの厄介になる。読谷村にもユタ的な人がいるが、ほとんど与那城村の屋ケ名に行っている。

注② 久米村 現在の那覇市久米にあつた中国系住人の集落。

注③ スムチ 307頁参照

注④ 唐 船 中国からやって来る船。シナ式ジャンク型のいわゆる中国風の船体構造を持つ船。

翻字・対訳 玉城和美

カンカー^注りしえーうりやるばー。

あれーシマクサラシリちよー。あんさーに前^{まへ}でーふー
ち返^げしりちや悪風返^{あくふうげ}しりち、村^{むら}うてい牛殺^{うしく}ち。あんさー
にうりが血^ちいや取^とつていホーギぬ葉^ふさーに血^ちい付^ちきてい、
屋敷^{やしち}ぬ角^{かど}々^{かち}うりし村^{むら}ぬ方^{ほう}々^{ほう}んかい牛^{うし}ぬ骨^{ほね}ぐわー飾^{かざ}てい
悪風返^{あくふうげ}しりち。うり悪風返^{あくふうげ}しぬ奉^{まつ}りやるばー、カンカー
りしえー。

カンカーというのはこうだよ。

あれは、シマクサラシといって。昔は悪風返しといっ
て、村で牛を殺した。そしてその血を取ってハマゴウ
の葉で血を付けて、悪風返しといって屋敷の角々につ
けたりまた村の入口に牛の骨を飾っていた。これは悪
風返しの奉りだったよ、カンカーというのは。

採集S52・2・26 読谷村民話調査団第三班(阿波根初美)

注 カンカー 地域によってはシマクサラシとも呼ぶ。悪疫が部落に入ってくるのを防ぐために行なわれる年中行事。牛を殺しその骨片
を左繩に結んで部落の入口などに張った。

話者 阿波根 庸 秀 (明治三十三年十二月一日生)

翻字・対訳 辺土名 初美

昔、首里ぬ侍達や、言いるんせー暇あまんどーせーや。暇あまんどーぐとう、ある場合に、くぬ言わば節目とかりちあしえーや。うぬ場合に遊ぶる暇ぬあくとう、言わば、うつたーが、「でいー、今日や何処ぬまーんかい集まやーに、何かな面白さるぐとうし遊でいんーだな」でいるうぬ催しから出して、あんし集まていさくとう。

今度お、「でいー、まし今日や暇んやい、なーめーめーまし歌ぐわー作えーし遊でいんーだな」でいるこういう相談なやーに、「とーあんせー、りー互えに歌作い勝負しんじやびらやー」でいるそういううりなていさくとう、なー皆うりなかい、「やしがまし歌作いる場合ねー、くぬ歌あ誰が詠でーる歌んでいるくぬうれーあらんぐーとうー、自分くる、直ぐ新たになー何やていんしむくとう作らやー」んちぬ、そういう約束なやーに、なー昔詠でーる歌あ例やさんぐーとうー作いる勝負やてー

昔、首里の士族たちは、言うなれば暇はいっぱいあるさあね。暇はいっぱいあるから、ある時に、言わば節目とか何とかいつてあるでしょう。その時に遊ぶ暇があるから、これたちが、「さあ、今日はどこそこに集まって、何か面白いことして遊んでみよう」というその催しから出て、そうして集まった。

今度は、「さあ、まず今日は暇もあるし、銘々まず歌作りをして遊んでみよう」ということになって、「それでは、さあ互いに歌作り勝負してみましようね」ということになったから、もう皆それに、「だけどまず歌作るときには、この歌は誰が詠んだ歌というこんなあれではなくて、自分ですぐ新たにもう何でもいいから作ろうね」という約束になって、もう昔詠んだ歌は例にしないように作る勝負だったようだ。

るぐとーん。

あんしししなー皆、それぐらいあまにかいうりそーせー
学問がくもんんしみらつてゐるうくとう、そういううりしな
めーめー歌作うたぢやくていかんし出いじやすしが、くり出いじや
しーねー、「あー、くれー上句かみくお誰たが作ぢやくてーみせーしん
かい似にじよーつさーやー」でゐるうりなやーに、な
むるーちん当あたらんなてーるばーてー。

ぬ、
あんししさくとう、今度こんどお後あとにし考かんがていうりさる歌うた
ぬ、

歌詠うたゆめまんとうむてい さまざまにさしが

歌うたや詠ゆめみ果はててい 昔むかし人ひとぬ

ち、かんし歌うた、自分じぶんくる作ぢやくてーるばーて。あんし、く
り出いじやちさくとう、くれー当あたい前めい、うぬ人ひとぬ作ぢやくてー
る歌うたなとーせーやー、何なんんかい掛かかてーうらんせー。
あんさーにくぬ人ひとぬ勝かつちやんでゐる、ことう話はなし。

そうしてもう皆、それぐらい向こうに集まつてゐる
人は学問もさせられてゐるから、そういうことで銘々
歌を作つてこうして出すが、これを出したら、「ああ、
この上句は誰かが作つていらつしやるのに似てゐるね」
ということになつて、もうちつとも当たらないわけね。

そうしたから、今度は最後の人が考へて詠んだ歌が、

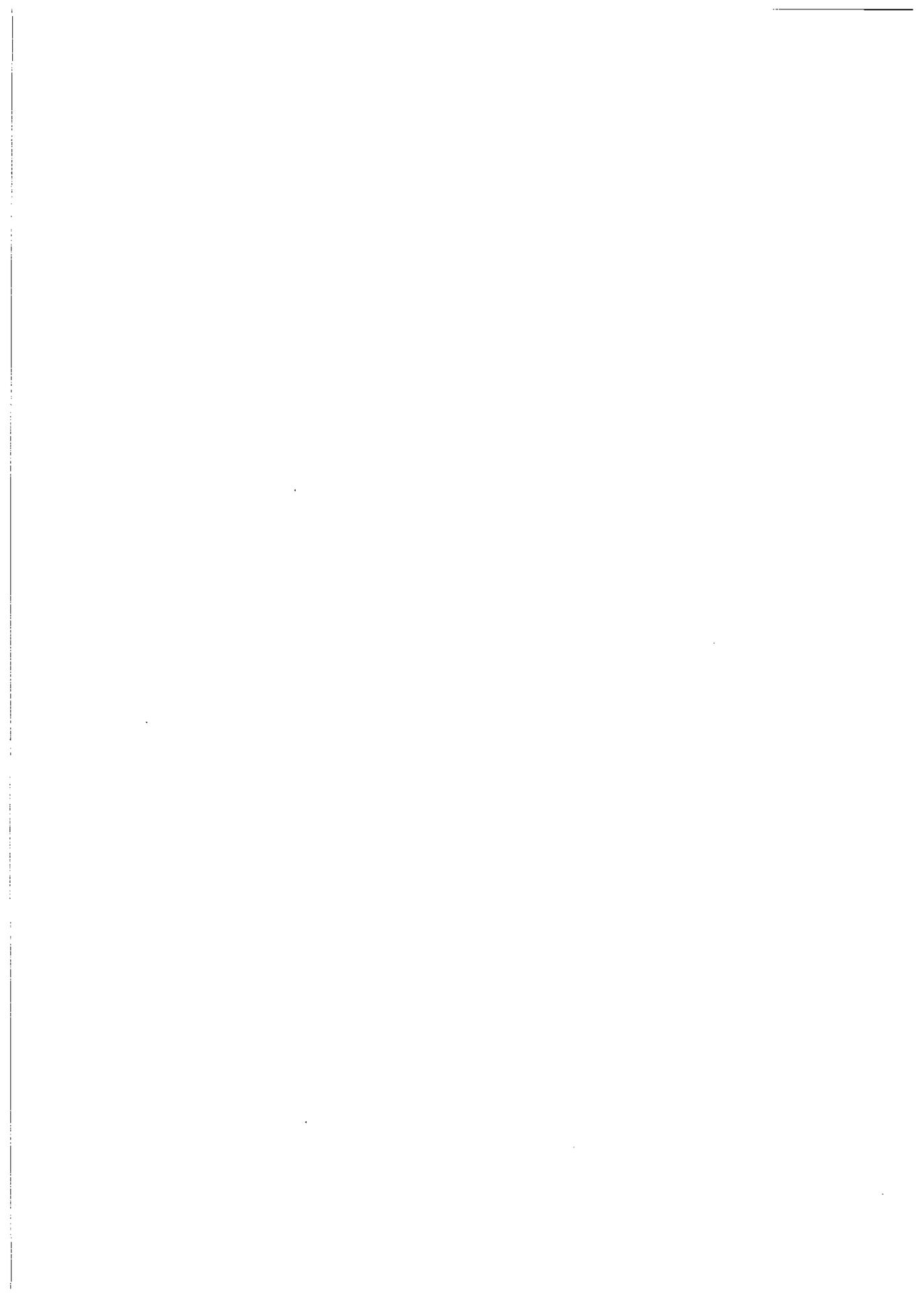
歌を詠もうと思つて さまざまに考へたが

歌は詠み尽くされてゐるよ 昔の人が

と、こうして歌を自分で作つてあるわけ。そうして、
これを出したらこれは当たり前、その人が作つてある
歌になつてゐるからね、何にも似てゐないでしょう。
それでこの人が勝つたという、ことう話。

採集S52・2・26 読谷村民話調査団第三班〈宮里洋子・小橋川清一〉

第二編 資料



話者別一覧表

凡例 一、話者番号は話者の数を表わす番号である。話者の配列は調査班の若い順に並べたが割り付け上前後したものもある。

二、話者欄には、話者の氏名を示し、できるだけ写真を載せた。

三、住所欄については、話者のすべてが読谷村に住所を有するので、字名と番地を記入した。生年月日は、便宜上M(明治)、T(大正)、S(昭和)の略号を用いた。

四、話型番号に○を付したのは、翻字資料が掲載されているところを示す。

五、話型名欄のへゝはモチーフ名を表わす。話は調査年月日の古い順に、テープ収録順に並べた。また、同話者による同じ話の再録分については調査の古い順に並記した。

六、語りの欄の○印は方言、×印は共通語、△印は方言共通語混じりの語りを表わす。

七、テープ欄には字ごとに編集したテープ番号を示した。

八、調査欄には調査年月日を示した。

話者番号	話者名	住所 生年月日	話型 番号	話型 名	翻字 番号	掲載頁	語り	テープ 番号	調査 月日
1	松田加真 	古堅八六八 M41・9・3	1	行事について			○	1A1	S52・2・26
2	比嘉好子	大湾五五八 M42・6・5	① ② ③ ④ ⑤	雀孝行 子供の肝へ仲順流り 継子の芋堀り 継子の麦突き 継子のハブ除け呪文	30		○ ○ ○ ○ △	1A20 1A19 1A18 1A17 1A2	S52・2・26 " " " "

6	5	4	
儀間 真治	阿波根 庸秀 	奥原 山登 	
大湾七〇四二 M 39・5・3	古堅五六九 M 33・12・1	古堅八七三三 M 40・10・29	
6 ⑤ 4 ③ ② 1	⑨ ⑧ 7 ⑥ ⑤ ④ ③ ② ①	⑧ ⑦ ⑥ 5 4 ③ 2 ①	23 22 ⑳ 20 ⑱
鍋蓋アカマタへアカマタの字 犬の足 城間ナーカへ瓦献上 城間ナーカへ盗人 赤犬子へ井戸発見 子供の寿命へ米寿由来	身代わり観音へ焼御観音 京阿波根親方 阿波根の祖先 吉屋チルルの死 歌勝負 カワセミ不孝 アカマタ婿入へ蛙報恩	逆立ち幽霊へ十六日由来 猿長者へ若水由来 吉屋チルルと炭焼御主前 大歳の客へ若水由来 白が泥棒を捕まえた話 城間ナーカへ盗人 後家の知恵	渡嘉敷ペークーへ碁打ち 渡嘉敷ペークーへ低頭門 渡嘉敷ペークーへ欠け茶碗 勝連バーマへ十日月 勝連バーマへ褒美の片荷
7 36 47	46 80 83 101 6 15 97 66	44 33 84 35 11	56 55
× × × × × ×	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	× × × × × × × ×	○ ○ ○ ○ ○ ○
3 A 6 3 A 5 3 A 4 3 A 3 3 A 2 3 A 1	2 B 7 2 B 6 2 B 4 2 B 1 2 A 10 2 A 9 2 A 5 2 A 4	2 B 5 2 B 3 2 A 11 2 A 8 2 A 7 2 A 6 2 A 3 2 A 1	1 B 6 1 B 5 1 B 4 1 B 3 1 B 2
S 52・2・26 " " " " " "	S 52・2・26 " " " " " " " " " "	S 52・2・26 " " " " " " " " " "	" " " " " "

12	11	10	
池原幸子	阿波根ツル	金城ウシ	
			
大湾七〇五 T 2・6・28	古堅六五八 M 36・3・3	大湾五五八 M 34・2・20	
③ ② ①	4 ③ ② ①	10 9 8 7 ⑥ 5 4 3 2 1	⑳ 27 26 ㉕ 24 ㉓ 22
雀孝行 子育て幽霊へウチカビ由来 天人女房へ銘苳子	雀孝行 雨蛙不孝 モイ親方へ勉強十灰繩 鬼餅由来へ腹破裂	雀孝行 雨蛙不孝 鬼餅由来 ハジチ由来 帽子組みの歌	火玉の話 間男の話 クスケー由来 五月五日由来 屁ひり嫁 屁は魔物除け ガジャン坂の話
21 3	53 5 2	1	88 19 93
× ○ ○	○ ○ ○ ○	○ × △ △ × ○ ○ ○ × ×	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
4 A 5 4 A 4 4 A 3	4 A 16 4 A 15 4 A 2 4 A 1	3 B 28 3 B 27 3 B 22 3 B 20 3 B 19 3 B 12 3 B 11 3 B 9 3 B 4 3 B 3	6 A 20 6 A 19 6 A 18 6 A 17 6 A 16 6 A 15 6 A 14
S 52・2・26 " "	S 52・2・26 " " "	S 52・2・26 " " " " " " " " " "	S 52・5・22 " " " " " "

17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1		54	53	52	51	50	49	48	47	46
渡嘉敷ペーク	モイは天才	モイ親方	モイ親方	モイ親方	モイ親方	モイ親方	モイ親方	笑話	猿蟹合戦	クスケー由来	下男が成功した話	貧乏神と福の神	塩が一番おいしい	千年蛇	船旅とウナイ神	聞き違い	聞き違い									
ペーク	ペーク	ペーク	ペーク	ペーク	ペーク	ペーク	ペーク																			
へ月の吸い物																										
1	1	1	1	1	1	2	1	2	2	1	2	1	1	1	1	2		1	2	1	1	1	1	1	1	1

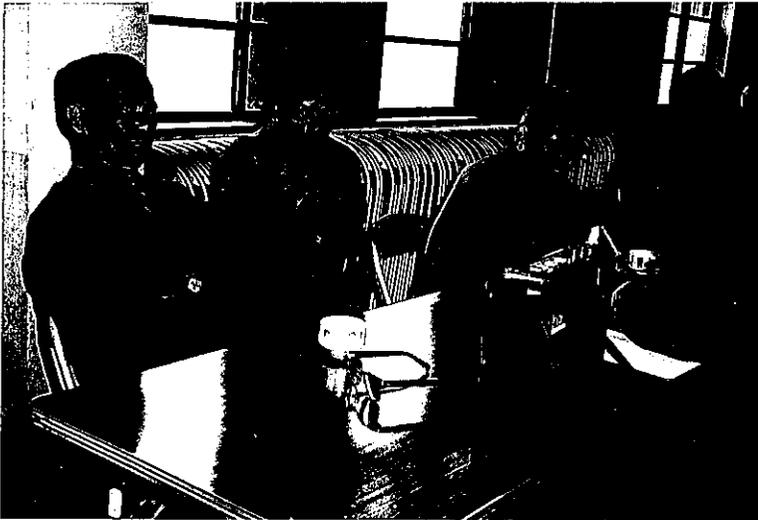
12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1					31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18
赤犬子	浦島太郎	嘉手納チナー	屋良ムルチ	普天間権現	護佐丸と阿麻和利	阿麻和利	阿麻和利	宮古の始まり	古堅部落の始まり	タケーサーガマ	徳武佐					笑い話	白が泥棒を捕まえた話	後家の知恵	鳩料理	十五夜の餅	山原と団亀	屁は魔物除け	屁ひり嫁	勝連バーマ	勝連バーマ	勝連バーマ	渡嘉敷ペーク	渡嘉敷ペーク	渡嘉敷ペーク
暗川発見		天川坂																											
2	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1					1	1	1	1	1	4	1	2	1	1	1	1	1	1

41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13
妻の歌	山入端	火玉	大木の遺念火	遺念火	北谷の綱引き	尾頼の始まり	ガンの始まり	多幸山フェー	蚊の始まり	煙草の起源	天川坂	流された王女	間男の話	奥の人と比地	お茶二杯	言葉は使い	ガジャン坂	黒金座主	吉屋チル	吉屋チル	吉屋チル	ハジチ	ハジチ	ハジチ	ハジチ	京阿波根親方	徳川の犬将軍	赤犬子
辻通い	タンメ	話																										
1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	1	1	1	2	1	1	2	1	1	1	1	1	1

	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
総話数	歌勝負	帽子組みの歌	阿波根の祖先	ナーチャミーの話	十六日の由来	シバサン	行事由来	カンカー由来	不思議な話	親孝行の話	親の恩	人の振り見て我が振り直せ	松の苗の植え時	千本針	子は宝	猫を長く飼つてはいけない理由	馬の角	五本足の牛	世間話・民俗・歌
	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	202

◇古堅の民話調査者名簿

沖繩国際大学口承文芸研究会
 遠藤庄治・上間清美・大宜味光一・宮里光雄・伊波百合子・宮里
 洋子・小橋川清一・山城悦子・山入端孝子・阿波根初美・松本久
 幸・渡慶次勲・新垣修子



古堅公民館での民話調査 昭和52 (1977)

翻字・対訳者一覽表

9	8	7	6	5	4	3	2	1	番号
菊地 尚子 嘉手納町字水釜 四五六	伊藝 弘子 那覇市首里汀良 町一・五五	大浜 洋子 那覇市三原一 二六・メゾン みはら五〇五	島袋 智子 沖繩市美里 一八六〇	安里 和子 北谷町字桑江 四七八・一三	津波古 米子 嘉手納町字屋良 六七・一三	島袋 喜美子 座喜味一四七	上原 ヨシ 波平一八五	国吉 トミ 楚辺一三・一七五	翻字・対訳者名
23	55	51	46 30	22	24	10	5	1	番号
継子話(麦突き二十日月)	渡嘉敷ベーク(碁打ち)	モイ親方(殿様の難題)	子供の肝(仲順流り) 身代わり観音(焼御観音)	継子のハブ除け呪文	継子話(麦と涙)	鬼餅由来	雨蛙不孝	雀孝行	話柄名
波平 秀	島袋 利蔵	比嘉 好子	比嘉 好子 阿波根 庸秀	比嘉 好子	奥原 松助	島袋 利蔵	阿波根 ツル	金城 ウシ	話者名
175	249	241	227 192	174	176	150	144	139	掲載頁

18	17	16	15	14	13	12	11	10
玉城 琳子 楚辺一三九五・ 二一四	松田 美奈 楚辺一六七五・一	辺土名 初美 古堅二六六	長花 春美 長浜一七九四・一	村山 友江 喜名三〇七四	比嘉 葉子 座喜味三九四	宮城 昭美 大木一九	島袋 フジエ 北谷町字宮城 一六三・一	知花 孝子 大木三七三・一
34 19	12 9 4	70 67 32	101 97 83 80 66	95 72	82	91 69	56 20	17 11
猿長者 五月五日由来 浜下り)	雀孝行 鳥孝行 アカマタ婿入(カマンタ+	猿長者 尻ひり嫁 山原と団亀	歌勝負 人の振り見て我が振り直せ 吉屋チル一の死 京阿波根親方	勝連バーマー(ハルアサ)	徳武佐 天川坂のお粥戦争	お茶二杯 山原と団亀	夫婦の赤い糸 渡嘉敷ベーク(欠け茶碗)	鬼餅由来 天人女房(銘苺子)
奥原 松助	奥原 松助	奥原 松助	阿波根 庸秀 阿波根 庸秀 阿波根 庸秀 阿波根 庸秀	島袋 利蔵	奥原 松助	儀間 真治 長嶺 ノブ	阿波根 ウシ 島袋 利蔵	池原 山登 奥原 幸子
198 167	154 149 142	267 264 195	333 321 290 285 262	318 269	288	312 266	251 169	164 153
								234

								玉 城 和 美
100	96	89	87	86	85	84	81	
カンカー由来	遺念火	蚊の始まり	黒金座主	吉屋チルル〈歌い骸骨〉	吉屋チルル〈生涯〉	吉屋チルルと炭焼御主前	ハジチ由来	
島 袋 利 藏	波 平 秀	儀 間 真 治	阿 波 根 ウ シ	池 原 幸 子	波 平 秀	奥 原 山 登	波 平 秀	
332	320	309	305	303	297	294	286	



読谷ゆうがおの会のみなさん

◆ 参 考 文 献

- 1 『日本昔話名彙』柳田国男監修 日本放送協会編 日本放送出版協会 昭和四九年二月 二版
- 2 『日本昔話集成』関敬悟著 角川書店 昭和二五年
- 3 『日本昔話通観 第26巻』稲田浩二・小澤俊夫編 同朋舎出版 一九八三年七月第一刷発行
- 4 『沖繩ことわざ事典』仲井真元楷著 月刊沖繩社 一九八二年 五月
- 5 『エイサー沖繩の盆踊り』宜保榮治郎著 那覇出版社 一九九七年十一月
- 6 『集成琉歌新釈』阿波根朝松著 沖繩タイムス社 一九七六年五月
- 7 『沖繩文化史辞典』真栄田義見他編 東京堂出版 昭和五十一年五月
- 8 『南島歌謡大成沖繩編(下)』外間守善他編 角川書店 昭和五十五年八月
- 9 『日本語大辞典』梅棹忠夫他監修 講談社 一九八九年十一月
- 10 『沖繩語辞典』国立国語研究所編 大蔵印刷局 昭和五十年三月 四版
- 11 『広辞苑』新村出編 昭和五二年三月第三刷発行
- 12 『琉球史辞典』中山盛茂編著 文教図書 昭和五九年三月 四版発行
- 13 『沖繩大百科事典』沖繩タイムス社編 一九八三年五月発行
- 14 『沖繩の民謡集』海邦出版編集部編 海邦出版社 一九七三年九月発行
- 15 『嘉手納町史 資料編2 民俗資料』嘉手納町史編纂委員会 平成三年
- 16 『那覇市史 資料編 第2巻中の7 那覇の民俗』那覇市企画部市史編集室 昭和五四年
- 17 『全訳古語辞典』宮腰賢他編 旺文社 一九九八年
- 18 『女流歌人吉屋チル―シンポジウム ゆしやついる』読谷村文化協会編 一九九八年
- 19 『読谷村史第四巻資料編3 読谷の民俗』読谷村史編集委員会編 平成七年三月発行
- 20 読谷村民話資料集一集〜十三集 読谷村立歴史民俗資料館編

編集後記

読谷村民話資料集十四『大湾・古堅の民話』をお届けします。

大湾・古堅の民話は、大湾が昭和五二年二月二五日と六月十九日、古堅が昭和五二年二月二六日と五月二二日に沖繩国際大学遠藤庄治ゼミ、同大学口承文芸研究会、読谷村立歴史民俗資料館等によって合同で行われました。その後、平成十一年一月に資料館によって補足調査を行い総採話数が大湾一七六話、古堅二〇二話で合計三七八話にのびりました。

翻字作業においては、平成九年六月に民話テープの確認作業にとりかかり分担して全話数を翻字しました。その中から大湾八一話、古堅一〇一話を選定し、その中の四四話をゆうがおの会会員に一人当り二話、五話を翻字依頼しました。紙幅の都合で全話数を掲載出来ないのが残念です。

会員から提出された翻字原稿は、再度テープを回して話者の語りに忠実に翻字されているかどうか、一字一句丁寧に点検していきました。その後、平成十一年五月に原稿を入稿し五校正を行いました。

部立ては第一編翻字資料、第二編資料編とし、話者別一覧では話者の顔写真も出来るだけ掲載するようにしました。

このようにして『大湾・古堅の民話』を編集するにあたって、各老人会、各公民館関係者、話者の家族の方々、ゆうがおの会会員、その他多くの方々に大変お世話になりました。また校正作業、その他で元資料館職員の知花春美氏、知花めぐみ氏お二人のご協力を頂きました。記して感謝申し上げます。

次回最終号は『渡具知・比謝・比謝社の民話』を予定しております。今後もお一層のご協力をよろしくお願い申し上げます。

平成十一年九月三十日

読谷村民話資料集14

正誤表 (大湾・古堅の民話)

ページ	誤	正
P162 写真 キャプション	南風原外間	南風原外間の <u>高倉</u>
P232 写真 キャプション	米寿祝	米寿祝の <u>斗搔</u> ^{とかき}
P294 写真 キャプション	御茶屋御殿	御茶屋御殿 <u>跡</u>
P294 注⑬	洗骨 <u>跡</u>	洗骨 <u>後</u>
P313 16行目の 上・下段	<u>網</u>	<u>網</u>
P314 注①	沖繩 <u>県</u>	沖繩 <u>本島</u>

大湾・古堅の民話 読谷村民話資料集 14

発行年月日 平成11年11月30日

編集・発行 読谷村教育委員会
歴史民俗資料館
〒904-0301 沖縄県読谷村字座喜味708-6
電話 098 (958) 3141

印刷 文進印刷株式会社
〒901-0305 沖縄県糸満市西崎町5丁目10-14
電話 098 (994) 5777